ISSN 2436-7591

Ignis

Vol. 5

論　　文

韓国語を母語とする学習者にとって難しい「は」「が」の問題とは
…… 中西久実子 … 1
浙江蒼南宜山方言の単字調における入声…… 大西　博子 … 15
中国文化発信の軽舟となるか
── マイクロドラマの展開とCGO戦略についての考察 ──…… 戴　　智軻 … 35
アンデスの地域特徴としての証拠性の実態
── アイマラ語・ケチュア語・スペイン語と言語接触 ──
…… 蝦名　大助 … 61
日本語の「動名詞＋中」構文におけるアスペクト的特徴
── 中国語「動詞＋中」との対照を通して ── …… 吉野　孝介 … 81

研究ノート

中国の日本語専攻大学生による言語分野の卒業論文テーマ
── X大学を対象としたテキストマイニングを用いた卒業論文題目分析 ──
…… 目黒　裕将 … 97
Development of Language-Specific Aptitude Tests for Measuring Language Proficiency for *ISO 13611:2024* Certification (English-Japanese, Russian-Japanese, Portuguese-Japanese, Chinese-Japanese)
…… Akiko SATO／Hiroko ONISHI／Lei YANG … 113
Maria MIYOSHI／Aishwarya SUGANDHI
Masashi HAYASHIDA／Pallavi BHATTE

翻　　訳

グラシリアノ・ハーモス著『サンベルナルド』（翻訳：第五章～第十二章）
…… 岐部　雅之／フェリッペ・モッタ（共訳）… 一
ヨーゼフ・ヴィッキ著，ルイス・フロイス『日本史』イントロダクション（抄訳）
……（訳者）伊藤　秋仁／呉座　勇一／フェリッペ・モッタ … 135

PAX MUNDI PER LINGUAS
京都外国語大学
Kyoto University of Foreign Studies
京都外国語短期大学
Kyoto Junior College of Foreign Languages

韓国語を母語とする学習者にとって難しい「は」「が」の問題とは

中　西　久 実 子

〈要旨〉

韓国語には「は」「が」に相当する「은／는（un/nun）」「이／가（i/ka）」という形式があるが，ほとんどの場合，日本語の「は」「が」と同じ振る舞いをするとされている。しかし，先行研究では，日本語と異なる振る舞いをする場合もあることが指摘されている。

本稿では，韓国語の「은／는（un/nun）」「이／가（i/ka）」が日本語の「は」「が」と異なる振る舞いをする場合に焦点を絞って，学習者の使用実態と使用意識を明らかにする。分析に使用するのは，学習者を対象にした「は」「が」の選択テストとその使用意識を問うインタビューの調査データである。調査の結果のデータから韓国語を母語とする日本語学習者が誤用をおかす傾向があることを主張する。

キーワード：は，が，韓国語，既出／未出，既知／未知

〈Abstract〉

Korean has the forms “은／는 (un/nun)” and “이／가 (i/ka)” that correspond to “wa” and “ga,” but they can behave differently from the Japanese “wa” and “ga.”

This paper points out that even native Korean learners of Japanese have difficulty with “WA” and “GA,” and clarifies the actual usage and awareness of the problem. The analysis uses survey data from a multiple choice test on “WA” and “GA” for Korean learners of Japanese and an interview asking about awareness of their usage.

In this paper, I focus on the cases where “은／는 (un/nun)” and “이／가 (i/ka)” behave differently from “WA” and “GA,” and show that Korean learners of Japanese are prone to making mistakes in these cases.

Key Words: “Wa”, “Ga”, Korean, already appeared/not appeared, known/unknown

1．はじめに

日本語学習者が使用する「は」「が」については先行研究でいくつか調査がなされている。たとえば，小口（2017）では，既知・未知の情報構造をふまえて学習者による「は」「が」の使用の実態が分析されている。しかし，その調査の対象は英語を母語とする学習者・中国語を母語とする学習者だけであり，韓国語を母語とする学習者（以下，KLと表記する）のデータはない。

これに対して，中浜（2013:45）では，KLが「は」「が」をどのように使用するかというデータが示されている。具体的には，「学習者全員が，韓国語にも「は」「が」に対応する後置詞があることから，「は」「が」に，それぞれ韓国語の助詞を対応させて使用している。（中略）母語の知識を第二言語での談話構成に役立てている」と述べられている。中浜（2013）は韓国語と日本語の類似性によって，KLが「は」「が」の誤用を避けることができるということは示しているが，逆に誤用を生む可能性については言及がない。これに対して，本稿ではKLにも誤用になりやすい「は」「が」の問題があり，誤用をおかす可能性があるということを指摘し，学習者の使用実態とその使用意識を明らかにする。

2．考察の前提

2.1　韓国語の「이／가（i/ka）」「은／는（un/nun）」と日本語の「は」「が」の共通点

2.1では，韓国語が日本語と同じような振る舞いをする場面の例をみる。

韓国語には日本語の「は」に相当する「은／는（un/nun）」，「が」に相当する「이／가（i/ka）」，があり，「은（un）」と「는（nun）」，「이（i）」と「가（ka）」はそれぞれ異形態である。「은（un）」と「는（nun）」は，（1）のように日本語の「は」「が」と同じような振る舞いをする。

（1）犬が走ってきた。　　犬は新聞を 口にくわえていた。

（韓国語訳）

개**가** 달려왔다.　　개**는**　신문을 입에 물고 있었다.

kay-**ka** tallyewa-ssta.　　kay-**nun**　sinmwun-ul　ip-ey mwulko issessta.

犬－が 走ってき－た　　犬－は　　新聞－を　　口－に　くわえて いた

（金（2008:667–668）より）

金善美（2008:668）では，（1）について下記のように記されている。

第1文に登場する主語の人物や犬は聞き手や読者のような情報の受信者にとって完全に新しい情報に該当する。これらについて両言語では新情報の主格標識の「이／가（i/ka）」「が」

を使う。一方，第２文に現れる人物や犬は，第１文に登録ずみであり，「은／는（un/nun）」と「は」を使う。（金善美（2008:668）より）

つまり，韓国語も日本語でも新情報には「が」「이／가（i/ka）」，旧情報には「は」「은／는（un/nun）」を使用するという点で一致しているということである。

次の（２）Bのそこ（＝LA（ロスアンゼルス））は話し手も聞き手もよく知っている既知の地名で旧情報なので，日本語では「は」，韓国語でも「は」に相当する「는（nun）」を使う。

（２）（Aがその前日，空港まで見送りに来てくれた友達Bに電話をかけてきた）

A「응，나야．지금LA에 도착했어．」

ung, na-ya. cikum LA-ey tochak-haysse.

うん 私－よ 今LA－に 到着－したの

B「어，벌써 도착했구나．거기는 덥지?」

e, pelsse tochak-haysskwuna. keki-nun tepci?

あ もう 到着－したの　　そこ－は 暑いよね　　（金善美（2008:682）より）

2.2　韓国語の「이／가（i/ka）」「은／는（un/nun）」と日本語の「は」「が」の違い

2.2では，韓国語が日本語と異なる振る舞いをする場面の例についてみていく。

油谷（2005:116–117）では，（３）について「韓国語においては，初出の体言を「が」で指示する範囲が日本語よりも広いので，日本語では「は」で指示する場合にも「가／이」が用いられることが多い」とされている。そして，（３）では日本語は「は」が用いられるのに対して，韓国語では「が」に相当する「이」が使用されるという違いがあることが指摘されている。

（３）이것**이**　무엇입니까?　　これは何ですか。（油谷（2005:117）より）

油谷（2005:116–117）と同様の指摘が田窪（1987）,金善美（2008）にもなされている。まず，田窪（1987:104）では，（４）を示して，なぜ日本語で「は」を用いるのに，韓国語で「가／이」を用いるのかが示されている。具体的には，（４）は前に聞いたかもしれない年齢「二十才」が発話時にはよくわからないため，韓国語では「が」に相当するものが使えるが，日本語の「が」は使えないとされている。つまり，韓国語ではよく知らないものには「が」に相当する「가／이」を使うのである。

（４）*君が二十才でしたね。（田窪（1987:104）より）

（5）でも「神戸大学」は先行文脈で既出ではないので，よく知らないものと捉えて韓国語では「が」に相当する「이／가（i/ka）」が用いられる。これに対して，日本語では「神戸大学」は既出ではないが，一般知識のように明白な共有の知識であるため，「は」が使われ，「が」は不適切になるということである。

（5）*神戸大学がどこにありますか。（田窪（1987:104）より）

金善美（2008）でも（6）のような場面でも「よく知らないもの」には「가／이」を使うという韓国語と，現場にあって話し手と聞き手には共有の知識である「ここ」には日本語では「は」を使うという違いが指摘されている。（6）は，病室から手術室に移動した患者が再び病室に帰ったときの発話であるが，「ここ（＝病室）」は先行文脈で既出であるが，話し手（患者）は発話時（＝手術後）にはそれについてよくわからなくなっているため，「는nun（＝ハ）」が使えないという。

（6）（手術後に病室で意識が戻った患者が開口一番）
ここは（*ここが）どこですか。
〈韓国語訳〉여기가（#여기는（*ここは））어디예요?
yeki-ka（#yeki-nun）eti-yeyyo?　（金善美（2008:678）より）

金善美（2008:681）では，（6）について（7）のように述べられている。やはり，韓国語では対象を知っている（既知）か，知らない（未知）かが重要であるが，日本語では先行文脈で既出か否かが重要になるという違いがあるということである。

（7）韓国語では，指示対象が先行文脈に導入されているか否かの可否は「이／가（i/ka）」の選択には影響を及ぼさず，指示対象が話し手に知られているかどうかの可否が「이／가（i/ka）」の選択に影響を及ぼす。（金善美（2008:681）より）

そこで，本稿では，日本語と韓国語で振る舞いが異なる（3）（5）（6）のような場面でよく知らないものについて尋ねる場合にKLが誤用をおかしやすいのかを調査することにした。

2.3　韓国語でも「이／가（i/ka）」「은／는（un/nun）」に揺れが生じる場合

2.3では，調査で使用する例文について考察する。

調査では，油谷（2005），田窪（1987），金善美（2008）で共通して指摘されている（3）（5）（6）（8）のような場面，つまり，日本語の「は」を使う場面で韓国語は「が」に相当する「이／가（i/ka）」が使用される場面に焦点を当てる。たとえば，次の（8）Bのような場面では，

聞き手がバボルという地名を知らない（未知である）ために「は」に相当する「은（un）」が使えず，「が」に相当する「이（i）」が使われるとされている。

（8）（旅行中のAが急に友達Bに電話をかけてきた）
A「나，지금 바볼（Babol）에 와 있어.」
na, cikum Babol-ey wa isse.
私 今 バボル－に 来て いる
私は今バボルに来ている。
B「뭐，바볼?바볼이（*바볼은）어디야?」
mwe, Babol? Babol-i（*Babol-un）eti-ya?
何，バボル バボル－が（*バボル－は）どこ－なの
何？　バボルはどこなの？　（金善美（2008:682）より）

しかし，先行研究では，（3）（5）（6）（8）のような場面では，韓国語でも「이／가（i/ka）」「은／는（un/nun）」に揺れが生じる可能性があるという指摘がある。以下では，この揺れを調査でどう扱うかについて述べる。

金智英（2018），金善美（2008）では，（8）のように日本語と韓国語で振る舞いが異なると思われがちな場面であっても，韓国語で例外的に「은／는（un/nun）」が使われることがあると指摘されている。金智英（2018）では，日本語では，（9）のような場面では一般的には「は」の使用が自然と判断されるが，韓国語では，「가（ka）」「는（nun）」どちらも許容される可能性に言及している。

金智英（2018）によると，（9）では「이／가（i/ka）」「은／는（un/nun）」のどちらも許容される可能性があるものの，「이／가（i/ka）」のほうが一般的に使用され，「은／는（un/nun）」は対比の解釈になるということである。つまり，韓国語では両方使えるとはいえ，対比的になると「은／는（un/nun）」が選択されやすくなるということである。

（9）ここは（*ここが）どこですか。
〈韓国語訳〉여기가（#여기는（*ここは））어디예요?
yeki-ka（#yeki-nun）eti-yeyyo?

金善美（2008）でも同様の指摘がある。金善美（2008）では，（10）のように「또（また）」を加えて対比的な解釈に傾くようにした（10）では，「은／는（un/nun）」が優勢になるとされている。

（10）（旅行中のAが急に友達Bに電話をかけてきた）

A「나, 지금 바볼（Babol）에와 있어.」

na, cikum Babol-ey wa isse.

私 今 バボル－に 来て いる

B「뭐, 바볼?（あきれたと言わんばかりに独り言で）（原文ママ）

바볼 은 또 어디야?」」

mwe, Babol? Babol-**un** tto eti-ya?

何, バボル－ は また どこ－なの （金善美（2008）より）

日本語では（9）でも（10）Bでも「は」を使うが，韓国語では（9）では「が」に相当する「가（ka）」，（10）Bでは「は」に相当する「은（un）」が使われる可能性があるということである。（10）Bで「은（un）」が使われるのは，「또（また）」があり，対比の解釈に傾いているからである。韓国語では「또（また）」がある場合は対比のニュアンスになり，必ず「은（un）」が選択される。

しかし，（10）Bで「또（また）」による対比のニュアンスがなく，「あきれたと言わんばかりに独り言で」というニュアンスしかなければ，「은／는（un/nun）」「이／가（i/ka）」のどちらが使われるのかは金善美（2008）では考察されていない。

そこで，本稿の調査では「또（また）」を例文に使用せず，「あきれたと言わんばかりに独り言で（金善美（2008））」だけを加えて結果がどう変わるかを調べることにした。ここまで述べたことをまとめると，本研究の調査では，次の（11）を明らかにする例文を使用するということになる。

（11） a. 日本語と韓国語で振る舞いが異なる（3）（5）（6）（8）のような場面でよく知らないものについて尋ねる場合にKLは誤用をおかしやすいのか。

b. 日本語と韓国語で振る舞いが異なる（3）（5）（6）（8）のような場面でよく知らないものについて尋ねる場合でも，「또（また）」による対比のニュアンスがなく，「あきれたと言わんばかりに独り言で」というニュアンスしかなければ，KLの「は」「が」の選択はどうなるのか。

以下では，3.において調査の概要を示す。4.では調査の結果を示し，5.では，調査の結果のデータについて仮説を立てて分析する。6.では本稿のまとめと今後の課題を示す。

3．調査の概要

3.1　調査の目的・協力者

調査の目的は，(11) を明らかにすることである。調査は，「は」「が」の選択式テストとインタビューから構成される。協力者には事前にGメールで「日本語の筆記テストとインタビューをすることだけを知らせて調査実施の承諾を得ておき，内容が「は」「が」であることを知らせないでおいた。筆記テストのGoogleフォームを送信する日時とインタビューのためにzoomに入室してもらう日時を約束しておいた。調査では，選択肢を含む例文を，Googleフォームで配信して「は」「が」のどちらかを回答してもらった後，回答を自動回収した。筆記テストの回答を受け取った後，それぞれの言語を母語とする学習者から各3人を任意に抽出してインタビューを行なった。

表1　協力者の情報

母語		職業（居住地）	日本語能力	人数
学習者	韓国語	大学生（韓国）	N1～N2	16人
	中国語	大学生（中国）	N1～N2	56人
	非漢字圏	大学生（アメリカ，イタリア，ハンガリー，ポーランド）	N1～N2	16人
		大学院生（スペイン） 大学生（スペイン，ポルトガル）	N3～N4	5人

調査の協力者は表1のとおりである。韓国の大学で日本語を主専攻で学ぶKL 16人，中国の大学で日本語を主専攻で学ぶ中国語を母語とする学習者（以下，CL）56人，日本語を学ぶ非漢字圏の言語を母語とする学習者（以下，EL）16人である。

3.2　調査文

調査では，下記のA群の調査文（12）～（16）を使用した。（12）～（14）は2.で示した（2）（8）（10）を学習者のためにリライトしたものである。（12）は先行文脈に「ロスアンゼルス」が既出であり，話し手も聞き手もこの地名を知っている場合である。（13）は先行文脈に「バボル」という地名が既出であるが，この地名は話し手には既知だが，聞き手には未知という場合である。（14）は（13）と似た場面だが，「あきれた」というニュアンスである点で異なる[1)]。

A群の調査文

（12）（＝（2））　A「うん 私よ 今ロスアンゼルスに着いたよ。」
　　B「あ もう 着いたの？そこ {**が・は**} 暑いよね？」

（13）（＝（8））（旅行中のAが急に友達Bに電話をかけてきた）

A「私 今 バボルに 来て いるよ」

B「何？バボル {**が・は**} どこなの？」[2)]

（14）（=（10））（旅行中のAが急に友達Bに電話をかけてきた）

A「私 今 バボルに来ているよ」

B「（あきれたと言いたいようにひとり言で）「何？バボル {**が・は**} どこなの」

（15）（16）はそれぞれ「AVホール」「お名前」が先行文脈で未出なので，いずれも日本語では「は」だが，韓国語では「が」に相当する「이／가（i/ka）」を使う例である。

（15）（大学の受付で）すみません。初めてこの大学に来たんですが，この紙に書いてあるAVホール {が・は} どこですか。

（16）はじめて会った人に）お名前 {**が・は**} **何ですか**。

調査では，上記のA群の調査文（12）～（16）を含む合計49箇所の選択肢を含む例文を使用した。上記（12）～（16）以外に下記のB群，C群を順不同でダミーの例文として混入させた[3)]。

B群の調査文

（17）キム社長はあまり人と会わない。外国訪問のための特別の飛行機がモスクワ空港で油を入れたときにも，飛行機の外にまったく出なかったそうだ。そのキム社長 {**が・は**} 4日に，フランスのマカロン大統領とパリで食事をした。

（18）人はあまり野菜を食べない。そして，ミルクティーに塩を加えて飲む人が多いから，1日に取る塩の量がかなり多くなる。これ {**が・は**} 高血圧の原因になっているそうだ。

C群の調査文

（19）日本には，「小京都」と呼ばれる古い町 {**が・は**} いくつかあり，山口はその一つである。

（20）日本料理についてご説明します。日本では，夏にしか食べられないもの① {**が・は**} あるが，ハモ（魚）② {**が・は**} その一つである。

4．調査の結果

ここでは，調査の結果を示す。表2は，A群の調査文の誤答率を示したものである。

表 2　（12）～（16）の誤答率

	KL	CL	EL
（12）LA	0%	0%	0%
（13）バボル	56.3%	0%	4.3%
（14）バボルあきれ	25.0%	16.7%	4.3%
（15）AVホール	0%	0%	0%
（16）お名前何	0%	0%	0%

4.1 （12）の結果

表 2 から，（12）は，すべての学習者（KL，CL，EL）が正解だったことが読み取れる。このことから，（12）Bのそこ（＝LA（ロスアンゼルス））のように話し手も聞き手もよく知っている既知の地名は，日本語では「は」が選択され，誤用の可能性はないと言ってよいであろう。中西久実子・張浩然（2021）でも指摘されているが，学習者は，「そこは暑い」のように単純な構造の短い文で，初級レベルの教科書でよく見るような文については，誤答の可能性は非常に低い。すべての学習者（KL，CL，EL）が（12）について正答を選ぶことができたのは，そのためであると考えられる。

（12）（＝（2））　A「うん 私よ 今ロスアンゼルスに着いたよ。」
　　B「あ もう 着いたの？そこ {**が・は**} 暑いよね？」

（12）については全員が正答であったが，これについてなぜそう答えたのかインタビューで使用意識を問うたところ，同じような回答が複数得られた。以下に引用する（21）はそのインタビューの回答の一つである。学習者は，「そちらは暑いよね」という文を授業で勉強したことがあり，よく使っていたので自動的に正答が選択できたということであった。

（21）韓国語を考える前に普段よく使ってた表現なので，「は」で答えられた（KL3）

ただし，KLについては，母語である韓国語で「は」に相当する「는（nun）」を使って主題であることを表せるので，これが有利に働いているということも完全には否定できない。

4.2 （15）（16）の結果

表 2 を見ると，（15）（16）も誤答率が 0 %であり，すべての学習者（KL，CL，EL）が正解だったことがわかる。

（15）（大学の受付で）すみません。初めてこの大学に来たんですが，この紙に書いてある

AVホール {**が・は**} どこですか。

（16）はじめて会った人に）お名前 {**が・は**} 何ですか。

（15）（16）の「AVホール」「お名前」のように先行文脈で未出で，日本語では「は」だが，韓国語では「が」に相当する「이／가（i/ka）」を使う場合は，誤用はまったくなかったということである。

以下に引用する（22）（23）は，（16）「お名前は何ですか。」についてのインタビューの回答である。（15）（16）は日本語の教科書やドラマでよく見たり聞いたりしていたので自動的に正答を選択できたということであった。

（22）「お名前は何ですか」は日本語のテキストで見たので「は」と答えた。（KL3）

（23）これは日本のドラマを見ていたときよく聞いていたので「は」を選んだ。（KL2）

4.3 （13）の結果

（15）（16）と同様に，日本語では「は」で韓国語では「が」に相当する形式を使うA群の（13）の結果はどうだったかをみてみよう。

（13）（＝（8））（旅行中のAが急に友達Bに電話をかけてきた）

A「私 今 バボルに 来て いるよ」

B「何？バボル {**が・は**} どこなの？」

表2によると，（13）の誤答率は「56.3%」であった。（13）は（15）（16）と同様によく知らないものについて尋ねる場面で，韓国語で「が」が使われやすいのだが，（13）は（15）（16）より誤答になりやすい結果になった。（15）（16）は教科書などでよく見たり聞いたりするため正答する可能性が高いが，これに対して（13）はなじみがない例文だったので正答できなかったのではないかと推測される。

以下に引用する（24）（25）は，（13）の回答についてのインタビューの結果である。KL2とKL3は両者ともテストの時に母語である韓国語で考えてそのまま翻訳し，韓国語の文法規則を適用して回答したと答えた。このことと表2で示した誤答率とを合わせて考えると，（13）については「KLは母語である韓国語の影響により，「が」で誤答をおかすことがある」と言ってもよいと思われる。

（24）「バボルがどこなの」は韓国語では「が」になります。（KL2）

（25）これは韓国語を考えました。バボルというところはどこなのか単純に気になる。こういう時韓国語では「が」になります。韓国語的に「が」と答えました。先に聞いたこ

とについて改めて聞く，そのように質問するとき韓国語では「が」を使います。情報をもっと知りたいから「が」を使います。例えば，Aが「クロワッサンを食べたよ。」と言ったら，Bが「クロワッサンが何？」と言います。一応名前は聞いたけど，それが何かわからないからもっと情報を知りたいからです。（KL3）

以上の考察を整理すると，韓国語で「が」に相当する形式を使う場面ではKLは母語の影響から誤用をおかす可能性があると言ってよいだろう。ただし，今回の調査では，誤用になりやすい例文と誤用になりにくい例文があることが明らかになった。（15）（16）のように教科書などでよく見たり聞いたりする例文では誤答になりにくいが，（13）のように教科書とは違った場面であまりなじみのない例文になると，誤答をおかす可能性が高くなるということである。

4.4 （14）の結果

（14）は（13）と似ているが，「あきれたと言いたいようにひとり言で」というニュアンスが加わる点で異なる。このような場合は，「が」の誤答率がやや低い結果となった。このことから，よく知らないものについて尋ねる（13）のような場合はKLは誤用をおかす可能性が高いが，（14）のように「あきれたと言いたいようにひとり言で」というニュアンスが加わっていると，母語の影響からか「は」を選択するので誤用がやや少なくなる傾向があると言えそうである。

（14）（＝（10））（旅行中のAが急に友達Bに電話をかけてきた）
A「私 今 バボルに来ているよ」
B「（あきれたと言いたいようにひとり言で）「何？バボル {**が・は**} どこなの」

次に示す（26）（27）は（14）についてのインタビューの回答である。（26）からわかるように，KL3は「あきれたひとり言なので「は」を選んだ」と回答した。

（26）括弧の中のあきれたひとり言，というのを読んで韓国語を考えました。韓国語は「は」です。あきれたという悪い気持ちの時です。「バボルはどこなの？」と答えられた。（KL3）

これに対して，（27）からわかるようにKL2は，「あきれたとひとり言なので「が」を選んだ」とまったく異なることを述べた。

（27）あきれたとひとり言なので「が」を選んだ。韓国語を考えた。いやな感情があると思う。わからない場所を聞いたから面倒でいやな感じがするその場合は韓国語は「が」です。（KL2）

以上のことから，「あきれた独り言」という要因がある場合，学習者は日本語で「は」を使用することもあれば，「が」を使用することもあり，今回の調査だけではどのような要因で「は／が」が選択されるかは結論づけられないと言わざるを得ない。現段階では，（13）のような場面では韓国語で「が」に相当するものを使うので，日本語で「が」を使って誤用になりがちであるが，（14）のように「あきれた独り言」という要因が加われば，KLはどんな要因で「は」「が」を使うのか，今後さらに考察を深める必要がある。（26）（27）の学習者の証言に「悪い気持ち」「いやな感じ」というネガティブな表現があることが「あきれた独り言」と関係があるかについても今後さらに調査データを増やして確認する必要がある。

5．調査結果のさらなる分析

5.では，調査結果のデータについて次のような仮説を設定し，これが正しいかを検証する。

仮説１　A群の調査文について，KLは，CL・ELに比べて誤答が多く，点数が低い。
仮説２　KLについて言えば，A群の調査文は，B群・C群に比べて誤答が多い。

5.1　仮説１の検証

ここでは，仮説１「A群の調査文について，KLはCL・ELに比べて誤用が多く，点数が低い。」が正しいかを検証する。

A群の問題のKL，CL，ELの点数についてパラメトリックな手法である一元配置分散分析をおこなった。その結果，点数に対して，母語（KL，CL，EL）による有意な差があった（$F=10685$, $p<0.001$, $\eta^2=0.408$）（表３）。Tukeyを用いた多重比較によると，KLは，A群の調査文についてCLとELより点数が低くて誤用が多いと言える。

表３　仮説１の検証

	KL	CL	EL	*F*値	多重比較
平均値	12.22	18.94	18.33	10.685	K< C K< E
標準誤差	1.46	0.72	1.66		

5.2　仮説２の検証

ここでは，仮説２「KLについて言えば，A群の調査文は，B群・C群に比べて誤用が多い。」が正しいかを検証する。

KLのA群の調査文，B群・C群の例文についてパラメトリックな手法である一元配置分散分析をおこなった結果，点数に対して，問題文（A，B，C）による差は有意ではなかった（$F=1.812$,

$p = 0.177 > 0.05$）（表４）。したがって，KLについては，A群・B群・C群の点数に統計的に差がないということになる。

表４　仮説２の検証

	A群	B群	C群	*F*値	多重比較
平均値	12.22	7.50	9.37	1.813	*N.S.*
標準誤差	1.46	1.44	1.70		

６．おわりに

本稿では，韓国語と日本語が異なる振る舞いをする場合について，韓国語を母語とする学習者が「が」で誤用をおかす可能性があることを指摘した。具体的には，日本語では「は」を使うが，韓国語では「が」に相当する形式を使う（13）のような例文の場面でKLが他の言語を母語とする学習者より誤用をおかしやすいことを示した。そして，この誤用は韓国語の影響の可能性があるというKLのインタビューのデータを示した。

しかし，本文中でも述べたが，「あきれた独り言」という要因がある場合の調査についてはさらに精度を高めた調査を実施する必要があると考えている。また，本文中では詳しく言及しなかったが，B群・C群の例文についても学習者は未知か既知かという要因に基づいて「は」「が」を選択している可能性がある。今後はB群，C群の例をA群と合わせて考察し，先行文脈で既出か否か，そして，話し手／聞き手にとって既知か未知かが学習者の「は」「が」の選択にどう関わっているのかを明らかにして行きたいと考えている。

付記

本稿はJSPS科研費21H00526の助成を受けている。

謝辞

本稿は日本語教育学会の2024年度春季大会で口頭発表した内容をまとめたものである。本誌の査読をしてくださった先生方には，貴重なコメントをいただいた。この場をお借りしてお礼を申し上げる。また本研究の調査にご協力いただいた 李迅さん，趙錬徽さん，鄭有景さん，梅林佑美さん，張浩然さん，若井誠二さん，塚田真由美さんはじめ多くの方にも改めてお礼を申し上げたい。

注

1）「あきれたと言わんばかりに（金善美（2008））」という表現は学習者に理解しにくいことが予想されるため，調査では「あきれたと言いたいようにひとり言で」と表記した。
2）例文（13）（14）は日本語では「バボルってどこなの？」が自然であるが，ここでは，「は」「が」の対立的な関係の中で「は」が使われるところに「が」が使われている」ということを検証するため，「って」を調査文に入れていない。
3）B群，C群の例文は，中西久実子・張浩然（2021）の調査で使用した例文をそのまま使用しているため，デス・マス体のA群とは異なり，デアル体になっている。

参考文献

（1）金善美（2008）「韓国語と日本語の主題標識「은／는（un/nun）」と「は」に関する対照研究」『言語文化』10–4，pp. 665–689，同志社大学言語文化学会.
（2）金智英（2018）「日本語母語話者における「은／는（eun/neun）」と「이／가（i/ga）」の習得：文法的根拠に基づいた体系的な学習のために」『立命館高等教育研究』18，pp.79–92.
（3）小口悠紀子（2017）「上級日本語学習者の談話における「は」と「が」の知識と運用 ── 未出か既出かによる使い分けに着目して ──」『日本語教育』166，pp.77–92，日本語教育学会.
（4）田窪行則（1987）「誤用分析 2 神戸大学がどこですか。田中さんが誰ですか。」『日本語学』6–6，pp.102–106，明治書院.
（5）陳訪澤（1994）「「魚は鯛がいい」構文の分析」『世界の日本語教育』 4，pp.165–183.
（6）中西久実子・張浩然（2021）「中国語を母語とする上級学習者は「は」「が」をどう使用しているのか ── 従属節内の「は」「が」の使用実態と使用意識の調査データを中心に ──」『日本語教育学会2021年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.105–110.
（7）中西久実子（2024a）「韓国語を母語とする学習者にとって難しい「は」「が」の問題とは ── 韓国語と日本語の違いをもとに ──」『2024年度春季大会予稿集』pp.77–82，日本語教育学会.
（8）中西久実子（2024b）日本語学習者の従属節を含む文の「は・が」の誤用の実態 ── 実例の長文を使用した誤用の実態調査から ──」『国際言語文化』 8，pp.31–45，国際言語文化学会.
（9）中浜優子（2013）「タスクの複雑さと言語運用（正確さ，複雑さ，談話の視点設定）との関連」『第二言語としての日本語の習得研究』16，pp.38–55，第二言語習得研究会.
（10）油谷幸利（2005）『日韓対照言語学入門』白帝社.

浙江蒼南宜山方言の単字調における入声

大　西　博　子

〈要旨〉

本稿では，７名の発話者から得られた録音データを基に，入声と舒声の音長と音高を比較しながら，宜山方言の単字調における入声の特性について分析を行った。その結果，宜山方言の入声は舒声の中で最も長い声調と同等の音長を獲得するまでに長音化しており，陰陽入声はどちらも降昇調で，音高関係は陰高陽低を維持しており，単字調の調値は温州方言と一致していることがわかった。また発話者間の比較から，陰入と陽入の調査語のうち，「搭，白，達」に音長や音高における変化が観察できた。「白」は長音化傾向，「搭」は陰平調値への接近傾向，「達」は陰入調値への接近傾向がある。つまりT7は音高のみ，T8には音長と音高のいずれの変化も見られた。

キーワード：呉語，蒼南宜山，単字調，入声，音高，音長，舒声化

〈提要〉

本文基于 7 名发音人提供的录音数据，通过比较入声与舒声的音长和音高，对宜山方言在单字调中的入声特性进行了分析。结果显示，宜山方言的入声已经长化，使其音长与舒声中最长声调的音长相当。阴阳入声均呈现降升调，音高关系保持阴高阳低，单字调的调值与温州方言一致。此外，通过不同发音人之间的对比，发现了阴入和阳入的例字中，“搭、白、达”在音长或音高方面存在变化：“白”呈现长音化趋势，“搭”趋向于接近阴平调值，“达”则趋向于接近阴入调值。即阴入只有音高的变化，而阳入呈现了音长与音高的变化。

关键词：吴语，苍南宜山，单字调，入声，音高，音长，舒化

はじめに

本稿が対象とする宜山方言は，浙江省温州市蒼南県宜山鎮で話される方言を指す[1)]。蒼南県は浙江省最南端の沿岸部にあり，福建省と境界を接している。宜山はこの東部に位置する鎮（町）である。

温端政（1991:9–12）の記述によれば，蒼南県には，呉語，閩語[2)]，蛮語[3)]，金郷語[4)]，畲語の５つの言語（方言）が分布する[5)]。そのうち閩語話者が最も多く，続いて蛮語話者，呉語話者は３番目に多い[6)]。宜山方言は呉語に帰属し，温州と同じ方言グループ（瓯江片）に分類されるが

（汪平・曹志耘2012:104），宜山には閩語や蛮語の話者も多く住んでおり，呉語と閩語が混交している地域であると言える。本稿では，宜山で話される呉語を対象とする。

入声とは，韻尾（音節末子音）が内破音［-p -t -k］で構成され，短く詰まって発音される音節を調類としたものを指し，陰陽に分かれた陰入と陽入は，まとめて入声調と呼ぶ。呉語には依然として入声が存在するが，旧入声韻尾［-p -t -k］の区別はなく，声門閉鎖音［-ʔ］に統合されており，短く詰まって発音される「短促調」である点が特徴として挙げられる。しかし，温州の入声は，入声韻尾［-ʔ］を伴わず長音化しており，入声の音長（音節の長さ）は舒声（入声以外の声調）よりも長くなっていることで知られる（盛金標2001，劉俐李2016）。ただ入声という調類は，依然として存在することから，まだ完全には舒声と合流していないと言える。

宜山で話される呉語は，現地では「温州語」と呼ばれており，先行研究（顔逸明2000:57）によると，宜山の入声も短促調ではないことは確認できるが，それ以上の実態はわからない。果たして宜山の入声も温州と同様，入声の音長は舒声よりも長くなっているのであろうか。本稿では，音響音声学的な手法を用いて，入声と舒声の音長（後続母音の持続時間）と音高（後続母音のF0値）を比較しながら，単字調（単音節語の声調）における入声の特性について明らかにすることを目指す。また発話者間の比較を通して，単字調における入声の動きについても分析し，舒声化への進行プロセスについても考察を行うことにする。

１．調査対象と分析方法

1.1　発話者

本稿の分析は，７名の発話者（Sample）の録音データに基づく。表１は，発話者リストである。表内の年齢は調査時の年齢で，年齢順に出生年，性別，最終学歴[7)]，職業，両親の出身地と母語，日常生活で使用する言語，他地域での生活歴を示す。日常生活で使用する言語については，話す相手や場所によって方言と普通話（共通語）をどう使い分けているか，三択（方言，普通話，両方）で回答してもらった。その結果，方言のみで交流する相手は，年長者或いは同世代者に限られていることがわかった。中には店員や隣人にも方言のみで交流すると回答した発話者もいたが（S3とS7），その話し相手の世代や年齢は，おそらく年長者或いは同世代者であろうと推測する。なお発話者の選定は，異なる年齢層（老年層，中年層，若年層）から男女１ペアずつが理想であるが，若年層（20歳代）では，方言が正確に話せる話者が見つからず，老年層（70歳以上）では，文字が正確に読める女性話者がいなかったことから，40～50歳代の発話者に集中している。

宜山は織物の産地で，中国屈指の「内衣名鎮」（下着の名産地）として知られる。住民の多くが家内労働者として，自宅の一室或いは近所の作業場で紡織業に従事している。７名の発話者のうち５名はその従事者で，女性発話者の職業は自称「主婦」であったが（表１），実際は全員が内職で紡織業に従事している。また女性話者のうち２名（S6とS7）は，宜山に隣接する龍港市出身であるが，龍港と宜山の方言は，音声については韻母の一部が異なるだけで，声母と声調に

関しては，違いは見られないことから（温端政1991:155–157，顔逸明2000:55–57），発話者に含めた。その他，男性発話者の一人（S3）は，他地域での生活歴（上海20年）があるが，地元を離れていた時期は26歳から46歳までの間で，言語形成期において他地域で生活した経験を有さないことから，母語への影響は少ないと見なし発話者に含めた。調査は，2024年10月28日と29日の２日間に実施し，発話者の自宅或いは作業場で録音を行った。なお今回の現地調査では，京都外国語大学大学院生呉高潔氏の同行と協力を得た。

表１．発話者リスト

発話者	年齢	出生年	性別	最終学歴	職業	出身地	両親の出身地と母語（呉語or閩語）		日常生活で使用する言語（方言/普通話/両方）							他地域での生活歴
							父親	母親	対年長者	対同世代	対若年者	職場	役所	対店員	対隣人	
S1	91	1932	男	小学	紡織業	宜山	宜山(呉)	宜山(呉)	方言	方言	両方	両方	普通話	両方	両方	なし
S2	52	1973	女	小学	主婦	宜山	宜山(呉)	宜山(呉)	方言	方言	両方	普通話	普通話	両方	両方	なし
S3	50	1975	男	大専	教師	宜山	宜山(呉)	宜山(呉)	方言	方言	普通話	普通話	普通話	方言	方言	上海20年
S4	47	1978	女	小学	主婦	宜山	宜山(呉)	望里(閩)	方言	方言	両方	両方	普通話	両方	両方	なし
S5	46	1979	男	中学	運転手	宜山	宜山(呉)	宜山(呉)	方言	方言	両方	両方	両方	両方	両方	なし
S6	44	1981	女	小学	主婦	龍港	宜山(呉)	宜山(呉)	方言	両方	両方	両方	両方	両方	両方	なし
S7	42	1983	女	大専	主婦	龍港	浙江(呉)	浙江(呉)	方言	普通話	普通話	両方	両方	方言	方言	なし

1.2　調査語

調査した語は，表２のとおりである。声調は，T1（陰平），T2（陽平），T3（陰上），T4（陽上），T5（陰去），T6（陽去），T7（陰入），T8（陽入）の記号で示す（括弧内は対応する調類）。調査語は，①開口系韻母，②無気音，③p系とt系の声母，④韻母は同音の４条件で選定を行ったミニマル・ペア（表２の上２段）と舒声調におけるミニマル・ペア（表２の３段目）の計22語である。なお表２の音価は，温州方言（鄭張尚芳2008）を参考にした想定音価である。

表２．調査語と想定音価

T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8
班［pa］	排［ba］	板［pa］	罢［ba］	拜［pa］	办［ba］	百［pa］	白［ba］
丹［ta］	谈［da］	胆［ta］	淡［da］	带［ta］	弹［da］	搭［ta］	达［da］
东［toŋ］	铜［doŋ］	懂［toŋ］	动［doŋ］	冻［toŋ］	洞［doŋ］		

1.3　分析方法

調査語は，最初の16語は調類ごと（表２の順番通り）に配列し，残りの６語は「东，洞，懂，动，铜，冻」の順に変更し，その後ろに入声の「百，白，搭，达」の４語を付け加え，一枚のA4用紙に26文字が収まる形で印刷した。発話者には「班」から順に一語ずつポーズを置きなが

ら5回通しで発音してもらった。つまり一語につき5回，入声語については各語10回の発話データを収録した。録音にはPraat（Paul Boersma and David Weenink 1992–2023: ver.6.3.10）のSoundRecorder（Mono Channels，サンプル周波数44100Hz）を用い，マイクはAKG社製LYRAを使用した。すべての録音音声はProsodyPro.praatscript（Xu2005–2021: ver. 5.7.8.7）を用いて計測した。具体的な計測方法については，大西（2018:3）を参照されたい。

2．音長分析

まずは音長から分析を始める。この分析は，F0の計測から得られた持続時間（duration）の測定値で行う。本章では，表2の調査語のうち「东，铜，懂，动，冻，洞」を除いた16語を対象に，持続時間の平均値（平均持続時間）を算出した上で分析を行う。なお各調査語の実際の音価（実音価）は表3の通りであった。一部の声母や韻母に個人差や地域差が見られた[8)]。

表3．調査語と実音価

T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8
班 ［pa/pɔ］	排 ［ba/bæɐ］	板 ［pa/pɔ］	罢 ［ba/bɔ/ bæɐ/pa］	拜 ［pa/pæɐ］	办 ［ba/bɔ］	百 ［pa］	白 ［ba］
丹 ［ta/tɔ］	谈 ［da/dɔ］	胆 ［ta/tɔ］	淡 ［da］	带 ［ta/tæɐ］	弹 ［da/dɔ］	搭 ［ta/tɔ］	达 ［da/dɔ］

2.1　調査語の平均持続時間

図1は，発話者全員の各調査語における平均持続時間（付録表1）を長い順に示したものである。入声語の序列に着目すると，T8の「白」（412.0ms）が最も長く，続いてT7の「百」（403.6ms）

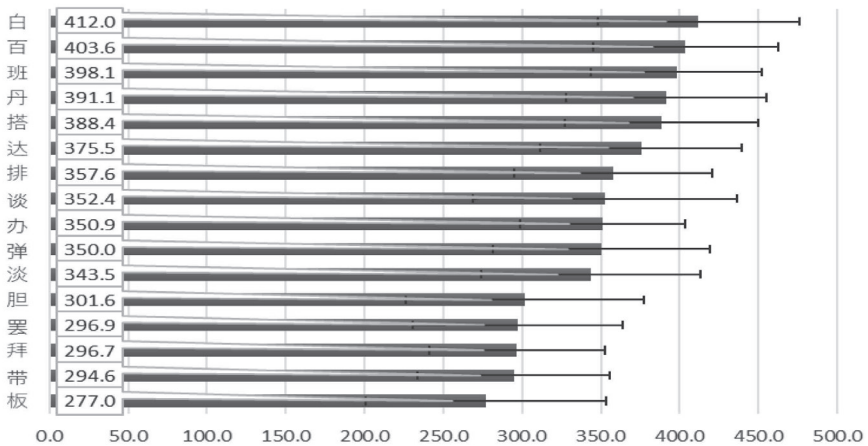


図1．各調査語における平均持続時間（単位ms）

であった。またT7の「搭」（388.4ms）は5番目，T8の「達」（375.5ms）は6番目に長く，入声語は単字調において長く発話されることが確認できた。ちなみに一番短い調査語はT3「板」（277.0ms）であったが，この結果は，先行研究（温端政1991:157，顔逸明2000:57）の記述と一致していた。

2.2　発話者間の音長差

次に発話者間の音長差を比較してみる。表4は，各声調における平均持続時間を発話者ごとに長い順から示したものである。発話者S1は91歳（1932年生まれ）で最年少のS7（1983年生まれ）と約50歳の年齢差があることから，発話者間の比較を通して，入声の音長変化について分析してみることにする。

まず最も長い声調に着目すると，7名のうち5名が入声（T7かT8）となっている。そのうちS1とS3ではT7が最長であるのに対し，S4，S6，S7ではT8が最長で，若い発話者においてはT8の方がT7よりも長い傾向にある。次にT7とT8の音長差を比較してみると（表5），S1，S2，S3ではT7の方がT8よりも22.6ms以上長いが，S4とS5ではT7とT8の差はわずか10ms以下であり，S6とS7ではT8の方がT7よりも18.1ms以上長い。

以上の結果から，T8の音長は，最初はT7より短かったと仮定する。しかし，T7と同じ音長を獲得するまでに長音化し，やがてT7の音長を超えるまでに長音化したと分析する。つまりT8の音長は以下のプロセスで，T7よりも長音化したと考える：T8短＜T7 → T8≒T7 → T8長＞T7。

表4．各声調の音長序列

	最長	>	>	>	>	>	>	最短
S1	T7	T1	T2	T8	T6	T4	T5	T3
S2	T1	T2	T7	T6	T8	T3	T4	T5
S3	T7	T1	T8	T2	T4	T6	T5	T3
S4	T8	T1	T7	T2	T6	T4	T3	T5
S5	T1	T2	T7	T8	T6	T5	T4	T3
S6	T8	T7	T1	T6	T4	T5	T2	T3
S7	T8	T7	T1	T6	T4	T2	T5	T3

表5．T7とT8の音長差（単位ms）

	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7
T7	399.2	451.2	435.9	434.4	279.5	369.8	401.9
T8	354.9	428.6	406.8	440.6	275.9	387.9	461.4
音長差	＋44.3	＋22.6	＋29.1	－6.2	＋3.6	－18.1	－59.5

2.3 他地点との比較

発話者同士の比較から得られた結果は，果たして他の地点においても観察できるのだろうか。表 6 は発話者全員の結果を統合した単字調の平均持続時間（絶対値）と相対値であり，表 7 は温州の単字調における持続時間の相対値を示したものである。温州 a（盛金標2001:349）は63歳男性，温州 b（劉俐李2016:160）は76歳男性[9]を対象に調査した結果である。ちなみに相対値とは，絶対値の平均値を 1 と換算した場合の相対比率を指す。

宜山（表 6 ）においてT7とT8の平均持続時間は，絶対値ではT7（396.0ms）がわずかにT8（393.7ms）より長くなっているが，相対値では両者はともに1.13の値で示せる。この値は，舒声の中で最も長いT1と同じである。一方，温州（表 7 ）では，入声の相対値は宜山よりも高く，温州 a のT7は1.26，T8は1.37，温州 b ではT7，T8どちらも1.27である。また温州 a も温州 b も入声の相対値は，舒声の中で最も長いT6よりも高い。以上のことから，温州の入声は単字調において最も長い声調であることが確認できる。その他，温州 a ではT8の方がT7よりも長いことから，T8に長音化の傾向があることも確認できる。

表 6．宜山の単字調における平均持続時間（絶対値 ms）と相対値

調類	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8
調査語	丹／班	谈／排	胆／板	淡／罢	带／拜	弹／办	搭／百	达／白
絶対値	394.6	355.0	289.3	320.2	295.7	350.5	396.0	393.7
相対値	1.13	1.02	0.83	0.92	0.85	1.00	1.13	1.13

表 7．温州の単字調における持続時間相対値

調類	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8
温州 a	1.04	0.87	0.6	0.78	0.57	1.23	1.26	1.37
温州 b	0.98	0.96	0.82	0.81	0.81	1.07	1.27	1.27

3．音高分析

次に音高分析を行う。まずは声調の高さを示す調値の算出から行う。調値の算出は，発話者間で互いの誤差が最も少ないデータ（調査語）を用いるのが理想であるため[10]，本章では「东，铜，懂，动，冻，洞，百，白」の 8 語による発話データを用いて調値を算出することにする。各語の実音価は，想定音価（表 2 ）の通りであった。

3.1 調値の算出方法

単字調の調値を導き出すには，F0値を標準化する必要がある。本稿では，石鋒（1986，2009）が提案するT値を標準化の指標として使用した。まずは調査語すべての発話データのF0をT値に

換算し，各語における５回の発話データ間で互いの偏差を確認し，その差が最も大きいデータは排除した。排除したデータは，明らかに他と異なるデータを除いて，各語ともに１データに限定し，各声調において均質なデータで分析できるよう調整した[11)]。

その後，発話者ごとに各声調における平均T値（付録表２）と計測時点ごとの実時間平均値（付録表３）を算出し，発話者全員の結果を統合した後，単字調のピッチ曲線を作成した（図２）。図の横軸は実時間（単位s），縦軸はT値を示す。

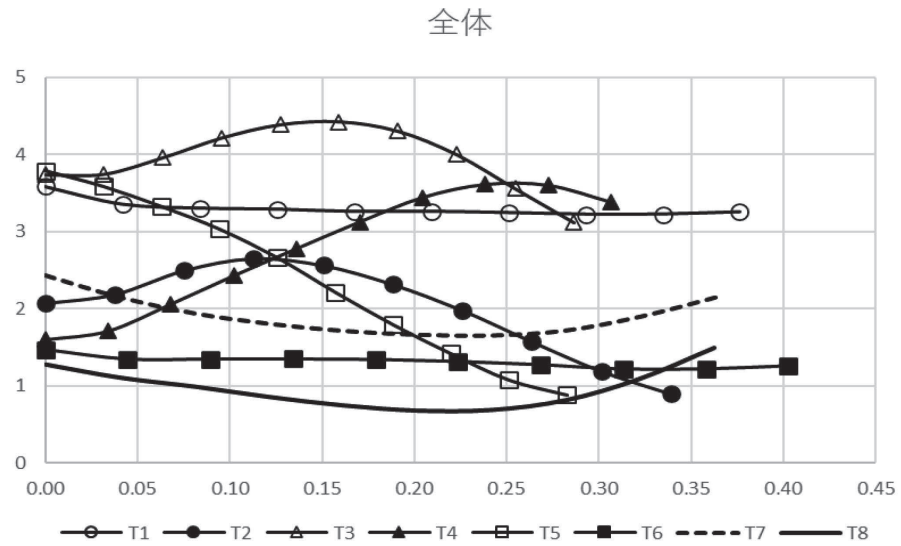


図２．単字調のピッチ曲線（T値）

各声調の最終的な調値は，調値とT値の対応表（表８）をもとに平均T値（付録表２）から各声調の調値を機械的に算出した後，ピッチ曲線（図２）の描写を参考にして判断した。その結果を表９に示す。なお５段階の表記体系では実際のピッチ変動を正確に記述できないため，補助記号（＋／－）を用い，ピッチの上昇を伴う場合は＋，ピッチの下降を伴う場合は－の記号を調値の右上に加えた。

表８．調値とT値の対応

調値	1	2	3	4	5
T値	0.1－1.0	1.0－2.0	2.0－3.0	3.0－4.0	4.0－5.0

表 9．単字調の調値

調類	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8
S1	433	231	453	254	42	22	323	112
S2	44	231	452	253	41	211	323	112
S3	44^{+}	231	452	24	51	22	322^{+}	112
S4	433	231	454	24	41	21	322^{+}	211^{+}
S5	44	231	454	25	42	22	323	212
S6	433	231	455^{-}	24	41	211	322^{+}	212
S7	44	342	455^{-}	24	42	33	323	312
全体	44	231	454	24	41	22	323	212

3.2　入声の調値と音高変化

全体（発話者全員）の結果（図 2 と表 9）から，入声の調形は陰陽いずれも降昇調で，T7は［323］，T8は［212］の調値で表記でき，陰陽入声の音高関係は「陰高陽低」であることが確認できる。

また表 9 において，各発話者のT7とT8の調値を比較すると，T7は［323］或いは［322^{+}］のみが分布し，発話者間で大きな違いは見られないが，T8では，［112］，［212］，［312］の 3 つの異なる調値が分布し，年齢が下がるにつれT8の起点値が上昇していく様子が観察できる（112→212→312）。またS7においてT8［312］の起点値がT7［323］と同じ高さにあることから，T8は起点値を徐々に上昇させながら，T7の音高へ接近していく傾向にあると分析する。

3.3　他地点との比較

それでは他の地点における入声はどうであろうか。表10は，宜山近隣の 3 地点[12]蒼南県霊江鎮（陶寰・朱子璇・姜淑珍2018:406），龍港市（温端政1991:157），平陽県蕭江鎮（顔逸明2000:57）及び温州の単字調調値を示したものである。温州 c は顔逸明（2000:15），温州 d は鄭張尚芳（2008:92）を参照している。

どの地点も 8 声調あり，一部の声調において調値の記述に若干の違いは見られるものの，各声調の調形は基本的に一致している。入声に関しては，T7は温州 d を除いてすべて上昇調，T8は降昇調である。温州 d は，宜山と同じくT7もT8も降昇調である。またT7とT8の音高関係は，龍港を除いてT7は［3］，T8は［2］の起点値で始まる調値が分布しており，「陰高陽低」が維持されている。ただ龍港ではT7とT8の起点値が同じ高さで記述されており，T7とT8は音高の上でも互いに接近していく傾向にあることが，近隣地点においても確認できる。

表10. 近隣地点の調値と実験値

地点	T1	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8
蕭江	44	31	54	243	42	22	34	213
龍港	44	21	54	45	42	22	24	213
霊江	44	331	53	354	42	22	334	213
温州c	44	31	454	243	42	22	34	213
温州d	33	31	45	34	42	11	323	212
実験値	44	231	454	24	41	22	323	212

4．単字調における入声の動き

以上の分析から，宜山の入声は，舒声で最も長い声調（T1）と同等の音長を獲得するまでに長音化しており，陰陽入声はどちらも降昇調で，音高関係は陰高陽低を維持しており，入声の調値は温州と一致していることがわかった。また発話者間の比較から，T8の音長変化（長音化傾向）と音高変化（起点値の上昇傾向）も観察できた。

本章では入声の調査語「百，白，搭，達」における10回分の発話データ（４語×10回）を用い，発話者ごとに各語のピッチ曲線を作成しながら，単字調における入声の動きをさらに詳しく分析する。ピッチ曲線（図３）は，図１同様，横軸は実時間（単位s），縦軸はT値を示す。互いに比較しやすいよう縦軸（T値）の最大値は3.5，横軸（実時間）の最大値は0.45sに設定した。

4.1 T7とT8の音高関係

発話者全員のピッチ曲線（図３）は，高さと形状の違いから二分型と三分型に分類できる。二分型には，「搭，百」と「達，白」との間で区別を有するタイプと「搭，百，達」と「白」との間で区別を有するタイプが含まれ，三分型には，「搭」と「百」と「達，白」との間で区別を有するタイプと「搭」と「百，達」と「白」との間で区別を有するタイプが含まれる。表11に上記４つのタイプをそれぞれABCDと称して順に示す。

また陰陽入声の音高関係に着目すると，AはT7，T8ともに変化なし，BはT8に変化あり，CはT7に変化あり，DはT7，T8ともに変化ありと分類できる。変化が見られた語はT7では「搭」，T8では「達」に限定され，「百」と「白」については，音高関係に変化は見られなかった。

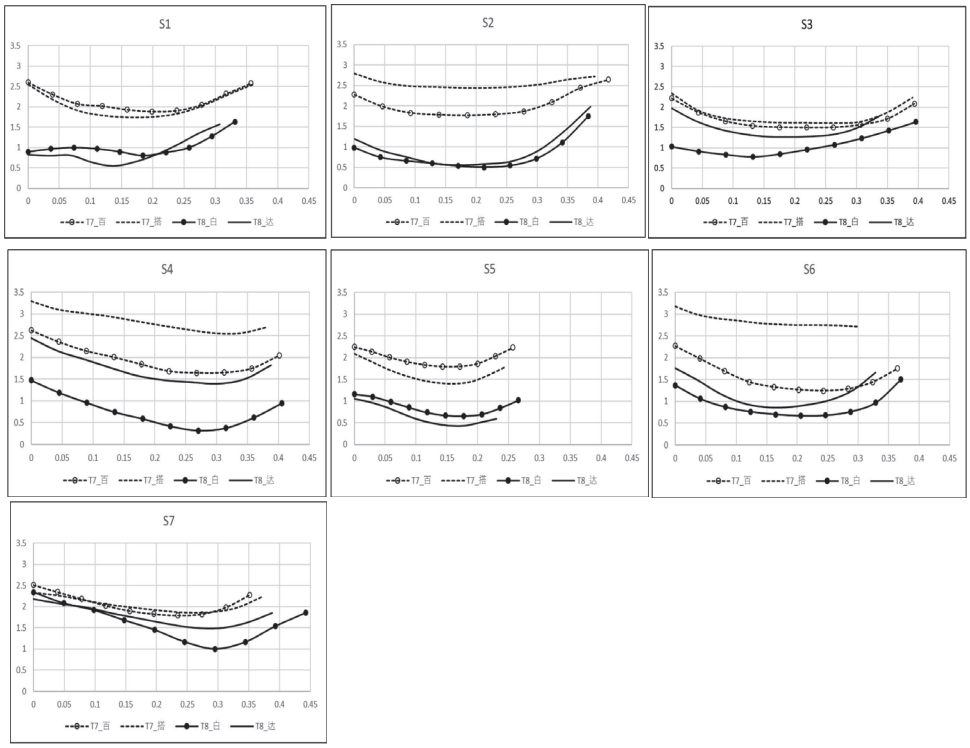


図３.「百，搭，白，達」のピッチ曲線

表11. ピッチ曲線（図３）の分類

類型		区分法	T7とT8の音高関係	該当するグラフ
A	二分型	搭＝百≠達＝白	T7，T8ともに変化なし	S1，S5
B		搭＝百＝達≠白	T8に変化あり	S3，S7
C	三分型	搭≠百≠達＝白	T7に変化あり	S2，S6
D		搭≠百＝達≠白	T7，T8ともに変化あり	S4

4.2 T7の音高変化

T7に音高変化が見られたのは，表11のC，D両タイプに分類されたS2，S4，S6のグラフである。まずは「搭」の10回分の発話データ（T値）を整理しながら，T1「丹，班」[13]とT7「百」のピッチ曲線を比較しながら分析を行う。

「搭」の発話データは，S6のみ10回分すべて同じ音高（T値）で発話されていたが，S2とS4では，高音域で始まる「搭」と中音域で始まる「搭」が混在していたため，前者を「搭a」，後者を「搭b」と称して二分割した。S2は５回分，S4は９回分の発話データが「搭a」に含まれる。図４のピッチ曲線の比較から，S2とS4の「搭a」はT1の「丹，班」いずれの曲線ともほぼ同じ高さに現れているものの，音長（横軸）においてわずかに「丹」と「班」のいずれの曲線にも届

いていない（音長差がある）ことから，まだ完全には舒声（T1）と合流していないと分析する。しかしS6の「搭」は，T1の「丹，班」いずれの曲線とも重なりあっており，なおかつ音長も「班」と一致していることから，舒声（T1）とすでに合流していると見なす。

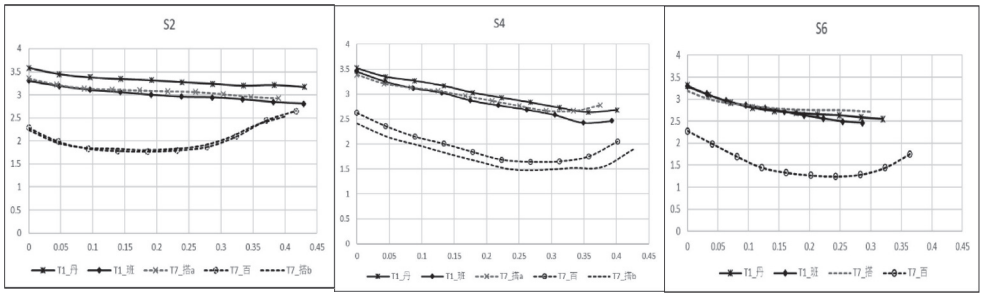


図 4．S2，S4，S6の「丹，搭，百」

4.3　T8の音高変化

T8に音高変化が見られたのは，表11のB，D両タイプに分類されたS3，S4，S7のグラフである。まずは「達」の10回分の発話データ（T値）を整理し，T7のピッチ曲線と対比させながら分析を行う。

「達」の発話データは，音高の違いから「達a」と「達b」に二分割した。S3は 5 回分，S4は 4 回分，S7は 6 回分の発話データが「達a」に含まれる。図 5 のピッチ曲線の比較から，どの発話者も「達a」はT7の「百，搭」（S4は「搭b」のみ）とほぼ同じ高さに現れていることから，「達」はT7へ接近している段階にあると分析する。S4については，「達a」は「百」，「達b」は「搭b」と同じ音高であることから，S4の「達」はT7と同じ音高に変化していると言える。

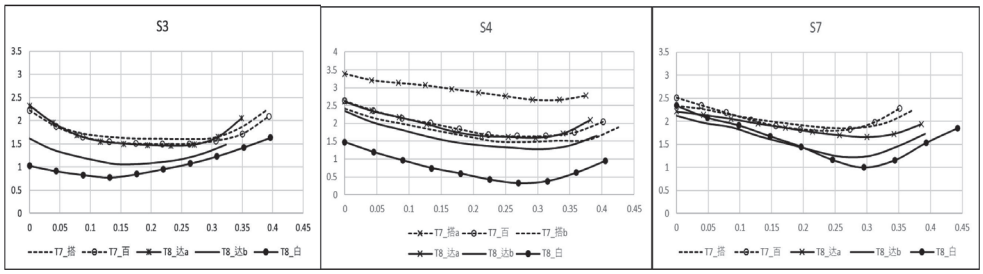


図 5．S3，S4，S7の「搭，百，達，白」

まとめ

本稿では，７名から得られた発話データを基に入声と舒声の音長と音高を比較しながら，単字調における宜山の入声の特性について分析を行った。その結果，宜山の入声は舒声の中で最も長い声調（T1）と同等の音長を獲得するまでに長音化しており，陰陽入声はどちらも降昇調で，

音高関係は陰高陽低を維持しており，単字調の調値は温州と一致していることがわかった。また発話者間の比較から，T7とT8の調査語のうち「搭，白，達」に音長や音高における変化が観察できた（表12)。「白」は長音化傾向，「搭」はT1調値への接近傾向，「達」はT7調値への接近傾向がある。つまりT7は音高のみ，T8には音長と音高のいずれの変化も見られた。

表12.「百，搭，白，達」の動向

動向		T7「百」	T7「搭」	T8「白」	T8「達」
音長	長音化	−	−	+	−
音高	T7へ接近			−	+
	T1へ接近	−	+	−	−

南部呉語の入声は，短促調から長調へ変化した後，単字調においてその入声と同じ調値或いは近似した調値の声調（舒声）が存在していれば，その声調に接近し合流するが，もし同じ調値や近似した調値が存在しなければ，長調化したまま入声調の状態であり続ける（曹志耘1998:96, 2002:445)。つまり南部呉語の入声舒声化は，以下のプロセスで進行する。

短促調　→　長調（長音化）→　舒声調値に接近（調値接近）→　舒声と合流

一方，北部呉語の入声も南部呉語と同様，長音化に始まり，舒声調値への接近を経て舒声との合流へ向かう傾向にあるが，調値接近の後，すぐに舒声合流へ向かうのではなく，接近しあう舒声との音長差（持続時間差）を縮めながら徐々に舒声合流へと向かう（大西2018:14)。つまり北部呉語の入声舒声化は，以下のプロセスで進行する。

短促調　→　長音化　→　調値接近　→　持続時間の接近　→　舒声と合流

宜山のS2とS4のT7「搭a」はT1と同じ音高で現れていたことから（図４)，上記のプロセスにおける「調値接近」段階にすでに到達していると言えるが，音長においてT1との間にまだ時間差が生じていたことから，「持続時間の接近」段階にあると分析する。ただその差はほんのわずかであったことから，「舒声と合流」の一歩手前の段階まで舒声化が進行していると言える。

また舒声化の初期段階では，入声内部にも変化が現れる。その変化とは，陰陽入声が互いに接近し合流しようとする動きと，陰陽入声が互いに反発し，対立を維持しようとする動きである（大西2024:58–59)。表13は，宜山の発話者間の比較（表５と表９）から観察できたT7とT8の音長変化と音高変化をまとめたものであるが，この結果からも陰陽入声の「接近」と「対立」といった真逆の動きが同時に発生していることが見て取れる。音長変化ではT8がT7よりも短い状態からT7との差を縮めて接近しあうものの，T8がT7よりもさらに長音化することで両者の対立

が維持された状態になっている。また音高変化ではT8の始発高度が［1］から［2］と上昇し，T7の始発高度［3］へ接近していく過程が観察できるが，S7のT7［323］とT8［312］では，陰陽の始発高度は同じでもT8の下降（最低）高度はT7よりも低い位置に現れていることから，T7とT8の音高対立はまだ維持された状態にあると言える。

表13. 宜山のT7とT8の音長と音高変化

発話者	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7
音長変化	T8＜T7			T8≒T7		T8＞T7	
音高変化	T8［112］			T8［212］			T8［312］

入声舒声化は，こうした入声内部で発生する「対立」の動きに触発されて進行していくと仮定する。宜山では，T7の「搭」に舒声（T1）調値への接近傾向[14)]が観察できた。この動きは普通話の影響を受けてT1で発話された可能性も否めないが，T8の調値接近[15)]による衝突を避ける動きとも解釈できよう。今回の調査では，T8がT7へ接近する動きのみ観察でき，その逆の動きは見られなかったことからも，T7の舒声調値への接近は，T8との対立を維持しようとする動きの現れとも考えられよう。

宜山の入声は，舒声と同じ音長を獲得するまでに長音化しているのにも関わらず，なぜ舒声と完全に合流しようとしないのだろうか。それは単字調において，入声と同じ調形（降昇調）を持つ声調（舒声）が存在しないからであり，入声と舒声との区別（対立）がまだ必要とされているからだと考える。ただ一部の入声（T7の「搭」など）には，舒声調値への接近傾向が観察できることから，入声の中には舒声と合流する傾向にある語と両者の対立を維持しようとする語が混在していることも事実である。果たしてどのような語が舒声と合流していく傾向にあるのか。さらに調査を推し進め，その問いを解明していくことを今後の課題としたい。

追記

本研究は，独立行政法人日本学術振興会の科研費（22K00565）の助成を得たものである。なお本稿は，日本中国語学会北海道支部例会（2025年3月8日北海学園大学開催）での発表内容に加筆修正を加えたものである。有益なコメントを下さった方々に心より感謝申し上げる。

注

1）宜山鎮の面積は12.9km^2，人口４万4625人である（2019年末統計に基づく。百度百科参照。https://baike.baidu.com/item/%E5%AE%9C%E5%B1%B1%E9%95%87/10964305?fr=ge_ala）。最終確認日2025年５月24日。

2）現地では「閩南語」と呼ばれるが，学術的には「浙江閩語」と呼ばれ，福建南部の閩語とは大きな違いがあるとされる（温端政1991:9–10）。

3）蒼南に分布する蛮語の帰属については，呉語と主張する学者（顔逸明1981，傅佐之1984）と閩語と主張する学者（鄭張尚芳1984，潘悟雲1992，温端政1995，秋谷裕幸2005）の二派にわかれる。

4）金郷語は呉語に帰属するが，周辺の瓯江片呉語とは異なり，太湖片呉語（北部呉語）の特徴を多く有する言語島で，その形成は明の始祖朱元璋の時代，倭寇に備える防衛基地の建設に伴い，浙江省北部や江蘇省南部から北部呉語を話す集団（兵士）が大量移住してきたことに由来する（温端政1991:28）。

5）蒼南県は1981年まで平陽県の所轄区域であり，民国４年（1915年）編纂『平陽県誌』巻19『風土誌』の「民族」という項目にこれら５つの言語（方言）が分布していることが記載されている（『歴代方誌方言文献集成』第６冊　p.3979）。

6）閩語話者は蒼南県総人口の54.4％，蛮語話者は25.6％，呉語話者は16.2％を占める（温端政1991:10–11）。

7）表内の「大専」は，中国語の“大专”を直訳したもの。大学程度の高等専門学校の略称である。

8）例えば一部の調査語に［a］と［ɔ］の２つの韻母が分布しているが，［a］は宜山出身者，［ɔ］は龍港出身者の音価である。但し「罢」の［bɔ］の音価はS1のみに分布した。また「排，罢，拜，带」４語の韻母［æɐ］は，S7のみに分布した。

9）温州ｂの発話者は1940年生まれとしか書かれていないため，当該論文（劉俐李2016）の発表年から発話者の出生年を差し引いて76歳とした。

10）第２章で用いた調査語には，表３で示した通り，想定音価（表２）で発話されなかったデータが含まれていたが，「东，铜，懂，动，冻，洞，百，白」の８語に関しては，すべて想定音価の通りに発話された。なお舒声調の調査語（东，铜，懂，动，冻，洞）は，いずれも鼻音韻尾［-ŋ］を伴うため，鼻音韻尾を伴わない語に比べると持続時間（音長）は必然的に長くなる。よって，図２のピッチ曲線図ではT6の音長が最も長く現れており，表６の結果（入声の音長は舒声の中で最も長い声調と同等の音長を獲得している）と一致しないことを断っておく。

11）入声の調査語「百」と「白」については，10データのうち６データを排除した。

12）これら３地点はそれぞれ異なる行政区域に位置するが，話されている呉語は瓯江片に帰属し（汪平・曹志耘2012:104），音韻体系の違いは小さいと見なされている（顔逸明2000:55–76，陶寰・朱子璇・姜淑珍2018:401–402）。また各地点間の距離は以下の通りである。宜山⇄龍港8.3km，宜山⇄霊江8.6km，霊江⇄蕭江9.8km，蕭江⇄龍港10km（Googleマップでの検索による。最終確認日2025年５月24日）。

13）「丹」と「班」については，５回分の発話データで互いの偏差を確認し，その差が最も大きいデータは排除している。

14）T7のT1調値への接近傾向は，「搭」以外に「扑，发，督，秃，汁，擦，湿，缩，郭，瞎」の10語においても観察できた（2025年５月16日と17日に実施した補足調査による）。但し，この傾向が顕著に見られたのは，S4（６語），S5（５語），S7（６語）の３名のみで，S2とS6ではわずか１語のみ，S1とS3においては全く観察されなかった。

15）T8のT7調値への接近傾向は，「达（達）」以外に「别，特，侄，十，罚，局」の６語においても観察できた（2025年５月16日と17日に実施した補足調査による）。この結果は，各語（T8）と声

母で対立する語（T7）と組み合せた以下 6 組のピッチ曲線の比較から得られたものである（笔－别，德－特，质－侄，湿－十，发－罚，桌－局）。この 6 組のT7とT8のピッチ曲線がほぼ重なる状態で現れた発話者はS6，S7では 5 組，S3では 2 組，S1とS2では 1 組のみ，S4とS5では全く重ならなかった。S4では「达（達）」と「搭」のピッチ曲線は重なる状態で現れていたが（図 5），上記 6 組においてはT7とT8の音高差が観察できた。

参考文献

曹志耘1998〈汉语方言声调演变的两种类型〉，《语言研究》第 1 期
曹志耘2002〈吴徽语入声演变的方式〉，《中国语文》第 5 期
傅佐之1984〈平阳蛮话的性质〉，《方言》第 2 期
华学诚主编2021《历代方志方言文献集成》第 6 册，中华书局
刘俐李2016〈温州吴语声调的EGG研究〉，《南京师范大学文学院学报》第 1 期
潘悟云1992〈苍南蛮话〉，《温州师范学院学报》第 4 期
秋谷裕幸2005《浙南的閩東區方言》，中央研究院語言學研究所
盛金標2001〈温州方言声调实验研究〉，《吴语声调的实验研究》第14章，复旦大学出版社
石锋1986〈天津方言双字调声调分析〉，《语言研究》第 1 期
石锋2009《实验音系学探索》，北京大学出版社
陶寰・朱子璇・姜淑珍2018〈浙江苍南灵江话声调实验〉，《方言》第 4 期
温端政1991《苍南方言志》，语文出版社
温端政1995〈浙南闽语的语音特点〉，《方言》第 3 期
汪平・曹志耘2012〈B14-吴语〉，《中国语言地图集（第二版）汉语方言卷》，商务印书馆
颜逸明1981〈平阳县和泰顺县的方言情况〉，《方言》第 1 期
颜逸明2000《浙江瓯语》，华东师范大学出版社
郑张尚芳1984〈平阳蛮话的性质〉，《方言》第 2 期
郑张尚芳2008《温州方言志》，中华书局
大西博子2018「二甲方言の単字調における音響音声学的分析」，『近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）』第 9 巻第 1 号
大西博子2024〈江苏海门四甲方言中的入声调〉，《吴语研究》第11辑，上海教育出版社

付録

表１．各調査語の平均持続時間（単位ms）

調類	調査語	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	平均	標準偏差
T1	班	353.6	482.4	411.0	438.3	405.0	318.5	377.7	398.1	54.3
	丹	368.3	474.5	427.8	437.5	280.6	358.2	391.2	391.1	63.6
	平均値	360.9	478.4	419.4	437.9	342.8	338.3	384.4	394.6	52.6
T2	排	385.9	467.2	326.6	396.7	325.4	280.1	321.7	357.6	62.7
	谈	328.9	480.5	436.9	383.6	255.1	281.5	300.3	352.4	84.0
	平均値	357.4	473.8	381.8	390.2	290.3	280.8	311.0	355.0	68.0
T3	板	287.1	428.9	295.3	280.8	208.4	228.8	209.9	277.0	76.4
	胆	279.4	422.5	361.4	311.8	208.0	308.2	220.1	301.6	75.6
	平均値	283.3	425.7	328.4	296.3	208.2	268.5	215.0	289.3	73.9
T4	罢	316.8	407.3	342.2	228.5	224.9	251.6	307.0	296.9	66.6
	淡	308.9	432.4	398.4	376.3	217.7	344.6	326.5	343.5	69.9
	平均値	312.8	419.8	370.3	302.4	221.3	298.1	316.7	320.2	62.0
T5	拜	286.2	389.9	360.4	248.5	262.2	277.1	252.8	296.7	55.8
	带	307.5	398.5	332.8	277.5	219.4	295.6	230.9	294.6	61.1
	平均値	296.9	394.2	346.6	263.0	240.8	286.3	241.8	295.7	56.8
T6	办	268.9	417.1	322.3	404.2	315.2	355.7	372.7	350.9	52.5
	弹	365.8	447.6	405.3	323.0	233.0	317.1	358.4	350.0	68.8
	平均値	317.4	432.4	363.8	363.6	274.1	336.4	365.5	350.5	49.0
T7	百	397.0	463.5	437.6	446.2	285.5	404.6	390.7	403.6	58.8
	搭	401.4	438.9	434.1	422.6	273.5	335.1	413.0	388.4	61.4
	平均値	399.2	451.2	435.9	434.4	279.5	369.8	401.9	396.0	58.3
T8	白	368.5	426.6	440.2	450.3	295.4	411.1	491.6	412.0	63.6
	达	341.4	430.7	373.4	430.8	256.3	364.8	431.1	375.5	64.1
	平均値	354.9	428.6	406.8	440.6	275.9	387.9	461.4	393.7	62.7

表２．各声調の平均T値

時点		10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
T1	S1	3.50	3.16	3.12	3.12	2.98	2.93	2.93	2.91	2.95	2.94
	S2	3.79	3.68	3.59	3.53	3.49	3.47	3.43	3.37	3.37	3.48
	S3	3.71	3.24	3.20	3.32	3.45	3.59	3.59	3.67	3.76	3.92
	S4	3.85	3.66	3.63	3.54	3.38	3.27	3.25	3.18	3.08	3.02
	S5	3.34	3.20	3.12	3.11	3.12	3.15	3.14	3.09	3.10	3.15
	S6	3.52	3.09	2.92	2.87	2.88	2.87	2.82	2.77	2.75	2.73
	S7	3.38	3.43	3.52	3.51	3.49	3.52	3.54	3.54	3.53	3.52
	平均値	3.58	3.35	3.30	3.29	3.26	3.26	3.24	3.22	3.22	3.25
T2	S1	2.07	2.40	2.79	2.95	2.76	2.50	2.20	1.89	1.54	1.16
	S2	1.73	2.07	2.60	2.60	2.30	2.03	1.68	1.18	0.79	0.64
	S3	1.86	1.81	2.21	2.44	2.43	2.16	1.81	1.40	1.12	0.89
	S4	2.30	2.45	2.64	2.77	2.69	2.45	2.11	1.70	1.21	0.74
	S5	1.68	1.81	2.03	2.20	2.21	2.08	1.85	1.62	1.37	1.20
	S6	2.11	2.02	2.25	2.48	2.43	2.06	1.58	1.04	0.57	0.30
	S7	2.73	2.75	2.95	3.12	3.10	2.93	2.63	2.19	1.71	1.30
	平均値	2.07	2.18	2.50	2.65	2.56	2.32	1.98	1.57	1.19	0.89
T3	S1	3.91	3.87	4.03	4.20	4.14	3.96	3.74	3.49	3.23	2.87
	S2	4.02	4.19	4.57	4.78	4.72	4.44	3.84	2.80	1.74	1.12
	S3	3.83	3.71	4.09	4.54	4.84	4.77	4.41	3.75	2.79	1.75
	S4	4.03	4.07	4.23	4.44	4.66	4.81	4.76	4.58	4.22	3.52
	S5	3.55	3.57	3.70	3.94	4.17	4.26	4.23	4.11	3.91	3.81
	S6	3.53	3.44	3.55	3.77	4.05	4.35	4.49	4.47	4.32	4.17
	S7	3.27	3.35	3.52	3.80	4.08	4.36	4.62	4.76	4.67	4.55
	平均値	3.73	3.74	3.95	4.21	4.38	4.42	4.30	4.00	3.55	3.12
T4	S1	1.64	2.10	2.84	3.46	3.83	4.00	4.01	3.81	3.46	3.04
	S2	1.64	2.27	3.32	3.97	4.45	4.64	4.57	4.00	3.14	2.05
	S3	1.84	1.76	1.92	2.07	2.15	2.29	2.66	2.94	3.07	3.18
	S4	1.63	1.55	1.84	2.23	2.58	2.96	3.39	3.84	4.09	3.88
	S5	1.20	1.35	1.60	2.01	2.56	3.14	3.67	4.05	4.22	4.26
	S6	1.27	1.06	1.07	1.39	1.93	2.68	3.34	3.79	4.00	3.96
	S7	1.96	1.88	1.83	1.87	1.97	2.16	2.44	2.83	3.20	3.27
	平均値	1.60	1.71	2.06	2.43	2.78	3.12	3.44	3.61	3.60	3.38

T5	S1	3.61	3.25	2.82	2.56	2.39	2.23	2.07	1.81	1.49	1.29
	S2	3.62	3.33	2.80	2.30	1.91	1.57	1.19	0.89	0.57	0.24
	S3	4.37	4.01	3.76	3.37	2.78	1.94	1.41	1.12	0.94	0.84
	S4	3.90	3.79	3.63	3.39	3.01	2.48	1.91	1.43	0.96	0.56
	S5	3.37	3.25	3.10	2.91	2.68	2.38	2.04	1.70	1.39	1.28
	S6	3.66	3.50	3.23	2.83	2.22	1.65	1.16	0.70	0.35	0.35
	S7	3.96	3.95	3.93	3.85	3.62	3.23	2.77	2.26	1.82	1.60
	平均値	3.78	3.58	3.32	3.03	2.66	2.21	1.79	1.42	1.07	0.88
T6	S1	1.28	1.41	1.51	1.55	1.53	1.49	1.35	1.18	1.13	1.21
	S2	1.24	0.97	0.97	0.93	0.86	0.70	0.58	0.56	0.53	0.49
	S3	1.48	1.45	1.73	1.88	1.91	1.97	2.06	2.08	2.11	2.09
	S4	1.52	1.29	1.17	1.01	0.90	0.88	0.83	0.75	0.65	0.57
	S5	1.08	1.04	0.99	0.97	1.00	1.00	0.97	0.94	0.94	0.98
	S6	1.33	0.98	0.89	0.86	0.90	0.90	0.78	0.68	0.83	1.07
	S7	2.33	2.27	2.16	2.23	2.29	2.27	2.34	2.35	2.37	2.40
	平均値	1.47	1.34	1.35	1.35	1.34	1.31	1.27	1.22	1.22	1.26
T7	S1	2.46	2.11	1.91	1.83	1.80	1.80	1.83	1.99	2.25	2.48
	S2	2.12	1.81	1.68	1.63	1.60	1.60	1.66	1.86	2.22	2.44
	S3	2.44	2.03	1.75	1.61	1.56	1.54	1.50	1.50	1.58	1.82
	S4	2.53	2.24	2.04	1.91	1.70	1.56	1.51	1.47	1.56	1.86
	S5	2.46	2.34	2.20	2.10	2.03	2.00	2.02	2.10	2.28	2.47
	S6	2.48	2.15	1.81	1.56	1.41	1.34	1.31	1.34	1.48	1.76
	S7	2.55	2.34	2.16	1.96	1.83	1.75	1.69	1.73	1.89	2.19
	平均値	2.43	2.15	1.94	1.80	1.70	1.66	1.65	1.71	1.89	2.15
T8	S1	0.78	0.81	0.85	0.80	0.78	0.75	0.81	1.06	1.44	1.74
	S2	0.68	0.49	0.41	0.35	0.29	0.29	0.33	0.49	0.89	1.61
	S3	0.97	0.91	0.87	0.84	0.88	0.96	1.06	1.16	1.25	1.52
	S4	1.60	1.24	0.94	0.69	0.47	0.33	0.26	0.33	0.52	0.94
	S5	1.32	1.25	1.14	0.99	0.83	0.76	0.76	0.82	0.99	1.22
	S6	1.45	1.11	0.90	0.79	0.72	0.68	0.72	0.83	1.09	1.64
	S7	2.13	1.91	1.80	1.51	1.22	0.94	0.83	0.96	1.44	1.76
	平均値	1.27	1.10	0.99	0.85	0.74	0.67	0.68	0.81	1.09	1.49

表３．各声調の実時間平均値

時点		10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
T1	S1	0.00	0.04	0.09	0.13	0.18	0.22	0.27	0.31	0.35	0.40
	S2	0.00	0.05	0.10	0.15	0.20	0.25	0.30	0.35	0.40	0.45
	S3	0.00	0.05	0.09	0.14	0.19	0.23	0.28	0.33	0.37	0.42
	S4	0.00	0.04	0.09	0.13	0.17	0.21	0.26	0.30	0.34	0.39
	S5	0.00	0.04	0.07	0.11	0.14	0.18	0.21	0.25	0.29	0.32
	S6	0.00	0.04	0.08	0.11	0.15	0.19	0.23	0.27	0.31	0.34
	S7	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.24	0.28	0.32	0.36
	平均値	0.00	0.04	0.08	0.13	0.17	0.21	0.25	0.29	0.33	0.38
T2	S1	0.00	0.03	0.07	0.10	0.14	0.17	0.21	0.24	0.28	0.31
	S2	0.00	0.05	0.09	0.14	0.19	0.24	0.28	0.33	0.38	0.43
	S3	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.24	0.28	0.32	0.36
	S4	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.24	0.27	0.31	0.35
	S5	0.00	0.03	0.05	0.08	0.11	0.13	0.16	0.19	0.21	0.24
	S6	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.24	0.28	0.33	0.37
	S7	0.00	0.03	0.07	0.10	0.14	0.17	0.21	0.24	0.28	0.31
	平均値	0.00	0.04	0.08	0.11	0.15	0.19	0.23	0.26	0.30	0.34
T3	S1	0.00	0.03	0.07	0.10	0.13	0.16	0.20	0.23	0.26	0.30
	S2	0.00	0.05	0.10	0.14	0.19	0.24	0.29	0.34	0.39	0.43
	S3	0.00	0.04	0.08	0.12	0.15	0.19	0.23	0.27	0.31	0.35
	S4	0.00	0.03	0.06	0.09	0.12	0.15	0.17	0.20	0.23	0.26
	S5	0.00	0.02	0.05	0.07	0.09	0.12	0.14	0.17	0.19	0.21
	S6	0.00	0.03	0.05	0.08	0.11	0.13	0.16	0.19	0.21	0.24
	S7	0.00	0.02	0.05	0.07	0.09	0.12	0.14	0.17	0.19	0.21
	平均値	0.00	0.03	0.06	0.10	0.13	0.16	0.19	0.22	0.25	0.29
T4	S1	0.00	0.03	0.06	0.09	0.13	0.16	0.19	0.22	0.25	0.28
	S2	0.00	0.05	0.09	0.14	0.19	0.24	0.28	0.33	0.38	0.42
	S3	0.00	0.03	0.07	0.10	0.14	0.17	0.21	0.24	0.28	0.31
	S4	0.00	0.03	0.07	0.10	0.14	0.17	0.21	0.24	0.28	0.31
	S5	0.00	0.02	0.05	0.07	0.09	0.11	0.14	0.16	0.18	0.21
	S6	0.00	0.03	0.07	0.10	0.13	0.17	0.20	0.24	0.27	0.30
	S7	0.00	0.03	0.07	0.10	0.14	0.17	0.20	0.24	0.27	0.31
	平均値	0.00	0.03	0.07	0.10	0.14	0.17	0.20	0.24	0.27	0.31

T5	S1	0.00	0.03	0.05	0.08	0.11	0.13	0.16	0.19	0.22	0.24
	S2	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.24	0.28	0.32	0.36
	S3	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.24	0.28	0.32	0.36
	S4	0.00	0.03	0.06	0.09	0.11	0.14	0.17	0.20	0.23	0.26
	S5	0.00	0.02	0.04	0.06	0.09	0.11	0.13	0.15	0.17	0.19
	S6	0.00	0.04	0.08	0.12	0.15	0.19	0.23	0.27	0.31	0.35
	S7	0.00	0.02	0.05	0.07	0.10	0.12	0.15	0.17	0.20	0.22
	平均値	0.00	0.03	0.06	0.09	0.13	0.16	0.19	0.22	0.25	0.28
T6	S1	0.00	0.04	0.08	0.13	0.17	0.21	0.25	0.29	0.34	0.38
	S2	0.00	0.05	0.10	0.14	0.19	0.24	0.29	0.33	0.38	0.43
	S3	0.00	0.05	0.10	0.15	0.19	0.24	0.29	0.34	0.39	0.44
	S4	0.00	0.05	0.09	0.14	0.19	0.23	0.28	0.33	0.37	0.42
	S5	0.00	0.03	0.07	0.10	0.13	0.17	0.20	0.23	0.27	0.30
	S6	0.00	0.05	0.09	0.14	0.18	0.23	0.27	0.32	0.36	0.41
	S7	0.00	0.05	0.10	0.15	0.20	0.25	0.30	0.35	0.40	0.45
	平均値	0.00	0.04	0.09	0.13	0.18	0.22	0.27	0.31	0.36	0.40
T7	S1	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.24	0.28	0.32	0.36
	S2	0.00	0.05	0.10	0.14	0.19	0.24	0.29	0.33	0.38	0.43
	S3	0.00	0.04	0.08	0.12	0.17	0.21	0.25	0.29	0.33	0.37
	S4	0.00	0.04	0.08	0.12	0.17	0.21	0.25	0.29	0.33	0.37
	S5	0.00	0.03	0.06	0.09	0.12	0.16	0.19	0.22	0.25	0.28
	S6	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.21	0.25	0.29	0.33	0.37
	S7	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.24	0.28	0.32	0.35
	平均値	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.24	0.28	0.32	0.36
T8	S1	0.00	0.03	0.06	0.09	0.12	0.15	0.18	0.21	0.24	0.27
	S2	0.00	0.04	0.09	0.13	0.17	0.22	0.26	0.30	0.34	0.39
	S3	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.25	0.29	0.33	0.37
	S4	0.00	0.04	0.09	0.13	0.18	0.22	0.27	0.31	0.35	0.40
	S5	0.00	0.03	0.06	0.10	0.13	0.16	0.19	0.23	0.26	0.29
	S6	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.24	0.28	0.32	0.36
	S7	0.00	0.05	0.10	0.15	0.20	0.25	0.30	0.35	0.40	0.45
	平均値	0.00	0.04	0.08	0.12	0.16	0.20	0.24	0.28	0.32	0.36

中国文化発信の軽舟となるか
── マイクロドラマの展開とCGO戦略についての考察 ──

戴　　智軻

〈要旨〉

本稿は，中国の文化輸出政策「文化走出去（CGO）」戦略の新たな展開として，短尺動画コンテンツ「マイクロドラマ」を対象として分析する。まず，CGO戦略が経済的・政治的動機から始まり，近年デジタルメディア重視へと転換した経緯を概観する。次に，マイクロドラマが，中国国内で爆発的に普及した後，国内の競争激化と規制強化を背景に海外へ進出した実態を明らかにする。特に米国市場でのReelShortの成功は，徹底した現地化戦略によるものだが，ユーザー定着率の低さや地政学的リスクといった課題も抱える。結論として，マイクロドラマの海外展開は市場原理が主導しており，国家主導のCGO戦略のソフトパワー向上という目標達成に新たな可能性を示す一方で，その文化的表層性や国家統制が限界となりうる複雑な状況を論じる。

〈摘要〉

本文旨在分析“微短剧”这一短视频内容，对国“文化走出去”（CGO）战略新发展进行探讨。首先本文梳理了该战略的演变历程：起初源于经济及政治动机，近年则转向重点发展数字媒体。其次，本文指出，微短剧在中国国内经历爆发式普及之后，已在竞争加剧与监管收紧的双重背景下向海外市场扩张。文中尤以ReelShort在美国市场的成功为例，指出其成功虽归功于彻底的本土化战略，但同样面临用户粘性不足和地缘政治风险等挑战。本文认为，微短剧的海外扩张主要由市场逻辑驱动，虽然为提升中国软实力战略目标上增添了新的可能性，但其文化内涵的浅表性以及国家管控等复杂因素抑或为其进一步扩张带来局限与制约。

はじめに

グローバル化が進展する現代において，国家の文化的な影響力は国際関係における重要な要素となっている。中国は過去20年にわたり，「文化走出去」（Culture Going Out, 文化の海外進出）戦略（以下「CGO戦略」とする）を推進し，自国文化の国際的な普及とソフトパワーの向上を図ってきた。この国家戦略は，経済的・政治的な動機に基づき，孔子学院の設立，文化産品の輸出促進，国際文化交流の活発化など，多岐にわたる施策を通じて展開されてきた（Yang & Ocon, 2023）。

近年，この戦略の新たな局面として，デジタルメディア，特に「微短劇（マイクロドラマ）」[1)]

と呼ばれる新しい形態のウェブ映像コンテンツが注目を集めている。マイクロドラマは，スマートフォンでの視聴を前提とした，1話あたり数分程度の短尺，縦型画面，急展開なストーリーなどを特徴とする。このフォーマットは，中国国内市場において驚異的な成長を遂げた後，ReelShortをはじめとする新興プラットフォームを通じて急速に海外市場への進出を果たしつつある。その結果，従来の中国製メディアコンテンツが到達し得なかった国際的視聴者層の獲得に成功しており，これは中国の文化発信における新たな可能性を示唆するものと言える。特に注目すべきは，マイクロドラマが従来型の流通経路や消費空間とは異なる，モバイル・デジタルプラットフォームを基盤とした独自のエコシステムを構築している点である。こうした特性により，マイクロドラマは，従来の映画やテレビドラマといった長尺作品が直面してきた文化的障壁や市場参入の困難を回避し，より柔軟かつ即応的な国際展開を可能にしている。このような意味において，中国国内ではマイクロドラマは，中国の文化的ソフトパワーを国際社会に浸透させる「軽舟」[2]として譬えられ，大規模な文化外交戦略や制度的支援に依存せずとも，市場原理と技術革新を通じて自律的に海外進出を実現する新しいモデルとして，大きな期待を集めているのである。

本稿は，中国のCGO戦略の展開，転換およびその成果を概観したうえで，中国製マイクロドラマの定義，特徴，国内での普及状況，そして海外，特に米国市場での受容実態を分析する。その上で，CGO戦略の文脈においてマイクロドラマがどのように位置づけられているのか，両者の関係性を考察する。さらに，マイクロドラマを用いたCGO戦略の効果と限界，検閲，文化摩擦，プラットフォーム規制といった課題についても検討する。

CGO戦略の変遷とマイクロドラマの海外受容という2つの現象を結びつける研究は，いくつかの点で重要性を持つ。第一に，マイクロドラマの国際的な展開は，中国発のデジタルコンテンツが世界市場で影響力を増している現状を示す注目すべき事例であり，これは，現代中国の文化外交とデジタル時代のメディア戦略の交差点を深く理解し，CGO戦略の成否を改めて判断する格好の材料となるのみならず，文化のグローバル化とデジタルプラットフォームを介した文化輸出の新たな形態を考察する上で重要な示唆を与える。第二に，マイクロドラマはグローバルなデジタルメディア経済において急速に成長しているセクターであり，その産業動態を理解することは，現代メディアの潮流を把握する上で不可欠である。

本稿の構成は以下の通りである。まず，第1節ではCGO戦略の進化と展開を概観する。第2節では，マイクロドラマの定義を点検し，中国国内におけるマイクロドラマ産業の成長と構造変容，管理政策の転換について詳述する。第3節では，マイクロドラマの国際展開の現状，および米国以外の海外市場での受容状況を分析する。第4節で，海外展開において有力なプラットフォームの一つであるReelShortを事例に，最大の海外市場と言われる米国におけるマイクロドラマの受容状況を分析する。最後の第5節では中国が増強を目指している「文化軟実力（文化ソフトパワー）」との関連性に基づき，マイクロドラマについての本稿の主要な結論を要約し，今後の展望について述べる。

1.「文化走出去」戦略の展開と転換

1.1 起源，目的，政策的枠組み

「文化走出去（CGO）」戦略は，20世紀末から21世紀初頭にかけて，中国企業の海外進出を奨励するより広範な「走出去」（Going Global）政策の一環として形成された。特に2001年の世界貿易機関（WTO）加盟は，中国のグローバルな政治経済秩序への統合を加速させる契機となり，文化政策においても国際的な展開を意識する背景となった。当初の「走出去」戦略は，デフレによる景気後退やアジア通貨危機への対応として，構造調整，輸出振興，資源の安定供給確保，過剰流動性の緩和といった経済的な動機が強かった（Reddy, 2023）。

文化領域における「走出去」戦略が明確に打ち出されたのは2001年から2002年頃であり，文化部（当時）は国際文化交流の拡大と戦略の実施を強調した。この戦略は，主に 2 つの目的を追求してきたと指摘される（Yang & Ocon, 2023）。第一に経済的動機であり，国際文化市場の開拓，文化産品・サービスの輸出促進，文化貿易における赤字の縮小を目指すものである。第二に政治的・ソフトパワー的動機であり，国家のソフトパワー向上，中国のグローバルイメージの改善，国際的影響力の増大，国外でのネガティブな報道への対抗，そして文化交流の促進を通じて相互理解を深めることである（戴, 2010; Yang & Ocon, 2023）。

この戦略を推進するための主要な政策手段としては，初期から「中国文化年」のような大規模な文化交流イベントの開催 や，言語・文化普及の拠点としての孔子学院（CI）の設立が挙げられる。Wei ら（2020）によると，そのいずれも，中国とホスト国との相互理解を促進することで，文化的な差異に起因する対外直接投資（OFDI）への負の影響を軽減する効果も期待されていた。

1.2 段階的発展と戦略的転換

2006年に発表された「第11次 5 カ年規画期国家文化発展計画綱要」では，中国文化のグローバルな推進と文化貿易赤字の改善が国家文化発展の優先事項の一つとして明記された。さらに2011年，中国共産党第17期中央委員会第 6 回全体会議において，CGO は正式に国家戦略へと格上げされ，「中国文化の国際的影響力を増大させる」ことが呼びかけられた。翌年には中国文化部が「第12次 5 カ年規画期国家文化事業発展計画」を発表し，CGO 戦略を五大国家発展戦略の 1 つに位置づけた。また，中国の国際的な発言力を強化し，西側メディアに対抗することを目指し，2009年にはメディア分野に特化した「走出去」政策も開始された（Hu & Ji, 2012）。

習近平政権下では，「一帯一路」構想（BRI）のような，より大きな国家戦略との連携が強化された。BRI 沿線国への投資における文化的な衝突リスクを軽減するため，文化交流が重視されるようになった。この時期，中国は既存の国際秩序の枠組み内での発展に留まらず，アジアインフラ投資銀行（AIIB）など，自ら主導して国際組織を設立するなど，より積極的な対外進出と「大国」としての意識を前面に打ち出すようになった。国内的には，旧来の成長モデルの問題，国有企業と政府の関係性の変化，外貨準備管理への国民の不満といった国内政治経済的要因も，

対外的な投資や援助プログラムの増加を後押しした。それに合わせて，「文化自信」（文化における自信）が強調され，文化的なアイデンティティと国家の偉大さを結びつける言説が強化された[3)]。

1.3　CGO戦略におけるデジタルメディアの重視

デジタルメディアの普及によって，CGO戦略の展開は，大きな転換期を迎えた。オンライン文学，ゲーム，映画・テレビドラマといったデジタルコンテンツは，中国文化をよりファッショナブルで多様，かつ現代的な形で世界に発信する新たな媒体として認識されるようになった（史 & 朱, 2022）。

政策レベルにおいてもデジタル時代への適応が見られる。政府はデジタル文化産品の輸出を支援し，グローバルなプラットフォームを活用した文化普及を後押ししている。ドラマシリーズ中のCM禁止措置などのような中国国内のテレビ広告規制が，オンライン動画配信の発展を間接的に促した側面もある（Zhao, 2014）。TikTokのようなグローバルプラットフォームは，文化輸出戦略において重要なチャネルと見なされるようになり，AI技術を活用してコンテンツの翻訳や配信を効率化し，大規模なグローバル展開を加速させる試みも行われている（Xinhua, 2025, April 2）。

このデジタルシフトは，より広範なオーディエンスにリーチする機会を提供する一方で，国家によるコンテンツ管理の困難さ，急速なコンテンツサイクルの変化，プラットフォームへの依存といった新たな課題も生じさせている。後述するマイクロドラマの規制強化の動きは，この急速に進化するデジタル空間を国家が管理しようとする際の難しさを示唆している。

1.4　CGO戦略の成果評価と課題

CGO戦略の実施から20年以上が経過し，その成果については評価が分かれている。YangとOcon（2023）は，一般的に，中国国内の研究者は戦略の成果を肯定的に評価する傾向があるのに対し，国外の研究者はその成功に対してより慎重な判断を下すことが多いと指摘する。即ち，中国国内の研究者やアナリストは，文化貿易や輸出の量と価値が期間中に大幅に増加したことを強調し，孔子学院や中国文化センターの急増が，中国のグローバルな存在感の増大と文化交流活動の活発化の証拠として位置づけ，海外で注目を集めた特定の映画やテレビ番組，ゲームなどを成功事例として挙げ，これらの事例はいずれも国家の文化的な自信の高まりと中国文化の国際的な影響力の増大を反映していると解釈する（孫, 2023）。言い換えると，中国国内の評価は，しばしば輸出量，機関の設置数など政府の目標に沿った指標を優先し，個別の成功事例を全体的な進歩の代表例として強調する傾向がある。

しかし，工芸品や楽器のような製造業ベースの「文化製品」全体の輸出は増加しているものの，より深い文化的意味合いを持つ映画，テレビ番組，音楽といった「コア文化製品」においては，依然として貿易赤字が続き，業績が振るわないのが現状である（Yang & Ocon, 2023）。特に映画

やテレビは，ディアスポラ・コミュニティや文化的に近接した地域以外では，主流の国際市場への参入や広範な魅力の獲得に苦戦している（Huang & Xue, 2023）。最も繰り返し指摘されるのは，戦略推進における政府の強力な関与が，国際社会の一部から疑念や警戒感を引き起こしている点である（Nye, 2005; Becard & Filho, 2019; Sun, 2023）。巨額の投資にもかかわらず，この国家主導的性格が妨げとなっており，戦略が実施されて長い間，中国のソフトパワーは国際的な比較調査において依然として低い順位に留まっていたとの評価が一般的である（Shambaugh, 2015）。YangとOcon（2023）が指摘しているように，「地域的にも世界的にも，中国はしばしば経済的・政治的脅威として認識されており，文化『発信』政策はそのような認識を打ち消すにはほとんど役立っていないように思われる」。

このような成果と限界を巡る評価の相違が現れた背景には，戦略の目標であるソフトパワー向上と，その実施方法である国家主導のアプローチとの間に内在的な緊張関係があると考えられる。つまり，文化的な魅力を通じて国際的な好感度を高めようとする目的自体が，強力な国家管理という手段によって損なわれる可能性があるというパラドックスである。

2．中国国内におけるマイクロドラマの発展

2.1　マイクロドラマの定義と特徴

マイクロドラマは，近年中国で急速に発展・普及した新しい映像コンテンツ形式である。国家広播電視総局（NRTA）による公式な定義では，１話あたりの時間が数十秒から約15分程度で，比較的明確なテーマと主要なストーリーラインを持ち，連続的かつ完結した物語を持つオンライン視聴覚プログラムとされる（NRTA, 2022, November 14）[4]。しかし，一般的には，特に１話あたり１分から５分程度の極めて短いエピソードによって構成され，スマートフォンでの視聴を前提とした縦型画面フォーマットが特徴として認識されていることが多い。

中国国内では，マイクロドラマはしばしば，「爽劇（クールドラマ）」という概念と関連付けられる。これは，視聴者に快感や爽快感，強い没入感や楽しみを与えるドラマを指す言葉である。マイクロドラマは，この「クールドラマ」の特性，すなわち短時間で強い刺激や満足感を与えることを追求し，その主な特徴は以下の通りである（Li, 2024）。

① 短尺性と速いテンポ：1話が非常に短く（多くは３～５分未満），物語の展開が極めて速い。
② モバイルファースト／縦型フォーマット：主にスマートフォンで視聴され，縦型画面での制作が多い。
③ 高い強度と「快楽ポイント」：即時的な感情的インパクト，強い対立構造，頻繁なプロットの反転（どんでん返し）やクリフハンガー（次回への強い引き）を多用し，視聴者の刺激への渇望を満たすように設計されている。中には６秒で登場人物の身分を確立し，15秒で最初の反転を起こすといった定型化された構成も見られる。
④ 単純化されたストーリーとキャラクター：成長や変化を求める深いキャラクターアーク[5]

は少なく，キャラクターは自信に満ちた強い女性など特定の属性が強調され「フラット化」される傾向がある。プロットも複雑さを避け，中国で流行している下剋上，復讐，玉の輿などオンライン小説の人気のある類型を基にしていることが多い。

⑤ 低予算と迅速な制作:初期（５万ドル以下の作品も多数）と比べて制作費が上昇傾向にあるが，全般的には依然として低く，制作期間も数週間程度で短い。

人気のジャンルやテーマとしては，しばしば誇張されたメロドラマ的ロマンス，復讐，貧困からの成功物語，ファンタジー（海外向けでは狼男や吸血鬼など），現代都市生活，コメディ，サスペンスなどが挙げられる。男性向け（男頻）と女性向け（女頻）でテーマが異なる傾向も見られる。また，女性主人公，男性主人公，当て馬役，悪役女性といった類型的なキャラクター設定が多用される。

2.2 プラットフォームと国内での普及

マイクロドラマの普及には，Douyin（抖音，TikTokの中国版）やKuaishou（快手）といった国内の主要な短編動画プラットフォームが決定的な役割を果たした。これらのプラットフォームは，資本，IP，クリック率の観点からマイクロドラマの制作支援も行っている（Li, 2024）。

中国国内におけるマイクロドラマ市場は，驚異的な速度で成長し，制作数，視聴者数，市場規模がいずれも急増している。中国網絡視聴発展研究報告（2025）によると，2024年12月末時点において，マイクロドラマの利用者数は６億6200万人に達した。直近半年間の成長率は14.8％と顕著な伸びを示しており，１ユーザーあたりの１日平均利用時間は90分から101分へと増加し，これはインスタントメッセージングサービスに比肩する水準となっている。

視聴動機としては，リラックスや気晴らし，現実逃避（特に経済的な困難に直面する若年層），目新しさ，単純な娯楽，隙間時間の消費，強い感情的解放感，友人との共通の話題作りなどが挙げられている。この人気は，現代中国社会における経済的圧力や社会的流動性の低下といった背景とも関連付けられており，マイクロドラマが提供する「下剋上」や「復讐」の物語が，視聴者のフラストレーションのはけ口となっている側面が指摘されている（Mishra, 2025）。

2.3 マイクロドラマの物語と美学に関する学術的分析

Zhuらはマイクロドラマの成功をその物語構成から分析を加え，「加速する暴力」（accelerated violence）という概念を提唱している（Zhu et al, 2025）。これは，社会学者ハルトムート・ローザの社会加速論に基づき，マイクロドラマの極端な速度と消費・廃棄の速さが，現代社会の時間的希少性を反映する一方で，視聴者の主体性や深い思考，感情的な内省能力を蝕み，疎外（自己疎外）を引き起こす可能性を指摘するものである。Zhuらは，マイクロドラマの物語構成においては，伝統的な伏線や丁寧な描写を省略し，即時的な対立，サスペンス，反転を重視する点が特徴であると指摘し，加速する暴力を内在するマイクロドラマは「中断なき依存」を生み出し，「ユーザー主体性の消滅」を招きかねない，加速化社会が生み出した「ファストフード的文化産

物」と位置づける。

Li（2024）は，製作者は物語の冒頭からクライマックス的な状況を提示する「クライマックス・スタイル」のオープニングを採用し，視聴者の注意を瞬時に引きつけようとする点を指摘している。さらに，物語全体を通じて「爆発点」（explosive points）や「快楽ポイント」（pleasure points）を意図的に配置し，強い感情的刺激を与えることを常に追求している点はマイクロドラマの最大の特徴と論じている。また，視聴者獲得のための戦略として，人気インフルエンサーを主役に起用することも，上述の物語の展開スタイルとの相乗効果を生み出し，視聴者の視聴意欲をさらに刺激する結果となったと述べている。

しかしながら，Liはマイクロドラマの美学的な特徴については批判的な立場をとっている。縦型画面に適応した結果として，背景描写が曖昧になる「環境のぼかし」現象が生じ，クローズアップを多用して登場人物に焦点を当てる傾向が強い。さらに，キャラクター造形においては，時間的制約から多面的な描写を避け，単一の支配的な特徴を強調する「フラット化」が顕著に見られるためである。

LiやZhuらの分析が示すように，マイクロドラマが断片化された時間での視聴に適応し，即時的な満足感を提供する一方で，内容の均質化や深みの欠如といった課題も抱えている。かれらの批判は，マイクロドラマが提供する文化体験が表層的であり，瞬間的な感覚刺激に偏重することで，より深い意味や内省を伴う文化体験を阻害する可能性を提起している。

2.4　マイクロドラマに対する政策管理の二重性

当初，マイクロドラマのブームは市場主導で発生したが，その人気と影響力の拡大に伴い，国家による関与が見られるようになった。NRTAが主導する「微短劇＋」（マイクロドラマ・プラス）行動計画は，マイクロドラマを観光，法律普及，ブランド構築，古典学習，科学普及，無形文化遺産保護など，他の産業や分野と融合させ，その活用を図る国家的な取り組みである（NRTA, 2025）。これは，マイクロドラマの持つ大衆的な魅力を，経済振興や「正能量」（ポジティブかつ健全な価値観）の普及などの国家戦略目標のために利用しようとする動きを示している。

しかし，これらの奨励策と並行して，厳格な規制枠組みの構築も進められている。NRTAや国家インターネット情報弁公室（CAC）は，マイクロドラマの内容に対するガイドラインを策定し，低俗さ，暴力，拝金主義，不健全な価値観などを排除し，「正能量」を促進するよう求めている（表１参照）。加えて，政治，軍事，外交，国家安全保障，統一戦線工作，民族・宗教問題，司法，公安など，特定の重要分野や特別なトピックを含むマイクロドラマに対しては，関連する共同審査メカニズムの適用を義務付けている。

表１．NRTAによるマイクロドラマ管理強化措置一覧

施策	内容	背景・理由	出典
分類・分級審査制度	（投資額により３級に分類）重点（100万元以上）：NTRAによる審査，普通（30-100万元）：各省による審査，その他（30万元未満）：プラットフォームの自主審査	低予算作品の乱造による低俗コンテンツ増加に対応	NRTA（2024.11；2025）
ホワイトリスト制度	すべての作品は「網絡劇片発行許可証（ウェブドラマ・マイクロドラマ発行許可証）」または届出番号を取得し，その冒頭に表示	無許可コンテンツの流通防止	NRTA（2025）
総編集者責任制	プラットフォームは総編集者を配置し，審査・報告を厳格化	自主審査体制の不備	NRTA（2025）
動態監視・罰則強化	規則違反作品は即時削除，プラットフォームには改善命令・業務停止等の処分	「劣幣駆逐良幣」現象（低品質作品が市場を圧倒）の是正	NRTA（2025）
タイトル審査の強化	低俗なタイトル（例：「富豪の二重生活」）を禁止	タイトルの過激化が社会問題化	NRTA（2024.12）

出典：中国国家広播電視総局（NRTA）による各種通達に基づき筆者作成

マイクロドラマは，新興メディアプラットフォームとして中国の文化産業において既に有力な地位を確立しており，その発展は中国経済に多大な影響を及ぼす潜在力を有している。従来の映画やテレビ番組とは一線を画し，アプリやプラットフォーム配信されるマイクロドラマは制作者と視聴者間の距離が極めて近いという特徴を有している。視聴者は，直接課金を通じて作品を支援し，制作者はそれに対して視聴者の反応をダイレクトに受容することが可能となる。この双方向的な関係性は，視聴者のニーズに即した作品の大量供給を促進する重要な要因となっている。前述のとおり，国内の利用人口は６億人超と推定され，コロナ禍後に低迷が続く経済を活性化させるため，この巨大なユーザー層をより活発な消費活動へ誘導することが，マイクロドラマに課された新たな課題であろう。

他方で，一連の規制措置には，国家のイデオロギーに合致した内容管理を強化する意図も読み取れる。これらの措置は，輸出コンテンツにも適用されている。国内のテレビドラマ制作における過剰生産能力を海外市場に向けることで解消するという動機もある（Zhang et al., 2022）と指摘されている中で，CGO戦略全般に対する政府の補助金が，マイクロドラマの海外展開にも影響を与えている可能性も考えられる。この状況は，マイクロドラマを経済振興や文化輸出のツールとして奨励しつつも，その内容に対しては厳格な管理を課すという，促進と統制の二重のアプローチが存在することを示唆している。しかし，指摘しておきたいのは，国家の介入が，初期の市場主導の発展とは異なり，すでに成功した現象を国家目標に整合させる形で方向付けようとする，後追いの適応的な動きであると解釈できる点である。

3．中国製マイクロドラマの海外受容と文化的影響

3.1　中国製マイクロドラマの国際的展開

中国製マイクロドラマの国際市場への進出は，複数の国内的要因と国際的機会認識が絡み合って推進されている。前述の通り，国内市場での爆発的な成長は，同時に市場内の競争激化と潜在的な飽和状態の到来を示唆している。実際に，中国国内のマイクロドラマアプリ市場では成長の停滞が見られ始め，業界内の競争の激化，海賊版の横行といった要因が，成長率の鈍化という課題に直面しているとの指摘もある（華金証券, 2024）。これに加えて，中国政府によるコンテンツに対する規制強化も，中国のマイクロドラマ制作者の海外市場への関心を高める一因となっている。報道によれば，2022年末から2023年初頭にかけて，中国政府当局は「暴力的，低俗，または下品なコンテンツ」を理由に，「特別是正キャンペーン」を行い，25,000本以上のマイクロドラマをオンラインプラットフォームから削除したとされており（央視新聞, 2023），このような国内の事業環境の変化が，海外市場に活路を見出そうとする動きを加速させている。つまり，中国製マイクロドラマの海外市場への進出は，意図的な文化輸出というより，経済的持続可能性を追求し，新たな収益源を開拓するという企業戦略上の要請から生じている側面が強いと考えられる。

一方で，グローバル市場には巨大な潜在的需要が存在すると見込まれている。第12回中国オンライン視聴覚大会では，マイクロドラマの海外市場のポテンシャルは国内市場の 7 倍から12倍に達し，その市場規模は数十億ドル規模になる可能性があると発表された（牛, 2025）。この魅力的な市場予測は，多くの中国企業にとって海外展開の大きな動機となっている。同大会で公開された年次報告書によると，2025年 3 月の時点で，中国発マイクロドラマの海外向けアプリケーションは300種類を突破し，全世界における累計ダウンロード数は 4 億7000万回を超過している。ReelShort，DramaBox，ShortMaxに代表されるトップクラスの海外向けアプリケーション群は，主要ターゲット市場においてダウンロードランキングの上位 3 位を維持している。中国のマイクロドラマは，全世界200以上の国と地域をカバーしており，米国市場を最重要拠点とし，ヨーロッパ，日本・韓国，中東，東南アジアを含む広大な市場へと影響範囲を拡大する発展様相を呈している。NRTAの関連責任者である周継紅は「マイクロドラマは，従来アプローチが困難であった一部の文化圏にまで深く浸透し，その国際的影響力は質的な飛躍を遂げた」と惜しみなく賛辞を送っている（徐, 2025）。

しかし，マイクロドラマの国際展開は，各地域の文化，視聴者の嗜好，規制環境などが複雑に絡み合い，地域ごとに異なる特徴を示している。紙幅の関係で，本稿ではまずマイクロドラマの地域別の展開の特徴を概観したうえで，特に成功を収めたとされる米国市場に焦点を当て，アメリカにおける人気のマイクロドラマアプリReelShortを事例に，マイクロドラマの成功モデルについて考察をする。

3.2　米国以外の地域におけるマイクロドラマの受容

①東南アジア市場

TikTok for Businessの報告（「短劇出海白皮書」，2024）によると，2024年にはTikTok上におけるマイクロドラマ市場が対前年比2,306％という驚異的な成長を遂げ，同地域はアメリカに次ぐ重要な市場の一つとして位置づけられている。東南アジア各国に存在するディアスポラ・コミュニティが初期の受容者および文化的橋渡し役として機能している可能性があるため，中国のコンテンツに対して文化的に親近感を抱き，受容しやすい視聴者層が厚く存在すると考えられる。実際に，中国制作のドラマ全般（C-drama）は，東南アジア地域で既に一定の人気を確立しており，ロマンスや中国の歴史を題材とした作品がよく視聴されており，文化的割引（cultural discount）[6)]という課題が存在するものの，適切な文化適応，ローカライゼーション，マーケティング戦略によって克服可能であることが指摘されている（Li, 2025）。マイクロドラマの視聴嗜好においても，中国国内でも人気の高い「覇道総裁（横暴なCEOもの）」「甘いロマンス」「復讐劇」といったジャンルやテーマが，東南アジアの視聴者にも好まれる傾向が表れている（Xiao & Zhao, 2024）。

しかしながら，東南アジアは多様な文化，言語，宗教が混在する極めて複雑な地域である。そのため，各国・地域内の微妙な文化的ニュアンスを正確に把握し，コンテンツを適切に提供することは決して容易なものではない。また各国も，オンラインコンテンツに対して独自の法的規制，コンテンツポリシー，検閲基準を設けており，これらは海外発マイクロドラマの配信や内容に大きな影響を与える可能性がある。そのため，ReelShort，DramaBox，FlexTVといった，すでに東南アジアに進出している代表的なプラットフォームの多くは，現地制作の推進やコンテンツの吹き替えといったローカライゼーション戦略を積極的に展開している。

②ヨーロッパ市場

本稿では主に英語の学術文献に依拠したが，ヨーロッパ市場における中国製マイクロドラマに対する具体的な視聴者の反応やコンテンツ嗜好に関する業界報告や学術的知見は，現時点では極めて限定的である。前出のTikTok for Businessの報告（2024）によれば，ヨーロッパは東南アジアや日韓と並び，マイクロドラマの海外展開における「成長市場」として位置づけられている。海外マイクロドラマ市場全体におけるヨーロッパのシェアは，ダウンロード数で９％，ユーザー視聴時間で５％，アプリストア売上で12％を占めており，特に売上における貢献度が相対的に高い点が注目される。

さらに，中国発のオンライン文学作品が英国図書館に収蔵されるといった事例もあり（Xinhua, 2025, April 2），イギリスをはじめとする欧州諸国において，中国のデジタルコンテンツに対する一定の受容基盤が存在することが示唆される。上記のTikTok for Businessの報告においても，主要プラットフォームであるReelShortはイギリスを重点市場の一つとして位置づけていることが指摘されており，アメリカ市場を起点とした英語圏への拡大の一環として，イギリスなどが戦略

的なターゲットとなる可能性が考えられる。

中国の識者はフランス，イギリスなどヨーロッパ諸国を中国との文化的距離が遠い国だと認識しており，今後の展開戦略について「中国的な言説体系の表出や文化的文脈の埋め込みを抑制する一方で，マイクロドラマの現地適応における競争力の向上に注力すべき」と提言し，成功のためには，現地の文化背景や視聴者の好みを深く理解し，ローカライズされた高品質なコンテンツ制作が不可欠と指摘している（王＆劉, 2024）。

③日韓市場

中国製マイクロドラマおよびそれらを配信するプラットフォームは，2022年頃から本格的に日本市場への参入を開始した。特に，Crazy Maple Studioが運営するReelShortは，2022年にグローバル展開を始め，日本を含む各国でサービスを提供している。これに追随する形で，TopShort，ShortMaxなどのプラットフォームも日本市場での活動を活発化させている。例えば，香港企業SHORTTV LIMITEDが運営する「ShortMax」はテレビ朝日と共同制作によるマイクロドラマ『大富豪のバツイチ孫娘』（全83話）を展開した。本作品は中国国内で放映されたマイクロドラマのリメーク版であり，2024年10月１日の配信開始と同時に爆発的な人気を博した。この成功により，ShortMaxのダウンロード数は急増し，一時的に日本のGoogle PlayおよびApp Storeにおける無料アプリケーションランキングの首位を獲得するに至った（徐, 2025）。

TopShortの人気コンテンツである「お嬢様のパワハラ退治」や「お嬢様は只今，インターン中」などの人気作品を見ると，日本市場において支持を集めるジャンルは，不倫や復讐といった刺激的なテーマの作品をはじめ，恋愛，ファンタジー，コメディなど多様化の傾向が見られる。視聴者層に関しては，ReelShortの日本における利用者は，20歳未満の若年層と，35歳から55歳の女性層に二極化しているという興味深いデータが報告されている（金, 2024）。前者は新規性への感度が高く，後者は比較的可処分時間及び可処分所得が多い層であると推察される。

日本市場が中国企業にとって魅力的な理由としては，高いRPD（Revenue Per Download）（金, 2024）に加え，比較的整備された著作権保護の環境や，コンテンツに対する消費習慣が確立している点などが挙げられる（杉本, 2024）。

一方，韓国における中国製マイクロドラマの市場規模に関する定量的データは現時点では限定的である。注目すべきは，韓国においては既に「ウェブドラマ」という形態で短尺映像コンテンツ市場と，それを気軽に消費する「スナック・カルチャー」の視聴習慣が確立しつつある点である（平田, 2023）。中国発のマイクロドラマプラットフォームの本格的参入は比較的近年の現象であるため，韓国市場は日本に比して小規模であり，成長の初期段階にあると推定される。しかしながら，類似コンテンツ市場がすでに成熟している事実は，中国製マイクロドラマにとって，フォーマット自体が受容されやすい土壌が形成されていることを意味する。実際，StardustTVの自主制作マイクロドラマ「マフィアの愛の拷問」が2024年11月，東南アジアと韓国の週間短編ドラマチャートで首位を獲得したという事例や，MoboReelsが多言語対応とオリジナルコンテ

ンツの提供により韓国市場において迅速に存在感を確立したとの報告もある（Xiao & Zhao, 2024）。韓国におけるマイクロドラマの主な視聴者層は若者であり，恋愛ものが人気を集める傾向が指摘されている（Minto, 2025）。彼らのライフスタイルやメディア接触習慣に合致したコンテンツであれば，中国製のマイクロドラマについても韓国市場における浸透の余地は十分に存在すると考えられる。

日中韓 3 国は，歴史的にも文化的にも深い繋がりを持ち，儒教文化圏という共通の基盤を有している。現代においても，J-POP，K-POPや中国ドラマなど，3 カ国間のポピュラーカルチャーの相互影響が見られる。こうした文化的近接性は，中国製マイクロドラマが両国の視聴者に受け入れられる上で，一定の親和性を生み出す可能性がある。しかしその一方で，3 カ国間には歴史認識を巡る問題や，近年の文化的な摩擦も存在しており，これらが中国製コンテンツに対する潜在的な抵抗感として作用する可能性も考慮しなければならない。

④中東市場

中国製マイクロドラマ企業は，北米や東南アジアでの成功体験を基に，成長著しい中東市場への進出を加速させている。その戦略は，市場参入，ローカライゼーション，そして現地パートナーシップの構築という多岐にわたるアプローチを含んでいる。

事業拠点としては，アラブ首長国連邦（UAE），特にドバイのフリーゾーンが魅力的な選択肢として浮上している。フリーゾーンは，設立コストの低さ，100％外国資本による保有の許可，税制上の優遇措置といったメリットを提供するため，多くの中国企業が進出拠点として活用している。実際に，大手ストリーミングプラットフォームのiQIYIはドバイにMENA地域を統括する支部を開設している（iQIYI, 2025）。

具体的な市場データとしては，ReelShortが2024年第 3 四半期に中東地域で週次収益約 5 万6000ドル，週次ダウンロード数約 2 万2000件，週次アクティブユーザー数約12万人に達したと報告されている（Senser Tower, 2024）。また，DramaBoxも中東での積極的な展開が報じられている（張, 2024）。これらの数字は，中東市場におけるマイクロドラマの商業的な可能性を示唆している。

中東市場で成功を収めるためには，ローカライゼーションが不可欠であるとの認識が中国企業の間で広まっている。単に中国で人気のあるドラマを翻訳するだけでなく，中東の視聴者の文化的好みや感受性に合わせたコンテンツ制作が重視されている。具体的には，アラブ系の俳優や西洋風の容貌を持つ俳優を起用し，地域の文化や習慣を反映した脚本で撮影を行うといった試みがなされている。これには，現地の文化的規範，宗教的慣習，そして言語の微妙なニュアンスへの配慮が含まれる。例えば，家族の絆を重視する価値観や，地域特有の社会的テーマを物語に盛り込むことで，視聴者の共感を呼ぼうとする動きがある（KrASIA, 2025, April 14）。実際に，中国のコンテンツ企業であるJiuzhou Cultureは，アラビア語話者向けのマイクロドラマ開発も計画していると報じられている（China Daily, 2024, January 24）。

中東市場への浸透を加速させるため，中国のマイクロドラマ企業は，現地の有力企業とのパートナーシップ構築や，直接的な投資活動を活発化させている。中国とUAEの産業投資協力会議のような政府レベルでの交流の場にマイクロドラマ関連企業の幹部が参加しているとの報道からも（Ainvest, 2025, February 24），投資熱の高まりは伺える。

表２．中国主要マイクロドラマアプリのグローバルな展開（2024年１月～11月のダウンロード数／アプリ内収益）

アプリ名	リリース日	企業名	ダウンロード数	主要地域分布
DramaBox	2023年4月	Dianzhong Technology	8260万	インドネシア（19.53%）、アメリカ（13.43%）、メキシコ（9.24%）
ShortMax	2023年9月	Jiuzhou Culture	7860万	インドネシア（15.33%）、アメリカ（15%）、ブラジル（8.01%）
Reelshort	2022年8月	Maple Leaf Interactive	5860万	アメリカ（25.2%）、ブラジル（14.93%）、インド（7.2%）
MoboReels	2023年6月	Fuzhou Changdu	1505万	インドネシア（13.8%）、ブラジル（12.18%）、メキシコ（9.62%）
Goodshort	2023年6月	New Reading Era	875万	インドネシア（25.03%）、アメリカ（20.32%）、フィリピン（10.4%）
FlexTV	2022年10月	Anyue Technology	738万	タイ（18.17%）、アメリカ（17.37%）、インドネシア（13.76%）
Minishorts	2024年1月	Byte	427万	アメリカ（25.97%）、インドネシア（8.87%）、フィリピン（6.03%）
StardustTV	2024年7月	Mountain Sea Star	366万	インドネシア（30.56%）、アメリカ（26.52%）、フィリピン（4.94%）
JoyReels	2023年9月	Palm Cloud	362万	インドネシア（24.42%）、アメリカ（8.93%）、タイ（6.16%）
Kalos TV	2023年9月	Qingrong Media	339万	アメリカ（23.53%）、インドネシア（10.49%）、フィリピン（8.95%）

出典：Xiao & Zhao（2024）より筆者訳出

４．米国における中国製マイクロドラマの展開戦略と受容 ── ReelShortを事例に

中国製のマイクロドラマアプリにとって，米国は最重要拠点として位置づけられている。その理由は，その巨大な市場規模と高い収益性に加え，短尺コンテンツを好む米国のユーザーの消費行動特性，そして有料コンテンツへの支払い意欲の高さにある。実際，主要な中国製マイクロドラマアプリの収益の60％から70％が米国市場によってもたらされており（Mobvista, 2025, March 19），Sensor Towerのデータによれば，2024年にはマイクロドラマアプリの全世界におけるモバイル収益の60％を米国市場が占めている（Sensor Tower, 2025, January）。米国市場において展開している複数のマイクロドラマ配信アプリの中で，特に「アメリカを征服する最新の中国発の輸出品」（The Economist, 2023, November 25）と称されているReelShortの存在が注目を集めている。

ReelShortは，中国の主要なデジタルパブリッシャーである中文在線集団（COL Group）傘下の米国企業Crazy Maple Studio（CMS）が運営するマイクロドラマ配信アプリであり，2022年８月に英語圏向けにローンチされた。米国で急速に成長し，2023年10月に北米のアプリダウンロード数で一時TikTokを上回り，2024年初頭には累計3700万ダウンロード，同年４月までに純収益8000万ドル超，12月には月間純収益2400万ドル超を記録するなど（Appfigures, 2024, December 20），短期間で米国市場で確固たる地位を築いている。

4.1 ReelShortの米国における戦略展開の各段階の特徴

①初期段階：コンテンツとターゲットユーザー（概ね2022年 8 月～2023年初頭）

参入初期においては，主に中国国内で人気を博したマイクロドラマの英語翻訳・吹き替え提供を主軸とする戦略が採用された。その背景には，親会社が市場で培ってきたマイクロドラマ制作と配信に関する豊富なノウハウが存在し，その知見を海外展開に活かすという意図があった。ターゲットとするユーザー層は，ロマンスや恋愛ドラマといったジャンルを好み，比較的自由な時間を持つと考えられる中年女性層に設定された。しかし，英語への単純な翻訳と吹き替えのみでは，視聴者の文化的背景や価値観，ユーモアのセンスといった要素が考慮されず，結果としてこのアプローチによる成果は限定的であった（DatumIntell, 2023, November 28）。

②成長段階：ローカライゼーション戦略と現地制作（概ね2023年以降）

初期の翻訳コンテンツの課題を踏まえ，ReelShortは2023年頃からローカライゼーション戦略を大幅に強化し，現地制作へと舵を切った。具体的には制作業務を，米国を拠点とするチームにアウトソーシングし，米国俳優を積極的に起用する。さらに，米国の視聴者にアピールしやすいテーマ，例えば権力闘争，裏切り，そして狼男や吸血鬼といったファンタジー要素など，米国視聴者に訴求力の高いテーマを取り入れたオリジナルシリーズの制作に注力するようになった。

一方，中国で実績のある脚本をベースにしつつも，それを西洋の視聴者の文化や価値観に合わせて翻案し，英語を母語とするキャストで撮影するという制作モデルが採用された（DatumIntell, 2023, November 28）。このアプローチにより，「The Double Life of My Billionaire Husband」のようなヒット作が生まれ，アプリのダウンロード数と収益を飛躍的に増加させることに成功した（Mobvista, 2025, March19）。字幕制作においても英語の慣用表現や文化的背景を考慮した翻訳を行い，自然で理解しやすい視聴体験を目指している。特にローカライゼーション戦略へのシフトは，表面的な翻訳ではなく深いレベルでの適応が文化的な輸出の成功に不可欠であることを示すReelShortの重要な戦略転換点である。

③拡大段階：マーケティング戦略とマネタイズモデル（継続中）

ローカライズされたコンテンツの成功を基盤に，ReelShortは積極的なマーケティング戦略と独自のマネタイズモデルを組み合わせることで，ユーザーベースの拡大と収益化を加速させている。

A. マーケティング戦略：

ReelShortは，ターゲット層が多く利用するFacebookやTikTokといったソーシャルメディアプラットフォームでの有料広告配信や，インフルエンサーとの提携を積極的に展開している。特に，XMPのようなクロスチャネル対応のインテリジェント広告プラットフォームと提携し，広告の最適化を図ることで，広告効率を30%向上させた（Mobvista, 2025, March 19）。マーケティングコンテンツとしては，ドラマ本編の刺激的なクリップをSNS上で共有し，クリフハンガー

（次回への強い引き）を効果的に用いることで，視聴者の興味を引きつけ，アプリのダウンロードへと誘導している。Sensor Towerのデータによれば，ReelShortの総ダウンロード数の70％が有料広告経由であるとされており（Sensor Tower, 2025, January），広告によるユーザー獲得が成功していることを示している。

B. マネタイズモデル：

ReelShortのマネタイズは，フリーミアムモデルを基本とし，初回数話を無料で提供し，続きはアプリ内通貨「コイン」購入または広告視聴が必要なハイブリッドモデルを採用している。コインの価格帯は$4.99から$99.99まで幅広く設定されており，ユーザーは視聴量に応じて柔軟に課金できる。また，週間単位のサブスクリプションサービスも提供されており，一定期間の見放題オプションも用意されている。ReelShortのCEOは，このモデルを「衝動買いコンテンツ（impulse purchases content）」を生み出すものと表現しており（Time, 2024），ユーザーの瞬間的な視聴意欲を収益に結びつける設計となっている。さらにWARC報告によれば，物語中に登場人物が特定ブランドを使用・言及するプロダクトプレイスメント型広告も活用されており，企業側自らがマイクロドラマを制作・盛り込む例も出てきている（WARC, 2025, February 2）。

ReelShortが米国市場で示した成功は，多くの追随者を生み出し，DramaBox，ShortMax，GoodShortといった類似のアプリが次々と参入し，特に米国市場においては「ゴールドラッシュ」とも言える状況を作り出した。

4.2 米国市場におけるユーザーの反応と評価

ReelShortは米国市場で高いダウンロード数と収益を記録している一方で，その利用実態の詳細を見ると，いくつかの注意すべき点が存在する。Wei（2024）の研究によれば，デイリーアクティブユーザー（DAU）の増加が，必ずしも期待されたほどの収益増に直結していない可能性が示唆されている。これは，多くのユーザーがアプリを試用するものの，継続的な課金に至らない，あるいは定額課金層が多数を占める可能性を示唆するものである。

さらに深刻なのは，ユーザーリテンション率の低さである。同研究によると，ReelShortの30日間のユーザーリテンション率はわずか２％であり，これはサブスクリプションモデルを採用する大手ストリーミングサービスNetflixの14.4％と比較して著しく低い数値である。この低いリテンション率は，多くのユーザーが初期の興味やマーケティングによってアプリをダウンロードするものの，長期的には定着せず，離脱している実態を浮き彫りにしている。

一方，米国市場におけるReelShortのユーザーレビューを分析すると，肯定的な評価と批判的な評価が混在している状況が見て取れる。全体として，ユーザーは手軽さと中毒性のある物語展開を評価する一方で，その対価としての価格設定や広告の多さ，そして時にはコンテンツの質そのものに不満も表出しており，両価的な評価構図が見え隠れする。

4.3　中国資本アプリが米国市場で直面する課題

米国を含む海外市場で展開する中国系マイクロドラマアプリの多くは，ReelShortに類似したローカライゼーション戦略やマーケティング手法を採用している。その意味から言うと，ReelShortが直面する問題はこれらの中国系アプリ全般に共通する課題と捉えることができる。

①データプライバシーとセキュリティに関する懸念

ReelShortに代表されるアプリは，ユーザーの識別子，ユーザーが生成したコンテンツ，利用状況データなど，広範な個人情報を収集している。ReelShortにおいては，プライバシーポリシーを通じてデータ収集・利用・共有に関する方針が明示されており，運営は米国法人であるCrazy Maple Studioが担っているものの，その背後には中国のCOL Groupの投資が存在する。運営企業が米国法の遵守を標ぼうしている状況下においても，中国製ソフトウェア開発キット（SDK）を介したユーザー情報の収集および第三者への提供の可能性を完全に排除することは困難である。この構造的な課題は米国政府関係者やセキュリティ専門家にとって看過できない懸念事項となるだろう。さらに，このような信頼性に対する根本的な疑念は，今後マイクロドラマアプリが米国市場で持続的な事業展開を図る際の重要な制約要因となる可能性が高い。

②規制環境と地政学的リスク

米国市場における中国資本アプリの事業展開は，米中間の技術覇権争いや経済摩擦といった，より広範な地政学的文脈の中で捉える必要がある。TikTokやWeChatといった他の主要な中国系アプリが直面してきたように，米国政府による規制強化や利用制限といったリスクは，ReelShortを含むマイクロドラマアプリにとっても現実的な脅威として存在する。米国内における反グローバリゼーション感情の高まりや「テクノナショナリズム」の台頭が指摘されており，これが中国系テクノロジー企業に対する厳しい視線に繋がっている。このような状況下では，ReelShortのように急速に人気を獲得し，市場で一定の存在感を示すようになったアプリは，米国の規制当局の注目を集めやすく，潜在的なターゲットとなりうる。

一方で，前述のように，中国国内においてもマイクロドラマ産業への規制が強化されている。NRTAの規制は，主に国内市場の健全な発展や，「公的価値観と社会的責任に合致するコンテンツ」の奨励を目的としているが，結果として海外展開されるコンテンツの質や方向性にも影響を及ぼしうる。より「無害化」された，あるいは中国の主流的価値観に沿ったコンテンツへの傾斜は，多様な嗜好を持っており，エッジの効いた自由な表現を求める海外視聴者層からの支持を失うリスクも考えられる。

このように，中国資本のマイクロドラマアプリは，米中両国双方の規制環境と地政学的要因によって複雑な影響を受ける立場にあり，長期的な戦略策定においてこれらの不確実性を常に考慮に入れる必要がある。

③市場競争の激化と持続可能性

ReelShortの成功を受け，米国におけるマイクロドラマアプリ市場は競争が激化しつつある。DramaBox，ShortMax，GoodShortなどがユーザーの可処分時間と支出を奪い合う一方，ユーザー獲得コスト（UAC）の高騰を招いている。コンテンツは狼男，富豪，復讐劇といった類似プロットに偏り，ユーザーレビューでも新鮮味の欠如が指摘されている。ReelShortの30日リテンション率２％という低さも目立ち，価格やコンテンツへの不満からユーザー離脱を招きかねない。高売上にもかかわらず広告費用対効果（ROAS）が低い可能性が指摘され（Wei, 2024），高価格設定は長期的な顧客ロイヤルティを阻害し，アプリのライフサイクルを短縮させる恐れがある。市場飽和とユーザーの倦怠感は，現収益モデルの維持を困難にするだろう。

④文化的な壁とコンテンツ適応の難しさ

ReelShortは米国市場進出において，現地俳優の起用および現地制作チームとの協働によるローカライゼーション戦略を推進し，一定の成果を収めている。しかしながら，依然として一部ユーザーからは，Google Play StoreのレビューやRedditのオンラインフォーラムにおいて，脚本の不自然さ，対話の違和感，陳腐なプロット展開，黒人キャラクターが登場するコンテンツの欠如など，コンテンツの多様性や描写のあり方や文化的齟齬に関する指摘が見られる（e.g., NewLeaf, 2025; MoeNancy, 2023; *Vertical Shorts and POC*, 2024）。これは原作が中国IPである場合や，制作プロセスにおいて中国的思考様式が色濃く反映されている作品において顕著に現れる傾向にある。

一方で，ReelShortがアメリカ市場において主要なターゲットとして設定しているのは，18歳から40歳の女性であり，特に家庭にいる時間が比較的長い主婦層である。NPR（National Public Radio）の報道によれば，ReelShortの月間アクティブユーザー数は4500万人に達し，そのうち70％が女性であり，さらにその半数が米国在住者で構成されている（2025, March 19）。従来よりソープオペラやロマンス小説の主要な消費者であり，ドラマチックな展開を好む女性という，既存のメディアでは必ずしもそのニーズが充足されていなかった特定のニッチな層の的確な捕捉が，ReelShortの成功要因の一つとされている（Dev Technosys, 2024, May 22）。ただし，特定のターゲット層には短期的にアピールできたとしても，より多様な価値観を持つ現代の広範な視聴者層への適応や支持獲得においては障害となることも考えられる。

実際，デジタルネイティブと称され，メディア消費活動において最もアクティブな米国Z世代は，短尺動画コンテンツへの優先的アクセスおよび「一口サイズ」のコンテンツへの明確な嗜好を示している。一方で，この世代はコンテンツの真正性や共感性に対する強い志向を併せ持つことから，ReelShortに対するエンゲージメント水準は極めて低いとの調査結果が報告されている（NuVoodoo Media Services, 2025, April 4）。

これらの現象は，効果的なローカライゼーション戦略の構築が，特に定型的物語類型（トロープ）を超えた多様な物語構造の提供において継続的課題であることを示唆している。輸出可能な

ジャンルの拡大には，より洗練された文化的翻案とコンテンツの創造的再構築が不可欠であろう。実際に，ReelShortのCEOであるJoey Jia氏は，視聴者の反応をリアルタイムで分析し，それに基づいて常にコンテンツを適応させていく能力を強化し，サイエンスフィクションやリアリティTVといった他のジャンルへの拡大に対する意欲を示している（Time, 2024）。DramaBoxをはじめとする競合アプリとの競争が激化する市場環境において，多様な利用者層へのリーチ拡大を実現するためのコンテンツ適応の複雑性が顕在化している。

中国発マイクロドラマは，現代の視聴習慣に適合したフォーマットの最適化，特定ターゲット層に対する訴求力を有する低予算・高中毒性コンテンツの提供，ソーシャルメディアを活用した積極的マーケティング戦略，および戦略的ローカライゼーションの実装を通じて，米国を含む海外市場において一定の商業的成功を収めている。しかしながら，ReelShortの事例分析からは，この成功モデルが内包する構造的脆弱性も明らかになる。すなわち，迅速な収益化とユーザー獲得に対して高い有効性を示す手法が，同時にユーザーの不満や外部からの批判的な視線を招くという，いわば諸刃の剣としての側面を有している。さらに，より広範な地政学的な文脈から考えれば，米中間の技術覇権争いや経済的対立がさらに激化すれば，米国以外の市場においても，両国の間で戦略的立場を模索する諸国が中国の文化コンテンツをどのように受容するかによって，マイクロドラマのさらなる展開には不確実性が伴う可能性も十分考えられる。

5．結びに代えてーマイクロドラマは中国CGO戦略の「軽舟」となるだろうか

5.1　CGO戦略の進化とマイクロドラマの海外展開の複雑な相互作用

マイクロドラマの海外での人気や商業的成功は，中国の「文化自信」を大いに鼓舞する事例として中国国内のメディアで大きく報じられている。これは『中国の物語を世界に発信する「文化の軽舟」』と譬えられ，前出のNRTAの責任者周継紅氏も「中国のマイクロドラマが国際的な情報流通の構図を再構築しつつある。これは極めて画期的な変化だ」と意気込みを見せている（徐, 2025）。

しかしながら，これまでの分析からもわかるように，中国製マイクロドラマの海外展開は，①モバイル中心のメディアエコロジーシステムに適応した新形態コンテンツとして消費文化に参入し，②異文化市場の嗜好を緻密に分析して物語内容や制作体制を転換し，③プラットフォーム経済の論理に則ったマネタイズと技術運用を追求するという三位一体の戦略で推進されていることがわかる。

CGO戦略は，2000年代初頭に経済的動機とソフトパワー向上という２つの目的を掲げて開始され，時代とともにその重点を進化させてきた。特に近年は，デジタルメディアを介した文化普及が重視されるようになり，国家戦略との連携も強化されている。

しかしながら，CGO戦略とマイクロドラマの海外受容は，単純な因果関係ではなく，複雑な相互作用として理解する必要がある。CGO戦略におけるデジタルメディア重視への転換は，マ

イクロドラマのような新興デジタルコンテンツの輸出と，政策的枠組み内での位置づけのための土壌を提供したと言えよう。

とはいえ，マイクロドラマの海外での成功は，CGO戦略の政策転換が直接的にもたらしたというより，むしろプラットフォームのダイナミクスと市場の需要によって自律的に発生した現象であり，国家がその流れを後から認識し，影響力を行使しようとしている側面が強い。ReelShortの成功事例が示すように，初期の国家主導や単純なコンテンツ移転ではなく，市場原理に基づいた徹底的なローカライゼーションが成功の鍵であった。国家による規制強化や「微短劇＋」のような振興策は，この既存の勢いを国家目標に沿わせようとする試みと考えて良いであろう。

この点は，CGO戦略のソフトパワー目標との間に矛盾を生じさせる。マイクロドラマが海外で成功するためには，中国的な要素を希薄化させ，現地の文化や嗜好に合わせたローカライゼーションが不可欠である。しかし，これは「中国の」文化や価値観を普及させるという，CGO戦略の本来の政治的目的とは必ずしも一致しない。市場での成功を追求するあまり，文化的な独自性が失われ，ソフトパワーとしての効果が限定的になる可能性がある。

マイクロドラマの急速かつ広範な国際的普及は，TikTok，YouTube，そしてReelShortのような専門アプリといったグローバルなデジタルプラットフォームの存在なくしては考えられない。これらのプラットフォームは，従来の国家管理下のメディアチャネルとは異なり，コンテンツ配信のための不可欠なインフラを提供している。

プラットフォーム上で機能するアルゴリズムは，ユーザーの視聴履歴やエンゲージメントに基づいてコンテンツを推薦するため，特定のタイプのコンテンツを増幅させる傾向がある。これは，コンテンツの文化的な深みや，CGO戦略が意図するメッセージとは無関係に起こりうる。結果として，国家の意図と実際に流通・受容されるコンテンツとの間に乖離が生じる可能性があり，戦略の予測不可能性と制御の難しさを高めている。

プラットフォームは，コンテンツ制作者，視聴者，そして国家との間の力関係において，重要な仲介者およびゲートキーパーとして機能する。プラットフォーム自身の商業的利益とアルゴリズムの論理に基づいて，どのコンテンツが成功するかが決定されるため，国家が文化普及のプロセスを完全にコントロールすることは困難であろう。

CGO戦略がマイクロドラマのようなデジタルフォーマットを取り込む方向へと進化したことは，変化するグローバルなメディア環境への現実的な適応と言える。しかしそれは同時に，コンテンツの管理，品質の維持，そしてオンライン文化トレンドの予測不可能性といった，新たな課題に直面することを意味する。プラットフォームを介した文化流通は，リーチの拡大という利点をもたらす一方で，国家の意図通りに文化的な影響力を行使することの難しさを露呈している。

5.2　CGO目標達成におけるマイクロドラマの有効性，限界，課題

マイクロドラマがCGO戦略の目標達成にどの程度貢献しているかについては，多角的な評価

が必要である。経済的成果の側面では，その有効性は比較的明確である。マイクロドラマ産業は急速な市場拡大を遂げ，コンテンツ輸出の活性化とともに，中国の文化産業振興および文化貿易赤字の是正というCGO戦略の経済的目標に確実に寄与していると評価できる。

しかしながら，ソフトパワー向上や中国のイメージ改善という政治的・外交的目標に対する有効性は依然として疑問符がつく。マイクロドラマは国際的なリーチを急速に拡大しており，多言語翻訳や海外プラットフォームでの流通を通じて可視性を高めている。とはいえ，そうした可視性が視聴者の中国に対する認識を肯定的に転換させる力を有しているかは不透明である。

さらに，マイクロドラマというフォーマット自体が持つ文化的な深みにも限界がある。極端な短尺性，感覚的な刺激への偏重，商業的な圧力は，複雑な文化的ニュアンスや深い人間描写，社会的な洞察を伝えることを困難にする。結果として，マイクロドラマを通じて得られる文化理解は表層的なものに留まり，真の相互理解を促進する効果は限定的であろう。

さらに注目すべきは，マイクロドラマ産業の急拡大が，中国政府によるコンテンツ規制や検閲体制の強化と表裏一体で進行している点である。とりわけ，「正能量（ポジティブな価値観）」の強調は，批判的・社会的テーマを扱う作品の制作を困難にし，結果として創造性の萎縮を招く危険性を孕んでいる。このような状況下では，マイクロドラマが示す文化的表象が単純化され，現実社会の多様性や矛盾が表現されにくくなるため，国際的な視聴者の共感を獲得するには限界がある。

もとより，国内の審査制度の海外展開コンテンツに及ぼす影響については，現時点で直接的な議論を見出すことは困難な状況にある。しかしながら，中国政府がTikTokに対して採用した手法をみると，海外向けコンテンツと国内向けコンテンツを区別し，差別化された政策対応を講じる可能性は否定し得ない。史ら（2022）が指摘するように，TikTokのような商業化・娯楽化された手法を採用する民間企業は，コンテンツの流通がプラットフォーム化される以前の時期において中国の「組織的海外進出」モデルが帯びていたイデオロギー的痕跡や価値観の対立を希薄化させることで，より柔軟な拡張戦略を実現した。これらの企業は，自主的な収益能力を強化することで市場収益を獲得し，また自らのビジネスモデルを海外展開することを通じて，「トランスカルチュラル」な特色を有するプラットフォームおよび製品マトリックスを構築したのである。この観点からみれば，意図せずして海外展開に成功したマイクロドラマでさえ，新たなモデルとして活用される可能性を秘めていると言えよう。言い換えれば，国家によるコンテンツの制約からひとたび解放されれば，プラットフォームエコシステムやビジネス戦略を含むデジタルメディアの「モデル」そのものを輸出することが可能となる。それによって中国のコンテンツとサービスの輸出に資するグローバルデジタル環境が創出され，ひいては「数字華流（デジタル華流）」の構築が推進されることも十分に想像可能なのである。

しかし，マイクロドラマのグローバル展開において避けて通れないのが，ローカライゼーション戦略に関する問題である。翻訳・吹き替え・文化的調整を通じて各国市場に適応しようとする努力は，文化的ギャップの存在を逆説的に示している。一方で，特定のイデオロギーや価値観が

前面に出たコンテンツは，受容先の文化的規範や政治的状況と軋轢を生みやすく，文化摩擦を誘発するリスクが高まる。とりわけ，米中間の技術・文化的覇権をめぐる緊張が続くなかで，中国製デジタルコンテンツの海外展開には，地政学的な制約要因も無視できない。

加えて，グローバルエンターテインメント市場における競争は熾烈を極めており，持続的な成功を収めるためには，単なる模倣や短期的な話題性を超えた，独自性と持続可能性を備えた創造的進化が求められる。将来的には，海外市場において中国系プラットフォームそのものが規制の対象となる可能性も否定できず，コンテンツ輸出戦略における重大な不確実性要因となり得る。

こうした課題は，マイクロドラマに特有のものではなく，むしろCGO戦略が長年にわたり直面してきた問題点を，デジタルメディアという新たな環境下で改めて顕在化させているものと捉えるべきである。

マイクロドラマ現象は，現代中国のデジタル文化の活力と制度的制約，プラットフォーム資本主義が主導するグローバルなメディア流通の現実，そして国家主導の文化外交が抱える構造的困難を象徴する，注目すべき事例である。国・地域別の受容メカニズムや，コンテンツ規制が制作実践と国際展開に及ぼす影響の具体的な分析を通じて，マイクロドラマが単なる一過性のトレンドにとどまるのか，それともデジタル時代における中国文化発信の重要なフォーマットとして定着するのかを慎重に見極めていく必要がある。マイクロドラマが「文化の軽舟」として波間を巧みに乗り越えていくのか，それとも「線香花火」のような短命な現象として消え去るのか。その行方は今後も注視に値する。

注：

1）中国において「微短劇」と呼ばれる新しい形態のウェブコンテンツの英訳や日本語訳はともに未定着である。議論を進める便宜上，本稿では英語文献で多用されるMicro Dramaに従い，微短劇の日本語訳を「マイクロドラマ」とする。

2）本稿のタイトルにも用いた「軽舟」という語は，中国語において「小船」を意味する語彙であり，海外市場におけるマイクロドラマの快進撃を報じる際に，中国国内のメディア言説において多用される比喩表現である。この表現の初出や典拠的用法については現時点では明確ではないものの，中国製メディアコンテンツの海外展開を指して「出海」（文字通りには「海に出る」）という比喩が広く定着していることを鑑みれば，「軽舟」ないし「文化軽舟」という表現がマイクロドラマを形容する際に選択される背景には，複層的な意味作用が認められる。第一に，この表現は新興の視聴覚コンテンツ形態としてのマイクロドラマが有する「軽薄短小」という形式的特徴，すなわち，短尺で機動的，かつ視聴者の負担が少ないといった性質を端的に象徴している。第二に，より重要な点として，この比喩には映画やドラマのような従来型の長尺コンテンツが「大船」として文化的・経済的に多大な資源と準備を要するのに対し，マイクロドラマは「軽舟」として機動性と柔軟性を発揮し，海外市場という「海」を迅速に航行できるという，戦略的優位性への期待が込められていると解釈できる。つまり，「軽舟」という表現は，単なる形式的記述にとどまらず，海外向け文化発信における新たな可能性とパラダイムシフトへの期待を内包した，規範的かつ展望的な言説装置として機能していると考えられる。

3）習近平総書記は，2012年の就任以来，「四つの自信」（道路自信，理論自信，制度自信，文化自信）を提唱し，その中でも特に「文化自信」を「より基礎的で，より広範で，より深厚な自信」であると位置づけている。「文化自信」という概念は，習近平氏が2014年２月24日に中央政治局第13回集団学習で行った講話で初めて明確に提起されたとされているが，その後，様々な重要演説で繰り返し強調されるようになった。

4）本稿において参照するウェブサイト資料の最終閲覧日は，個別に明記する場合を除き，本稿の初回提出日の2025年６月30日に統一する。なお，引用スタイルについては以下の通りとする。第一に，APAスタイルなどでは通常，文中の引用に西暦年のみを記載するが，本稿では新聞やウェブ記事など著者不明で発行年月日が重要な参照文献について，読者の便宜を考慮し，文中引用にも月日を併記した。第二に，日本語・中国語の参考文献は原文表記が一般的であるが，本稿では表記の統一性を優先し，中国語の簡体字は日本の常用漢字に置き換えている。

5）キャラクターアーク（Character Arc）とは，物語の進行とともに登場人物が経験する内面的な変化や成長の軌跡のことを指す。物語の開始時点と終了時点とで，キャラクターの考え方や価値観，人間性がどのように変わったかを示すもので，物語に深みと感動を与える上で非常に重要な要素とされる。

6）文化的割引（Cultural Discount）とは，Colin HoskinsおよびRolf Mirusが1980年代後半より提唱した概念であり，ある文化圏において制作されたメディア製品が，異なる文化圏の消費者に受容される際に，文化的背景の差異に起因してその本来的価値が減殺される現象を指す。言語，ユーモア感覚，生活様式，価値観，社会的文脈といった文化固有の諸要素が，他文化圏の受容者にとって親近性を欠き，共感や理解を阻む障壁として機能することにより，当該「割引」現象が生起するとされる。詳細については，Hoskins & Mirus（1988）を参照されたい。

参考文献

英語

Ainvest. (2025, February 24). *Mega Matrix Inc.'s FlexTV wins "Jinpeng Index" at China's 14th international short film festival*. https://www.ainvest.com/news/mega-matrix-inc-s-flextv-wins-jinpeng-index-at-china-s-14th-international-short-film-festival-25021000df27c4ebf393cf7a/

Appfigures. (2024, December 20). *It wasn't just a fad! Short drama apps rallied in 2024*. https://appfigures.com/resources/insights/20241220?f=1

Becard, D. S. R., & Filho, J. I. F. (2019). Chinese cultural diplomacy: Instruments in China's strategy for international insertion in the 21st century. *Revista Brasileira de Estratégia e Relações Internacionais*, *8*(23), 131–151. https://doi.org/10.1590/0034-7329201900105

China Daily. (2024, January 24). *Chinese mini-dramas turn hot overseas*. https://global.chinadaily.com.cn/a/202401/24/WS65b0716fa3105f21a507e087.html

DatumIntell. (2023, November 28). *Deep dive into ReelShort*. https://www.datumintell.in/deep-dive-into-reelshort/

Dev Technosys. (2024, May 22). *How to develop an app like ReelShort in 7 easy steps?* https://devtechnosys.com/insights/develop-an-app-like-reelshort/

GlobeNewswire. (2025, March 20). *The global surge of short dramas: China's dominance and the path forward*. https://www.globenewswire.com/news-release/2025/03/20/3046806/0/en/The-Global-Surge-of-Short-Dramas-China-s-Dominance-and-the-Path-Forward.html

Hoskins, C., & Mirus, R. (1988). Reasons for the US dominance of the international trade in television programmes. *Media, Culture & Society*, *10*(4), 499–515.

Hu, Z., & Ji, D. (2012). Ambiguities in communicating with the world: The "going-out" policy of China's media and its multilayered contexts. *International Communication Gazette*, *74*(8), 705–719. https://doi.org/10.1177/1748048512461821

Huang, M., & Xue, F. (2023). Research on Chinese film and television export in recent years and development recommendations. *International Journal of Education and Humanities*, *9*(3), 85–88. https://doi.org/10.54097/ijeh.v9i3.12353

iQIYI. (2025, May 16). *iQIYI expands MENA presence with MENA branch launch and local partnership, elevating Chinese storytelling worldwide*. PR Newswire. https://www.prnewswire.com/apac/news-releases/iqiyi-expands-mena-presence-with-mena-branch-launch-and-local-partnership-elevating-chinese-storytelling-worldwide-302457624.html

KrASIA. (2025, April 14). *Why the UAE is the next stop for China's short drama wave*. https://kr-asia.com/why-the-uae-is-the-next-stop-for-chinas-short-drama-wave

Li, L. (2025). Cultural discount: Breakthrough point of China's TV drama exports to Southeast Asia. *International Review of Humanities Studies*, *10*(1), Article 4. https://doi.org/10.7454/irhs.v10i1.1363

Li, X. (2024). Understanding audience reception of Chinese internet 'cool dramas'. *SHS Web of Conferences, 207*, 02010. https://doi.org/10.1051/shsconf/202420702010

Li, Y. (2024). Narrative and aesthetic features of micro-short plays on short video platforms: A case study of Douyin micro-short plays. *Advances in Educational and Desocialization Research*, *2*(1), 40–44. https://doi.org/10.61935/aedmr.2.1.2024.P40

Mishra, G. (2025, February 10). *Catch the drama: Micro-dramas take over China with a bite-sized sensation*. Marketing in Asia. https://www.marketinginasia.com/catch-the-drama-micro-dramas-take-over-china-with-a-bite-sized-sensation/

Mobvista. (2025, March 19). *ReelShort boosts efficiency by 30% with XMP*. https://xmp.mobvista.com/en-blog/docs/boost-reelshort-ad-efficiency-with-xmp

MoeNancy. (2023). *Thoughts on ReelShort?* [Online forum post]. Reddit. https://www.reddit.com/r/Filmmakers/comments/176uvkc/thoughts_on_reelshort/

NewLeaf. (2025). *ReelShort* [Mobile app]. Google Play Store. https://play.google.com/store/apps/details?id=com.newleaf.app.android.victor&hl=en_NZ

NPR. (2025, March 19). *Micro-drama is a soap opera in a TikTok world, and it's a hit*. https://www.npr.org/2025/03/19/nx-s1-5330470/micro-drama-soap-opera-app

NuVoodoo Media Services. (2025, April 4). *New data: Short form video explodes in popularity*. https://nuvoodoo.com/2025/04/04/new-data-short-form-video-explodes-in-popularity/

Nye, J. S., Jr. (2005, December 29). The rise of China's soft power. *The Wall Street Journal Asia*. https://www.wsj.com/articles/SB113580867242333272

Reddy, R. K. (2023). *China's going global policy: A prelude to the BRI*. ORCASIA. https://orcasia.org/chinas-going-global-policy-a-prelude-to-the-bri

Sensor Tower. (2024, October 24). *Top 5 interactive story games in the Middle East Q3 2024*. https://sensortower.com/blog/2024-q3-unified-top-5-interactive-story-games-units-mid_east-6019ed6a241bc16eb869f511

Sensor Tower. (2025, January). *Short-drama redefines mobile entertainment and challenges games*. https://sensortower.com/blog/short-drama-redefines-mobile-entertainment-and-challenges-games

Shambaugh, D. (2015). China's soft-power push: The search for respect. *Foreign Affairs, 94*(4), 99–107. https://www.jstor.org/stable/24483821

Sun, S.-C. (2023). The Confucius Institutes: China's cultural soft power strategy. *Journal of Culture and Values in Education, 6*(1), 52–68. https://doi.org/10.46303/jcve.2023.4

The Economist. (2023, November 23). *ReelShort is the latest Chinese export to conquer America*. https://www.economist.com/business/2023/11/23/reelshort-is-the-latest-chinese-export-to-conquer-america

Time. (2024, November 10). *How ReelShort CEO Joey Jia used a Chinese trend to disrupt the U.S. entertainment industry*. https://time.com/7173765/reelshort-crazy-maple-studio-joey-jia-interview/

Vertical shorts and POC [Online forum post]. (2024). Reddit. https://www.reddit.com/r/acting/comments/1iqilv9/vertical_shorts_and_poc/

WARC. (2025, February 2). *Inside the rise of micro dramas – and the opportunities for marketers*. https://www.warc.com/newsandopinion/opinion/inside-the-rise-of-micro-dramas–and-the-opportunities-for-marketers/en-gb/6981

Wei, Y. (2024). Analyzing the impact of user behavior and paid advertising on app revenue: A case study of Reelshort. *International Journal of Academic Research in Economics and Management Sciences, 13*(3), 294–311. https://doi.org/10.6007/IJAREMS/v13-i3/22346

Wei, Y. X., Wang, S., & Sun, Q. (2020). Research on the investment effect of Chinese cultural "going out" — Empirical evidence from the countries along the "Belt and Road". *Open Journal of Social Sciences, 8*(7), 253–264. https://doi.org/10.4236/jss.2020.87021

Xiao, D., & Zhao, Y. (2024, December 17). *How Chinese "alpha male" short dramas conquered the world*. EqualOcean. https://equalocean.com/analysis/2024121721237

Xinhua. (2025, April 2). *Micro dramas, video games, online literature: Chinese digital content goes global*. Invest in China. https://investinchina.chinaservicesinfo.com/s/202504/02/WS67ed0053498eec7e1f733767/micro-dramas-video-games-online-literature-chinese-digital-content-goes-global.html

Yang, G., & Ocon, G. (2023). *Motivations, policies and performance: A review of China's culture "going out" strategy*. SMU Institutional Repository. https://ink.library.smu.edu.sg/context/soss_research/article/4954/viewcontent/Ocon_Yang_2023_Motivations_Policies_and_Performance_A_Review_of_China_s_Culture_Going_Out_Strategy.pdf

Zhang, Y., Yasin, M. A. I., Alsagoff, S. A. B. S., & Ang, L. H. (2022). A semiotic analysis of Chinese export online TV dramas based on Fiske's TV culture theory. *Linguistics and Culture Review, 6*(S2), 560–575. https://doi.org/10.21744/lingcure.v6nS2.2198

Zhao, E. (2014). The micro-movie wave in a globalising China: Adaptation, formalisation and commercialisation. *International Journal of Cultural Studies, 17*(5), 453–467. https://doi.org/10.1177/1367877913500649

Zhu, L., He, A., & Ma, L. (2025, January 8). *Micro-dramas exhibit "accelerated violence"*. Chinese Social Sciences Today. http://english.cssn.cn/skw_research/journalism/202501/t20250108_5831856.shtml

中国語および日本語

王芳・劉佳佳.（2024）. 平台範式与地縁調適：“一帯一路”視域下中国微短劇国際伝播的双重邏輯. *電影評価, (23)*, 16–23.

金光国.（2024, September 23）. *日本のショートドラマ市場の現状 ── 今が参入の絶好のタイミングか?* note. https://note.com/short_drama/n/nc18f1c966a25

国家広播電視総局.（2022, November 14）. *関於進一歩加強網络微短劇管理実施創作提升計画有關工*

作的通知. https://www.gov.cn/zhengce/zhengceku/2022-12/27/content_5733727.htm

国家広播電視総局. (2025, January 4). *国家広播電視総局関与実施“微短劇+”行動計画賦能千行百業的通知*. https://www.nrta.gov.cn/art/2025/1/4/art_113_69936.html

国家広播電視総局. (2025, February 5). *國家広播電視總局辦公廳關於進一步統籌發展和安全促進網絡微短劇行業健康繁榮發展的通知*. https://www.nrta.gov.cn/art/2025/2/5/art_113_70148.html

国家広播電視総局網絡視聽司. (2024, December 21). *管理提示（加強微短劇片名審核）*. 人民網. http://opinion.people.com.cn/n1/2024/1226/c437948-40389815.html

史安斌・朱泓宇. (2022). 数字華流的模式之争與系統之辯:平台世界主義視域下中国国際伝播転型升級的路径與趨勢. *新聞與伝播評論, 75*（5）, 5–21. https://doi.org/10.14086/j.cnki.xwycbpl.2022.05.001

杉本穂高. (2024, July 11). *縦型動画革命！中国発ショートドラマが世界を席巻！*…杉本穂高公式サイト. https://hotakasugi-jp.com/2024/07/11/interview-shortdrama-china/

戴智軻. (2010). 21世紀の中国国家文化戦略とメディアの対外的展開 ── ソフトパワーの視点からの解読 ──. *神戸夙川学院大学紀要, (1)*, 1–17.

張榆沢. (2024, December 23). 微短劇出海：数字文化貿易拓新. *人民日報海外版*. https://paper.people.com.cn/rmrbhwb/pc/content/202412/23/content_30047524.html

中国網絡視聽節目服務協会. (2025). *中国網絡視聽発展研究報告*. 流媒体網. https://lmtw.com/mzw/content/detail/id/241036/keyword_id/-1

牛夢笛. (2025, April 11). *微短劇：影視出海新増長極*. 光明網. https://news.gmw.cn/2025-04/11/content_37958606.htm

平田由紀江. (2023). 韓国におけるスナック・カルチャーの浮上とウェブドラマ ── その広がりと変容 ──. *神戸女子大学文学部紀要, 56*, 37–51.

華金証券. (2024, September 29). *微短劇行業深度分析報告*. 搜狐. https://www.sohu.com/a/815169432_121825883

Minto. (2025, May 15). ［*イベントレポート］映像制作関係者向け：課金型ショートドラマ制作の最前線 ── 中国・韓国・日本の視点で語りあう*. note. https://note.com/quan_official/n/n8f83661ea430

孫佳山. (2023, September 13). 展現中華文化魅力 助推中国影視聽出海. *人民日報*. https://wenyi.gmw.cn/2023-09/13/content_36828947.htm

徐嘉偉. (2025, April 7). 網絡視聽向新再攀高（深観察）. *人民日報海版*. https://paper.people.com.cn/rmrbhwb/pc/content/202504/07/content_30066092.html

央視新聞. (2023, November 15). *広電総局：再次開展為期 1 個月的網絡微短劇専項整治工作*. https://news.cctv.com/2023/11/15/ARTItHt7qrv6kJzXVgcqzDca231115.shtml

アンデスの地域特徴としての証拠性の実態
── アイマラ語・ケチュア語・スペイン語と言語接触 ──

蝦　名　大　助

〈要旨〉

証拠性（evidentiality）とは，その主要な意味が情報ソース（source of information）であるような言語範疇のことである。南米アンデスで話されているアイマラ諸語やケチュア諸語には証拠性を標示する文法形式があるとされている。そして，アンデスで話されるスペイン語においても，証拠性を標示する文法形式を観察することができる。本稿では，各言語における証拠性標示の実態，言語接触による影響とその方向性について論じる。スペイン語における証拠性の獲得はアイマラ諸語やケチュア諸語の影響と考えられるが，アイマラ諸語とケチュア諸語間の影響の方向性についてはそれほど単純ではなく，双方向の影響の可能性も考えられる。

【キーワード】証拠性，アンデス，地域特徴，言語接触，モダリティ

〈Summary〉

Evidentiality is a linguistic category whose primary meaning is source of information. Studies have discussed that Aymaran and Quechuan languages of the Andes have grammatical categories to mark evidentiality. Andean Spanish also has an evidential category. In this paper, I will show realizations of evidentiality in each language and discuss influence and directions of language contact. It is obvious that the Spanish evidentiality comes from Aymaran and/or Quechuan. In the case of the influence between Aymaran and Quechuan, the situation seems to be not so simple. There might have been influence from both directions.

1．はじめに

証拠性（evidentiality）とは，その主要な意味が情報ソースであるような言語範疇のことである（Aikhenvald 2004: 3，下線部筆者）[1)]。ここでいう情報ソース（source of information）とは，話者が，その情報を直接体験から得たのか，二次的に得たのか，といったことである。直接情報と間接情報のみを文法的に区別する言語もあれば，さらに細かく区別する言語もある。すなわち，その情報を視覚によって得たのか，聴覚によって得たのか，などである。以下にAikhenvald（2004: 2）が挙げるタリアナ語（Tariana，南米アマゾン）の例を示す。

（1） Juse irida di-manika-**ka**
José football 3SGNF-play-REC.P.VIS[2)]
‘José has played football (we saw it).’

（2） Juse irida di-manika-**makha**
José football 3SGNF-play-REC.P.NONVIS
‘José has played football (we heard it).’

Aikhenvald（2004: 3）によると，（1）は話者がそのシーン（ホセがサッカーをしたの）を見た場合に適切であり，（2）は見ることができなかったがサッカーの試合の音を聞いた場合に適切であるという。これらは直接情報がさらに文法的に細分化されている例である。またAikhenvald（2004）によれば，タリアナ語では間接情報についても，それが視覚的な証拠から推測したのか（inferred evidential），話者の知識や一般知識から推測したのかが区別されるという。そして，証拠性マーカーを削除するとその文は非文法的になりとても不自然になるとも述べている。当該の接尾辞が屈折形式であるとは明確に述べられていないが，義務的であり，また時制を同時に表す形式であることから，これらの接尾辞は屈折的なものであると考えられる。

あらゆる言語において証拠性を語彙的に示すことができる。日本語では「～（だ）そうだ」で間接情報（伝聞）を示すことができる。しかしこれはあくまで語彙的な手段であって，日本語において文法範疇としての証拠性を認めることはできない。Aikhenvald（2004: 1）によると，世界の言語の約4分の1において発話の際に情報ソースを示さなければならないという。すなわち情報ソースを示す形式が義務的であるということであり，これらの言語においては，文法範疇として証拠性を認めることができる，ということになるであろう。

南米アンデス地域で話されるアイマラ諸語（Aymaran languages）やケチュア諸語（Quechuan languages）には証拠性を標示する文法範疇があるとされる（Hardman 1986, Weber 1986, Aikhenvald 2004など）。また，アンデス地域で話されるスペイン語においても証拠性に関わる文法範疇が認められることが先行研究で指摘されており，筆者の観察でもそうだといえる。このスペイン語における証拠性についてはアイマラ語やケチュア諸語の影響が指摘されている。いわば，証拠性はアンデスの地域特徴（areal feature）といえる。しかしその実態については明確に示されてきたとはいえない。本稿ではアンデスの言語における証拠性について，以下の3点を論じる。

①個々の言語の実態，特にケチュア諸語内における差異とその文法的位置づけ。
②①に関連して，それぞれの形式が「文法的証拠性」と呼べるかどうか。
③言語接触による影響として考えられるシナリオと，その方向性。

ケチュア諸語において，証拠性に関わる文法範疇には2種類ある。1つは上述のタリアナ語同

様，時制接尾辞であり，もう 1 つは付属語（前接語）である。これらのうち特に，後者が本当に「文法的証拠性」と呼べるのかどうかを議論したい。アイマラ諸語においてもおおむね並行的な証拠性に関わる文法範疇がみられる。1 つは人称・時制接尾辞であるが，もう 1 つはアイマラ語学では一般に文接尾辞（sentence suffix）と呼ばれている。この文「接尾辞」が本当に接尾辞なのか，筆者には一次資料がないため判断できない。しかし，アイマラ語学でいうところの文接尾辞と，ケチュア諸語の前接語の文法的振る舞いや意味はかなり類似している。

以下のように議論を進める。2 節で Hardman（2001）などに従い，アイマラ諸語における証拠性カテゴリーについて概観する。3 節ではケチュア諸語における証拠性カテゴリーの概要と，言語間の異同について述べる。そして，ケチュア諸語において文法範疇として証拠性を認めることができるかどうかについて議論する。4 節では南米アンデス地域で話されるスペイン語にみられる証拠性を表す形式について述べる。そして 5 節で言語接触の方向性について仮説を提示する。

本論に入る前に用語について述べておく。証拠性や関連する概念を指す用語・ラベルは先行研究によって異なる。たとえば間接情報に相当するラベルとして，”non-personal knowledge”, “hear-say”（伝聞），“reportative”（報告）などがみられる。言語によって細かな用法の違いがあると考えられるが，言語間で異なるラベルを用いることは余計な混乱を招く。そこで本稿では直接情報に類するものはすべて「直接情報」，間接情報に類するものはすべて「間接情報」，推測（conjecture）に類するものはすべて「推測」というラベルを用い，必要に応じて異なるラベルを併記する。

2．アイマラ諸語における証拠性

アイマラ諸語またはアイマラ語族（Aymara language family）は，アイマラ語（Aymara），ハカル語（Jaqaru），カウキ語（Kawki）からなる。かつてはハケ語族（Jaqi language family）との呼び方が一般的であったが，近年はアイマラ諸語またはアイマラ語族との呼び方が一般的になってきている。本稿ではアイマラ諸語と呼ぶことにする。

アイマラ諸語のうち，アイマラ語が最大の言語であり，ボリビア領内に約300万の話者がいるという（Hardman 2001: 1）。ペルー南部モケワ（Moquegua）県，プーノ（Puno）県，タクナ（Tacna）県にも話者がいる。ハカル語とカウキ語はペルー中部ヤウヨス（Yauyos）で話されており，消滅の危機に瀕している。現在，ハカル語・カウキ語域とアイマラ語域は分断されており，あいだにケチュア諸語域があるが，かつてはより広い範囲でアイマラ諸語が話されていたと考えられている。本稿での議論と関係するが，アイマラ諸語とケチュア諸語とは言語接触があり，双方に影響があったと考えられている。

カウキ語については十分な記述がないため本稿ではアイマラ語およびハカル語における証拠性について扱う。Hardman（1986）はアイマラ諸語における証拠性標示形式について述べているが，“data source marking”という用語を用いており，その中に証拠性マーカーやモダリティに関す

るものを含めている。以下ではHardman（2001）やHardman（2000）に従いアイマラ諸語における証拠性標示の実態について見ていくことにする。

2-1　アイマラ語における証拠性

2-1-1　動詞屈折接尾辞

アイマラ語では，時制と人称は融合した形で現れる。

表１　アイマラ語の時制と人称を標示する動詞接尾辞

	遠過去	近過去	単純形（非未来）	未来
1 （>3）	*-täta*	*-äta*	*-ta*	*-¨*
1incl（>3）	*-tätan*	*-yätan*	*-tan*	*-ñani*
2 （>3）	*-täta*	*-yatä*[3)]	*-ta*	*-¨ta*
3 （>3）	*-tayna*	*-na*	*-i*	*-ni*
1>2	*-täsma*	*-yäsma*	*-sma*	*-¨ma*
2>1	*-istästa*	*-istästa*	*-ista*	*-itäta*
3>1	*-itütu*	*-tana*	*-itu*	*-itani*
3>1incl	*-istüstu*	*-istana*	*-istu*	*-istani*
3>2	*-tätam*	*-yätam*	*-tam*	*-¨tam*

表１はHardman（2001）にもとづくアイマラ語の時制体系である（なお¨は長母音化音素を表す）。遠過去（distal past），近過去（proximal past），単純形（simple），未来の４つの時制が区別されている。Coler（2014）によると，方言によって接尾辞の音形に多少の違いがみられるものの，上記４つの区別があることは方言間で共通であるようだ。ここで重要なのは，時制部分と人称部分が融合していて切り離せないことである。たとえば遠過去形と単純形を比べてみると，歴史的には/tä/が遠過去を意味する形式であったことが推測できるが，共時的にはこれを切り離して別の接尾辞とは分析できない。３人称主語・１人称目的語（3>1）遠過去の接尾辞は*-itutu*であり，/tä/という音形はどこにもみられない。後でみるケチュア諸語とはこの点ではっきりした違いがある。すなわち，ケチュア諸語では人称と時制は異なる接尾辞で示され，スロットが異なる。

Hardman（2001）は単純形と近過去形を直接情報（personal knowledge），遠過去形を間接情報（non-personal knowledge），未来形を未実現（non-realized）という３項対立に分類している。一方Coler（2014: 255）はもう少し明確な分類を提示している。すなわち，アイマラ語の人称／時制パラダイムは時制（過去と非過去）と証拠性（直接情報と間接情報）の二項対立であると述べている[4)]。表２のような対立である。

表2　アイマラ語の時制と証拠性

証拠性 時制／	直接情報	間接情報
非過去	単純形	未来
過去	近過去	遠過去

Coler（2014）の分類にもとづけばアイマラ語では非過去と過去それぞれの時制で直接情報と間接情報の対立があることになる。一方Hardman（2001）によれば過去時制においてのみ証拠性の対立があるということになる。いずれにしても，Hardman（2001）はアイマラ語の時制・人称標示体系を屈折としているので，アイマラ語における証拠性の標示は文法的証拠性とみることができる（なおColer 2014は派生・屈折という用語を避け，inflection-like，derivation-likeという用語を用いている）。

これとは別に，Hardman（1986，2001）によれば，アイマラ語では動詞接尾辞 *-pacha* が表1に挙げた時制接尾辞の直前に現れ「推測（inferential）」を表すという。Hardman（1986）は *-pacha* をdata source markingの1つとしているが，data source markingにはモダリティも含まれる。Hardman（1986）は動詞形態論を明確に示しておらず，異なる位置に現れる形式を意味で分類しており，個々の形式の形態論上の位置づけがよくわからないという問題があるが，Hardman（2001）の記述からみて *-pacha* は証拠性を表す他の形式とパラディグマティック（系列的）な関係にはないため，証拠性にかかわる形式とは考えられない。Hardman（2001）で *-pacha* は屈折形式であるとされていることから，文法的モダリティと考えられる。従って本稿の議論の対象には含めない。

2-1-2　文接尾辞

アイマラ諸語では上記の動詞接尾辞とは別に，「文接尾辞」と呼ばれる接尾辞の中に証拠性に関わる形式があるとされている。文接尾辞（sentence suffix）とはアンデスの言語研究，特にアイマラ諸語の研究で用いられる用語だが，アンデス言語学特有の用語であり一般的ではない。Hardman（2001）によれば，文接尾辞には *-wa*「焦点・直接情報」，*-chim/-chix*「間接情報（伝聞）」，*-sa*「content questionに現れる」，*-xa*「主題」，*-ti*「肯否疑問・否定の焦点」，*-cha*「か〜か」などがあるという。これらは句末に現れるとみられる。これらのうち，証拠性に関わるのは *-wa*「直接情報」と *-chim/-chix*「間接情報」ではないだろうか。

Hardman（2001: 170）は「文接尾辞は統語的に義務的である」と述べている[5)]。「統語的に」の意味が判然としないが，文には必ずこの種の形式が一つは現れる，ということのようである。屈折接尾辞のようにそれが付加されないと語として成立しない，というものではないだろう。実際，文接尾辞は屈折接尾辞が付いた後に付くものである。筆者は一次データを持たないためはっきりしたことがいえないが，アイマラ語や後述するハカル語の「文接尾辞」は前接語と分析でき

るようにもみえる。

これらのうちどれとどれがパラディグマティックな関係にあるのか，Hardman（2001）には明確に述べられていないが，２つの形式が共起するのは限られたもののみであるようなので，基本的にはパラディグマティックな関係にあるといえるだろう。となると，証拠性に関わる形式（*-wa* と *-chim*/*-chix*）とそうでないものとが文法的に同じ範疇に属するということになる。またHardman（2001）が挙げる例文をみると，*-wa* と *-chim*/*-chix* が現れない文もあり，これらは義務的ではないようである。つまり *-wa* や *-chim*/*-chix* は文法的な証拠性マーカーとはいえないのではないか。Aikkenvald（2004）の議論に従えば，義務的であることが文法的証拠性範疇の要件と考えられるからである。

なお，前節でみた *-pacha* は屈折接尾辞であるのに対し，文接尾辞は屈折接尾辞ではなく，前接語と分析できる可能性もあることから，両者は文法的に異なる位置付けの形式であると考えられる。

以上見てきたことから，アイマラ語では動詞の時制・人称接尾辞と，文接尾辞において証拠性が示されることがわかった。そして文接尾辞は文法的な証拠性マーカーであるとはいえないことがわかった。一方，時制・人称接尾辞は文法的な証拠性マーカーとみることができるのではないか。アイマラ語では個々の時制・人称接尾辞において時制・人称・証拠性が同時に標示されるのだと考えられる。そしてHardman（2001）やColer（2014）の記述からみて証拠性が二次的な意味だとは解釈できない。

2-2　ハカル語における証拠性

2-2-1　時制接尾辞

ハカル語の時制接尾辞の体系はアイマラ語とは異なっている。アイマラ語では直接情報・間接情報を表す形式は時制・人称と融合しておりそれ以上分析することができない。しかしハカル語では専用の形式がある。

表３　ハカル語の動詞における人称標示と遠過去時制

人称接尾辞	遠過去
人称接尾辞	*-ana*　直接情報 *-ata*　間接情報

過去の事柄を表す際に，*-ana* が直接情報（personal knowledge），*-ata* が間接情報（non-personal knowledge）を表すという（Hardman 2000: 62-64）。これらは人称接尾辞に後接するとされている。アイマラ語とハカル語は同系統であるのに標示のされ方が異なるが，動詞接尾辞である点は共通している。Hardman（2000）はこの種の接尾辞群を動詞屈折に含めていることから，*-ana* と *-ata* の対立は文法的証拠性とみることができる。

2-2-2　文接尾辞

ハカル語には証拠性に関わる文接尾辞として，*-wa*「直接情報」（personal knowledge），*-mna*「間接情報」（Hardman 2000は“knowledge through language”と呼んでいる），*-ashi*「推測」（conjectural）*-ishi*「記憶」（evoker, memorial）があるという（Hardman 2000）。アイマラ語と一対一の関係になっていない。ここで，アイマラ語とハカル語の文接尾辞の対応関係を示すと以下のようになる。

表4　アイマラ語とハカル語の文接尾辞の対応関係

アイマラ語	ハカル語	意味
-wa	*-wa*	直接情報
-chim/-chix	*-mna*	間接情報（伝聞）
-sa	*-sa*	content question
-xa	*-qa*	主題
-ti	*-txi*	肯否疑問／否定
-cha		「～か～か」
	-ashi	推測
	-ishi	記憶

ハカル語においても文接尾辞に *-sa* や *-qa*, *-txi* といった証拠性とは関係がない形式がある。*-ashi*「推測」や *-ishi*「記憶」は意味的にはモダリティにみえる。そしてHardman（2000）の例文から判断すると *-wa* や *-mna* は義務的ではないようである。すなわちアイマラ語の文接尾辞が文法的証拠性とはいえないのと同様に，ハカル語でも文接尾辞は文法的証拠性とはいえないと考えられる。表3に示した文接尾辞が，全体として証拠性を示す文法範疇であるとは考えられないし，義務的でもないからである。

3．ケチュア諸語における証拠性

ケチュア諸語またはケチュア語族（Quechua language family）はペルーを中心に北はコロンビア南端から南はアルゼンチン北部までの領域で話される。話者数は約700万人と推計される。アイマラ諸語とは分布域が隣接している。ペルーとボリビアの国境にあるティティカカ（Titicaca）湖周辺ではケチュア語とアイマラ語の二言語話者がいるとされているが，本稿の議論は現代のバイリンガリズムを対象としたものではなくより古い時代の接触を対象としている。

Weber（1986）はケチュア諸語に証拠性マーカーがあることを主張した。同時にAdelaar（1977）を挙げ，言語によっては対応する形式が証拠性を標示するとはいえないとしている。筆者の観察では，Weber（1986）の示すペルー中部ケチュア語群と，クスコ・ケチュア語（ペルー南部）と

では形式や体系に違いがみられるし，Grzech（2025）をみても地域変種によって違いがあるようである。

ケチュア諸語では一般に証拠性を標示する手段に 2 種類がある。1 つは付属語（前接語）によるものであり，*=mi*（直接情報），*=si/shi*（間接情報），*=cha/chi*（推測）の 3 つの形式が一般に認められる。Weber（1986）以外にも多くの文法書がこの区別に沿った記述をしている。もう 1 つは動詞の時制接尾辞であり，*-r(q)a*（直接情報・過去），*-sqa*（間接情報・過去）が区別される。この時制接尾辞における区別はすべてのケチュア諸語にみられるわけではないため，先行研究では前接語による証拠性標示が扱われることが多い。いずれにせよアイマラ諸語と並行的であることがみてとれる。

本節では以下のように議論を進める。まず3-1でWeber（1986）の示す体系をみる。次に3-2でクスコ（Cusco）・ケチュア語における証拠性について述べ，異同を考察する。3-3で他のケチュア諸語の研究を概観し，それぞれの形式が文法的証拠性といえるかどうか議論する。

3-1　ペルー中部のケチュア諸語における証拠性

表 5　ペルー中部ケチュア諸語の証拠性標識（Weber 1986）

	一時的意味	含意
-mi	直接情報	確信
-shi	間接情報	確信がない
-chi	推測	–

Weber（1986）はペルー中部のケチュア諸語において，*-mi/-shi/-chi* という 3 つの証拠性マーカーが認められると述べている。なおWeber（1986）は前接語を認めておらず，すべて接尾辞としているが，ケチュア諸語の研究には前接語を認めるものも多く，対応する形式は一般に前接語とされている。

Weber（1986）はAdelaar（1977）を引用し，タルマ（Tarma）・ケチュア語においては*-mi*は「話者の確信」を表し証拠性マーカーとはいえないとしているが，自身の挙げるペルー中部ケチュア諸語では *-mi*が持つ「確信」の意味は二次的であり，「直接情報」という一次的な意味から出てきていると主張している。従って，Weber（1986）は自身の議論においては *-mi/-shi/-chi* を文法的な証拠性マーカーと解釈しているといえるが，ケチュア諸語のすべてにおいてそうであるとは述べていない。ただし「推測」の *-chi*が証拠性を表すといえるのか，モダリティではないのかという疑問は残る。Aikhenvald（2004）のタリアナ語の議論では，「推測」を表すマーカーに 2 種類あり，その推測が視覚的な証拠によるものか，知識から推測したのかが区別されるということであった。すなわち部分的にではあるが証拠性が関わっていることが認められる。しかし *-chi*については単に「推測」を表すものである以上，証拠性マーカーといえるのか，という疑問

が呈されてもおかしくはないであろう。一次的な意味が証拠性に関わるものであり，そこから「推測」という含意が出てくる，という主張であれば証拠性マーカーと認められるが，「推測」自体は証拠性というよりもモダリティ的な意味である。

時制接尾辞についてはWeber（1986）に言及がない。後述するようにクスコ・ケチュア語では動詞接尾辞 *-sqa* が「伝聞過去」（間接情報）を表すのだが，Weber（1989）をみると，ワリャガ（Huállaga）・ケチュア語では *-sqa* は「完了」を表すとされていて「伝聞」の含意はないようである。すなわち，ケチュア諸語の中には動詞接尾辞において直接情報過去／間接情報過去の対立を持つものと持たないものがある。

3-2　クスコ・ケチュア語における証拠性

次に，クスコ・ケチュア語における証拠性や関連する概念の体系をみる。

3-2-1　前接語

表 6　クスコ・ケチュア語の句末に現れる前接語

形式	意味	Cusihuamán（2001）
=mi/n[6]	確言	直接情報
=si(s)/s	間接情報／伝聞	
=cha	推測	
=ma	驚き	
=ya	強意	感情
=qa	主題	
=chu	肯否疑問／否定の焦点	
=ri	問い返し	

表 6 は筆者の分析に基づく。すでに述べたように，ケチュア諸語では証拠性に関わる前接語として，*=mi*（直接情報／確言），*=si*（伝聞／間接情報），*=cha/chi*（推測）の 3 つが一般に認められている。Weber（1986）の *-mi* はクスコ・ケチュア語の *=mi/n* に，*-shi* は *=si(s)/s* に，*-chi* は *=cha* に対応する。Weber（1986）ではこれらの形式は接尾辞とされていたが，筆者はこれらは接尾辞ではなく前接語（付属語）とすべきであると考える。その根拠について詳しくはEbina（2011: 19-20）を参照されたいが，前接語とする根拠の 1 つは，ホストの品詞に制限がないことである。ケチュア諸語では一般に，接尾辞はホストが名詞類か動詞か決まっているのに対し，前接語は名詞類，動詞，小辞（否定辞など）いずれにも付くことができる。（3）（4）を参照されたい。もう 1 つの根拠は屈折が終わったあとに付くことであり，すなわち形態論的に義務的でないことである。なおクスコ・ケチュア語の先行研究であるCusihuamán（2001）とCalvo-Pérez

（1993）はいずれも前接語を認めている。

ケチュア諸語の証拠性に関する先行研究一般の記述をみると，ケチュア諸語では *=mi*（直接情報／確言），*=si/shi*（間接情報／伝聞），*=cha/chi*（推測）という 3 つの証拠性マーカーがあり，これらがパラディグマティックな対立を成している，というようにみえてしまう。しかしこれはミスリーディングである。実際にはアイマラ語同様，同じ位置に，証拠性とは関係がない意味を表す前接語が現れるのである。たとえば *=chu* は次の例文から明らかなように肯否疑問や否定を表すマーカーであり，証拠性とは全く関係がない。

（3） a. nuqa=qa mana chay-ta yacha-ni=chu
私=TOP NEG それ -ACC 知る -1=NEG.FOC
「私はそれを知らない。」

b. nuqa=qa mana chay-ta=chu yacha-ni=chu
私=TOP NEG それ -ACC= NEG.FOC 知る -1
「私は（他の何ものでもなく）**それを**知らない。」

否定文には必ず *=chu* が現れる。*=chu* は否定の焦点を表す。（3a）は *yacha-ni*「私は知っている」が否定の焦点になっているか，無標の場合である。（3b）は *chay-ta*「それを」が否定の焦点になっている。

なお Cusihuamán（2001）は表 6 よりも複雑なパラダイム（パラダイムといえるのであれば）を提示しているが，その根拠は薄弱であると考える。Cusihuamán（2001）では *=ma*「驚き」や *=ya*「強意」は *=mi, =si* とは異なる位置に現れるとされているが，筆者の観察では表 6 で示した前接語は共起しない。Cusihuamán（2001）は主張の根拠として *imasmari*「なぞなぞ」という語のみを示しているが，この語が共時的に *ima=s=ma=ri* と分析できる根拠が示されておらず，他の例が必要である。筆者はこの語は共時的には語彙化していてそれ以上分析できないと考える。たとえばクスコ・ケチュア語と系統的に近いコチャバンバ（Cochabamba）・ケチュア語について，Lastra（1968: 40）は以下のように分析している。

表 7　コチャバンバ・ケチュア語の句末に現れる前接語（Lastra 1968）

確認の接尾辞 （Validational suffixes）	強意 （Intensive）
=chus　疑念 *=chá*　推測 *=chu*　肯否疑問／否定の焦点 *=sis*　伝聞 *=min*　確言	*-ri*　強意
主題（Topic marker）	
=qa　主題	

クスコ・ケチュア語と似た体系であることがみてとれる。コチャバンバ・ケチュア語の句末に現れる前接語（Lastra 1968 は接尾辞としているが前接語とみていいだろう）において，明らかに証拠性を表すといえるのは *=sis*「伝聞」のみであり，雑多な意味を表す前接語の中の一つにすぎない。

クスコ・ケチュア語の議論に戻る。Weber（1986）との比較で注目すべきは 2 点ある。まず，*=mi* についてであるが，筆者の観察では *=mi* が直接情報を表すとすべき根拠は見いだせなかった。むしろ，Weber（1986）の二次的意味である確信，あるいは確言（確かであると主張すること）が一次的意味と思われる。Calvo-Pérez（1993）も同様の指摘をしている[7)]。Cusihuamán（2001）は直接情報としているが，Cusihuamán（2001）が挙げる例文には前後の文脈がないため，それが直接情報を表しているという説得的な根拠は見いだせなかった。Faller（2002）は証拠性（直接情報）と「確認」（validational）両方の意味を表すとしている。

文法的な証拠性に対する反証をさらに示す。

（4） allin=mi
　　良い=AFF
　　（「元気か」と尋ねられて）「元気だよ。」

（4）は確言ともみることができるが，名詞文（形容詞文）の述語化ともみることができる。ケチュア諸語ではコピュラが現れず名詞を並列して（または単独で）名詞文を構成できるが，クスコ・ケチュア語ではその際に述語に *=mi* が付きやすい。すなわち *=mi* には名詞や形容詞を述語化する機能があると考えられる。

=mi や *=chu* などの前接語には焦点化機能もあり，Grzech（2025）にも指摘がある（紙幅の都合上例文は割愛する。蝦名2016を参照されたい）。

他の付属語についても検討する。*=qa* はトピックマーカーであり，情報構造に関わるものである（（3a），（3b）を参照されたい）。*=cha* は推測を表し，モダリティとみることも可能である。*=ya* もモダリティとみることができる。*=ma* については「意外性（mirativity）」とみることがで

きるかもしれないが，意外性と証拠性は異なる概念である。*=chu* は統語構造に関わるものであり，焦点化の機能もある。*=ri* には談話上の機能がある（なお *=cha*，*=ma*，*=ya*，*=ri* は句末の上昇音調を伴う点で他の前接語と異なる）。とすると，証拠性，モダリティ，情報構造，統語構造，談話に関わるものがパラディグマティックな関係にあるということになるため，この点からも「文法的証拠性」とはいえないのではないだろうか。そもそも接尾辞ではなく付属語であることと意味的・機能的な多様性は関係がありそうである。これらの前接語には句末に現れるという共通点があり，文レベルで何らかの機能を持つ，という点だけが共通点ではないだろうか。

Aikhenvald（2004）はFloyd（1997）を根拠にすべてのケチュア諸語に *-mi/-chi/chr(a)/-shi* の証拠性マーカーが認められるとしている（下線筆者）[8]。しかし実はFloyd（1997）は「すべての」ではなく「大半の」と述べており（Floyd 1997: 24），Aikhenvald（2004）の指摘は誤りである。また，Aikhenvald（2004）だけをみるとこれらが文法的証拠性マーカーであると理解してしまうかもしれない。しかし，クスコ・ケチュア語では，*=mi*（直接情報／確言），*=cha*（推測），*=si(s)*（間接情報）のいずれかが文に必ず現れなければならない，ということはない。前接語であるからもちろん形態論的に義務的でもない。

義務的でもなく，証拠性という１つの文法範疇を成しているともいえそうにないいくつかの形式を，文法的証拠性マーカーとはいえないであろう。*=si(s)* が証拠性を表すとはいえるが，「文法的マーカー」とはいえないのではないだろうか。Weber（1989）その他ケチュア諸語の記述文法書を広くみても，*=mi*（直接情報／確言），*=si(s)*（間接情報），*=cha*（推測）に相当する形式が義務的であるとは考えられない。

Grzech（2025）は先行研究を広く引用しながら，中央アンデスの言語における証拠性や関連する概念を扱っている。Grzech（2025: 635）は “This chapter aims to describe the grammatical devices used to organize information in and beyond the clause, to ensure discourse coherence, and to facilitate information exchange between speaker and the addressee.” と述べているが，情報構造における「情報」（主題，焦点など）と，直接情報か間接情報かといった証拠性とでは「情報」の意味が異なり，同列に扱われるべきではないだろう。「話者と聞き手の情報のやり取り」も情報構造や証拠性に限られた話でなく，やや混乱している印象を受ける。そのような混乱の一因は，アイマラ諸語の文接尾辞やケチュア諸語の前接語が，１つの文法範疇を成しているとはいいにくいほど雑多な概念を含んでいることの現れではないだろうか。これらの形式が持っている共通の特徴は，「句末に現れ，文レベルで機能する」としかまとめられない。

3-2-2　時制接尾辞

クスコ・ケチュア語では，過去時制接尾辞に *-r(q)a*「直接情報」と *-sqa*「間接情報（伝聞）」の対立をみることができる。

（5） a. pay hamu-r(q)a-n
彼（女） 来る -PAST-3
「彼（女）が来た。」（来るところを，話者が見た。）

b. pay hamu-sqa
彼（女） 来る -PHS.3
「彼（女）が来たそうだ。」（話者は見ていない。）

この対立はケチュア諸語全般にみられるわけではない。たとえばWeber（1989）では *-sqa* は「完了」とされており，「伝聞」の含意は示されていない。

クスコ・ケチュア語において，*-sqa* は文法的な証拠性マーカーといえるだろう。「間接情報／伝聞」であれば *-sqa* が現れる必要があり，*-sqa* が現れない場合（過去接尾辞 *-r(q)a* または完了接尾辞 *-pu* が現れる）は直接情報であるという含意がある。すなわち過去時制では証拠性の標示が義務的であると考えられる。

ところで，この *-sqa* は本来名詞化接尾辞である。印欧語の過去分詞におおむね相当し，「結果状態」などを表す。この *-sqa* 形動詞が定動詞化し，共時的に時制接尾辞と解釈されるようになったと考えられる。

（6） wañu-sqa「死んだもの，死んだ状態」（名詞化形）

（7） chay alqu=qa wañu-pu-sqa（定動詞，間接情報）
それ 犬=TOP 死ぬ -PERF-PHS.3
「その犬は死んでしまった（そうだ）」（話者は死ぬところを見ていない）

名詞化接尾辞から時制接尾辞への変化の経緯は次のように考えられる。*-sqa* 形は結果状態を表す。結果状態だけを見ればその出来事が起こった（過去）ことを推察できるが，出来事自体は見ていないということがありえる。この「見ていない」という含意が明示的（explicit）になれば，間接情報の意味が生じる。一方，間接情報の含意がなければ結果状態（resultative）と完了（perfect）は意味的に近いものである。後者の意味に発展したのが，ワリャガ・ケチュア語などではないかと考えられる。

すなわち，本来ケチュア諸語において，過去時制に直接経験／間接経験の区別はなかったはずである。名詞化接尾辞の定動詞化によって，この対立が生じたと考えられる[9)]。

3-3 その他のケチュア諸語における証拠性に関わる前接語

Weber（1986）が言及しているように，タルマ・ケチュア語を扱ったAdelaar（1977）では証

拠性という記述は現れない。Adelaar（1977）は “validation”「確認・確言」という用語を用いている。これは筆者が観察するクスコ・ケチュア語のデータに沿っている。同様にLastra（1968）もコチャバンバ・ケチュア語の分析においてvalidationという用語を用いている。いわゆる認識のモダリティ（epistemic modality）を指していると考えられるので，Adelaar（1977）やLastra（1968）はこれらの形式をモダリティ形式とみなしているとみてもいいだろう。

表 8　ケチュア諸語間の「証拠性」マーカーの意味の違い

言語	=mi	=chi	=shi/=si
クスコ	「最適な根拠」	推測	言語での報告
ワリャガ	直接情報，確実性	話者の関わりを減少	伝聞
ワンカ	確実性	推測	言語での報告
アヤクチョ	話者が妥当性を保証	推測	伝聞
南コンチュコス	「最適な根拠」	推測	伝聞
シワス	「最適な根拠」	推測	報告
ワマリエス	個人的知識	推測	非個人的知識

Grzech（2025: 645）は先行研究のデータを引用しながら，ケチュア諸語における証拠性の意味を表 8 のようにまとめている（より正確にはGrzech（2025）を参照されたい）。

ここで挙げられている意味の区別を本質的とみなすべきではない。一見すると言語によって意味が異なるようだが，それぞれのデータが依っている先行研究の著者が異なる以上，単なる「ラベル」程度にみておくべきである。実際にどの程度意味の違いがあるかはわからない。そうだとしても，証拠性的な意味と，認識のモダリティ的な意味が並置されていることに留意すべきである。Grzech（2025: 645）は「証拠性マーカーの意味の違い」としているが，実際には認識のモダリティ的な意味も含まれている。

モダリティ（modality）とは「話者の心的態度」を表す文法的形式のことである。モダリティと証拠性との関係について，２つの立場がある。Aikhenvald（2004: 7）は “Evidentiality is a category in its own right, and not a subcategory of any modality” として，証拠性がモダリティに含められるべきでないと主張する。一方，Palmer（2001）は証拠性もモダリティに含め，次のように述べている。“Epistemic and Evidential systems are the two main types of Propositional modality ... The essential difference between these two types is ... that with epistemic modality speakers express their judgments about the factual status of the proposition, whereas with evidentiality modality they indicate the evidence they have for its factual status” (Palmer 2001: 8). ケチュア諸語の前接語の体系を考える上では，Palmer（2001）の考えるように，証拠性はモダリティの下位範疇とみるのが妥当であるように思われる。Faller（2002）はクスコ・ケチュア語の前接語 *=mi* について，純粋な証拠性とも純粋な認識のモダリティ（Fallerはvalidationalという用語を用

いている）ともいえず，どちらの概念も表すと述べている[10)]。筆者のデータでは *=mi* が直接情報（証拠性）を表すという証拠はみつけられなかったが，ケチュア諸語の前接語の体系全体を考えるうえではFaller（2002）の見解に同意したい。アイマラ諸語の文接尾辞については一次資料がないためはっきりしたことがいえないが，先行研究をみる限り，同様のことがいえそうである。前述のとおり，Hardman（1986）は“data source marking”に証拠性とモダリティを含めている。

これまでの議論をまとめる。アイマラ諸語およびケチュア諸語の一部では，動詞において直接情報／間接情報（伝聞）の対立が示される。これは屈折範疇であるため文法的証拠性マーカーとみることができる。これとは別に証拠性を示す前接語があるが，文法的証拠性マーカーとはみとめられない。パラディグマティックな関係にある他の前接語が，モダリティ，情報構造，統語構造，談話に関わる雑多なものであること，義務的でないことがその理由である。

４．アンデスのスペイン語における証拠性

Martin（1981）やLaprade（1981）において，ラパスのスペイン語で，過去完了形が間接情報に用いられることが指摘されている。以下のような対立である（Martin 1981: 205）。

（８） Hoy día llegó su mamá de él.
“Today his mother arrived, (and I saw her arrive).”

（９） Hoy día había llegado su mamá de él.
“Today his mother arrived, (but I didn’t see her arrive).”

過去時制においてのみ証拠性の対立がある。すなわち，点過去形は直接情報に，完了去形は間接情報に用いられる。もちろん標準スペインにこのような用法はない。Laprade（1981）はこのような完了過去形の用法をアイマラ語の影響とみているが，筆者の観察ではペルー・アンデスでも同様の用法がみられる。従ってアイマラ語だけでなくケチュア諸語の影響も考えられ，アンデスで広くみられるものと思われる。

５．伝播の可能性と方向性

すでに述べたようにアイマラ諸語とケチュア諸語とのあいだには言語接触があり，双方に影響があったと考えられているが，文法面では主にアイマラ諸語からケチュア諸語への影響があったとされている。たとえばAdelaar（2010: 242）は，ケチュア諸語における人称標示体系の発達に，アイマラ諸語の影響があった可能性を指摘している[11)]。

以下では本稿で扱った証拠性に関する伝播の可能性と方向性について仮説を提示する。まず，

クスコ・ケチュア語などにみられる，動詞屈折接尾辞における直接情報過去／間接情報過去の区別はアイマラ語からの影響の可能性が考えられる。アイマラ語の屈折接尾辞は，時制と人称が融合した形であり，それ以上分析できない。一方で，ケチュア諸語において過去時制接尾辞は人称接尾辞と融合していない。また，伝聞過去／完了の *-sqa* は名詞化接尾辞由来である。本来，ケチュア諸語の時制体系に証拠性範疇はなかったのだが，アイマラ語の近過去（直接情報）／遠過去（間接情報）の対立がケチュア諸語にマッピングされ，*-sqa* の定動詞化が起こったと考えられる。同様に，アンデス・スペイン語における証拠性の区別も，アイマラ諸語か，あるいはあいだにケチュア諸語を介した影響と考えられる。標準スペイン語の過去完了形にそのような用法はないからである。

ハカル語の動詞接尾辞についてはアイマラ語の体系と異なりむしろケチュア諸語の体系に似ている。ハカル語が周囲をケチュア語に囲まれていることから，ケチュア語側からの影響があったのではないだろうか。

まとめると以下のようになる。まず動詞接尾辞における証拠性範疇については，次のような伝播の方向性が考えられる。

アイマラ語⇒ケチュア諸語⇒スペイン語
　　アイマラ諸語⇒スペイン語
ケチュア諸語⇒ハカル語（⇒スペイン語）

これらシナリオに対する反論としては以下のようなものが考えられる。まず一部のケチュア語にみられる直接情報過去／間接情報過去の区別だが，間接情報過去を表す形式は名詞化接尾辞由来である。そして本稿では名詞化接尾辞を含む結果状態構文から間接情報過去への意味の変化が考えられることを示し，そこにはアイマラ語の影響があった可能性を指摘した。しかし，結果相（resultative）から間接情報への意味の変化が起こりえることはBybee et al.（1994: 95-105）に指摘があり，言語接触による影響がなくとも起こりえる変化である。接触による影響ではないという可能性を否定することはできないが，言語接触仮説をサポートする１つの根拠としては，他地域と比べ，クスコ地域はアイマラ語との接触による影響がより大きかったことが挙げられる。その１つの表れは，クスコ以南にみられる閉鎖音における無気／有気／放出音の対立はアイマラ語の影響と考えられるが，他のケチュア諸語にはみられないことである。このことはWeber（1989）などにはみられない直接情報過去／間接情報過去の区別が，クスコ・ケチュア語ではみられることの説明となる。

Bybee et al.（1994: 95-105）に従えば，アンデス・スペイン語にみられる直接情報過去／間接情報過去の区別の発達に対しても，過去完了から間接情報という意味変化であり，接触の影響とは限らない，という反論が考えられる。しかしスペイン語における直接情報過去／間接情報過去の区別の発達については，管見の限り，ケチュア諸語やアイマラ語が話されるアンデス地域にお

いてしか先行研究の言及がない[12)]。となると，独自の発展の可能性よりも言語接触の影響を考えたくなる。

ケチュア諸語の前接語とアイマラ諸語の文接尾辞についてはどうだろうか。どちらにも証拠性に関わる形式の他に，情報構造や談話に関する形式があり，整然とした体系になっておらず雑多なものが含まれている。

表 9　アイマラ語，ハカル語，ケチュア諸語の前接語の対応関係

アイマラ語	ハカル語	ケチュア諸語	意味
-wa	*-wa*	*=mi/n*	直接情報／確信
-chi	*-mna*	*=si/s*	伝聞
-sa	*-sa*	−	content question
-xa	*-qa*	*=qa*	主題
-ti	*-txi*	*=chu*	肯否疑問／否定
−	*-ashi*	*=cha*	推測

ケチュア諸語研究の観点からアイマラ諸語の「文接辞」をみると，ケチュア諸語との類似性が多くみられ，前接語と分析できる可能性もあるのではないかと考えられる。そしてどちらも雑多な意味の形式を含んでおり，証拠性に関わるものはその一部であるなど，かなり似通っている。したがって，前接語については明確な方向性はみえない。ただし，ハカル語の*-ashi*「推測」はケチュア諸語に対応する形式があるがアイマラ語には欠けている。そして前述のとおり動詞接尾辞においては「ケチュア語⇒ハカル語」の影響が考えられることから，ハカル語には周囲を取り囲むケチュア語の影響があったかもしれない。

6．まとめ

アイマラ諸語，ケチュア諸語，アンデス・スペイン語では，地域特徴として証拠性がみられる。先行研究ではケチュア諸語で一般に「直接情報／間接情報／推測」という証拠性を表す形式がある，とされており，たとえばAikhenvald（2004: 43）では「すべてのケチュア諸語において」とされているが，これは正確ではなく，誤解を招くものでもある。「直接情報／間接情報／推測」の対立はケチュア諸語の前接語にみられるものだが，すべてのケチュア諸語にこの対立があるわけではない。またケチュア諸語の前接語には文レベルで機能する機能語，といった共通性しか認められず，そのうちの一部分だけが証拠性に関わる。他にはモダリティや情報構造に関わる形式がある。すなわち証拠性マーカーという 1 つの文法範疇を成しているわけではない。そしてアイマラ諸語の文接尾辞も，ケチュア諸語の前接語とかなり似通っており，前接語と分析できる可能性がある。証拠性マーカーは雑多な意味を表す前接語群のわずか一部を成すものであり，屈折形

式でもなく義務的でもない。このようなものを文法的証拠性マーカーとは認めがたい。

モダリティと証拠性との関係については2つの立場がある。Aikhenvald（2004）は証拠性がモダリティに含められるべきでないと主張するが，Palmer（2001）は証拠性もモダリティに含める。ケチュア諸語やアイマラ諸語の前接語群をみると，Palmer（2001）の考えるように，証拠性はモダリティの下位範疇とみるのが妥当であるように思われる。

前接語とは別に，アイマラ諸語とケチュア諸語では，動詞屈折接尾辞で「直接情報／間接情報」の対立がある。これこそ，文法的証拠性のマーカーと考えたい。

この文法的証拠性マーカーの体系は，アイマラ語からケチュア諸語への影響があった可能性が考えられる。不思議なのはハカル語で，同系のアイマラ語よりもケチュア諸語に似た体系である。ハカル語は現在では周囲をケチュア語に取り囲まれている。そのため，本来の体系を失い，ケチュア語からの影響があったのかもしれない。

前接語の体系はアイマラ諸語とケチュア諸語でよく似ている。そのため，どちらからどちらへ影響があったかにわかに判断できない。

最後にスペイン語についてだが，アイマラ語からスペイン語，あるいはアイマラ語からケチュア諸語への影響を経由してスペイン語への影響，といった方向性が考えられる。

本稿ではアンデス・スペイン語にみられる文末の*dice*について扱わなかった。日本語の「〜そうだ」に相当する機能を持ち，証拠性（間接情報）に関するとみることもできよう。このような*dice*は，もはや動詞としての機能を失い，小辞化（機能語化）していると考えられる。Laprade（1981）はアイマラ語の影響としているが，ケチュア語とスペイン語との二言語域でも同様の*dice*がある。本稿での議論とあわせて今後考える必要がある。また，本稿では言語接触の方向性について仮説を提示したが，ある言語（群）から他の言語（群）への直接的な体系のマッピングではない，という反論も考えられる。南米アンデスにおいてはスペイン人到来以前の書かれた記録がないため，歴史的な資料がきわめて限られているという制約があるが，個々の言語の記述を精緻化していくことによって，仮説を検証していく必要がある。

謝辞

本稿はクスコ・ケチュア語のデータの一部を文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））「ケチュア語とスペイン語の言語接触 ── 今まさに起こりつつある変化 ──」（課題番号：22720171）（平成22年度－平成24年度）によっている。

注

1）“Evidentiality is a linguistic category whose primary meaning is source of information. ... To be considered as an evidential, a morpheme has to have ‘source of information’ as its core meaning; that is, the unmarked, or default interpretation.” (Aikhenvald 2004: 3).
2）タリアナ語の例文については，表記・グロス・訳など，Aikhenvald（2004）の原文のまま載せる。
3）*-yatä* は *-yäta* の誤植と思われる。
4）“The person/tense paradigm may be seen as a matrix of a binary opposition of tense (past vs. non-past) and evidentiality (personal knowledge vs. non-personal knowledge).” (Coler 2014: 255)
5）“Sentence suffixes are syntactically obligatory.” (Hardman 2001: 170)
6）なお筆者は音節末の鼻音を /n/ ではなく /ŋ/ と分析しているが，本稿では紙幅の都合上，多くの先行研究に従い /n/ としておく。
7）“A unos y a otros les suceden elementos focalizadores: bien *-n/-mi*, indicator enfático del compromiso de verdad por parte del hablante (“en verdad que”) o bien el enclítico que elimina tal compromiso del Emisor, *-s/-si* (validador vs reportativo)” (Calvo Pérez 1993: 103)
8）“All the Quechua languages have three evidentiality specifications: direct evidence (*-mi*), inferred (traditionally called conjectural) (*-chi*, *chr(a)*), and reported (*-shi*) (Floyd 1997)” (Aikhenvald 2004: 43)
9）本来ケチュア諸語には過去時制範疇自体がなく，アイマラ諸語の影響であるということも考えられる。
10）“it cannot be classified as a pure evidential or as pure validational, but encodes both notions” (Faller 2002: 7)
11）“la mayoría de las transiciones verbales quechuas se expresan mediante terminaciones compuestas que, tal vez, no hayan formado parte del sistema original de indicaciones de persona verbal del pre-protoquechua. Es posible que la formación de estas terminaciones compuestas se haya originado en la etapa de la convergencia formativa, al modelo pre-protoaimara.” (Adelaar 2010: 242)
12）たとえばAikhenvald（2004: 297）は次のように述べている。“The Spanish varieties influenced by Quechua and Aymara are in the process of developing a firsthand-non-firsthand ... evidentiality system out of their past tenses.”

略号一覧

1: 1 人称	NEG: 否定辞	PHS: 伝聞過去
2: 2 人称	NEG.FOC: 否定の焦点	REC: 相互
3: 3 人称	NONVIS: 非視覚情報	SGNF: 単数非女性
ACC: 対格	P: 過去	TOP: 主題
AFF: 確言	PAST: 過去	VIS: 視覚情報
FUT: 未来	PERF: 完了	

参考文献

蝦名大助（2016）「日本語とケチュア語 ── 文法関係と情報構造，語順」日本語学　35-6. pp.72–81.
Adelaar, Willem (1977) *Tarma Quechua*. Lisse: The Peter de Ridder Press.
Adelaar, Willem (2010) Trayectoria histórica de la familia lingüística quechua y sus relaciones con la familia lingüística aimara. Boletín de Arqueología PUCP 14. pp. 239–254. Lima: Fondo Editorial de la

Pontificia Universidad Católica del Perú.

Aikhenvald, Alexandra Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford and New York: Oxford University Press.

Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.

Calvo Pérez, Julio (1993) *Pragmática y gramática del quechua cuzqueño*. Cuzco: Centro de Estudios Regionales Andinos “Bartolomé de Las Casas”.

Chafe, Wallace and Johanna Nichols (eds.) (1986) *Evidentiality: the Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood: Ablex Publishing Corporation.

Coler, Matt (2014) *A Grammar of Muylaq’ Aymara: Aymara as spoken in Southern Peru*. Leiden: Brill.

Cusihuamán, Antonio (2001 [1976]) *Gramática quechua: Cuzco-Collao (2nd ed.)*. Cuzco: Centro de estudios regionales “Bartolomé de Las Casas”.

Ebina, Daisuke (2011) Cusco Quechua. in Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*. pp.1–39. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

Faller, Martina (2002) The Evidential and validational licensing conditions for the Cusco Quechua enclitic *-mi*. Belgian Journal of Linguistics 16-1. pp.7–21.

Floyd, Rick (1997) *La estructura categorial de los evidenciales en el quechua wanka*. Lima: Instituto Lingüístico de Verano.

Grzech, Karolina (2025) Discourse, information structure, and evidentiality in the Central Andes. in Matthias Urban (ed.) *The Oxford Guide to the Languages of the Central Andes*. pp.635–666. Oxford and New York: Oxford University Press.

Hardman, Martha J. (1986) Data-source marking in the Jaqi languages. in Wallace Chafe and Johanna Nichols (eds.) pp.113–136

Hardman, Martha J. (2000) *Jaqaru*. München: Lincom Europa.

Hardman, Martha J. (2001) *Aymara*. München: Lincom Europa.

Laprade, Richard A. (1981) Some cases of Aymara influence on La Paz Spanish. in Wallace Chafe and Johanna Nichols (eds.) pp. 207–227.

Lastra, Yolanda (1968) *Cochabamba Quechua Syntax*. The Hague: Mouton.

Martin, E. Herminia (1981) Data source in La Paz Spanish verb tenses. in Wallace Chafe and Johanna Nichols (eds.) pp. 205–206.

Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality* (2nd. ed.) Cambridge and New York: Cambridge University Press.

Weber, David (1986) Information perspective, profile, and patterns in Quechua. in Wallace Chafe and Joahnna Nichols (eds.) pp.137–155.

Weber, David (1989) *A Grammar of Huállaga (Huánuco) Quechua*. University of California Press.

日本語の「動名詞＋中」構文におけるアスペクト的特徴
── 中国語「動詞＋中」との対照を通して ──

吉　野　孝　介

〈要旨〉

本研究は，日本語の「動名詞＋中」構文と中国語訳との対応関係を明らかにすることを目的とする。具体的には，用例をA～Cの３パターンに分類し，それぞれの意味・用法的特徴を整理する。また，「動名詞＋中」が日本語のアスペクト体系においてどのような位置を占めるのかを明らかにするために，従来の研究（工藤1995，大島2010）を参照し，同構文が「～ている」構文とどのように異なるかを比較分析する。さらに，対応する中国語表現「動詞＋中」及び“正在＋動詞”との対照を通じて，両言語におけるアスペクト表現の体系的差異を明らかにする。

〈摘要〉

本研究的目的在于阐明日语“动名词＋中”结构与其汉语译文之间的对应关系。具体而言，将语例分为A～C三种类型，并整理各类型的意义与用法特征。此外，为了明确“动名词＋中”在日语体貌体系中的位置，参考了既有研究（工藤1995，大岛2010），比较分析该结构与“～ている”结构之间的差异。进一步地，通过与汉语中相应的“动词＋中”以及“正在＋动词”等表达进行对比，揭示两种语言在体貌表达上的系统性差异。

０．はじめに

日本語の「動名詞＋中」構文は，名詞化された動詞が「行為や状態の進行中」を表す形式として，日常会話から書き言葉まで幅広く使用される。一方，中国語における“動詞＋中”構文は，“正在＋動詞”や“動詞＋着”と同様，進行・持続を表すが，その機能的範囲や焦点化の仕方に違いがみられる。

日本語のアスペクト研究に関しては，多くの先行研究がテンス・アスペクト体系の観点から論じている。なかでも工藤真由美（1995）は，『アスペクト・テンス体系とテクスト』において，「～ている」構文を中心に出来事の時間的相と語彙的相の関係を整理し，発話時点と事態時間の対応関係を体系的に示した。本研究で扱う「動名詞＋中」構文は，工藤のいう「進行相」及び「結果状態相」と部分的に対応するが，名詞構文である点で異なる。本研究では，この先行研究の成果を踏まえ，「中」のアスペクト的特徴を再検討する。

例えば「会議中です」と“正在开会”は，いずれも進行中の出来事を表すが，前者は「時間的

な状態の内部」に焦点があり，後者は「行為そのものの進行」に焦点がある。したがって，「中」という形式素がどのように事態を区切り，どの範囲を含意するのかを明らかにすることは，両言語のアスペクト体系の差異を理解する上で重要である。

本研究では，「動名詞＋中」構文をA～Cの三種類に分類し，それぞれの意味的特徴を検討する。なお，本研究で設定したA～Cの三分類は，次の操作的定義（operational definition）に基づく。Aパターンは，発話時点で行為が進行中である場合，Bパターンは，一定期間持続する行為・状態を背景にして出来事が進行している場合，Cパターンは，行為が完了し，その結果が状態として継続している場合である。この分類の妥当性を検証するため，10名の日本語母語話者（大学生）に対し，10文の「～中」構文をA／B／Cのいずれに該当するか判定させた結果，8割以上の一致率が得られた。これにより，A～Cの三分類が客観的に再現可能な基準に基づくものであることが確認された。

以下では，まず日本語の「動名詞＋中」『日中辞典』（注１）構文の特徴を整理し，中国語の対応表現との比較を行う。

［図表１］「動詞＋中」の三分類

	日本語の「動名詞＋中」	中国語での対応
Aパターン	（１）会議中 （辞書訳：正在开会） （試訳：会议正在进行中） （２）現在調査中の事件 （辞書訳：眼下正在调查的事件） （試訳：目前正在调查中的事件）	正在／在……； 正在／在……中
Bパターン	（３）食事中はよそ見をしないように （辞書訳：吃饭时不要东瞅西看） （試訳：吃着饭／吃着饭的时候不要东瞅西看） （４）運転中は携帯電話の使用はできない （辞書訳：驾驶时不可以使用移动电话） （試訳：驾驶中不可以使用移动电话） （５）通話中に相手の声が聞こえない （試訳１：通话中听不见对方的声音） （試訳２：通话时听不见对方的声音）	……着（的时候）； ……时／时候； 「動詞＋中」
Cパターン	（６）彼はいま出張中で留守です （辞書訳：他出差不在家） （試訳：他出差了不在家）	出差； ……了 状態を表す動詞

（試訳はすべて筆者自身による訳である）

上記の【Aパターン】は中国語では，通常“正在／在……”で表現するパターンである。文脈によって“会议正在进行中”“目前正在调查中的事件”のように“正在……中”も使用可能であ

る。

【Bパターン】は“吃饭时”“驾驶时”“通话时”のように，“……时”と“……的时候”の使用が可能である。例（3）は“吃饭时”のほか，試訳の“吃着饭”のように，“……着”も対応できる。“吃着饭”を“吃着饭的时候”の省略であり，【Bパターン】としても考える。

例（3）の「食事中」と例（4）の「運転中」をもう少し考えよう。

「食事中」→ ○“吃饭时” ○“吃着饭” ×“吃饭中”
「運転中」→ ○“驾驶时” ×“驾着驶” ○“驾驶中”

また例（4）試訳の“驾驶中”と例（5）試訳1の“通话中”のように，「動詞＋中」での対応もできる。

同様に過程を表し，“驾驶中”は使用可能だが，“吃饭中”は使えない。

また，「運転する」は“驾驶”のほか，“行驶”“开车”なども対応できる。次の例を見よう。

（7）汽车行驶过程中打手机是不允许的。
（車の運転中に携帯電話を使用することは許されていません。）
（8）2013年新交规－行驶中拨打手机扣分罚款怎么办?
（2013年の新しい交通規則では，運転中に携帯電話をかけた場合の減点や罰金はどうなりますか。）
（9a）开车玩手机怎么处罚呢？开车打电话要扣几分？
（運転中に携帯をいじるとどう処罰されますか？運転中に電話をかけると何点減点されますか。）
（9b）开着车玩手机怎么处罚呢？开着车打电话要扣几分？
（車を運転しながら携帯をいじるとどう処罰されますか？車を運転しながら電話をかけると何点減点されますか）
（9c）开车中玩手机怎么处罚呢？开车中打电话要扣几分？
（運転中に携帯をいじっている場合はどう処罰されますか？運転中に電話をかけると何点減点されますか？）

“行驶”は“驾驶”と同様，“行驶（过程）中”のように，「動詞＋中」が使用可能である。（9）の3例について，筆者はまわりの中国人に確認したが，（9a）（9b）の方が自然だと感じる人がほとんどである。では，どのような動詞が“中”の前に使えるかについても明らかにしたい。

【Cパターン】は“出差”“出差了”のように状態を表す動詞と“……了”で対応できる。

上記に示したように，日本語の「動名詞＋中」についてさらに考察する必要があると考えられる。

本研究の目的は，日本語における「動名詞＋中」構文とその中国語訳との対応関係を明らかにすることである。具体的には，①図表１で示したパターン分類の妥当性を実際の用例を通じて検証し，「動名詞＋中」構文の意味的・用法の特徴を把握すること，②その各パターンが中国語の「動詞＋中」構文とどのような対応・非対応関係にあるのかを分析することで，両言語におけるアスペクト表現の違いや共通点を明らかにすることを目的とする。

1.1　日本語の「動名詞＋中」とその中国語訳について

次に，日本語の原文（注２）における「動名詞＋中」とその中国語訳を考察対象とし，日本語の「動名詞＋中」構文がどのように中国語に訳されているかを調査する。本研究では，特に「動名詞＋中」が示すアスペクト的特徴に注目し，その意味的対応関係を分析した。

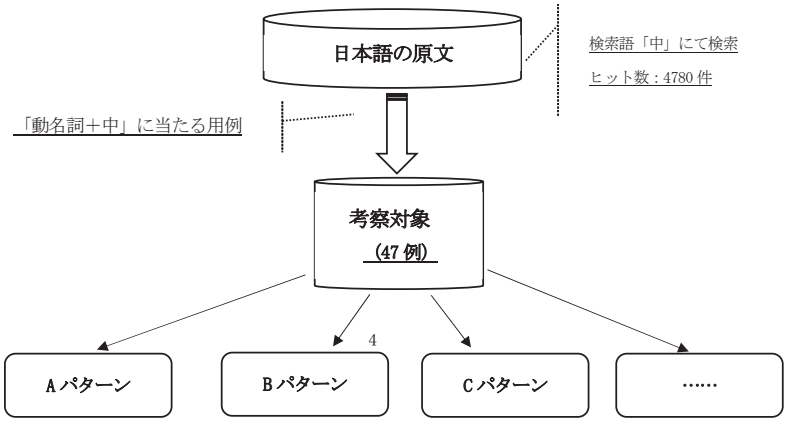
収集したデータは，まず「動名詞＋中」を含む文を抽出し，その中国語訳を照合した上で，文脈におけるアスペクト的機能を判断した。判断の基準としては，動作が進行中であるか（Aパターン），一定期間にわたる行為や状態を表すか（Bパターン），ある結果状態が継続しているか（Cパターン）の三点を操作的定義とした。

また，同一の「動名詞＋中」構文が異なる訳語（例：“正在”“在”“中”“期間”など）で訳されている場合には，それぞれの訳語の選択理由を文脈に基づいて分析した。特に，行為主の有無・動作の反復性・文全体のテンスとの関係を考慮し，対応関係の傾向を抽出した。

このような分析により，日本語の「動名詞＋中」構文が中国語においてどのような形でアスペクト的に再現されるかを明らかにし，その背後にある両言語のアスペクト体系の差異を検討する。

1.2　日本語の「動名詞＋中」及びその中国語訳についての調査

調査の手順は下記の［図表２］のようにまとめられる。



［図表２］日本語の「動名詞＋中」及びその中国語訳についての調査手順

上記の［図表２］に示したように，日本語の原文から「中」を検索語で4780件を抽出，手作業によって，本研究の考察対象として，日本語の「動名詞＋中」に当たる「滞在中」「留守中」「入院中」「活躍中」などの47例を抽出した。

［図表３］は「動名詞＋中」構文の出現頻度を示す。出現件数が３件以上の語を表に記載し，１件のみ確認された語（例：「在学中」「掃除中」「旅行中」「検討中」「稼働中」「休暇中」など）は本文中にまとめて示すこととした。出現数が特に多いのは「戦争中」（33件），「滞在中」（11件），「留守中」（８件），「授業中」（７件）であり，これらが全体の約半数を占める。

［図表３］日本語の「動名詞＋中」の調査結果

順位	語彙	件数
1	戦争中	33
2	滞在中	11
3	留守中	8
4	授業中	7
5	入院中	3
6	調査中	3
7	工事中	3

上記の［図表３］に示したように，日本語の「動名詞＋中」構文の使用実態を示す47種96例の調査結果の中で，最も頻出したのは「戦争中」であり，33件と突出して多く見られた。この「戦争中」は，一定期間継続する状況を表しており，構文としての「動名詞＋中」が期間的・持続的な事態に自然に用いられることを示唆している。

次いで多かったのは「滞在中」（11件），「留守中」（８件），「授業中」（７件）といった表現であり，これらもいずれも時間的な継続性を伴う動作・状態を表している。また，「調査中」「入院中」「工事中」「建設中」「休会中」「在任中」「練習中」といった３件前後の項目も同様に，ある程度の期間にわたる活動・状態を表すものである。

一方で，「稼働中」「旅行中」「苦行中」など１件のみの用例も多数存在し，語彙的には多様な「動名詞＋中」構文が存在することが確認できるが，頻度としては限定的である。これらは特定の文脈や場面において使われる傾向があると考えられる。

2.1 【Aパターン】～【Cパターン】に対しての検証

次に各調査例及びその中国語訳を考察し，［図表１］の三パターンとの関わりの有無を調べ，その妥当性についても考えてみる。

［図表４］日本語の「動名詞＋中」の調査例及びその中国語訳

パターン	該当数	代表的な例（すべて）
A（動作進行中）	19	調査中，工事中，建設中，作業中，対談中，検討中，稽古中，開発中，乾燥中，旅行中，掃除中，選挙中，苦行中，動員中，用談中，退却中，病臥中，修業中，来客中
B（一定期間の持続）	19	入院中，休会中，在任中，練習中，妊娠中，航海中，勉学中，病気中，忌服中，発令中，生理中，休業中，冬眠中，睡眠中，稼働中，在学中，空襲中，修業中，出張中
C（結果状態の継続）	7	活躍中，帰省中，警報中，休暇中，遠征中，来客中，出張中

2.2 【Aパターン】に対しての検証

上記の［図表４］から分かるように，Aパターンに当たる用例は20例あり，「調査中」「建設中」「開発中」などがその代表例である。以下に示す例文もAパターンに属する用例である。

（10）ノックしてとびらを開けると，父の梶大助は来客と対談中であった。
（敲开门一看，父亲梶大助正和来客交谈。）
（11）住職は来客中なので，二三十分待ってほしいと云われた。
（老方丈正在会客，叫我们等上二三十分钟。）
（12）詳細は今調査中なり。
（详细情况，正在调查中。）
（13）値上げするかどうか検討中である。
（涨价不涨价还在讨论）

例（10）～（13）に示したように，日本語の「動名詞＋中」は「動作進行中の持続」（注３）を表す場合，中国語の“正……”“正在……”“正在……中”“在……”で対応できる。

中国語の“正……”“正在……”“在……”は動作の進行或いは持続を表す場合では，基本的に意味は同様である。“正……”は時間を強調するニュアンスがあり，“在……”は状態を強調するニュアンスがあり，“正在……”は時間，状態のどちらも強調するニュアンスがある。

上記４例における「動名詞＋中」は，いずれも述語として機能している点にも注目すべきである。特に例（12）や（13）では，“在／正在＋動詞＋中”という構文が述語として使われ，その動詞には目的語が先行して提示されている。

しかし，次に挙げるような用例では，“正在……中”の使用が不自然とされる場合がある。

×（10a）敲开门一看，父亲梶大助正在和来客交谈中。（注４）
（ノックしてとびらを開けると，父の梶大助は来客と対談中であった。）

×（11a）老方丈正在会客中，叫我们等上二三十分钟。（注５）
（住職は来客中なので，二三十分待ってほしいと云われた。）
○（13a）涨价不涨价正在讨论中。（注６）
（値上げするかどうか検討中である。）

上記に示したように，持続状態を表す用法であっても，すべての動詞は“在／正在＋動詞＋中”構文に来ることができるとは限りない。例（12）の“调查”，例（13a）の“讨论”のような他動詞が必要であると考えられる。また，“在／正在＋動詞＋中”構文は述語として使うと，動詞の目的語が文頭に来る傾向もある。例（12）の“调查”の目的語は“详细情况”であり，例（13a）の“讨论”の目的語は“涨价不涨价”であり，いずれも文頭に来る。

他動詞のみは“在／正在＋動詞＋中”構文に使えるという分析を裏付けるため，中国語の「動詞＋“中”」について，中国語文法用例辞典 ──『現代漢語八百詞増訂本』日本語版（2003）（注７）の語釈を調査した。同辞典では，「持続状態を指す。“在”の後ろに用いる。」という説明があり，下記の（14）（15）を挙げている。

（14）球赛在进行中
（試合は進行中だ）
（15）剧本正在写作中
（脚本は執筆中だ）

次に（14）と（15）についてもう少し考えよう。

○进行球赛　→ ○球赛在进行中→ ○球赛正在进行中
△写作剧本　→ △剧本在写作中→ △剧本正在写作中

上記に示したように，“进行球赛”は使えるが，例（14）の“球赛在进行中”のほか，“球赛正在进行中”も言える。

（15）については，筆者のまわりの中国人（注８）に確認すると，筆者も含めて少し違和感があると答える人がほとんどであった。それを検証するため，CCLコーパス（注９）を用いて確認した。

“写作剧本”で検索したが，ヒット数は次の４件しかない。

○他们也担心有意外，特意在合约中写明“请作家彭荆风写作剧本”，我也明白这“画外音”是要我为他们负责。
（彼らも何かのトラブルを心配して，「作家の彭荆風に脚本を書いてもらうこと」と契約書に

特別に明記した。私もこの「行間の意味」が，彼らが私に責任を取ってほしいという意図であることを理解していた。）

○但对于我们来说，还没有写作剧本就确定了女主角，这还是第一次。
（しかし私たちにとっては，脚本を書く前にすでにヒロインが決まっているというのは，これが初めてのことだった。）

○齐尔品也算有自知之明，晓得自己对《红楼梦》见解肤浅，提议请鲁迅来写作剧本。但他又有点担心：“像鲁迅这样伟大的作家，不知愿不愿意担任这份工作！”
（チールピンもそれなりに自覚があり，自分の『紅楼夢』に対する理解が浅いことをわきまえていた。それで魯迅に脚本執筆を依頼しようと提案したが，少し心配もしていた──「魯迅のような偉大な作家が，この仕事を引き受けてくれるだろうか」と。）

○这位著名作家通过翻译岩崎昶的一篇文章，介绍了日本“无产阶级电影”的经验，同时为数众多的年轻的进步知识分子在电影界也开始发挥重要的作用，尤其是作为编剧，给明星影片公司和其他几家影片公司的影片写作剧本。
（この著名な作家は，岩崎昶の一篇の論文を翻訳して，日本の「プロレタリア映画」の経験を紹介した。また，多くの若い進歩的知識人が映画界で重要な役割を果たし始め，とくに脚本家としてスター映画会社や他のいくつかの映画会社の作品に脚本を書いていた。）

これらの用例についても，筆者及び中国母国語者の複数名は，“写剧本”“创作剧本”“进行剧本写作”といった表現の方が自然であると感じていた。また，“正在写作中”での検索では，“正在写作中的书稿”“正在写作中的作品”など連体修飾語としての用例が 4 件確認されたが，述語として使われている例は確認されなかった。

以上の考察を踏まえ，Aパターンは以下のようにさらに 2 類型に分類できると考える：

- 【A－①類】：“在／正在＋動詞＋中”の形が自然に成立し，述語表現として用いられるもの（例：調査中，建設中，討論中など）

- 【A－②類】：文法的には形式が成立するが，自然な表現としては定着しておらず，使用に違和感を覚えるもの（例：交談中，会客中など）

このように，【Aパターン】内部においても動詞の自他性・語彙的性質に基づく分類が可能であり，それぞれの対応の自然さ・頻度に注目することで，より詳細な日中対照分析を行うことができる。

2.3 【Bパターン】に対しての検証

Bパターンに当たる用例は17例であり，いずれも幅のあるひとまとまりの時間量を表す場合に使われ，“……时／的时候”“……期间”などで対応できるが，「滞在中」「留守中」「妊娠中」などはそれである。まず，次の（16）（17）を見よう。

（16）二人は食事中も殆んど口を利きませんでした。
（两人吃饭时，几乎都没有说话。）
（17）誰だって戦時中は，そのくらいなことを言うたもんや。
（在战争期间，谁都会说那种话。）

例（16）と（17）は一定の時間を表す表現であり，「～の時」とほぼ同様，中国語の“……时／的时候”“……期间”に訳せる。日本語の「～中」が，出来事が生起する時間的な背景や枠組みを示しており，中国語では“吃饭时／的时候”“战争期间”などで対応されている。ここで注目すべきは，対応する中国語表現において，“……时／的时候”と“……期间”が使用される場面が異なる点である。

具体的には，“吃饭”のような比較的短時間の行為に対しては“……时／的时候”が自然である一方，“战争”のように比較的長期間に及ぶ状態に対しては“……期间”が用いられる傾向がある。したがって，【Bパターン】はさらに以下のように下位分類することができる。

・【B－①類】：“……时／的时候”で対応するもの（例：吃饭时）

・【B－②類】：“……期间”で対応するもの（例：战争期间）

Bパターンに当たる用例の中，中国語訳は“……着”になるのもある。次の例（18）をみよう。

（18）妹は妊娠中であった。
（妹妹正怀着身孕。）

例（18）の「妊娠中」は単に時間的な区間を示すだけでなく，妊娠という状態の持続を表している点に注目すべきである。このようなケースでは，“……着”や“……着的时候”など，状態を焦点化した表現が中国語訳として適切となる。したがって，このような用例はさらに以下のように分類できる：

・【B－③類】：“……着”または“……着的时候”など，状態の持続を表す構文で対応する

もの（例：怀着身孕）

さらに，調査では，中国語の“動詞＋中”で対応可能な用例も 7 例見つかっており，「戦争中」「練習中」「稼働中」などが該当する。次の例はそれにあたる。

（19）冬眠中の蛙に冬が存在しないように，……
（冬眠中的青蛙，就象冬天不存在似地……）
（20）稼働中の原発は，代替エネルギー確立までの過渡的エネルギーとして認める。
（运转中的原子能发电站在寻找到新的能源之前，作为过渡时期的能源设施予以认可。）

これらの例に見られるように，“動詞＋中”構文は，中国語においても自然な表現として成立しており，以下のような特徴を併せ持っている。

○冬眠中的→　○冬眠期间的→ ○冬眠着的
○运转中的→　○运转期间的→ ○运转着的

上記の（19）（20）は時間を表す場合“冬眠期间的”“运转期间的”も使え，【B－②】類に当たる。「状態の持続」を考える場合，“冬眠着的”“运转着的”も使え，【B－③】類に当たる。すなわち，中国語の「動詞＋中」は，【B－②】類と【B－③】類の特徴があると考えられる。

では，【B－①】類，【B－②】類，【B－③】類の用例はすべて，中国語の「動詞＋中」でいえるか否かも考えてみよう。

【B－①】類　○吃饭时→　×吃饭中
【B－②】類　○在战争期间→　○战争中
【B－③】類　○妹妹怀着身孕→　○怀着身孕的妹妹

上記に示したように，中国語の「動詞＋中」で対応できるBパターンを【B－④】類として扱い，その特徴を次の三つのようにまとめることができる。

①連体修飾語として使用される傾向がある
②比較的長期間の時間的枠組みを表す
③状態の持続性を示す語彙的特徴を持つ

したがって，BパターンもAパターンと同様，語彙の時間的性質や文法的構造に基づいて，より詳細な下位分類と対応分析が可能である。特に，「状態としての持続」を表すか，「出来事の時

間的背景」として用いられるかによって，中国語の対応形式に差異が見られる点は，重要な観察結果といえる。

2.4 【Cパターン】に対しての検証

Cパターンに当たる用例は 9 例であり，下記の例に示したように，「出張中」「入院中」などはそれである。

（21）大尉が出張中なんだ。
（上尉出差去了。）
（22）看護疲れのためシゲ子が立ちくらみするようになったので，入院中の矢須子には附添婦を附けて，……
（因为护理病人受了累，繁子一站起身来就会头昏眼花，只好给住院的矢须子找个看护人。）
（23）授業中に机のふたを百回以上も開けたり閉めたりする
（上课他总要把桌子盖开开关关百十来次以上。）

例（21）の「出張中」は，「現在，大尉が物理的に不在である」ことを意味しており，これは中国語の“出差去了”によって自然に対応される。ここでの“去了”は，動作の完了を示すとともに，その結果として「現在もその状態が続いている」ことを暗示する補語である。すなわち，「出差」は単なる動作ではなく，「出差している状態」へと変化したことを表している。

また，例（22）の「入院中」も，“住院的矢须子”という連体修飾構造によって表現されており，“住院”という語自体が「治療のために病院にいる」という状態の持続を意味している。“正在住院的矢须子”のような進行表現も文法的には可能であるが，中国語では“住院”という語の中にすでに状態の意味が含まれているため，より簡潔に“住院的”と表現するのが自然である。

例（23）の「授業中」についても同様である。“上课”は本来「授業を受ける／行う」という動作を意味するが，この文脈では授業が行われているという時間的・空間的な背景状態を表しており，“上课”が副詞句的に機能している。したがって，ここでも“正在上课中”ではなく，“上课”の一語で十分に「授業中」という状態が表現されている。

これらの用例に見られるように，【Cパターン】に対応する中国語表現は，以下のような特徴を持つといえる。

・“出差”“住院”“上课”など，行為と状態の両面を持つ語彙が用いられる。
・動作の進行を強調する“正在～”よりも，すでに到達した状態が持続していることを重視した表現が選ばれる。
・名詞を修飾する場合には，“住院的矢须子”のように“動詞＋的”構造で連体修飾を行う

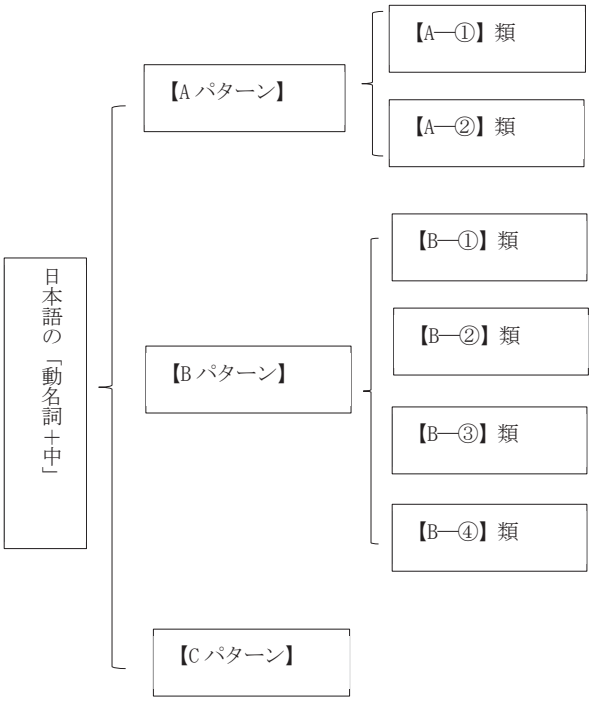
ことが多い。

行為性よりも状態性が前面に出るため，【Aパターン】のような“正在～中”構文では不自然になることがある。

このように，【Cパターン】の「動名詞＋中」は，行為の進行というよりも，「状態の持続」や「状態への到達後の継続」として機能しており，中国語訳ではその性質に応じた状態焦点型の語彙で対応される傾向がある。これは【Aパターン】や【Bパターン】と異なる大きな特徴であり，日中両言語における「状態性の把握と表現形式」の違いを示す重要な例といえる。

3.1　まとめ

以上の検証で，対応できる中国語によって，日本語の「動名詞＋中」の三分類を次のように説明することにする。



［図表５］日本語の「動名詞＋中」の三分類

本研究では，日本語における「動名詞＋中」の表現が，中国語においてどのように訳出・対応されているかを詳細に分析し，意味的特徴や中国語の表現形式の違いに基づいて【Aパターン】【Bパターン】【Cパターン】の三類に分類した。さらに，各パターン内でも，より細かな意味・機能の違いに基づいて下位分類を行った。以下に，それぞれの分類について整理する。

【Aパターン】
意味的特徴：動作が「現在進行中」であることを表す。
中国語対応：“正在…”“在…”“正在…中”などの進行表現。
【A－①】類：
“在／正在＋動詞＋中”構文で自然に表現できる用例。
例：調查中→“正在调查中”，開発中→“正在研究中”。
【A－②】類：
“在／正在＋動詞＋中”では不自然な用例。他動詞＋目的語構文に限定されやすい。
例：対談中→“正在交谈”，会客中→“现在有客人”。

【Bパターン】
意味的特徴：幅をもった時間量を背景に，ある行為や状態が行われていることを表す。
中国語対応：“……时／的时候”“……期间”“……着”など。
【B－①】類：
“……时／的时候”で自然に表現される。短時間の行為に適用されやすい。
例：食事中→“吃饭时”，授業中→“上课的时候”。
【B－②】類：
“……期间”で対応できる。比較的長い時間を表す語に対応。
例：戦争中→“战争期间”，妊娠中→“怀孕期间”。
【B－③】類：
“……着”や“……着的时候”によって，行為の状態持続を表現するタイプ。
例：妊娠中→“正怀着身孕”，“吃着饭的时候”。
【B－④】類：
“動詞＋中”で連体修飾語として表現可能なもの。
特徴：①連体修飾に使える，②時間が長い，③状態の持続。
例：稼働中→“运转中的”，練習中→“练习中的”。

【Cパターン】
意味特徴：ある状態に達し，それが継続していることを示す。
中国語対応：出差・住院・上课など，すでに状態化された語で対応。

「状態そのもの」が表現の中心であり，“正在…”のような進行形式ではなく，“出差去了”“住院的…”といった状態指向の表現が用いられる。
例：出張中→出差去了，入院中→住院的，授業中→上课。

以上のように，「動名詞＋中」は一見すると一様な形式に見えるが，中国語訳を通して観察することで，その意味・機能の違いが明確に浮かび上がる。特に【Aパターン】が動作の進行を，【Bパターン】が時間の幅をもつ背景的行為や状態を，【Cパターン】がある状態の持続をそれぞれ表すことが確認できた。また，中国語ではそれぞれのパターンに応じた語彙的・構文的表現が選ばれており，言語間の意味構造と表現手段の違いを示す貴重な対照資料となる。

注

1）用例と辞書訳は『日中辞典』第２版（菱沼透，守屋広則など編集　小学館／北京・商務印書館）からのものである。
2）本章で用いた日本語と中国語の対訳データは主に「中日対訳コーパス」（第１版　2003　北京日本学研究中心）から抽出した実例である。
3）彭飛（2006）「中国語と日本語の対照研究が抱える諸問題（６）── 日本語の『動詞＋テイル』構文と中国語の【“在”＋動詞】【動詞＋“着”】構文との相違及び【“在”＋動詞】構文の基本用法をめぐって ──」（京都外国語大学『研究論叢』第67号）
4）“正在交谈中”の表現はあるか否かについては，「北京大学汉语语言学研究中心现代汉语语料库」（网络版http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp）にて確認した。
5）“正在会客中”の表現はあるか否かについては，「北京大学汉语语言学研究中心现代汉语语料库」（网络版http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp）にて確認した。“正在会客中”にて検索したが，ヒット数は０件である。
6）“正在讨论中”の表現はあるか否かについては，「北京大学汉语语言学研究中心现代汉语语料库」（网络版http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp）にて確認した。“正在讨论中”にて検索したが，ヒット数は21件であり，対象となるのは15件である。
7）中国語文法用例辞典 ──『現代漢語八百詞増訂本』日本語版，呂 叔湘（編集），牛島 徳次（翻訳），菱沼透（翻訳），東方書店
8）本語能力試験N1～N2レベルの中国人による確認
9）“写作剧本”の表現はあるか否かについては，「北京大学汉语语言学研究中心现代汉语语料库」（网络版http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp）にて確認した。
10）“写作剧本”にて検索したが，ヒット数は下記の４件である。
11）〇他们也担心有意外，特意在合约中写明“请作家彭荆风写作剧本”，我也明白这“画外音”是要我为他们负责。
12）〇但对于我们来说，还没有写作剧本就确定了女主角，这还是第一次。
13）〇齐尔品也算有自知之明，晓得自己对《红楼梦》见解肤浅，提议请鲁迅来写作剧本。但他又有点担心：“像鲁迅这样伟大的作家，不知愿不愿意担任这份工作！”
14）〇这位著名作家通过翻译岩崎昶的一篇文章，介绍了日本“无产阶级电影”的经验，同时为数众多的年轻的进步知识分子在电影界也开始发挥重要的作用，尤其是作为编剧，给明星影片公司和其他几家影片公司的影片写作剧本

参考文献

1．大島弘子（2010a）「漢語接尾辞『～中』によるアスペクト用法 ──『～ている』との違い ──」『漢語の言語学』くろしお出版.

2．大島弘子（2010b）「日本語と中国語におけるアスペクト表現の比較」『言語文化論集』第22号，広島大学大学院教育学研究科，pp.121–139.
3．王艳滨（2024）「构式视角下的汉语动量 组配认知研究」P25–P37
4．工藤真由美（1995a）『アスペクト・テンス体系とテクスト ── 現代日本語の時間の表現 ──』ひつじ書房.
5．小泉保（1989）『日本語基本動詞用法辞典』くろしお出版.
6．胡晓清 张宝林（2023）「第六届汉语中介语语料库建设与应用国际学术讨论会论文选集」P327–P334
7．西原鈴子（2005）「日本語の進行表現と相的対立」『日本語文法』5（2），pp.55–70.
8．益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 ── 改訂版 ──』くろしお出版.
9．吉川博文（2012）「日本語動詞のアスペクト的分類と文脈解釈」『日本語学』31（4），pp.14–29.

中国の日本語専攻大学生による言語分野の卒業論文テーマ
── X大学を対象としたテキストマイニングを用いた卒業論文題目分析 ──

目　黒　裕　将

〈要旨〉

本稿では，テキストマイニングを用いて，中国のX大学日本語専攻大学生が2015年から2022年（2021年を除く）に提出した言語分野の卒業論文89編の題目を分析した。テキストマイニングにはKHCoder（Ver.3.Beta.07c）を用い，題目内の語の共起関係から分析した。その結果，日中対照研究が最多を占め，とりわけ同形語を扱うテーマが顕著であったほか，日本語と中国語の方言の対照，アニメ・ドラマの役割語，歌詞や広告表現などサブカルチャー系テーマも一定数見られた。これは日本語学の授業内容や地理的要因，日本文化への興味関心が反映されたものだと考えられる。対象を拡大することで，卒業論文のテーマの変遷や指導体制，日本語学の授業との関連を明らかにすることができると思われる。

キーワード：卒業論文，日本語専攻，テキストマイニング，共起ネットワーク

〈摘要〉

本文利用文本挖掘技术分析了中国X大学日语专业大学生在2015年至2022年（不含2021年）期间提交的89篇语言领域毕业论文的标题。文本挖掘使用了KHCoder（Ver.3.Beta.07c），分析基于标题中词语的共现关系。结果显示，日汉对比研究的数量最多，尤其是涉及同源词的主题比较突出，同时还发现了一定数量的亚文化主题，如日汉方言对比、动漫和戏剧中的角色词、歌词和广告表达等。这被认为反映了日语语言学课程的内容、地理因素和对日本文化的兴趣。通过扩大研究范围，可以明确毕业论文主题的变化、它们与教学体系的关系以及它们与日语语言学课程的联系。

关键词：毕业论文，日语专业，文本挖掘，共现网络

１．はじめに

日本国外で日本語学習者が最も多い国・地域は中国であり，国際交流基金が実施した2021年度の海外日本語教育機関調査によると，学習者数は約105万人である。そのうち，高等教育機関における学習者数は約56万人と半数以上であり，他の国・地域と比べて高い割合となっている。また，中国国内で日本語・日本研究関係の学位を授与する高等教育機関数は準学士号が134，学士

号が581，修士号が147，博士号が26となっている。上記のうち，学士号の取得には卒業論文の執筆が必須となっている。中国国内の大学における外国語教育についてのガイドラインである《外国语言文学类教学质量国家标准》には卒業論文の執筆言語は一般的に専攻の外国語を使用することが記載されている。また，日本語専攻のカリキュラムでは，「読む・聞く・話す・書く」の四技能に加えて，翻訳・通訳，日本語学，日本文学，日本事情などをカリキュラムに組み込むことが求められている。中国の日本語専攻の大学生は，こうしたカリキュラムでの学習を経て，卒業論文を執筆している。つまり，卒業論文は中国の日本語専攻の大学生にとって，日本語学習の集大成と言える。しかしながら，中国の日本語専攻の大学生の卒業論文（以下，「中国の卒業論文」）については様々な問題が指摘されている。そこで，本稿では，言語分野における卒業論文の題目を分析し，中国の大学の日本語学習者の興味関心について明らかにすることで，卒業論文執筆に関する諸問題を解決する一助にしたいと思う。

2．先行研究と本稿の目的

2-1　中国の卒業論文に関する先行研究

中国の卒業論文についての研究にはいくつかの種類がある。まず，卒業論文全体についての研究がある。王（2007）は中国の卒業論文の問題点として，①テーマの問題，②先行研究の問題，③指導体制の問題を挙げている。安・陳（2012）は中国の卒業論文のテーマ選定の問題点として，①日本語学科の教育目標に合致しない，②学術性と独創性の不足，③大きすぎるテーマ，④研究領域が文化，言語，文学の三つに集中していることを指摘している。また，于（2018），林（2022）も，大きすぎるテーマと内容の乏しさを問題点として指摘している。

次に，卒業論文指導についての研究では，楊（2013），大島・陳・山路・因（2016），李（2014）があり，これらの研究では中国の卒業論文の問題点を踏まえ，アカデミック・ライティング指導への提案や示唆を行っている。

最後に，卒業論文のテーマを対象とし，学生の興味関心について分析した研究がある。曽・高（2013）は中国のZ農業大学の132編の卒業論文のキーワードをクラスター分析し，学生が好むテーマとして，小説・漫画・アニメ・映画などの作品分析であると述べている。一方，日本国内では中国の卒業論文のテーマを対象とした研究は管見の限り見られず，高木・田中・小城・太田・阿部・牛田（2011），梶原（2023）などが社会学分野の日本人学部生の卒業論文のテーマを分析している。また，パリハワダナ（2023）は日本語・日本文化研究留学生（日研生）の修了研究テーマを分析しており，分野では日本語，日本社会，日本文化，文学，日本の教育が多かったと述べている。

中国の卒業論文に対する研究は卒業論文全体や指導についてなど，中国国内でも日本国内でも広く行われている。先行研究では，中国の卒業論文の問題点は大きく①テーマの範囲設定，②テーマの偏り，③指導体制の３点に整理できる。特に①テーマの範囲設定の問題では，卒業論文

として扱いきれない広範なテーマを設定し，結果として内容が乏しいものになっているという問題点がある。また，②テーマの偏りでは，特定のテーマが繰り返し選ばれることで，新規性が欠如するという問題に繋がっている。さらに，①と②の原因として③指導体制が考えられる。

2-2　本稿の目的

中国は日本国外で日本語学習者が最も多く，高等教育機関で学ぶ学習者の割合が高い一方で，高等教育機関における日本語学習の集大成とも言える卒業論文についての研究は限定的である。特に，中国の卒業論文のテーマを対象としたものは，卒業論文の全ての分野についての研究が多い。一方，ある特定の分野のみを対象として，日本語専攻の大学生の興味関心について分析したものは管見の限り見られなかった。そこで，本稿では，中国のX大学を事例として取り上げ，X大学の言語分野の卒業論文の題目の分析を行い，以下の 2 点を明らかにする。

①X大学の言語分野の卒業論文において，どのようなテーマが選ばれているか。
②先行研究で指摘されているテーマに関する問題がX大学においても見られるのか。

本稿が言語分野に着目する理由は以下の 2 点である。第一に，《外国语言文学类教学质量国家标准》から，中国の大学には日本語学についての授業が設置されており，卒業論文のテーマを分析することで，カリキュラムとの関連を考察する基盤となる可能性がある。第二に，言語分野は卒業論文のテーマとして多く選ばれているものであり，安・陳（2012）と林（2022）では分析対象とした卒業論文のうち，言語分野は 2 番目に多く，李（2014）では 3 番目に多かった。X大学においても本稿の調査対象とした期間全体においては約19%，最も高い年度では約29%が言語分野の卒業論文であった。本稿は一大学の事例的分析ではあるが，言語分野の卒業論文のテーマ分析を通して，日本語学の授業と卒業論文執筆をより密接なものにし，これまで指摘されてきた中国の卒業論文に関する諸問題を解決するための一助にしたい。

3．調査の概要

本稿ではX大学の日本語専攻に所属した学生が提出した言語分野の卒業論文の題目を対象に，テキストマイニングの手法を用いた分析を行った。

テキストマイニングとは「文章の中から単語を切り出し，各単語の頻度，単語同士のつながりを数値化することにより統計的な分析を行う（岩崎・中西・時岡，2004，p.184）」手法であり，テキストデータを定量的に可視化することが可能である。本稿では，この手法を用いて卒業論文の題目を定量的に分析し，題目内の語句の相互の関係を把握する。これによって，言語分野における学習者の興味関心を明らかにすることができると思われる。

3-1　調査対象

調査対象は2015年から2022年（2021年を除く[1)]）の間に中国のX大学の日本語専攻の大学生が提出した卒業論文である。当該期間提出された卒業論文は全475編であった。X大学では学生が言語，翻訳，文化，文学の中から卒業論文の分野を自主的に選択し，卒業論文のテーマを決定することになっている。このうち言語分野として提出された全89編を対象にその題目を分析した。なお，この卒業論文を提出した89名全員から承諾を得たうえで，調査を行った。

3-2　調査方法

テキストマイニングにはKHCoder（Ver.3.Beta.07c）を用い，以下の手順で分析を行った。まず，対象となる卒業論文の題目をテキストファイル形式に統一し，各題目の改行や句読点などの不要な記号を処理した。次に，KHCoderで前処理を行った。前処理とは形態素解析の分かち書き処理により単語に分解することである。この前処理を行うにあたり，卒業論文のキーワードを参考に強制抽出する語のリスト（計60語）を作成した。リストには通常の処理では適切に抽出されない専門用語や複合語[2)]，人名や作品名や地名などの固有名詞[3)]，題目内の中国語[4)]を含めた。前処理の後，卒業論文の題目で出現した語を抽出し，それらの語がどのような語と関連があるかを分析した。

なお，本稿では「研究」「分析」「考察」「用いる」といった論文執筆そのものを表す語も抽出対象に含めた。これらは厳密には論文のメタ言語であり，研究テーマそのものではないが，「対照研究」「意味分析」のように他の語と共起することでテーマの特徴を表す可能性があるためである。

4．調査結果

抽出された語の総数は1,234語で，異なり語数は392語であった。これらの頻出語のうち，出現回数が3回以上であったものとその出現頻度を表1に示す。

KHCoderを用い，89編の論文の題目において，共起の程度が強い語を線で結んだ共起ネットワークを作成した。作成するにあたり，出現数による語の取捨選択に関して最小出現数を3に設定し，描画する共起関係の選択では描画数を60に設定した[5)]。共起ネットワークでは図内の円の大きさが単語の出現回数を表し，2つの円を結んだ線の太さが共起関係の強さを表している。また，色の塗分けはグループ分けを意味している。

図1を見ると，89編の卒業論文の題目は大きく6つのサブグラフというグループに分けることができる。次節では6つのサブグラフに対し，サブグラフ内のそれぞれの語がどのような共起関係にあるかを確認するために，KHCoderのKWICコンコーダンス[6)]を用いて題目における使用例を確認し，各グループの特徴を分析した。

表１　出現回数３回以上の語と出現頻度

順位	頻出語	頻度
1	日中	30
2	分析	24
3	研究	23
4	中心	17
4	比較	17
6	日本語	16
7	意味	12
8	中国語	10
9	対照	9
9	日本	9
11	広告	8
11	対比	8
11	表現	8
14	キャラクター	7
14	見る	7

順位	頻出語	頻度
14	例	7
17	両言語	6
18	歌詞	5
18	外来語	5
18	使用	5
18	特徴	5
18	役割語	5
23	オノマトペ	4
23	現代	4
23	言語	4
23	語彙	4
23	考察	4
23	対象	4
23	同形語	4
23	用いる	4

順位	頻出語	頻度
23	流行語	4
32	アニメ	3
32	セリフ	3
32	慣用句	3
32	計量言語学	3
32	借用	3
32	手法	3
32	女性	3
32	食品	3
32	中国	3
32	中国人	3
32	日本語学習者	3
32	文体	3
32	母語話者	3
32	類義語	3

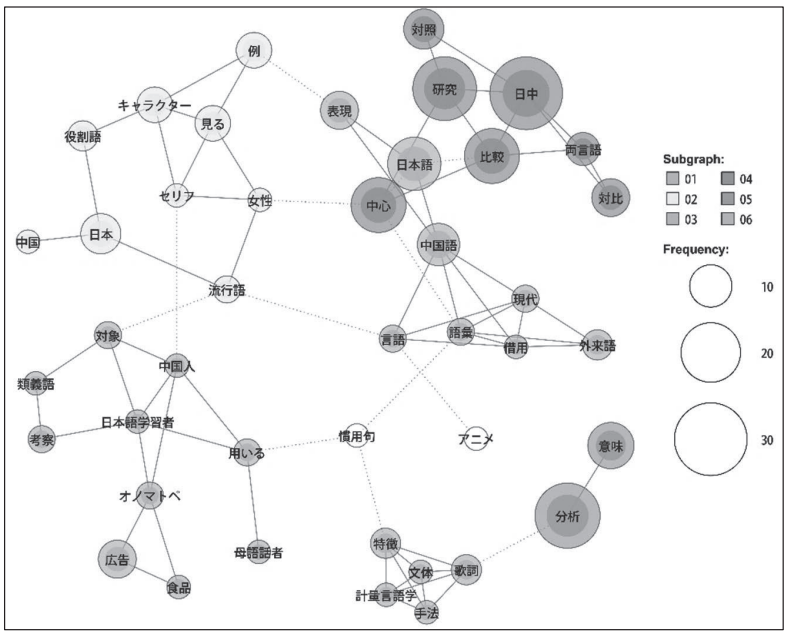


図１　言語分野の卒業論文題目の共起ネットワーク

4-1 「日中」を中心とするグループ

「日中」は出現頻度が最も高い語であった。表２[7]に出現頻度１位「日中」と関連がある語を示す。表の下に卒業論文の題目を示す。「日中」と繋がりが強い語は「比較」「対照」「両言語」であり，ここから，X大学の言語分野の卒業論文では日本語と中国語の対照研究が多いことが分かる。さらに，KWICコンコーダンスから，日本語と中国語の対照研究の対象としては日中同形語のみならず，慣用句，謝罪表現，婉曲表現，語彙の借用，流行語など多岐にわたっている。

表２ 「日中」と関連がある語

N	抽出語	全体	共起	N	抽出語	全体	共起
1	研究	23（0.258）	14（0.483）	7	表現	8 （0.090）	3 （0.103）
2	対照	9 （0.101）	8 （0.276）	8	メタファー	2 （0.022）	2 （0.069）
3	比較	17（0.191）	8 （0.276）	9	呼称	2 （0.022）	2 （0.069）
4	両言語	6 （0.067）	6 （0.207）	10	語彙	4 （0.045）	2 （0.069）
5	対比	8 （0.090）	6 （0.207）	11	用いる	4 （0.045）	2 （0.069）
6	同形語	4 （0.045）	4 （0.138）	12	広告	6 （0.067）	2 （0.069）

・語彙借用における日中言語の比較 ── 現代日本語と現代中国語の両方向の借用を中心に ──（2016年度提出）
・日中同形語「花」の意味分析（2018年度提出）
・日中両言語における慣用句の意味特徴の比較 ── 動物と身体語彙を用いた慣用句を中心に ──（2018年度提出）
・日中同形語“深刻”と「深刻」における対照研究（2019年度提出）

4-2 「日本語」と「中国語」を中心としたグループ

ここでは，出現頻度６位の「日本語」と出現頻度８位の「中国語」を中心としたグループを見る。これらの語は「表現」や「語彙」と共起関係が強く，4-1の「日中」を中心としたグループと合わせて，日本語と中国語の表現や語彙が卒業論文のテーマとして多く選ばれていることが分かる。さらに，KWICコンコーダンスから，日中対照以外に日本語の謝罪表現，反語表現，社交辞令など日本語のみを対象としたものや，広東語・客家語・ビン南語などの中国語の方言と日本語を対照としたテーマも見られた。表３に「日本語」と関連がある語，表４に「中国語」と関連がある語を示す。

表 3 「日本語」と関連のある語

N	抽出語	全体	共起
1	中国語	10（0.112）	8 （0.500）
2	表現	8 （0.090）	4 （0.250）
3	中心	17（0.191）	5 （0.313）
4	比較	17（0.191）	5 （0.313）
5	研究	23（0.258）	5 （0.313）
6	広東語	2 （0.022）	2 （0.125）
7	謝罪	2 （0.022）	2 （0.125）
8	借用	2 （0.022）	2 （0.125）
9	発話	2 （0.022）	2 （0.125）
10	母語話者	2 （0.022）	2 （0.125）
11	外来語	3 （0.034）	2 （0.125）
12	現代	3 （0.034）	2 （0.125）
13	オノマトペ	4 （0.045）	2 （0.125）
14	語彙	4 （0.045）	2 （0.125）
15	対照	9 （0.101）	2 （0.125）

表 4 「中国語」と関連がある語

N	抽出語	全体	共起
1	日本語	16（0.180）	8 （0.800）
2	表現	8 （0.090）	3 （0.300）
3	借用	2 （0.022）	2 （0.200）
4	文化	2 （0.022）	2 （0.200）
5	現代	3 （0.034）	2 （0.200）
6	言語	4 （0.045）	2 （0.200）
7	語彙	4 （0.045）	2 （0.200）
8	中心	17（0.191）	3 （0.300）
9	対照	9 （0.101）	2 （0.200）
10	日本	9 （0.101）	2 （0.200）
11	研究	23（0.258）	3 （0.300）

・中国語と日本語における婉曲表現 ──「好き」を例として ──（2016年度提出）
・日中二重否定表現の対照研究 ── 中国語「不是不」と日本語「なくはない」を中心に ──（2017年度提出）
・日本語・客家語における泣く様子を表すオノマトペの比較 ── 梅県の客家語を中心に ──（2017年度提出）
・日本語間接発話行為における反語表現（2018年度提出）
・日本語の外来語と香港広東語の外来語の対比研究 ── 食に関する外来語を中心に ──（2019年度提出）

4-3 「日本」と「キャラクター」を中心としたグループ

「日本」出現頻度が 9 位であり，「キャラクター」は出現頻度が14位であった。このグループではサブカルチャーとの関連があるテーマが見られた。「日本」は「役割語」と「流行語」と共起関係があり，KWIC コンコーダンスを見ると，日本語の役割語や流行語を中国や中国語と関連させたテーマも見られた。また，「キャラクター」は「セリフ」と共起関係があり，アニメ・ドラマの役割語をテーマとしているものが見られ，表 5 に「日本」，表 6 に「キャラクター」と関連

がある語を示す。

表5 「日本」と関連がある語

N	抽出語	全体	共起
1	中国	3 (0.034)	2 (0.222)
2	流行語	3 (0.034)	2 (0.222)
3	役割語	5 (0.056)	2 (0.222)
4	キャラクター	7 (0.079)	2 (0.222)
5	見る	7 (0.079)	2 (0.222)
6	例	7 (0.079)	2 (0.222)
7	中心	17 (0.191)	3 (0.333)
8	中国語	10 (0.112)	2 (0.222)

表6 「キャラクター」と関連がある語

N	抽出語	全体	共起
1	セリフ	3 (0.034)	3 (0.429)
2	見る	7 (0.079)	4 (0.571)
3	役割語	5 (0.056)	3 (0.429)
4	例	7 (0.079)	2 (0.286)
5	日本	9 (0.101)	2 (0.286)

・流行語から見る日本女性 ── 平成以降の流行語を中心に ──（2016年度）
・日本の反社会的キャラクターの隠語を中心とした役割語（2017年度提出）
・朝ドラのセリフから見た女性キャラクターのことばの中性化 ── 文末表現を中心に ──（2019年度提出）
・イントネーションから見た中国人キャラクターの役割語 ── 日本ドラマでのセリフを例として ──（2020年度提出）

4-4 「広告」と「日本語学習者」を中心としたグループ

出現頻度11位の「広告」と出現頻度32位の「日本語学習者」を中心としたグループを見る。「広告」は「オノマトペ」と「食品」と共起関係があり，KWICコンコーダンスから，食品や化粧品広告のオノマトペを対象としたテーマが見られた。さらに，日本語学習者を対象にオノマトペの広告効果を述べたテーマがあることから，このグループでは「広告」と「日本語学習者」に関連が見られた。「日本語学習者」は「中国人」,「考察」,「対象」と共起関係があり，中国人日本語学習者の文末省略についてや特定の表現の習得難易度についてなどをテーマとしていることがKWICコンコーダンスから分かった。表7に「広告」，表8に「日本語学習者」と関連がある語を示す。

表７ 「広告」と関連がある語

N	抽出語	全体	共起
1	キャッチフレーズ	2 （0.022）	2 （0.333）
2	化粧品	2 （0.022）	2 （0.333）
3	雑誌	2 （0.022）	2 （0.333）
4	食品	2 （0.022）	2 （0.333）
5	オノマトペ	4 （0.045）	2 （0.333）

表８ 「日本語学習者」と関連がある語

N	抽出語	全体	共起
1	中国人	3 （0.034）	2 （0.667）
2	お菓子	1 （0.011）	1 （0.333）
3	効果	1 （0.011）	1 （0.333）
4	習得	1 （0.011）	1 （0.333）

・日中における広告キャッチフレーズの研究 ── 女性雑誌の化粧品広告を中心に ──（2016年度提出）
・食品の広告に使われるオノマトペについて ── 楽天市場における食品広告を資料として ──（2018年度提出）
・お菓子包装に用いられるオノマトペの広告効果 ── 中国人日本語学習者を対象に ──（2022年度提出）
・中国人日本語学習者の「ていく」・「てくる」の習得難易度 ── 母語転移を中心に ──（2022年度提出）

4-5 「分析」と「意味」を中心としたグループ

「分析」は出現頻度が２位，「意味」は出現頻度が７位であった。「分析」は研究手法や観点などを表す語と関連があった。「意味」は日中同形語や日本語の類義語の意味を分析したものがKWICコンコーダンスから見られた。表９に「分析」と関連がある語，表10に「意味」と関連がある語を示す。

表 9 「分析」と関連がある語

N	抽出語	全体	共起
1	意味	12（0.135）	8 （0.348）
2	歌詞	5 （0.056）	4 （0.174）
3	計量言語学	3 （0.034）	3 （0.130）
4	手法	3 （0.034）	3 （0.130）
5	文体	3 （0.034）	3 （0.130）
6	特徴	5 （0.056）	3 （0.130）
7	観点	2 （0.022）	2 （0.087）
8	類義語	3 （0.034）	2 （0.087）
9	見る	7 （0.079）	2 （0.087）

表10 「意味」と関連がある語

N	抽出語	全体	共起
1	分析	23（0.258）	8 （0.667）
2	類義語	3 （0.034）	2 （0.167）
3	同形語	4 （0.045）	2 （0.167）

・「相方」,「相棒」の意味分析（2015年度提出）
・類義語「あく」と「ひらく」の意味分析（2017年度提出）
・分解可能な慣用表現における意味拡張の分析 ── ［手＋格助詞＋述語］からなる慣用表現を対象に ──（2022年度提出）

4-6 「歌詞」を中心としたグループ

最後に，出現頻度18位の「歌詞」を中心としたグループである。「歌詞」は「計量言語学」,「特徴」などと繋がりがあり，KWIC コンコーダンスから計量言語学の手法を用いてある歌手の歌詞を分析したテーマが見られた。表11に「歌詞」と関連がある語を示す。

表11 「歌詞」と関連がある語

N	抽出語	全体	共起
1	計量言語学	3 （0.034）	3 （0.600）
2	手法	3 （0.034）	3 （0.600）
3	文体	3 （0.034）	3 （0.600）
4	特徴	5 （0.056）	3 （0.600）

・中島みゆきの歌詞に関する文体的特徴分析 ── 計量言語学的手法による ──（2016年度提出）
・松任谷由実の歌詞の言語特質に関する分析 ── 修辞学，計量語彙論の観点から ──（2019年度提出）
・米津玄師の歌詞に関する文体的特徴分析 ── 計量言語学的手法による ──（2020年度提出）

5．考察

本稿では，X大学における言語分野の卒業論文題目をテキストマイニングにより分析した。その結果，以下の特徴が明らかになった。

5-1　テーマの傾向

まず，X大学の言語分野の卒業論文では日本語と中国語の対照研究が最も多いことが分かった。パリハワダナ（2023）によると，中国出身の日研生の修了研究テーマは日本語と中国語の対照研究が多い。ここから，中国の日本語学習者にとって日本語と中国語の対照研究は卒業論文などの研究テーマとして好まれるものであると言うことができる。さらに，日中対照研究の中でも日中同形語を対象としたものが多く見られた。これはX大学の日本語学の授業において，日中同形語が重点的に扱われていることが影響した可能性を示唆している。つまり，授業内容と卒業論文のテーマとの間に一定の関連性が存在すると考えられる。

5-2　先行研究で指摘された問題点との比較

X大学では日中同形語を対象としたもの以外にも多様なテーマが見られた。安・陳（2012）と于（2014）では，中国の卒業論文の言語分野でよく選ばれているテーマとして，外来語，女性語，色彩語，曖昧表現が挙げられている。しかし，X大学では外来語が3編，女性語が1編，色彩語が1編，曖昧表現が1編とこれらのテーマを扱ったものは比較的少なかった。さらに，X大学では先行研究とは異なる傾向が見られる。以下に外来語の3編を示す。

・現代中国語における日本語外来語 ── 言語接触による語彙の借用と伝播を中心に ──（2015年度提出）
・日本語の外来語と香港広東語の外来語の対比研究 ── 食に関する外来語を中心に ──（2019年度提出）
・認知言語学から欧米外来語の語義変化の分析（2020年度提出）

これらの3編を見てみると，単独で外来語を扱うのではなく，中国語における日本語外来語，日本語と香港広東語の外来語を対照したもの，認知言語学の枠組みを用いた分析と様々な観点から外来語を扱っている。李（2014），于（2018），林（2022）では新規性に乏しい卒業論文が多いことが指摘されているが，X大学の卒業論文では既に扱われることが多いテーマであっても独自の視点を加え，新規性を確保しようとする姿勢が見られた。

5-3　地域性の影響

X大学では日中対照研究が最も多く選ばれているテーマであったが，日中対照研究の中にも，

日本語と中国語の方言との対照研究も見られた。具体的には広東語，客家語，ビン南語が各２編あった。広東語と客家語は主に広東省，ビン南語は広東省に隣接する福建省で主に話される言語である。X大学は広東省に位置しており，こうした中国語の方言を研究対象として取り上げる背景には地理的要因が関係していると考えられる。

5-4　サブカルチャー関連のテーマ

アニメやドラマの役割語，日本語の歌詞，広告表現をテーマとしたものが一定数見られた。国際交流基金によると「アニメ・マンガ・J-POP・ファッション等への興味」が日本語学習の目的の第１位であった。こうした学生個人のサブカルチャーへの興味関心が卒業論文のテーマを選ぶ際にも影響していると思われる。

６．本稿のまとめと今後の課題

6-1　言語分野の卒業論文題目分析のまとめ

本稿ではX大学の日本語専攻学生の言語分野の卒業論文89編の題目を対象に，テキストマイニングを用いた分析を行い，テーマの傾向とこれまで中国の卒業論文で指摘されてきた問題点がX大学でも見られるかという点を明らかにした。

分析の結果，X大学では日中対照がテーマとして多く選ばれており，特に，日中同形語を対照したものが好まれるという傾向があった。これにはX大学の日本語学の授業が影響を与えた可能性がある。

これに対し，これまでの研究で多いとされていた外来語・女性語・色彩語・曖昧表現といったテーマはX大学ではそれほど多くなかった。また，こうしたものがテーマとして選ばれていても，様々な観点が加えられており，新規性を意識したテーマ選定が行われていた。

さらに，広東省またはその隣接する土地で話されている中国語の方言との対照という地理的要因があると思われるテーマも見られた。さらに，日本語学習のきっかけや目的となることが多い日本のサブカルチャーと関連したテーマも見られた。

日中対照をテーマとしたものが多いことや，中国語の方言との対照が見られることから，X大学では学習者の母語である中国語や方言という学習者自身の言語環境が卒業論文のテーマとして選ばれる傾向にあると言える。また，サブカルチャー関連のテーマが見られることと合わせると，学習者の環境や興味が卒業論文のテーマとして選ばれやすいと言えるだろう。

6-2　今後の課題

本稿はテキストマイニングを用い，89編のX大学の言語分野の卒業論文の題目を分析したが，定量的に分析するにはまだ数が十分とは言えないだろう。さらに多くの卒業論文を分析することにより，テーマの変遷などのより多角的な分析も可能になると思われる。

また，本稿では対象がX大学のみであり，あくまで事例的な分析であった。多くの大学の卒業論文を分析することにより，各大学の卒業論文指導との関連や，卒業論文のテーマと地理的要因についての考察も可能になるだろう。

最後に，X大学の日本語学の授業との関連については本稿では明らかにできなかった。卒業論文のテーマと日本語学の授業で扱われた項目との関連を分析することにより，授業で扱われたものが卒業論文のテーマに選ばれやすいのかを明らかにすることができる。また，卒業論文のテーマとして多く選ばれたものを日本語学の授業で扱うことにより，卒業論文と関連付けた日本語学の授業を行うことができるようにもなる。これらの点は今後の課題としたい。

謝辞

本稿は2024年 3 月16日に開催された中国語話者のための日本語教育研究会の発表内容に基づいています。その席上，先生方から多くのご教示を賜りました。心より感謝申し上げます。また，調査にあたり協力してくださった中国のX大学の学生にも感謝申し上げます。

注

1）2021年は新型コロナウイルス感染拡大期であり，X大学においては卒業論文指導が非常に限定的に行われており，データを収集できなかった。
2）「計量言語学」「役割語」「広東語」など。
3）「ONE PIECE」「松任谷由美」「梅県」など。
4）「貸」「深刻」など。
5）最小出現数を 3 に設定したのは出現頻度が低すぎる語を除外し，一定の傾向として認められる語に焦点を当てるためである。描画する共起関係の数は主要な共起関係を可視化するためである。これらの設定は樋口（2014）を参考に，データ量と分析目的から決定した。
6）KWIC コンコーダンスは特定の語が分析対象の文章の中でどのように使われているかを見ることができる。
7）なお表中のNはJaccard係数に基づいた表示順である。全体はデータ全体で何回出現したかを表し，（ ）内は出現確率である。また，共起はその抽出語と何回共起したかを表し，（ ）内は条件付き確率である（表 2 から表11まで同様）。

参考文献

日本語

⑴ 安静，陳俊森（2012）「中国の大学における卒論テーマ選定の評価基準 ── 日本語学科の卒論タイトルの分析を通して ──」『東洋大学中国哲学文学科紀要』20，98–112.
⑵ 岩崎学，中西寛子，時岡規夫（2004）『実用　統計用語事典』オーム社
⑶ 王健宜（2007）「中国の大学の日本語専攻における問題 ── 卒業論文の指導 ──」『中国21』27，55–64.

⑷ 大島弥生，陳俊森，山路奈保子，因 京子（2016）「中国の大学における卒業論文作成指導の過程からのアカデミック・ジャパニーズ教育への示唆」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』8，28–36.
⑸ 梶原晃（2023）「卒業研究題目の傾向とその変化 ── テキストマイニングによる過去 8 年間の分析 ──」『久留米大学文学部紀要　社会情報科学編』18，37–45.
⑹ 高木修，田中優，小城英子，太田仁，阿部晋吾，牛田好美（2011）「学部学生の興味・関心から見た対人社会心理学研究の変遷 ── 卒業研究のテーマ分析 ──」『関西大学社会学部紀要』42（2），131–153.
⑺ パリハワダナ ルチラ（2023）「修了研究テーマから見た日研生の日本に対する関心事と日本研究へのアプローチ ── 15大学日研生の研究テーマ分析を基に ──」『京都大学国際高等教育院紀要』6，51–70.
⑻ 樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析 ── 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
⑼ 楊秀娥（2013）「アカデミック・ライティングに対する日本語学習者の意味付け ──卒業論文を作成した中国の大学生における日本語専攻生への調査から ──」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 5，46–54.
⑽ 国際交流基金（2022）『海外の日本語教育の現状　2021年度日本語教育機関調査より』https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2021/all.pdf（2024年 3 月13日）

中国語

⑾ 曾志灵，高琴（2013）「农业院校日语专业本科毕业论文关键词的共词聚类分析 ── 基于Z农业大学的数据 ──」『广东农业科学』 8，234–236.
⑿ 教育部高等学校教学指导委员会（2018）《普通高等学校本科专业类教学质量国家标准》高等教育出版社
⒀ 李洁（2014）「应用型本科日语毕业论文选题指导的问题与思考」『日语教学与日本研究』 1，176–183.
⒁ 林杰晓（2022）「浅析高校日语专业毕业论文选题 ── 以N高校2017级及2018级学生选题为例 ──」『教育研究』 4 （22），168-169.
⒂ 于浩洋（2018）「日语专业大学本科毕业论文选题分析 ── 以D大学2011和2012级为例 ──」『明日风尚』，169–170.

資料　X大学の言語分野の卒業論文題目

提出年度	卒業論文題目
15	現代中国語における日本語外来語 ── 言語接触による語彙の借用と伝播を中心に ──
	日本語と中国語における「腹」を含んだ慣用句の比較
	会話における日中両言語の述語省略についての比較研究
	接辞と語基から見る日中両言語の派生語比較
	日中家族呼称の比較
	日中のポリティカル・コレクトネスによる言い換え表現考
	日本語と広東語の忌み言葉における比較研究
	「相方」,「相棒」の意味分析
	映画『東京物語』と『東京家族』における敬語使用の比較 ── 家庭における敬語を中心に──
	会話分析を通じた日本語学習者の文末省略の考察
	日本と中国における絵文字の利用相違
16	日中両言語における雨の呼称比較
	「御」についての日中対比
	中国語と日本語における婉曲表現 ──「好き」を例として ──
	ネコキャラクターの役割語「ニャ」の使用状況の縦断的比較研究
	中島みゆきの歌詞に関する文体的特徴分析 ── 計量言語学的手法による ──
	日中両言語における方位語の対比研究
	広告のキャッチフレーズに関する言語学的分析 ── 資生堂を中心に ──
	語彙借用における日中言語の比較 ── 現代日本語と現代中国語の両方向の借用を中心に ──
	日中における広告キャッチフレーズの研究 ── 女性雑誌の化粧品広告を中心に ──
	アニメ『ゲゲゲの鬼太郎』の役割語研究 ── 植物，自然物，器物の妖怪を中心に ──
	流行語から見る日本女性 ── 平成以降の流行語を中心に ──
	日中の歌における恋愛の認知メタファーの対照
	日中同形語の意味考察 ── 知的財産権諸法を例として ──
	中国語における日本文化に由来する新語・流行語の言語的特徴
17	日本語と中国語における「水」を修飾するオノマトペ対照研究
	日中二重否定表現の対照研究 ── 中国語「不是不」と日本語「なくはない」を中心に ──
	日本語の社交辞令における建前と本音
	日中英三ヶ国語の外交辞令における曖昧表現 ── 日中米三国の外交部門の記者会見記録を例として ──
	日本の反社会的キャラクターの隠語を中心とした役割語
	類義語「あく」と「ひらく」の意味分析
	日常生活における特殊な畳語の使用研究 ──「ABABする」型を例として ──
	類義語の使い分けに関する考察 ──「秘密」と「内緒」を対象に ──
	日中の食品広告における形容詞の比較研究
	日本語における謝罪言葉の使い分け
	セリフから見る『ONE PIECE』キャラクター人気の要因
	日中の歌詞における感情メタファー対照研究
	アニメにおける幽霊キャラクター言語考
	日本語・客家語における泣く様子を表すオノマトペの比較 ── 梅県の客家語を中心に ──
	日本の化粧品広告における比喩の表現 ── 2013～2016年に発行された美容雑誌を例として ──
	日中における役割語研究の現状比較
	複合動詞「～切る」・「～抜く」の意味分析について
18	感謝の場面で用いる謝罪表現 ── 日本語母語話者と中国語母語話者の発話意識から ──
	女性語の古今対比 ── 現代女性語の新しい傾向 ──
	「あいづち」の日中対照研究 ── 形態，機能，頻度から ──

提出年度	卒業論文題目
18	偽中国語と偽日本語の曖昧意味について
	「AはBほどCない」と「BほどDはない」の比較分析
	二人称から見るキャラクターのイメージ分析 ── 『神様はじめました』を例として ──
	日中同形語「花」の意味分析
	断りに用いられる言い訳の日中対照分析
	日本語間接発話行為における反語表現
	新聞における「（さ）せていただく」に付く語彙の使用頻度分析 ──「行動展開表現」と「理解要請表現」の観点から ──
	日中両言語における慣用句の意味特徴の比較 ── 動物と身体語彙を用いた慣用句を中心に ──
	「左右」についての日中対比
	コーパスを活用した類義語「用意，準備と支度」の意味分析
	インターネットにおける新しい句構造「～をよろしくです」について
	食品の広告に使われるオノマトペについて ── 楽天市場における食品広告を資料として ──
19	日中同形語“深刻”と「深刻」における対照研究
	「全然」と「全く」再考 ── 使用場面を中心に ──
	「当たる」と「当てる」の意味分析
	日中同形語「自然」の対比研究
	「借りる・貸す」と“借・貸”の日中対照研究
	日中突発事件に関する標語の研究
	ビリビリ動画における日本アニメソングの中国語空耳分析
	日中における「手」を含んだ慣用語の対照研究
	ガーネットクロウAZUKI七の歌詞に関する文体特徴分析 ── 計量言語学的手法による ──
	「とまる」と「とどまる」の意味分析
	日本語の外来語と香港広東語の外来語の対比研究 ── 食に関する外来語を中心に ──
	松任谷由実の歌詞の言語特質に関する分析 ── 修辞学，計量語彙論の観点から ──
	日本語の［ɸ］のビン南語における存在の実相 ── 口形分析と音響分析から見た ──
	「大丈夫です」と「いいです」の比較 ── 日本語母語話者に対するアンケート調査結果の分析から ──
	日本における「OL」という語の通時的考察
	中国大学生による日系ネットスランク?への受容度調査
	朝ドラのセリフから見た女性キャラクターのことばの中性化 ── 文末表現を中心に ──
	日中における「赤」と「紅」の色彩語対比
20	認知言語学から欧米外来語の語義変化の分析
	日中両言語における程度副詞の対比研究
	同形異義語 ── 中国語と日本語の「玉」における文化意味研究 ──
	米津玄師の歌詞に関する文体的特徴分析 ── 計量言語学的手法による ──
	接尾辞「的」の連体修飾用法
	「ていただく」文の非恩恵的な用法について
	いかに漫才の笑いを理解するか ── 関連性理論と前提理論による分析 ──
	イントネーションから見た中国人キャラクターの役割語 ── 日本ドラマでのセリフを例として ──
22	お菓子包装に用いられるオノマトペの広告効果 ── 中国人日本語学習者を対象に ──
	分解可能な慣用表現における意味拡張の分析 ──［手+格助詞+述語］からなる慣用表現を対象に ──
	中国人日本語学習者の「ていく」·「てくる」の習得難易度 ── 母語転移を中心に ──
	大衆マスコミ分野における日中両国の新語・流行語からみる社会世相 ── 2017年から2021年までを対象に ──
	漢字の作成方法に関する比較研究 ── 和製漢字とビン南方言字を中心に ──
	日本と中国の民族地名の比較研究 ── アイヌ語地名とリー語地名を中心に ──

Akiko SATO, Hiroko ONISHI, Lei YANG, Maria MIYOSHI, Aishwarya SUGANDHI, Masashi HAYASHIDA, Pallavi BHATTE. Development of Language-Specific Aptitude Tests for Measuring Language Proficiency for *ISO13611:2024* Certification (English-Japanese, Russian-Japanese, Portuguese-Japanese, Chinese-Japanese). *Ignis*, Vol. 5, 2025, pp. 113–133.

Development of Language-Specific Aptitude Tests for Measuring Language Proficiency for *ISO 13611:2024* Certification (English-Japanese, Russian-Japanese, Portuguese-Japanese, Chinese-Japanese)

Akiko SATO
Hiroko ONISHI
Lei YANG
Maria MIYOSHI
Aishwarya SUGANDHI
Masashi HAYASHIDA
Pallavi BHATTE

〈Abstract〉

The purpose of this paper is to clarify important considerations in creating aptitude tests with identical content but different languages for four language-Japanese combinations, report on the main activities in 2024, and identify challenges and essential requirements for 2025, which is the final year of research. This research focuses on the training of community interpreters, who play crucial roles in multicultural societies where people with diverse linguistic and cultural backgrounds coexist amid the advancement of globalisation. The joint and collaborative researchers have formed industry-academia partnerships with translation companies specialising in multilingual machine translation systems and proofreading, facilitated through confidentiality agreements. Since 2023, they have been developing and implementing language-specific aptitude tests (English-Japanese, Russian-Japanese, Portuguese-Japanese, and Chinese-Japanese) to measure the language proficiency necessary for obtaining certification under the international standard *ISO 13611:2024 Interpreting services - Community interpreting - Requirements and recommendations (ISO 13611:2024)*." This paper reports on the development and implementation of aptitude tests in 2024. The 2024 research involved creating and implementing test questions that consider the characteristics of each language and analysing results. The research revealed factors such as test takers' native languages, language proficiency in acquired specialised languages, education related to community interpreting, differences in problem text length due to linguistic characteristics, and variations in test time. These findings suggest the need to consider these factors. The importance of comprehensive evaluation, encompassing elements such as understanding cultural background, interpreting

techniques, and ethical judgment, was also confirmed. This report describes the test development, implementation status, result analysis, and future challenges conducted in 2024.

〈要旨〉

本稿は、2024年度における適正テストの作成と実施に関する報告である。特に、内容が同一で言語の異なる 4 カ国語 ── 日本語の組み合わせの適正テスト作成において留意すべき点を明らかにすることを目的とし、2024年度の主な活動内容について報告し、研究の最終年度としている2025年度への課題と必須事項を明示する。本研究では、グローバル化に伴う多文化共生社会において重要な役割を果たすコミュニティ通訳者の育成に焦点を当て、『ISO13611:2024』認証取得に必要な言語運用能力を測定するための言語別適正テスト問題を開発している。英語、ロシア語、ポルトガル語、中国語と日本語の組み合わせでテストを作成・実施し、受検者の母語、言語運用能力、教育背景、言語特性による問題文の長さやテスト時間の相違などを分析した。その結果、文化的背景の理解や通訳技術、倫理的判断力を含めた総合的な評価の重要性が確認された。

Keywords: community interpreting, ISO13611:2024, aptitude test, language proficiency, multicultural coexistence society, linguistic characteristics

Introduction

With the rapid advancement of globalisation, linguistic diversity in Japanese society has been increasing annually. The number of foreign residents exceeded a record high of 3.36 million at the end of 2023 (Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism, 2024). Foreign tourist visitors are also recovering to pre-COVID-19 levels, similar to those in 2019.

With the increase in foreign residents, tourists, and international students, language barriers in accessing public services have become a significant problem, particularly in fields such as healthcare, education, administration, and legal affairs, where the demand for language support is increasing. According to a survey by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology, the number of children requiring Japanese language instruction is also increasing annually, making the need for language support evident in educational settings (Ministry of Education, Culture, Sports, Science, and Technology, 2024). Under these circumstances, the role of community interpreters who serve as bridges between languages has become essential.

Community interpreting is defined as “interpreting that enables people who cannot access public services due to communication barriers arising from using different languages to access such services” (ISO, 2024, p. 2). Community interpreters serve not only as language converters but also as cultural mediators, playing a crucial role in facilitating smooth intercultural communication.

As Sandra Beatriz Hale (2007, pp. 25-26) points out, community interpreting covers various fields, including healthcare, law, administration, and social services, playing an indispensable role in ensuring accessibility for linguistic minorities.

However, the current situation shows that training programs and certification systems for community interpreters in Japan are not sufficiently established. As Keiko Sugisawa (2013, pp. 24-25) points out, informal interpreting by volunteers, family members, and friends who possess language skills but lack professional training is not uncommon, presenting challenges in terms of interpreting quality, accuracy, and ethical considerations. Particularly, efforts to train community interpreters in higher education institutions are limited, requiring systematic approaches (Sato, 2020, pp. 160-161).

Against this background, our research group has been working on developing and implementing community interpreter training programs at Kyoto University of Foreign Studies since 2023. Specifically, the authors are working toward certification based on the International Organization for Standardization (ISO) international standard *ISO 13611:2014 Interpreting - Guidelines for community interpreting* (*ISO 13611:2014*). As part of this effort, we have been developing language-specific aptitude tests to measure the language proficiency necessary for community interpreters.

This research focuses on the significant academic challenges in developing language-specific aptitude tests. Specifically, it centres on the question: "What points should be considered when creating aptitude tests with the same content but different languages for multiple languages?" It is predicted that differences in linguistic characteristics (grammatical structure, writing systems, cultural backgrounds, etc.) will result in variations in problem text length and complexity, thereby affecting test time and difficulty levels. The question of how to design fair and effective aptitude tests while considering such linguistic differences is a significant challenge in test development for multilingual environments (Angelelli, 2009, pp. 13-15).

The 2024 research focused on the development and implementation of aptitude tests for five language pairs: English-Japanese, Russian-Japanese, Portuguese-Japanese, Chinese-Japanese, and French-Japanese. The focus was particularly on creating test questions that consider each language's characteristics and practical challenges, such as time allocation during test implementation and conducting comparative verification between languages.

This report provides an overview of the theoretical background of community interpreting and aptitude tests in Chapter 1. It details the development process and content of the aptitude tests implemented in 2024 in Chapter 2, analyses and discusses the implementation results in Chapter 3, and concludes with findings and prospects. As a result of this research, we concluded that "when problem text length differs due to linguistic characteristics, test time is also affected, requiring

consideration of this factor," and present specific guidelines for developing aptitude tests that consider each language's characteristics. This research will likely contribute to the development of community interpreter training in higher education institutions in Japan.

Chapter 1: Theoretical Background of Community Interpreting and Aptitude Tests

1.1 Definition and Importance of Community Interpreting

Community interpreting is widely recognised as a form of interpreting in public service sectors. *ISO 13611:2024* defines community interpreting as "interpreting that enables people who cannot access public services due to communication barriers arising from using different languages to access such services" (ISO, 2024, p. 2). This definition indicates that the scope of community interpreting is broad, including interpreting support in various daily life situations. Hale explains that community interpreting, also known as public service interpreting or dialogue interpreting, is a general term for interpreting conducted in various fields, including healthcare, administration, law, and social services (Hale, 2007, pp. 25-26). According to ISO and Hale, community interpreting applies not only to permanent foreign residents and immigrants but also to people who temporarily need linguistic support.

Many researchers have emphasised the importance of community interpreting. Makiko Mizuno and Minoru Naito (2018, p. 19) state that community interpreting is essential to work to prevent foreigners and immigrants from suffering various disadvantages. This statement suggests that community interpreting contributes not only to linguistic bridging but also to achieving social justice. Masashi Hayashida (2020, p. 492) notes that the foundation of community interpreting rests on ensuring access to language rights as fundamental human rights. This highlights the possibility that language barriers can lead to human rights violations, emphasising the importance of community interpreting from a fundamental human rights perspective.

Furthermore, Franz Pöchhacker argues that community interpreting is a means to empower interpretation subjects and plays a role in promoting the social participation of linguistic minorities (Pöchhacker, 2004, pp. 162-163). Community interpreting is indeed indispensable for integrating society and achieving multicultural coexistence.

Internationally, ensuring the professionalism and quality of community interpreting is emphasised. The development of *ISO 13611:2014* published in 2014, was part of this effort. This international standard outlines standards and recommendations for community interpreting, as well as requirements for interpreter qualifications and abilities. In 2024, *ISO 13611:2014* was revised and updated as *ISO 13611:2024* (ISO, 2024). This revised version clarifies the requirements and recommendations for community interpreting services, strengthening provisions for quality control and

ethical considerations in interpreting.

In Japan, despite the increasing demand for community interpreting, recognition and establishment of professionalism are not sufficient. Sugisawa (2013, pp. 24-25) notes that community interpreting is sometimes performed informally by volunteers with language skills but lacking professional training or by family members and friends. This situation poses significant problems in terms of interpreting quality, accuracy, and ethical considerations.

Based on the international and Japanese background described above, efforts to train community interpreters in higher education institutions have become important, and this research is positioned as part of such efforts. Establishing certification systems based on the international standard *ISO 13611:2024* is expected to contribute to ensuring the quality of community interpreting by global standards and enhancing the profession's status.

1.2 Abilities Required of Community Interpreters

The abilities required of community interpreters are diverse. Not only language ability but also cultural understanding, ethical judgment, and specialised knowledge are necessary. Regarding language ability, bidirectional language proficiency is required. In community interpreting, it is usually necessary to interpret exchanges between two languages (such as Japanese and English), requiring high comprehension and expression abilities in both languages. Angelelli points out the complexity of interpreter roles in medical interpreting settings. Medical interpreters are not merely language converters but also play a crucial role in bridging cultural gaps between patients and healthcare providers, promoting mutual understanding. To fulfil such complex roles, high levels of cultural sensitivity and medical knowledge are required in addition to language ability (Angelelli, 2009, pp. 13-15).

Community interpreters are also required to have high ethical standards. *ISO 13611:2014* and *ISO 13611:2024* emphasise ethical principles such as confidentiality, neutrality, and accuracy. Particularly in community interpreting, which often targets socially vulnerable or disadvantaged people, these ethical considerations become even more important.

Technical skills, note-taking, memory enhancement, and summarisation techniques are also important. Andrew Gillies states that effective note-taking has a significant impact on the quality of consecutive interpreting (Gillies, 2005, pp. 5-7). In community interpreting settings, it is not uncommon to interpret long conversations or discussions containing specialised content, making these techniques extremely important in practice.

To evaluate these diverse abilities, a comprehensive evaluation approach is necessary that includes not only language ability but also cultural sensitivity, ethical judgment, and practical skills. The following section examines theories and practices of aptitude tests for evaluating such compos-

ite abilities.

1.3 Theory and Practice of Interpreting Aptitude Tests

Interpreting aptitude tests are tools for measuring the abilities necessary for interpreting and evaluating aptitude. In community interpreter training, aptitude tests are used to select trainees and measure the effectiveness of training programs. The theoretical background of interpreting aptitude tests encompasses multifaceted elements, including language proficiency, cognitive ability, and interpersonal communication skills. Pöchhacker points out that in evaluating interpreter abilities, not only equivalence between languages but also understanding the intention and context of utterances is important (Pöchhacker, 2004, pp. 113-115). This is based on the recognition that interpreting is not merely a matter of language conversion but rather the transmission of meaning and intention.

In Japan, the "aptitude test" conducted when Osaka University selected volunteer interpreters for the G20 in 2019 is noted as a pioneering effort in this field. This test measures language proficiency based on CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment) (Hayashida, 2020, pp. 492-493). Hayashida evaluates this test as groundbreaking for comprehensively assessing aptitude as an interpreter, not just language ability. It is particularly characterised by an emphasis on evaluating language proficiency for speaking and cultural sensitivity (Hayashida, 2020, p. 493). In community interpreting, aptitude tests, simulations that mimic actual interpreting situations, and case studies on ethical dilemmas are also important elements. These are effective for measuring response capabilities to situations that interpreters may face in the field.

Interpreter certification systems implemented at multiple universities teaching interpretation studies in the UK and universities teaching interpretation studies in the US incorporate not only language ability tests but also mock interpretation sessions and examinations on ethical judgment. These comprehensive approaches are considered adequate for evaluating the multifaceted abilities necessary as community interpreters (Sato et al., 2022, pp. 46-48).

The aptitude test developed in this research also aims to construct an evaluation system suitable for the Japanese context while referring to such international trends. It is particularly characterised by test design for each language pair considering the characteristics of Japanese and each foreign language (English, Russian, Portuguese, Chinese, French).

1.4 Overview and Significance of ISO 13611:2024

ISO 13611:2014 was established in 2014 as an international standard to ensure the quality of community interpreting, following examination by Subcommittee 5 (SC5) for interpreting and trans-

lation under ISO Technical Committee 37 (TC37), which deals with language and terminology management (ISO, 2014, p. 1). In 2024, this international standard was revised for the first time in 10 years and published as *ISO 13611:2024* (ISO, 2024, p. 1).

The revised version clarifies the requirements and recommendations for community interpreting services, strengthening provisions for quality control and ethical considerations in interpreting. Requirements use the English auxiliary verb "shall," while recommendations use "should." Requirements are more strongly demanded than recommendations in terms of compliance with provisions.

ISO 13611:2024 stipulates the foundations and recommendations for community interpreting and also addresses the requirements for interpreter qualifications and abilities. Particularly regarding interpreter language ability, clear standards are shown in 4.4 as "Competence" (ISO, 2024, pp. 6-8). The aptitude test developed by our research group is positioned as part of efforts toward certification based on this international standard. The significance of this international standard lies in its important role in quality control and establishing professionalism in community interpreting (Sato, 2020, pp. 160-161).

The authors emphasise that introducing internationally applicable standards contributes to improving social recognition and professional status of community interpreting. Uldis Ozolins points out that introducing internationally applicable standards plays a crucial role in quality control and enhancing the professional status of community interpreting (Ozolins, 2010, pp. 19-20). However, he also emphasises the need for a flexible approach according to each country's context, requiring an understanding that an appropriate introduction is necessary in the Japanese context.

ISO 13611:2024 is characterised by detailed stipulations regarding language ability, interpreting techniques, and ethical principles, among other requirements, that are required of community interpreters. It also addresses community interpreting service provision processes and quality control, making it a valuable resource for practical guidance.

The aptitude test developed by our joint research group aims to measure the language proficiency required to meet *ISO 13611:2024* requirements. Notably, since language proficiency equivalent to CEFR B2 level or above is required, the authors designed tests that can measure abilities corresponding to this level. Obtaining certification based on *ISO 13611:2024* is important for ensuring the international applicability and reliability of community interpreters. Through this research, the authors aim to improve the quality of community interpreter training in Japanese higher education institutions and respond to international standardisation.

1.5 Ethical Considerations

This research received approval from the Ethics Review Committee of Kyoto University of

Foreign Studies (Research Ethics Number: 2024-18). The following ethical considerations were taken into account when conducting the research.

First, in implementing aptitude tests, all test takers received sufficient explanations about research purposes, content, and handling of personal information, and participation was requested after obtaining written consent. Maximum consideration was given to protecting test takers' personal information, with thorough anonymisation processing of data. In analysing and publishing test results, statistical processing was performed to ensure individuals could not be identified, and efforts were made to protect privacy. Regarding the publication of research results, explanations were provided to test-takers in advance, and consent was obtained.

Furthermore, ethical considerations were applied to cases and scenarios included in test content due to the nature of community interpreting. Particularly when including content requiring consideration, such as healthcare or law, care was taken not to evoke specific individuals or cases, using fictional situation settings and other devices.

All joint research team members received training on research ethics and were informed about shared response procedures for addressing ethical issues. Pledge documents were exchanged among joint researchers and collaborative researchers, and confidentiality agreements were established with translation companies partnering in proofreading work to ensure the thorough maintenance of confidentiality arising from the research. Regular face-to-face or online meetings were held to confirm research progress and implementation status of ethical considerations.

In 2024, the university's Educational Support Department became the responsible department, establishing a "Community Interpreter Training Program" incorporated into the educational system. Undergraduate students who meet three requirements—passing the aptitude test at A level (CEFR B2 level or above), earning credits through taking "Community Interpreting Special Topics," and completing designated interpreting practical hours—receive *ISO 13611:2024* certification upon graduation. When registering for this program and applying for certification, applicants must submit consent forms regarding the handling of personal information, including names, addresses, language proficiency levels on aptitude tests, and personal histories included in application documents, to the administrative department, which stores them securely.

This research focuses on the development and implementation of tests to measure test takers' language proficiency, with minimal risk of imposing physical or mental burdens on test takers. Furthermore, considering the possibility of psychological stress associated with test implementation, a system was established to receive continuous feedback from test-takers.

As described above, this research was conducted with thorough consideration of the necessary ethical principles for human subject research, paying maximum attention to protecting the rights and dignity of test takers.

Chapter 2: Development and Implementation of Language-Specific Aptitude Tests

2.1 Overview of Aptitude Tests

The aptitude test developed in this research was designed to measure the language proficiency of test-takers aiming for certification based on *ISO 13611:2024*. The test was conducted over 90 minutes and consisted of elements including language proficiency, interpreting techniques, specialised knowledge, intercultural understanding ability, and ethical judgment.

First, regarding language proficiency evaluation, sections for reading comprehension, listening comprehension, writing, and oral expression are included. The purpose is to measure language ability equivalent to or above the CEFR B2 level, with a particular focus on the practical language proficiency required in interpreting settings. For interpreting technique evaluation, quick response (rapid translation) of words and short sentences in a target language-native language combination, as well as long text interpreting (translation) questions of 150-250 words, are provided. These measure technical skills required in actual interpreting situations, testing memory, note-taking ability, information organisation ability, etc.

Regarding specialised knowledge evaluation, questions measuring understanding of basic specialised terminology and concepts in fields such as healthcare, law, and administration are included. Since community interpreters may be required to interpret in various specialised fields, this foundational knowledge is important. For evaluating intercultural understanding, questions are provided that measure understanding of cultural differences and customs. This ability is essential for community interpreters who facilitate communication between individuals with different cultural backgrounds.

Finally, for the evaluation of ethical judgment, case studies on ethical dilemmas that interpreters may face are included. These measure whether judgments can be made based on ethical principles such as confidentiality, neutrality, and accuracy. Five language pair types were established: English-Japanese, Russian-Japanese, Portuguese-Japanese, Chinese-Japanese, and French-Japanese. These languages were selected as major languages established in the university's Faculty of Foreign Studies due to high demand in Japanese society.

For the implementation and test results of the 2024 aptitude tests conducted by language combination, achievements and challenges are attached by language at the end of this joint research report. Regarding test evaluation criteria, "With a total of 100 points (%), S evaluation for 90 points or above, A evaluation for 80 points or above, B evaluation for 70 points or above, C evaluation for 60 points or above, and D 'unqualified' for 59 points or below" was established. Additionally, score differences indicating contextual sensitivity balance (i.e., the balance between target language-to-Japanese and Japanese-to-target language interpreting abilities) were defined as "S

evaluation for 0 to less than 0.25 points, A evaluation for 0.25 to less than 0.5 points, B evaluation for 0.5 to less than 0.75 points, C evaluation for 0.75 to less than 1.0 points, and D 'unqualified' for differences of 1.0 points or more" (Kyoto University of Foreign Studies, 2024).

Thus, this aptitude test is designed to evaluate comprehensive abilities necessary as community interpreters, not just language ability. The following section details the characteristics of test questions for each language pair.

2.2 Characteristics of Language-Specific Test Questions

The aptitude test developed in this research is implemented as one of the requirements for the community interpreter training program, which is constructed to obtain *ISO 13611:2024* certification upon graduation. Therefore, aptitude tests are implemented in combinations of English-Japanese, Chinese-Japanese, Russian-Japanese, and Brazilian Portuguese-Japanese. Languages differ, but the content is the same.

2.3 Differences in Problem Text Length Due to Linguistic Characteristics

In the aptitude test developed in this research, it became clear that differences in problem text length occur due to the characteristics of each language. This is due to differences in expression methods and grammatical structures between languages, posing an important challenge in test design. Differences in problem text length due to linguistic characteristics also affect test implementation time. Even for questions measuring the duplicate content, the length of translation from Japanese to target languages differs by language, resulting in different audio listening comprehension times and note-taking times. Therefore, joint researchers and collaborative researchers aimed to minimise the impact on test time caused by differences in problem text length due to linguistic characteristics. This point needs to be considered as a future challenge.

2.4 Test Implementation Status

Aptitude tests for English-Japanese, Chinese-Japanese, and Russian-Japanese combinations were implemented at arbitrary times by joint researchers in June and July of the spring semester. In the fall semester, tests were implemented on 30 November 2024 for English-Japanese, Chinese-Japanese, and Brazilian Portuguese-Japanese combinations. In the future, it was agreed upon through meetings among department heads, full-time faculty, and joint researchers from the four language departments that tests would be implemented twice a year, once in each spring and fall semester. For 2025, implementation is planned for 31 May (Saturday) and the final Saturday of November, coordinating schedules of each department (Sato et al., 2025, pp. 5–12).

2.5 Implementation Environment and Equipment

Tests were implemented using computer-equipped classrooms with dual monitors available on campus with approval from the university's Educational Support Department for each language-Japanese combination aptitude test. Classrooms were equipped with computer terminals, headsets, and other necessary equipment, creating an environment suitable for implementing aptitude tests that involved listening to quick-response listening comprehension questions and translation problems while taking notes. Classroom capacity was approximately 50 people maximum, allowing sufficient space even when about 20 test takers participated. Appropriate distances were maintained between test takers to prevent them from influencing each other's responses.

Test supervisors consisted of specialised faculty for each language and research collaborators, with department staff also participating in the fall semester to respond to questions and technical problems from test takers. Circulation of tests by supervisors was also conducted to prevent cheating during exams.

2.6 Test Implementation Process

The test implementation process was as follows:

1. **Test Taker Registration (5 minutes)**
   - Identity verification using identification documents
   - Explanation of test overview
   - Signature on consent form on answer sheet
2. **Test Explanation (5 minutes)**
   - Explanation of test format
   - Communication of precautions
3. **Test Implementation (70 minutes)**
   - Questions 1-4 (20 minutes each), each question has Section 1 (Quick Response) and Section 2 (Long text listening comprehension-translation problems) in fields/areas of "Healthcare/Infectious diseases, School education, Judiciary, Administration (Foreign counselling, Disaster volunteering), Intercultural exchange events."
4. **Completion, Questionnaire completion, Note-taking sheet collection, Dismissal (10 minutes)**
   - Information about the following tests and result notifications
   - Q&A session

Overall, approximately 90 minutes were scheduled for implementation. Particularly, sufficient explanation time before tests was secured, allowing test takers to become familiar with the test formats and respond smoothly.

2.7 Challenges and Responses in Test Implementation

During test implementation, several unexpected challenges were encountered. These challenges can be broadly categorised into four categories: technical problems, time management, language characteristic issues, and test-taker stress management. The following details each challenge and corresponding responses.

First, regarding technical issues, audio playback problems occurred on some computer terminals during the test implementation. This was mainly due to headset connection failures and driver compatibility issues. This problem was addressed by promptly providing prepared backup headsets. When terminal malfunctions were observed, test takers were immediately moved to different computers. A system was established to maintain constant contact with specialised technical staff, preparing for potential technical issues and ensuring that problems could be resolved promptly.

Next, time management challenges became apparent. Particularly in Section 2, significant differences in test takers' response speeds were observed depending on problem fields. In specialised fields such as healthcare and law, many test-takers experienced time shortages. This challenge was addressed by clearly noting the time allocation for each section at the upper right of the question sheets before the test started, with supervisors providing clear oral instructions. Furthermore, regular time announcements, such as "5 minutes remaining," were made so that test-takers could be aware of their time allocation.

The third challenge involved problems arising from linguistic characteristics. It became clear that differences in sentence length and the time required for listening comprehension, as influenced by language, affected the overall test duration. For example, Japanese and English differ in sentence structure and vocabulary density, requiring different amounts of time to express the duplicate content. This problem was addressed flexibly during tests, with supervisors manually advancing to the next page after confirming that all test takers had finished their responses.

Conversely, for test takers requiring more time to respond, the remaining time was communicated, along with encouragement to complete their responses within the time limit. For future test design, the necessity of adjusting question numbers and difficulty levels to consider each language's characteristics was recognised so that overall response times would be approximately equal.

Finally, test-taker stress management became a significant psychological challenge. Particularly among students taking aptitude tests for the first time, many felt strong tension and stress due to unfamiliar test formats and time constraints. This problem was addressed by providing sufficient explanation time before the test started and carefully explaining test purposes and formats to reduce anxiety. Environmental adjustments, such as room temperature and lighting, were also made to create test environments as comfortable as possible. Furthermore, supervisors

aimed to create a relaxed atmosphere so that test takers could work calmly, avoiding intimidating attitudes.

These challenges and responses provided valuable experiences during the test implementation. Particularly regarding the relationship between problem text length differences due to linguistic characteristics and test time, continuous examination and adjustment are necessary to ensure fairness between languages. For future test implementations, the authors aim to construct smoother and fairer test environments utilising this experience. The authors also plan multifaceted improvements, including further strengthening backup systems for technical problems and enhancing support systems to reduce test-taker stress.

Chapter 3: Analysis and Discussion of Test Results

As mentioned in the previous chapter, the implementation and test results, achievements, and challenges of the 2024 aptitude tests, organised by language combination, English and Japanese, and Chinese and Japanese, are attached by language at the end of this paper

3.1 Interesting Trends and Discoveries

Through the analysis of aptitude test results, several interesting trends and discoveries emerged. These provide insights that are helpful in improving community interpreter training programs and the development of future aptitude tests.

3.2 Understanding Cultural Backgrounds

Regarding problems in understanding cultural backgrounds, students without study abroad experience did not necessarily achieve low scores; cases were observed where students who had accumulated multicultural exchange experiences within Japan achieved excellent results. For example, students who actively participate in international exchange events and volunteer activities within Japan tend to exhibit high cultural sensitivity. This suggests that the abilities necessary for community interpreters depend not only on language ability and study abroad experience but also significantly on exchange experiences and communication skills with people from diverse cultural backgrounds.

3.3 Importance of Interpreting Techniques

Even test takers with high language ability tended to struggle with consecutive interpreting tests when lacking note-taking and memory skills. Particularly in specialised fields and areas, such as healthcare, infectious diseases, and law (including taxes and insurance), these skills were essen-

tial, in addition to understanding specialised terminology, requiring information organisation and accurate reproduction abilities. Significant point losses resulted when these skills were insufficient.

As Gillies points out, effective note-taking has a significant impact on the quality of consecutive interpreting (Gillies, 2005, pp. 5-7). The current results also suggested the importance of systematic training in interpreting techniques.

3.4 Importance of Bidirectionality

A particularly noteworthy trend was the variation in the balance between specific language-to-Japanese interpreting ability and Japanese-to-specific language interpreting ability among test-takers. Comprehensive statistical analysis across both English and Chinese versions revealed significant patterns in bidirectional language proficiency.

In the English version aptitude test (n = 23), all test-takers demonstrated strong, balanced bidirectional proficiency, with 100% achieving an A-level or above evaluation in contextual sensitivity balance (the difference between target language-to-Japanese and Japanese-to-target language interpreting abilities). Specifically, all 23 test-takers showed score differences of less than 0.5 points between the two directions. Among the seven successful A-level candidates, 100% achieved S-level balance (score difference less than 0.25 points), while remarkably, all 16 unsuccessful candidates also maintained A-level or above balance ability.

The Chinese version (n = 41 test attempts, 38 individuals) presented contrasting results. Among the 21 successful candidates, 75% (n = 16) demonstrated A-level or above balance ability: 57% (12 candidates) achieved S-level balance, and 14% (3 candidates) achieved A-level balance. However, among the 20 unsuccessful candidates, only 38% (n = 8) achieved A-level or above balance, revealing a significant correlation between balanced bidirectional proficiency and overall test success.

Cross-language comparison revealed that many test-takers excelled at translating from specific languages into Japanese but struggled with Japanese-to-target language translation. For example, in the Chinese version, successful candidates showed an average score difference of 8.3 points between directions, while unsuccessful candidates exhibited an average difference of 15.7 points. This 7.4-point differential suggests that balanced bidirectional competence significantly contributes to overall aptitude test performance.

In language learning, the balance between “comprehension” (receptive ability) and “production” (productive ability) is crucial. Since community interpreting requires bidirectional interpreting ability, educational programs should particularly strengthen productive competence—the ability to translate from the native language to the target language. Conversely, comparing A-level passers with those who failed at B, C, and D levels, a phenomenon was observed where students had

balanced abilities but insufficient overall language proficiency. For test-takers seeking to improve their language proficiency, comprehensive educational opportunities are needed to raise both overall competence levels and maintain bidirectional balance.

3.5 Stress Tolerance

Significant differences were observed between performance under test conditions and high scores on regular language ability measurement tests (e.g., TOEIC, HSK) among some test takers. This suggests that concentration and judgment under stress are important abilities for interpreters. In actual interpreting settings, various stress factors, including tension, time constraints, and unexpected situations, are present, and interpreters must be able to cope with these effectively. Further research is needed on the relationship between performance in test environments and actual interpreting ability.

3.6 Challenges and Improvements in Language-Specific Test Implementation

Achievements and challenges in implementing aptitude tests by language- Japanese combinations are attached by language at the end of this joint research report. Please refer to them.

Conclusion

This research reports on the development and implementation of language-specific aptitude tests for measuring language proficiency, an important element in community interpreter training. Specifically, we reported on the development and implementation of aptitude tests, result analysis, and reporting for five language combinations, English-Japanese, Russian-Japanese, Portuguese-Japanese, and Chinese-Japanese, to obtain *ISO 13611:2024* certification.

A significant finding of the research is that differences in problem text length due to linguistic characteristics affect test time, suggesting the need for consideration of this factor. Differences in grammatical structures and writing systems of each language mean that even when expressing duplicate content, problem text length and complexity differ, potentially affecting test response time. It also became clear through the implementation of community interpreting classes and the provision of practical experience that evaluating multifaceted elements, including not only language ability but also cultural understanding, interpreting techniques, and ethical judgment, is important for the abilities necessary for community interpreters. Specifically, understanding cultural backgrounds, bidirectional language proficiency, and stress tolerance were suggested to be significantly related to students' aptitude as interpreters.

Future challenges include the continuous improvement of aptitude tests, online test develop-

ment, the utilisation of AI technology, long-term follow-up studies, and expanding multilingual support. By addressing these challenges, the authors aim to develop more accurate aptitude evaluation systems and enhance the quality of community interpreter training programs. The authors aim to utilise the results of this research to develop community interpreter training programs in Japanese higher education institutions while also contributing to international standardisation. Particularly, the authors would be pleased to contribute to improving the quality of community interpreting and social recognition by establishing and promoting certification systems based on *ISO 13611:2024*.

This research is one effort toward realising multicultural coexistence societies, playing an important role in promoting mutual understanding and coexistence beyond language barriers. Community interpreters serve not merely as language converters but also as cultural mediators facilitating smooth intercultural communication. The authors hope this research can contribute to training community interpreters who play such important roles.

Acknowledgements

This research was conducted using the research fund for educational methods and educational contents from the International Research Institute for Studies in Language and Peace of Kyoto University of Foreign Studies. Along with gratitude to the institute and researchers, the authors express heartfelt thanks to chairs of the department British and American Studies, department of Brazilian Portuguese, department of Chinese, and department of Russian, and deans of the faculty of Foreign Studies and the faculty of Global Engagement who cooperated in implementing the aptitude tests; staff members of the division of Academic Affairs who devoted efforts to establishing the Community Interpreting Program; staff members of the division of Division for Coordination of Planning and Implementation and Language Center who cooperated in interpreting practice; all faculty and staff members who cooperated in this research; and external personnel including the Kyoto City International Foundation with which the university has concluded the agreement.

Addendum

Regarding the academic development of community interpreting at Kyoto University of Foreign Studies, papers and research reports on community interpreting have been written from 2023 to 2025. Papers and reports for each year differ in academic challenges, article purposes, and authors. Individual researchers, collaborative researchers, and authors have further developed knowledge about various fields, areas, and ethical interpretations related to community interpreting.

References

Angelelli, C. V. (2009). Using a rubric to assess translation ability: Defining the construct. In C. V. Angelelli & H. E. Jacobson (Eds.), *Testing and assessment in translation and interpreting studies* (pp. 13–47). John Benjamins Publishing Company.

Gillies, A. (2005). *Note-taking for consecutive interpreting: A short course*. St. Jerome Publishing.

Hale, S. B. (2007). *Community interpreting*. Palgrave Macmillan.

Hayashida, M. (2020). Reconsidering "health" in the era of 21st century globalisation. *Journal of Public Health Practice*, 84(8), 492–493.

International Organization for Standardization. (2014). *ISO 13611:2014 Interpreting – Guidelines for community interpreting*. ISO.

International Organization for Standardization. (2024). *ISO 13611:2024 Interpreting services - Community interpreting - Requirements and recommendations*. ISO.

Kyoto University of Foreign Studies. (2024). *Community interpreter training program guidelines*. Kyoto University of Foreign Studies.

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. (2024). *Results of the survey on the acceptance status of school-age children requiring Japanese language instruction in 2023*. https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt_kyokoku-000037366_4.pdf

Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism. (2025). *Number of foreign visitors to Japan and Japanese departing Japan*. https://www.mlit.go.jp/kankocho/tokei_hakusyo/shutsunyukokushasu.html

Mizuno, M., & Naito, M. (2018). *Community interpreting: Communication in multicultural coexistence society*. Misuzu Shobo.

Ozolins, U. (2010). Factors that determine the provision of public service interpreting: Comparative perspectives on government motivation and language service implementation. *Journal of Specialized Translation*, 14, 194–215.

Pöchhacker, F. (2004). *Introducing interpreting studies*. Routledge.

Sato, A. (2020). Considerations on MLE programs and ISO international standards for specialised interpreting and translation services. *Frontiers in Foreign Language Education*, 3, 160–161.

Sato, A., Komori, M., & Hayashida, M. (2022). Considerations on certification conferral by higher education institutions and implementation of aptitude tests measuring language proficiency: From the perspective of "ISO 13611:2014 Interpreting | Guidelines for community interpreting." *Osaka University of Tourism Research Review*, 22, 43–50.

Sato, A., Onishi, H., Yang, L., Miyoshi, M., & Sugandhi, A. (2025). Community interpreter training in Japanese higher education: Implementation of language-specific aptitude tests for ISO 13611:2024 certification—2024 joint research report and practical materials (M. Hayashida, Supervisor&Editor; P. Bhatte, Collaborator). The University of Osaka Institutional Knowledge Archive (OUKA). https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Sugisawa, K. (2013). The role of community interpreting in problem-solving and efforts to develop professionalism. In *The role and professionalism of community interpreting in "consecutive interpreting"* (pp. 1–30). Tokyo University of Foreign Studies.

Appendix

2024 Implementation Report: ISO Community Interpreting Certification Language Check "Aptitude Test" English and Chinese Versions

1. Implementation Overview

In 2024, Kyoto University of Foreign Studies introduced aptitude tests in English and Chinese versions as part of the Community Interpreter Training Program, aiming to obtain certification under *ISO 13611:2024*. This report provides a comprehensive examination of the implementation status, result analysis, and future challenges for both languages.

1.1 Implementation Status and Pass Rate Comparison

The English version aptitude test was administered twice, on 24 July and 30 November, with 23 test takers and seven successful candidates, yielding a pass rate of 30.4%. In contrast, the Chinese version of the aptitude test was administered twice, on 26 June and 30 November, with 41 test takers (38 actual individuals) participating and 21 candidates successfully passing, resulting in a pass rate of 51%. The Chinese version's pass rate exceeded that of the English version by approximately 20 percentage points, primarily due to differences in the linguistic backgrounds of the test takers.

About 90% of Chinese version test takers were students of Chinese heritage, including "bilingual speakers" who had used Chinese as their home language. The exceptionally high pass rate of 70% among second-year students was attributed to the high proportion of such bilingual speakers. In contrast, the English version showed the highest pass rate of 60% among fourth-year students, demonstrating a trend in which specialised knowledge and language proficiency improvements were reflected in pass rates as students advanced in grade level.

1.2 Grade-Level Analysis of Test Takers

Comparing the grade-level pass rates between both languages reveals different trends. In the English version, there was a clear improvement in pass rates as grade levels increased: 0% for second-year students, 8% for third-year students, and 60% for fourth-year students. Notably, 5 out of 6 fourth-year students who took "Community Interpreting Special Topics" passed, demonstrating the pronounced effect of specialised education.

In the Chinese version, the distribution was as follows: 43% for first-year students, 70% for second-year students, 40% for third-year students, and 46% for fourth-year students, with second-year students showing the highest pass rate. As mentioned earlier, this was due to the high concentration of bilingual speakers in the second year. However, students achieving the highest SS evaluation were limited to those in the third year and above, suggesting that acquiring advanced language

proficiency requires a specific period of study.

2. Test Structure and Evaluation System

2.1 Test Format Improvements

The 2024 aptitude tests were improved from Version 0, used at Osaka University of Tourism, to Version 1 and Version 2, which were adapted to the educational content of Kyoto University of Foreign Studies. Significant changes included the introduction of recorded audio for each section, standardisation of question numbers (Section 1: 10 questions, Section 2: 20 questions), and equalisation of time limits (Section 1: 3 minutes, Section 2: 9 minutes).

These improvements reduced the overall test implementation time from 68 minutes and 30 seconds to 48 minutes, enabling reduced burden on test takers and maintained concentration. Additionally, the introduction of audio questions made it possible to measure the quick response abilities required in interpreting settings.

2.2 Enhanced Practical Content

Test content was specialised into five fields and six domains: healthcare/infectious diseases, school education, judiciary, administration (foreign counselling, disaster volunteering), and intercultural exchange, based on consultation areas from the Kyoto International Community House's foreign counselling days, with which Kyoto University of Foreign Studies has partnership agreements. This made it possible to evaluate the specialised knowledge and vocabulary required as community interpreters.

3. Evaluation Criteria and Language Proficiency Report Cards

3.1 Emphasis on Contextual Sensitivity

The most significant characteristic of this aptitude test is its measurement of the balance of bidirectional language proficiency, in addition to overall score evaluation. The score difference between English-to-Japanese translation ability and Japanese-to-English translation ability is evaluated as "Contextual Sensitivity," with scores of 0 to less than 0.25 points receiving an S evaluation and scores of 0.25 to less than 0.5 points receiving an A evaluation in a graduated assessment system.

Interestingly, all 23 test-takers in the English version achieved A-level or above evaluation in balance ability. This demonstrates that the university's English education has achieved specific results in fostering bidirectional language proficiency. In contrast, in the Chinese version, 75% of successful candidates possessed A-level or above balance ability, while only 38% of unsuccessful candidates achieved this level.

3.2 Feedback Through Language Proficiency Report Cards

Under the supervision of Professor Emeritus Masashi Hayashida of Osaka University, who serves as an ISO Community Interpreting Certification Language Proficiency Examiner, "Language Proficiency Report Cards" were introduced. These cards include overall scores, CEFR evaluations, score rates for each problem section, and bidirectional language proficiency balance evaluations, establishing a system that allows test-takers to understand their strengths and weaknesses objectively.

4. Implementation Results and Findings

4.1 Effects of Specialized Education

The high pass rates among students who took "Community Interpreting Study" clearly demonstrate the importance of specialised education. In the English version, 6 out of 7 successful candidates, and in the Chinese version, all fourth-year successful candidates were enrolled in this course. This demonstrates that acquiring specialised knowledge and vocabulary specific to community interpreting directly contributes to success on aptitude tests.

4.2 Impact of Linguistic Background

Results from the Chinese version revealed that test takers' linguistic backgrounds significantly influence pass rates. However, even bilingual speakers did not achieve passing scores if they lacked sufficient balance in bidirectional language proficiency, suggesting that acquiring interpreting techniques, not just language ability, is crucial for success.

4.3 Effects of Test Format Improvements

The introduction of audio questions and time reduction enabled more practical and efficient evaluation. Particularly, measuring quick response ability has become an important indicator for evaluating the responsiveness required in actual interpreting settings.

5. Future Challenges and Improvement Strategies

5.1 Educational Intervention for Improving Pass Rates

The English version's pass rate of 30.4% has room for improvement, particularly requiring enhanced specialised education from lower grade levels. Consideration should be given to providing portions of "Community Interpreting Study" content to lower-grade students, expanding opportunities for early specialised knowledge acquisition.

5.2 Strengthening Bidirectional Language Proficiency

Analysis of the Chinese version revealed that many test takers who had reached a certain level of language ability still lacked sufficient balance in bidirectional language proficiency. To address this challenge, promoting scribing training (techniques for summarising and expressing conversation content) and systematic acquisition of interpreting terminology is important.

5.3 Educational Material Development and Learning Environment Enhancement

Developing bilingual textbooks that enable self-study acquisition of specialised knowledge in the diverse fields where community interpreting is required (healthcare, education, administration, judiciary, intercultural exchange) is urgent. Creating practical materials that incorporate SDG-related content will provide learning opportunities that supplement specialised courses with enrolment restrictions, thereby enhancing the learning experience.

5.4 Continuous Updates to Test Content

Regular updates to test content are required to respond to social changes. Continuous updates reflecting current needs, such as changes in medical interpreting settings following the COVID-19 pandemic, must be maintained to ensure relevance and accuracy.

6. Conclusion

The implementation of English and Chinese version aptitude tests in 2024 established the foundation for the Community Interpreter Program at our university. Valuable insights were gained regarding the effects of specialised education, the importance of bidirectional language proficiency evaluation, and the impact of test-takers' linguistic backgrounds.

Moving forward, the authors will refine our educational programs based on these results and aim to develop a comprehensive multilingual community interpreter training system by sequentially implementing aptitude tests in Russian, Brazilian Portuguese, and Spanish versions. By obtaining *ISO 13611:2024* certification, the authors aim to provide high-quality community interpreters by international standards, thereby contributing to the realisation of a multicultural coexistence society.

ヨーゼフ・ヴィッキ著，ルイス・フロイス『日本史』[1] イントロダクション（抄訳）

（訳者）伊　藤　秋　仁[2]
呉　座　勇　一[3]
フェリッペ・モッタ[4]

解題

新訳プロジェクト

京都外国語大学名誉教授である故・松田毅一先生と同じく故・川崎桃太先生は，1977年にフロイスの『日本史』の第１巻（豊臣秀吉編１）を翻訳された。全12巻の刊行を終えるのが1980年である。両氏は中公新書より1973年に『回想の織田信長　フロイスの「日本史」より』を，同じく1974年に『秀吉と文禄の役　フロイス「日本史」より』を出版しており，それに先立つ何年かをフロイスの翻訳・研究に捧げられていたものと推測する。おおよそ50年ほど前のことである。1921年生まれの松田が50代，1915年生まれの川崎が50代後半から60代に差し掛かるころの時期である。

『日本史』第１巻の訳者序文で二人は連名で次のように書いている。

> （…）吾人は率直に言って本書を完訳できるかどうかについて確信を持つことができない。この訳注本を完結する日まで，両人の健康が維持されるという保証はないからである。原著者が十数年の間，執筆し続けた厖大な記録をすべて写本から解読し，訳出し，十分な学注を付するのに相当な期間を必要とすることはご賢察いただけるだろう[5]。

2024年４月，伊藤とモッタが所属する京都外国語大学とポルトガル共和国の言語と文化を促進する重要な機関であるカモインス院（Camões – Instituto da Cooperação e da Língua, I.P.）との間で，日本初となるポルトガル研究の学術講座を設置する協定書が調印された。同講座はそれぞれの国に関りのあるポルトガル人の名を冠することになっており，本講座には奇しくもルイス・フロイスの名が採択された。そして同年12月，同講座と京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター主催の学術シンポジウム「ルイス・フロイスとラテンアメリカの宣教師たち」が開催され，呉座が基調講演[6]，モッタは発表者，伊藤が司会ならびにパネルディスカッションのモデレーターを務めた。パネルディスカッションの中で，松田・川崎訳のフロイスの『日本史』が発行されて

からおよそ50年経った今，新訳の可能性があるやなしやについて議論[7]になった。

松田は歴史学者であり，ポルトガル語には，ある程度通じていたであろうが，手稿の文字の解読や16世紀のポルトガル語の古文書を理解するに，大きな障壁が立ち塞がっていたことは想像に難くない。『日本史』は一部が活字化され，ドイツ語訳などが存在していたものの，ほとんどが活字化されない手書きの写本のままであった[8]。一方，川崎は1930年にブラジルに渡り，1955年に帰国するまで，カトリック大学や大学院で学んだことから，ポルトガル語は無論，ラテン語も堪能であり，ポルトガル語の古文書を解読する能力を有していた。当然のことながらカトリック（イエズス会）の制度にも精通していたが，日本史については専門外である。このような二人が双方の弱点を補い，強みを生かすことで，フロイスの『日本史』の訳出という偉業を成し遂げた。当時，二人が京都外国語大学に在職し，同じベクトルを持ち，ケミストリーが合ったという奇跡の結晶とも言える。

本新訳プロジェクトに当たり，ポルトガル語や歴史を専門とする伊藤，モッタに加えて，日本史を専門とする呉座が加わった。伊藤は当時の川崎や松田と同年代だが，呉座とモッタはずいぶん若い。現在，『日本史』は全巻がポルトガル語で活字化されている。加えてコンピューターネットワークにより，情報や資料の入手のための労力も，かつて二人が翻訳した時代に比べれば桁違いに少なくて済む。壮大すぎるほどのプロジェクトであり，訳者の力不足も明らかではあるけれども，不可能とまでは言えない。実現のための条件はある程度までは整っていると判断した。

松田・川崎訳『日本史』出版の衝撃

フロイスの『日本史』の重要性は論を俟たない。ヴィッキの手なる本イントロダクションでも，ヨーロッパにおける『日本史』の出版への期待が述べられているけれども，その期待の度合いは，おそらくは日本のほうが遥かに高かった。『日本史』の存在は日本でもすでに知られていて，キリシタン史・宗教史の研究者[9]のみならず，戦国時代研究者・日本近世史学者から比較文明論の専門家に至るまで，その発表を心待ちにした。『日本史』の翻訳書が出版されるや否や，大きな反響を呼んだのは言うまでもない。同書は，信長や秀吉の人物像に多くの紙幅を割くなど，布教とは直接に関係ない「脱線的」な内容のほか，当時の日本の風俗，文化，芸術，政治，宗教が外国人の目で率直に語られており，貴重な一次資料としての価値が再認識された[10]。

一方で，「一般に異邦人の観察記には先入観や偏見が混じることがしばしばあり，フロイスの『日本史』も例外ではない。フロイスの記述は伝聞情報，噂に基づくものも多く，またフロイス自身，脚色を好んだ節が見られる」[11]。『日本史』の日本語版の出版後，年月を重ねる中で，様々な批判や検証が重ねられてきている。とくに日本の歴史的な事実に関しては，日本側の史料と突き合わせることで齟齬が指摘されたり，また反対にその内容の整合性が証明されることもあった。

ヨーゼフ・ヴィッキ編『日本史』と松田・川崎訳『日本史』の邂逅

『日本史』の復刻は，日本の研究者のみならず，ポルトガルの関係者にとっても悲願であった。その実現に向けて，ヴィッキと松田・川崎は，志を同じくしていたようである。しかし，細かな事情はわからぬものの，その後，両者は完全に袂を分かつ。松田・川崎は『日本史』の復刻に関するヨーロッパのイニシアティブについて，次のように記している。

> （…）「日本史」は，戦国末期から織豊時代の日本に関する記述から成り，かつ日本語の名称，ことに日本の地名・人名がおびただしく現れることと，既述のようにポルトガル語のテキストが難解であることも併せ考えるならば，日欧の史家が協力して，まず覆刻版を出し，ついで邦訳するのが望ましく思われた。訳者はそれを期待して来たし，またそうした話もなくはなかったが，具体化せぬまま今に至ったのである。西欧において「日本史」の全覆刻版が刊行されることを耳にしてすでに久しいが，いまだに刊行されぬので，訳者両名は協議し，いずれ原語版が世に出ることを期待しつつ開板することにした次第である[12]。

一方，ヴィッキは名指しこそ避けてはいるが，二人の日本の専門家の非協力的な態度を批判すると同時に，作業の進展の遅れについて弁明している。

> （…）海外領歴史研究センターの所長のシルヴァ・レゴ博士の勧めもあり，我々はフロイスの『日本史』の出版の準備を決意した。そのため，歴史家で16世紀の日本のカトリックの布教に精通する日本の二人の，言語的側面ならびに日本の史料についての歴史的な解明についての助力の約束を当てにした。しかし彼らは約束をしたにもかかわらず，我々に力を貸すことは一切なかった。加えて，リスボンの国立図書館に保管されている３つの写本のコピーがなかった[13]。それらは本作の出版に不可欠であり，それなしでは科学的で完全な作品になりえなかった[14]。

このようにヴィッキの復刻と，松田・川崎の翻訳のプロジェクトはパラレルに行われることとなった。ヴィッキの復刻版は全５巻で，第１巻が1976年，第２巻が1981年，第３巻が1982年，第４巻は1983年，第５巻は1984年に刊行された。準備期間に差があるとは言え[15]，松田・川崎に比べれば，ずいぶん時間がかかっている。また松田・川崎が，『日本史』を年代順に翻訳せず，「史学界と読書界においてもっとも訳出が要望されている部分」[16]を，第二部と第三部の中から抜粋し「豊臣秀吉篇」として刊行を始めていることから，ヴィッキの復刻と松田・川崎の手稿の解読と翻訳の作業の期間は内容的に重なっておらず，それぞれが独自に行ったものと思われる。松田・川崎の前のめりぶりに比べるとヴィッキの作業は何とも悠長に見える。

一方，このような時間的なすれ違いから，おそらくは松田・川崎は，ヴィッキの復刻をほとん

ど参照していなかったのではないかと思われる。ヴィッキのほうは松田・川崎の翻訳を参照できた可能性がある。ヴィッキが行った復刻ならびに付された校異注などが，松田・川崎の翻訳に反映されていないのであれば，新訳ではそれを参考にすることができる。そのことによって新たな解釈や相違点の指摘が可能になると思われる。松田・川崎も次のように述べている。

> いずれ覆刻されるはずの原文のテキストには，ローマ・イエズス会士学研究所所員が，欧文献をもって豊富な注釈を加えることが当然予想されるに鑑み，私たちの邦文版においては，主として日本側の古文書や文献，また史家の研究成果に基づく学注を付し，フロイスの記事と照合することに重点を置いた。「日本史」の本訳は日本史家に史料として提示されるべき性質のものであるから，注記はどこまでも参考に留まるものであり，史実としての確認は今後の研究に俟たねばならぬことが多い[17]。

ヴィッキの『日本史』のイントロダクションからも，松田・川崎の解釈や事実認定との違いが散見される。松田・川崎の『日本史』翻訳という偉業に対し，散発的な検証などが試みられているが，後進はフロイスと松田・川崎のあまりに大きなエネルギーに太刀打ちできないでいる。訳者一同は，完遂できるかはなはだ不明ではあるけれども，ヴィッキ編の『日本史』翻訳というはるか遠い到達点に向かって第一歩を踏み出すことにした。

本訳書の翻訳権取得にあたり，ポルトガルの国立文化機関であるカモンイス院（Camões, Instituto da Cooperação e da Língua, I.P.）のご支援を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

イントロダクション[18]

ヨーゼフ・ヴィッキ

日本学の父，ルイス・フロイス神父の『日本史』を，巡察師A.ヴァリニャーノ神父は気に入らなかった。冗漫すぎると思ったからである。ヴァリニャーノは，自身が『インド史』で行ったような総論を望んでいたのだ。結果として，フロイスの著作は放置されることになり，ローマに送られることさえなかった。ところが，マカオのモンターニャ神父が，1742年から45年の間にリスボンの歴史アカデミーのために書写を命じた。しかしそこで紛失され，その後，その存在はほぼ忘れ去られた。20世紀に入って，イエズス会のL. J. M.クロ神父，フランシスコ会のD.シリン

グ神父，イエズス会のゲオルグ・シュルハンマー神父が，リスボンのアジューダ図書館，植民史（のちに海外領）文書館，トゥールーズ（フランス）のサルダ氏の私設図書館，リスボンの国立図書館でその手稿を発見し，ヨーロッパと日本の歴史家や学者の関心を大いに掻き立てた。そして1926年には，ドイツ人のシュルハンマーとA.フォレツシュが，アジューダの写本（49-IV-54）を基に，1549年から1578年にわたる第一部のドイツ語訳をライプツィヒ大アジア出版社から刊行した。続いて，1578年から1582年の第二部，１章から43章が，ジョアン・ド・アマラル・アブランシェス・ピント教授ならびに日本人の優れた歴史家である岡本良知教授の手で，東京の日本ポルトガル協会から出版された。両者は注記で日本の史料を用いた。またこれら二人の教授は，1583年から87年，1588年から93年の残りの２巻の出版を準備したけれども，状態のよい完全なマイクロフィルムが入手できず[19]，またおそらくは十分な助成金を得られなかったために出版するに至らなかった。アブランシェス・ピント教授は1965年11月15日に，岡本良知教授は1972年８月６日に鬼籍に入った。

一方，当時の国立図書館長のマヌエル・エステヴェンス博士は完全版の準備のためにすでに作業を始めていた。1957年にはトゥールーズ（フランス）の二つの写本を入手し，シュルハンマー＆フォレツシュもピント＆岡本も利用しなかった1566年から1581年の別の写本（一般蔵書9448）も所有していた。ところがその準備の作業を妨げる障害が生じた。問題の一つは，同時に二つの言語で出版するために，その長大な作品を英語に翻訳する人が見つからないことだった。しかし，それまでにすでにポルトガル語版の出版の試みがいくつか行われていた[20]。1933年に一度，前世紀の終わりに一度[21]。しかしどれも望ましい結果を得るに至らなかった。

L.フロイス神父がインドとマラッカに滞在中（1552–1562）に書いた書簡は，『Monumenta Historica Societatis Iesu〔イエズス会歴史文書集成〕』の『Documentaa Indica〔インド文書〕』第II巻から第Ⅴ巻[22]に，またヴァリニャーノの1542年から1564年までの時期の日本を含む『História Índica〔インド史〕』（1583）[23]，同様に日本を含み，現存部分は1570年に至るイエズス会士のセバスティアン・ゴンサルヴェス神父の『História dos Religiosos da Companhia de Jesus nos reynose provincias da India Oriental〔東インドの諸王国および属州におけるイエズス会士の歴史〕』（1614）[24]で刊行されていることから，海外領歴史研究センターの所長のシルヴァ・レゴ博士の勧めもあり，我々はフロイスの『日本史』の出版の準備を決意した。そのため，歴史家で16世紀の日本のカトリックの布教に精通する日本の二人の，言語的側面ならびに日本の史料についての歴史的な解明についての助力の約束を当てにした。しかし彼らは約束をしたにもかかわらず，我々に力を貸すことは一切なかった。加えて，リスボンの国立図書館に保管されている３つの写本のコピーがなかった。それらは本作の出版に不可欠であり，それなしでは科学的で完全な作品になりえなかった。1972年に入り，同年４月28日に行われた学会で，A.ダ・シルヴァ・レゴ博士とマヌエル・エステヴェンス博士とともに，我々は『日本史』の批判的な校異注と注釈を備えた完全版を準備する任を授かった。本作は全部で５巻となり，資金は国立図書館と海外領歴史研究センターが負担する。収支額は折半し，出版権も同等に所有することになる。このようにして本作

は生まれた。とりわけ価値があると思われるのは，まとまった形で ── 後々の散逸を防ぐことになる ──，まさに作者の故郷の地で出版されることだ。

ルイス・フロイス神父の生涯

ルイス・フロイス神父は1532年[25]，リスボンで生まれ[26]，おそらくは同地で初等教育と人文主義的教育を受けた。時期は不明だが，王室の官庁に勤めていた（付録文書１）。そこにはバルトロメウ・フロイスという役人が財務官を務めており，彼はおそらくフロイスの親類だった[27]。1548年の２月か３月に，まだ16歳の若さながらS.アマロのイエズス会に入会した。生まれたばかりのポルトガル管区の創設者で初代上長のシマン・ロドリゲス神父により迎え入れられた。とは言うものの，同年３月17日にはすでにアントニオ・ゴメス神父と他の３人のイエズス会士とともにガレガ号に乗ってゴアに出発した[28]。同じく旗艦のサン・ペドロ号には将来の日本の宣教師バルタザル・ガゴ神父[29]がインドに向かっていた。フロイスは彼について『日本史』の中で語っている。この年の航海はあまり楽しいものではなかった。なぜならモザンビークに着く前にガレガ号は，二度，座礁し，一度は舵が外れ，元の位置に戻すことがほぼ不可能に思われたからだ。しかし何とかモザンビークに辿り着き，そこで以前に到着していた船の多くの病人に出会った。着いたばかりの者たちは病人を治療し，彼らをゴアへ連れて行った。最後の渡航はすでに時期外れで，逆風のモンスーンが始まっていた。航海中に食料と水が不足し始めた。

ついに10月９日[30]，ゴアに上陸した。通常よりも優に一か月は遅れた。入会して間がないフロイスは，東洋のポルトガルの大司教座のあるその地で２年過ごした。同地で，宣教師長のフランシスコ・ザビエルの面識を得た。1549年の４月の半ばに日本人のアンジロウとその二人の同国人とともに日本に行くまで何度も顔を合わせた。1550年末にフロイスはインド北部に派遣された。そこは1548年に旗艦でゴアに上陸していたベルキオル・ゴンサルヴェス神父がバサインとその他の周囲の村の宣教師ならびに上長を務めていた。ザビエルから日本に呼ばれたガスパル・バルゼウ神父は，ホルムズから帰る際，バサインで我らがフロイス修道士に会った。彼と一緒に，チャウス，マンダペシュワー，カンヘーリーの有名な石窟，エレファンタ島，ターナを訪ねた。1551年11月，フロイスはゴアに戻り[31]，1554年４月まで滞在した。おそらくは人文学の研究，雑務，あらたな改宗者たちの指導に従事した。1552年11月，ザビエルが中国へ出発した後，コレジオ・デ・サンパウロの学院長ならびに副管区長になったバルゼウ神父により，「現地だより」（ゴア）[32]を書くよう命じられ，それを見事に成し遂げた。12月１日付で最初の書簡を仕上げた。長文で，語彙も豊富，構成も鮮やかな[33]布教年報第１号にふさわしい出来栄えだった。そこにはすでに将来の彼の卓越した歴史家の才能がはっきりと表れている。まさにポリカルポ（実り豊か）[34]の言葉に値した。

1554年３月，上川島（じょうせんとう）からマラッカを経てやってきたザビエルの清らかなる遺体がゴアに着いたとき，フロイスもそこにいた。著名な作家フェルナン・メンデス・ピントも道中で合流し，ザ

ビエルの遺体とともに到着した。彼は激情に駆られてイエズス会に入会し，副管区長のベルキオル・ヌネス・バレットに日本行きを申し出た。ヌネス・バレットはともに行く決心をした。というのもメンデス・ピントがその事業の資金の一部を負担し，加えて副王が自身の使節として彼を送ることにしたからである[35]。その派遣の随行に選ばれた一人がフロイス修道士であった[36]。フロイスが持参した本のリストが残っている。それは4冊であった。一冊が『Gersão（キリストにならいて)』，もう一つは論考「Deseoso〔切望した〕」もしくは「Espelho de religiosos〔修道士の鑑〕」（おそらくはカスティーリャ語），そしてポルトガル語の『Espelho da Perfeição〔完全の鑑〕』，さらに聖ボアヴェントゥラがラテン語で編んだ『Stimulo de amor divino〔神の愛の刺激〕』[37]。マラッカから先に旅を続けることができず，そこに，約1年，留まらざるを得なかった。この時期フロイスは副管区長の記録係として多くの書簡を書いた[38]。その間，副管区長は航海を続けたが，フロイスはマラッカに残りイエズス会の居所と教会を管理し，教義を教え，勤行を行い，信仰を深めるよう，囚人に寄り添い，入院患者を見舞うよう命じられた[39]。当時，そこには他のイエズス会士がいなかった。彼自身が書いているように，ゴアの「そのコレジオから神父か修道士が来るまで，施設を掃除し，見守るため」[40]であった。

しかし副管区長はそれより前に彼に別の任務を託していた。フロイス自身が1555年に言及している。「神父（B.ヌネス・バレット）様はここ（マラッカ）を発つ前に，私をシナに送ることを決めておられました。ポルトガル人たちは私を現地に置いて，広東の町の有力者の元に身を寄せさせ，そこで2，3年の間，インドから神父様たちが来るまで言葉を学ばせようとしたのです。彼らがそこに赴いた際に通訳できる人を見つけられるようにするために。親愛なる皆様，疑いようもなく，私の魂が神の恵みにより受け取った精神的な満足と喜びは非常に大きく，どんな熱情をもってしても，ペンは私の魂が感じたことを表現できません。たとえ多くの人から，入国した後に大きな困難や恐ろしい苦しみが待ち受けていると知らされようとも。しかしこのことにさえ，私の罪の数々がいかに深刻であるかを思い知りました。私はマラッカのこのコレジオに一人残るほかなく，そこではこれを実行する術がなかったのです」[41]1555年にゴアの神父と修道士たちに長い手紙を書き，彼らに知らせた。「これを行うには，一晩，二晩，朝まで眠らずに過ごさなければなりませんでした。と申しますのも，私の乏しい能力では，日なかに私に命じられた聖なる服従を果たす必要があったからです」[42]

副管区長が日本から戻り，マラッカに寄った際，再びフロイス修道士を同行させ，1557年の復活祭には二人はゴアにいた。1557年から1558年まで，フロイスは評価の高い人文学者マルコス・ヌネスの指導の下で研鑽を積んだ。同氏は1555年にポルトガルからゴアに到着し，1556年に司祭に任じられた[43]。1557年，学監ならびにラテン語上級課程（修辞学）の教授となった[44]。1560年にポルトガルに戻り，1563年にイエズス会を辞した。フロイスは彼に恩義を感じており，ポルトガルに何通も手紙を書いた[45]。

1557年から1560年は，ゴアの村々がキリスト教の信仰を受け入れるようになった時期を成す。この事実が，フロイスに長大な年報の形で，この重要な出来事における様々な成功を記録させる

機会を与えた。フロイスは知的かつ心地よくそれらを詳述した。しかしフロイスは単なる事実の語り部ではなく，また大きな事業の活発な協力者でもあり，1560年には人口が多く，高貴なカルマリのサン・ジョアン村を改宗に導いた[46]。フロイスのことをバルタザル・ダ・コスタ修道士は，1560年11月16日付で，「ディヴァル島とショラン島を改宗させた中心的な存在だった」[47]と記している。それらの島はバラモンの力が特に強い場所だった[48]。フロイス自身も具体的かつ鮮明な筆致で布教のあらゆる現実を表現するのを楽しんだ。1557年の年報の書簡では次のように書いている。陸地から50人か60人のモーロ人が泳いでやってきて，サン・ジョアンの教会を焼き，キリスト教徒を滅ぼそうとした。キリスト教徒と何人かのポルトガル人は対抗し，モーロ人の大半を殺した。一方，新たな改宗者を導き，教会を守るためにそこに住み込んでいた修道士も，教会で「導火線に火のついた銃を手にしていた」。ライネス総長の補佐のポランコ神父は，ゴアの管区長のクァドロス神父に，修道士が武器を手にすることは許されず，さらに品位を損なうことだと伝えた。さらに修道士は魂という武器を使うべきであり，その他の武器は世俗の人々に任せるべきだと助言した[49]。その時期，神父たちのもう一つの幸福ではない仕事は死刑を宣せられた者に付き添うことだった。フロイスは1559年の多くの事例を記録している。例えばゴアで「神が滅ぼしたあの町々のおぞましい罪」により有罪になった者たちが火あぶりにされたり，同様の罪でより年少の若者たちが処罰されたりした事件である[50]。同様に『日本史』を書く際にも，この悪行の断罪に非常に雄弁となる。

しかしながらフロイスは26歳になっており，高等教育を受けるには十分すぎるほどの年齢だった。1558年10月28日にスコラ哲学を始め[51]，当時で言うところの二年の「課程」を履修した。1559年の学監はマヌエル・テイシェイラ神父だった。彼は，その後，聖フランシスコ・ザビエルの初の伝記作家となる。論理学の教師（1558–1559）は管区長のアントニオ・デ・クァドロス神父で，マヌエル・テイシェイラ神父が補佐を務めた[52]。そして1560年１月には，将来の日本布教の上長であるフランシスコ・カブラル神父が，午前中にアリストテレスの自然学の論考の，午後にはテイシェイラ神父が，同じ作者の『生成消滅論』の「講義」を始めた[53]。1560年10月にはフランシスコ・カブラルの主宰で荘厳な討論会すなわち「結論」が行われた[54]。フランシスコ・ロドリゲス神父は，1559年，１日２時間，受講生らにアストロラーベと良心の問題について「講義した」[55]。

1559年10月，ディオゴ・ライネス神父のイエズス会総長就任の選挙結果とともに，ゴアに対し，神父と修道士のそれぞれについて，またその資質と見込みについて情報を集めるよう指令が届いた。情報はローマに送られることになっていた。この任に当たった６人の神父が，我らがフロイス修道士について記したことは非常に興味深い。1556年から1559年の管区長ドン・ゴンサロ・ダ・シルヴェイラ神父は，彼について，スペイン語で記した。「ルイス・フロイスは，体は華奢だが，精神的には思いやりがあり，善意に溢れ，生来の思慮深さがある。努力の末に，やがて三誓願の幇助修士になるだろう」[56]クァドロス神父は，新管区長（1559–72）で，かつて彼の論理学の教師だった。彼は述べている。「ルイス・フロイス修道士は生気があり陽気で善良な人間であ

るが，信仰心に篤くはない。よく冗談を言い，講義をよく聞き，理解する。説教をするのを好むようだ。あらゆる種類の世事に通じ，使命については揺るぎがないように思える」[57]1556年以来，ゴアにいて，コレジオ・デ・サンパウロの学長だったフランシスコ・ロドリゲス神父は，当時，講座で学んでいた７人の修道士について，ひとまとめに評していて，フロイスの名を先頭に置いている。「会における徳と確信の過程において彼らが示す善良さゆえに，我らが主は全員に希望を抱かれるであろう」[58]より近くでフロイスを知り，その先生だったフランシスコ・カブラルは，「ルイス・フロイス修道士は26歳で，会に11年，現在，教科を学んでおり，機知に富み，会にしっかりと根付いていて，あらゆる徳を有しており，事務仕事に対処する素質があり，的確な判断力もあるようである。見たところ，よい説教者になるであろう。なぜなら生まれながらに言葉を模倣する才があるからだ」[59]興味深いのはまた，エチオピアの総大司教の同志であり，司教に選ばれたベルキオル・カルネイロが語ったことである。「ルイス・フロイスは使命に忠実で，従順で，教科（哲学）を学んでいる。人好きのする会話ができる。宮廷人だったことがあり，今もその名残がある。昇天されたアントニオ・ゴメスを懐かしみ，仲間と非常に親しくしている。会に11年，年齢は27歳である」[60]フロイスの所見を最後に記したのは，総大司教の兄弟であり，1551年からインドにおり，1560年１月にはすでにCochim〔コーチ〕にいたベルキオル・ヌネス・バレット神父である。総長神父に次のようにしたためた。「ルイス・フロイスは入会して12年になる。生まれながらに雄弁の才があり，実務能力に非常に長けている。常に上長らに試験され，経験を積んでいる。常に召命への確信を持ち，対話においてはやや形式主義的[61]でこだわりがあるが，従順である。自身の意見を表明したり，言い聞かせる際に説得力があり，生まれながらの慎重さと対話の際の快活さを持っているが，時に命じられた仕事に愚痴をこぼすこともある。噂好きであり，かつて（今はどうか知らない）上長について書いたり知ったりしたことを，秘すべきことであるにもかかわらず，仲間の修道士たちに漏らしたことが何度かあった。だが，大きな期待がかけられている。快活であり，教科を学んでいる」[62]全体として，これらの意見は，フロイス修道士について非常に明確な印象を与えてくれる。そしてその将来が，当時，彼にかけられた期待を十分に証明することになる。

哲学の学修を終えた後，フロイスは神学を学び始めた。午前中はフランシスコ・カブラル神父が他の７人の神父とともに行う聖トマスの第一部についての講義を，午後はフランシスコ・ロドリゲス学長が行う同じ著者の秘蹟の第三部の講義を受けた[63]。フロイスは1561年にエチオピアの総大司教により司祭に任じられた[64]。そして神学を続けながら，告解を受ける仕事も任された[65]。それは精神学の習得を要する。おそらくは私的に学んだのであろう。

しかしフロイスの告解を受けながら勉学をする生活は，1562年４月に終わった。と言うのもイタリア人のジョアン・バティスタ・デ・モンテ神父と再び日本行きの船に乗ったためである[66]。二人は無事マカオに着いたが，その時期，日本に向かう季節風はすでに止んでおり，約10か月，1563年６月まで待つよりほかなかった。この年，フロイス神父はマカオの聖週間に，主の受難についての「２時間の説教」を行い，聴衆の大きな感動を誘った[67]。1563年７月６日，ついに同僚

とともに日本の地に足を踏み入れた。そこは横瀬浦（大村）の港であった[68]。当時，日本全国に，横瀬浦の上長のコスメ・デ・トレス神父，そして都のガスパル・ヴィレラ神父の二人の司祭しかいなかった。皆の喜びはいかほどであったか！　その時から1592年10月９日まで ── ほぼ30年 ── フロイスの『日本史』の中の自身についての言及はすべて自伝と言える。

ここにフロイス神父が日本で行ったことを詳細に書くつもりはない。と言うのも彼自身が特に最初の20年間，時にきわめて写実的に，したことや起こったことを述べているからである。しかしその活動の大筋を簡単に触れることは興味を引くであろう。横瀬浦から平戸の度島（たくしま）に行った。同じ名のその町でジョアン・フェルナンデス修道士に会った。彼は聖フランシスコ・ザビエルの時代からの経験豊かで有能な宣教師だった。この修道士とともに日本語で宣教を始めた。しかし1564年の終わりに日本の「首都」である都に出発することになった。都に着いたのは，折しも1565年の日本の正月であった[69]。当初からほとんど12年間，1565年から1576年まで，都か堺に滞在した。最初はヴィレラ神父と，その後は単身で，1570年から1576年はオルガンティノ神父と共に。大いなる犠牲と欠乏の生涯であった。800年も前から同国の政治，文化，宗教活動の中心地である首都における宣教の重要性がいかなるものかを常に意識した。カブラル神父が1572年と1574年に都を訪れた際，フロイスは彼の通訳を務めた。1577年から1581年は，南部の豊後の上長だった。そして1581年には巡察師ヴァリニャーノ神父の同伴者兼通訳を務めた。同師の信長訪問にも同席した。1582年２月，ヴァリニャーノ神父が日本を発った後，副管区長ガスパル・コエリョ神父の同伴者となり，1586年に再び彼と都を旅した。1587年７月，秀吉が反教会の命令を発した後，フロイス神父は度島に隠棲した。1592年２月と７月の日本副管区の２回の修道会では会議の記録係を務めた。

残念ながら，『日本史)』（史料）の後年部分では，フロイス神父は自身についてほとんど語っていない。おそらくは健康状態の悪化や迫害，もしくは成熟した宗教家の謙虚さゆえであろう。1592年10月巡察師ヴァリニャーノとともにマカオに戻り，同地で２年間，彼に仕えた。しかし健康状態が悪化した。1595年７月に日本に戻り，1597年７月８日に長患いの末，死去した[70]。

フロイスはなぜ『日本史』を書いたのか

偉大な上長らはフロイスの類まれな文才を早々に見出していた。初めはバルゼウ神父で，前述のように1552年，フロイスに対し，ヨーロッパの各施設や外部の多くの人々に送るため，その年に起こった布教に関するあらゆる出来事についての総括の書簡を書くように命じた。1559年にはフランシスコ・カブラル神父は「事務仕事に対処する素質」（前述）があると所見を述べた。事実，1552年から死去するまで，多くの年報やその他の多数の書簡を自身の名義のみならず他人の名義でも書いた。それゆえ，今なお，手稿もしくは印刷物が約130点も保管されており，そのいくつかは非常に長大なものである。しかしながら，書簡を書くことと歴史書を編纂するのは別物である。

1579年，J．P．マフェイ神父は，ポルトガルで，彼の東インドの歴史書のための文書や資料を探していた。その仕事の中で，彼はメルクリアノ総長神父に，日本に居住し，文才があるフロイス神父に，その経験と知識と才能でもって，同国の宣教の進展について，その地の風土や福音の妨げになった政府や戦争の記載を含む「解説書」を編纂させることを提案するアイデアを思い付いた（付録文書１）。メルクリアノ神父が1580年に亡くなったため，マフェイは彼の後継のクラウディオ・アクァヴィヴァに依頼し，総長は，その意を汲んで，1582年の終わりか1583年の初めにヴァリニャーノ神父に手紙を書き，フロイスにマフェイが望む日本の歴史書を編纂させるよう提案した。総長の書簡は，1583年の終わりにコーチかゴアにいたヴァリニャーノの手に届いた。そしてその後の４月に日本の副管区長の神父に送り，1584年の半ばあたりにその書簡を受け取ったと思われる[71]。

フロイス神父はその任を引き受けたが，1585年10月，総長神父に１年ほど前から体が不自由で，両手，両腕に常に痛みがあり，与えられた薬も効かなかった，自分の手でこの書簡をかくことさえ思うようにはできないと知らせた（付録文書３）。1587年１月１日に，イタリア人の書記補を使って，総長神父に対し，その２年前にインドの管区長（ヴァリニャーノ）から日本の副管区長（コエリョ）へ書簡が届き，自身がザビエルの時代からその時までの日本の布教の歴史を事実と真実でもって書く任に当たるよう要請があったことを記している。また，その書簡で，自分にはその能力が不足していると感じているが，従順の誓いにより課されたことなので，できうる限り尽力すると述べている。年齢 ── 当時54歳か55歳 ──，持病，時間の不足，通常の業務により，必要十分な機会が与えられているわけではないが，すでに第一部が終わり，第二部を始めていた。実際，1578年までの第一部の末尾に，フロイス自身の付記で，第一部は1586年12月30日に書き終えたと記されている（第116章）。18世紀のブラジルの聖人伝歴では「７月20日」となっている（付録文書15）。

しかしヴァリニャーノ神父は1588年，総長神父に対し，── フロイス神父によって編纂された1586年と1587年の年報に言及しながら ── 同人は，物事を叙述するに際し，生まれながらに冗長かつ誇張気味であることに加え，書かれた内容がすべて真実かどうか検証することや報告内容の取捨選択に重きを置かないと報告している。この批判は純粋に文学的なものではなかった。巡察師は彼の６章にわたる年報を１章に削減し，さらには他の者の情報も加え，最終的には新たに編集したものをフロイス神父の書簡として送った。それは大いなる厚意であった（付録文書５）。

フロイス神父は作品を書き続けたが，自身の上役の行為について全く知ることはなかった。そして1589年１月30日付で，ローマに書簡を書き，４年間（1585，1586，1587，1588），『日本史』に打ち込み，巡察師の日本への新たな来訪が控えており，できるだけ早く完成させることを願っていると述べている（付録文書５）。その数か月後，1589年９月，ヴァリニャーノの日本到着（1590年）時には，執筆開始からほぼ７年が経っており，『日本史』が完成し，見直しの後，総長神父に送られることを期待し，皆がそれを喜ぶことを疑わなかった（付録文書７）。この点について，巡察師神父の到着と時を同じくしてフロイスは長く沈黙する。1593年まで，彼の書簡から

『日本史』のことを窺い知ることは一切ない。同年１月，マカオから総長神父に伝えている。毎日，午前中に３時間から４時間，午後にも同じ時間，巡察師神父のために書簡を書いている。すでに手が震えるようになったが，５，６年を費やした『日本史』は完成している。今，同書は巡察師神父の手にあり，時間がある時に推敲し，見直している（付録文書８）。

この後，フロイス神父は，アクァヴィヴァ総長神父から1591年１月２日付の書簡を受け取り，1593年11月13日に長文の返事を書いている。マカオにいて，健康状態は悪く，非常に衰弱しており，ヴァリニャーノのために書簡を書くのにいつも変わらず忙しくしている。総長神父が彼に勧めたこと ──『日本史』に取り組み，完成させること ── に関し，ガスパル・コエリョ神父より，総長神父の命として同作を書くことを委ねられてから，彼はとても意欲的にそれに取り組んだ。今ではフランシスコ・ザビエル師の時代を知る唯一の者として日本に残っているからだと答えている。ほぼ６年間，彼の通常の業務や任務以外の時間を『日本史』の編纂に費やした。巡察師神父は，日本ですでにその一部を見ており，彼，フロイスがマカオにそれを運ぶことを望んだ。そこで推敲し，見直すつもりだった。だがヴァリニャーノは，その年，とても忙しくしており，その機会を持てなかった。巡察師神父と『日本史』について話した際，同師は，日本の神父や修道士たちにとって同書はとても有益だ，最初の神父たち，彼らの先人が，キリスト教信仰の基礎を築くために経験したことを教えることができるからだと述べた。しかしフロイスは続ける。ローマに送られ，世界中で読まれるには，── ヴァリニャーノの意見では ── 短くし，より簡略化した概説書にまとめる必要がある。ローマで出版される年報（300ページほどのポケットブック）よりは多少厚くなるにせよ。フロイスは同書に推敲すべきところが数多くあることは認めるものの，本質を損なうことなくそのように簡略することはできないと述べている。それゆえ『日本史』をそのまま総長神父に送ることを望んだ。省略可能ないくつかの箇所を余白に記して。だが，これには二つの不都合があると想起している。一つは『日本史』は彼の言葉であるポルトガル語で，すべてが彼の手で ── ほかの誰の手を借りることはなかった ── 書かれていること，もう一つは彼がすでに年老いていて，体調も思わしくないため，道中で失われることに備えて，写しを作って残しておくことができないことだった。1589年から現時点（1593年の終わり）まで，『日本史』は中断され，何の進展もない。最後にフロイスは，総長神父の気を引くために，同作を読んだ日本の文物に詳しい博識な神父たちが，総長神父が同作を手にすれば，喜ぶに違いないと断言したと付け加えることを忘れなかった。巡察師神父（ヴァリニャーノ）か副管区長（ペドロ・ゴメス）に最良と思われることをお命じください。彼，フロイスは，彼が生きている間にその返答が届くかどうかわからないけれども，その決定を受け入れるだろう（付録文書10）。

しかし，フロイスは同書を書き続けた。そして日本に戻るため，マカオを発つ前に，すべてを完成させることができた。というのも1594年２月が同書の中で言及される最後の日付だからである。しかしヴァリニャーノ神父がその冗長さを嫌ったため，フロイス神父の作品は，存命中も，その作者の死後もローマに送られることはなかった。極東に残されたままだった。イタリア人のフランチェスコ・パシオ神父はポルトガルの管区担当の総長補佐ジョアン・アルヴァレス神父へ

の書簡の中で，ヴァリニャーノの裁決をこれらの言葉で確認している。「ご尊台がご所望の故ルイス・フロイス神父の『日本史』は送られませんでした。修正するところが多々あったからです」（付録文書14）。

一方で，ヴァリニャーノ神父は1601年１月25日に彼の日本史を書き始め，７月25日に加津佐（高来）で終えた。彼はこのテーマを５巻に分け，ザビエルの到着から17世紀初頭に至ることになっていたが，カブラル神父の日本到着（1570年）で終わる第１巻だけを執筆した。一部をラテン語，一部をスペイン語で書いていて，主にマフェイの書『De Iaponicis rebus epistolarum libri IIII〔日本事情書簡集４〕』に依拠している。彼自身は，自作を形式的には明らかに未完成であるが，歴史の叙述については完全だと判断した[72]。ヴァリニャーノはフロイスの作品を知っており，少なくとも一部は読んでいたにもかかわらず，同書にフロイスについて直接的な依拠の記載はない。しかしイエズス会の日本の布教の優れた歴史書を入手する努力はこれに留まらなかった。今度はマテウス・デ・コウロス神父にこの困難な任務が託された。1623年９月23日，同人は布教の年代記（Cronicon）のために尽力したけれども，ロドリゲス神父のほうがそれをよりよくやり遂げることができると書いた[73]。２年後，管区長のフランシスコ・パシェコは，弾圧の激化を理由に，コウロス神父がその作品の執筆のためにマカオに発つのを許さなかった[74]。こうして，その仕事はジョアン・ロドリゲス・ツズ神父の手に渡った。彼は日本，中国，朝鮮，安南，トンキン，シャム，カンボジアの布教という歴史的な大作を計画し，同人が死去した1634年までを扱うことになっていた。しかし，彼が残したのは，とても評価の高い日本の風土と人々についての記載と，こちらは非常に貧弱な，聖フランシスコ・ザビエルの1549年から1552年までの歴史のみである[75]。このように，16世紀の日本の布教の歴史について，もっとも完全で信じるに足る作品はルイス・フロイス神父の本作のみである。

『日本史』の手稿の運命

1595年，フロイスが日本に戻った時，おそらくは上長たちの決定を待っていて，マカオに『日本史』の手稿を残しておいた可能性が非常に高い。N.トリゴー神父は，1613年２月，ヨーロッパへ出発する前に同地でそれを見たと思われる[76]。いずれにせよ，それは会のどこかの施設に手つかずで残されて，18世紀の中ごろまで時間による劣化に晒された。ヨーロッパでは，時々，歴史家フロイスについて不確かであいまいな声が聞かれた。

1608年，ペドロ・リバデネイラ神父の著書『Illustrium Scriptorum Religionis Societatis Iesu Catalogus〔イエズス会の著名な著述家目録〕』（アントワープ，136頁）に，フロイスが日本の諸国の説教者で「その風俗，慣習，制度，儀式，その他，日本人の性格，気質，宗教に関する事象について優れた書を著した」と書かれている。同様の言葉が，1613年版（同じくアントワープ，169頁）にも繰り返されている。リバデネイラはそれまで『日本史』のことは知らなかったとわかる。フェリペ・アレガンベは同市で出版された大著『Bibliotheca Scriptorum Societatis Iesu

〔イエズス会著述者書誌〕』（1643年，312頁）で，リバデネイラの言葉を繰り返しながらも付け加えている。「しかし私はこのタイトルで言及されている著作は彼自身の書簡と大きく異なるものではないと思う」そのため，日本の気候などについての論考も忘却の彼方に消えつつある。フアン・エウセビオ・ニエレンベルグ神父は1645年の『Varones Illustres〔名高き者たち〕』の第１巻で，著述家であるフロイスについて言及しているが，アレガンベ以上のことは知らなかった。次の言葉で読者を彼に委ねている。「この神の僕はいくつかの作品を書いたが，それらをまとめ言及したのはフェリペ・アレガンベ神父である」（680頁）。同年，バルタザル・テレス神父は彼の『Chronica〔年代記〕』第１巻（リスボン，393頁）の中で，もう少しだけ言及している。「次のように伝えられている。日本教会史は彼が完成させたが，印刷機に届くに至らなかった。というのもその前に天の褒美を授かったからである。それは，彼が日本で耐え忍んだ，大きくそして弛まぬ仕事の後で，授けられるにまことにふさわしいものであった。優れた説教を行っただけでなく，優れた歴史家として執筆した」リバデネイラとアレガンベの『Bibliotheca Scriptorum Societatis Iesu』の新版（ローマ，1676年，565頁）では，アレガンベの同じ見解の言葉を繰り返している。

1710年のジョゼフ・ド・ジュヴァンシーは大著『Historia Societatis Iesu〔イエズス会の歴史〕』の第５部（下巻，ローマ，604頁）のフロイス神父の追悼文で彼について相当の情報を記しているけれど，『日本史』についてはまったく何の記載もない。もっとも驚かされるのは，ローマのイエズス会の中央文書館の熱心な研究者であるダニエル・バルトリ神父がそこで同書を探したけれど，見つけることができなかったことである。彼は1660年に記したアジアの第二部『日本』第２巻（64章，437頁）で次のように記している。「かつて総長の命により，約20年にわたって書き続けられた『日本史』３巻の完本が手元にあればどれほどよかっただろう。だが，彼はその大著を完成させるよりも前に人生を終えた」ポルトガルの文書館の偉大な研究者であるアントニオ・フランコ神父は，我らが作品について何らかの情報を得ていた。1717年に書いている。「その『歴史』はどうなったのか？　マカオか，ゴアか，それともローマに保管されているのか？　私は記録を見つけることができない。間違いなくとても興味深いものであるだろう」（付録文書11）その数十年後の1752年，ディオゴ・バルボザ・マシャドは『Bibliotheca Lusitana〔ルジタニア書誌〕』第III巻（102頁）で，フランコ以上のことがわからず，彼の言葉を繰り返している。すでにその頃リスボンにあったに違いないのに！

1742年３月４日，フランシスコ会士のジョゼ・デ・ジェズゥ・マリア神父とイエズス会士のジョゼ・モンターニャ神父がリスボン港を出発し，同年11月５日，マカオに着いた。両名とも1720年にリスボンで創立された王立歴史アカデミーにより派遣されたのだった。彼らは，マカオにある歴史的関心が非常に高い文書をすべて書写し，上記のアカデミーに送ることを託されていた[77]。二人は熱心にその仕事に取組み，同イエズス会士は，1744年ごろ，すでに一本か二本の写本の包みをポルトガルに送ることができた[78]。しかし1745年の３月か４月に，モンターニャはインドシナへの布教に派遣され[79]，その仕事はジョアン・アルヴァレス修道士に引き継がれた。ただし，写本はリスボンのイエズス会の布教事務局に送られた[80]。ここで興味を引くのは，フロイ

ス神父の『日本史』の写本が，モンターニャ神父[81]によって，1744年以降，リスボンの歴史アカデミーに送られたことだ。いつそこに着いたかもどんな関心を呼んだかも正確にはわからない。しかし出版の動きが何もなかったのは確かなようんだ。と言うのも，おそらくアカデミーは，当時，解体の危機に瀕していたからである[82]。

長い沈黙が一世紀以上続いたが，アゴスティーニョ・デ・バケルの登場で終わる。彼が1869年の『Bibliothèque de la Compagnie de Jésus〔イエズス会書誌〕』第１巻（1978段）で，1593年11月12日付の書簡（付録文書10）に従って，同作が分冊であることを伝えているが，写本については何も述べていない。しかし続けて次のように述べている。「この書物はフロイス神父が６年間精魂込めて書いた物で，その文体も内容の興味深さもその正確さも称賛に値する。この大著は手稿のままのようだ」1898年にカルロス・ソンメルヴォジェルがデ・バケルを再び引いて，アレガンベとソトヴェルが同作について触れているが，あいまいで，書簡集にすぎないと考えていたようだと付け加えている（第III巻，1037–38段）。こうしてフロイスの死から３世紀過ぎて，彼の『日本史』はますます闇に包まれていった。

手稿の発見

イエズス会士のL. J. M.クロ神父は，ザビエル家ならびに同聖人の優れた研究者で，1894年12月と1895年１月に，リスボンのアジューダ王立図書館で第一部の写本（49-IV-54）を発見し，彼の著書『S. François de Xavier, Sa vie et ses lettres〔聖フランシスコ・ザビエル，その生涯と書簡〕』第II巻（トゥールーズ，1900年，39頁以降）で，その一部をフランス語に訳して発表した。その時，初めて学術世界がその存在と，何世紀もの間，行方が分からなかった作品の少なくともその第一部の所在を知ったのだった。とは言え，その反響は慎ましやかでささやかなものだった。ハンス・ハースは，その著書『História do Cristianismo no Japão〔日本におけるキリスト教の歴史〕』第II巻（184頁）で，その発見とその重要性を評価し，一方で，間違いなく多くの興味深い資料を含むその作品が，未だ手に届かないことを嘆いた[83]。1906年，クリストヴァン・アイレスが，その著書『Fernão Mendes Pinto e o Japão. Pontos controversos, Discussões, Informações Novas〔フェルナン・メンデス・ピントと日本。争点，議論，新情報〕』（リスボン，107～122頁）に，書かれたそのままのポルトガル語で序文と６章，15章と16章の一部を記した[84]。

ほぼその時期に，『Aparatos para a Historia do Bispado de Macao（1583–1593）〔マカオ司教区の歴史のための史料集（1583–1593）〕』の誤ったタイトルで発見された。今度は雑誌『Ta-ssi-yang-kuo: Archivos e Annaes do Extremo-Oriente portuguez〔大西洋國：極東ポルトガルの書誌と年報〕』（リスボン，1899年，34頁）で，J. F.マルケス・ペレイラが，上述の『Aparatos』の出版を約束したが，それはジョゼ・モンターニャ神父の作だとしている。ここに彼の言を記す。「幸い，筆者が調査を続ける中でジョゼ・モンターニャ神父の手稿による貴重な解説もしくは集成『Aparatos para a Historia do Bispado de Macao』を見つけた。折を見て，このイエズス会士の

未発表の作品について関して詳しく言及するともりだ。それはこの『Annaes』にも転載されるだろう。私が非常に必要としている巡察師のリストと共に」このリストはアジューダ図書館にある（49-IV-66，56–60葉）[85]。

次に望まれたのはフロイスの『日本史』の1583年から1593年までの事実が記された箇所がどこにあるかを明らかにすることだった。傑出した日本研究家のレオン・パジェスの手に成る1859年の『Catalogue des ouvrages relatifs au Japon〔日本に関する文献目録〕』の手稿のリスト（60–62頁）ではまだ同書について知られてはいなかったが，30年後には，『Bibliothèque Japonaise〔日本書誌〕』の577番で示されているごとく，その存在を承知していた。そこにはコルディエの評価で300フランと記されていた[86]。同じくアンリ・コルディエは，『Bibliotheca Japonica〔日本書誌〕』（1912年，190–191頁）で，我々に各巻の正確な書名を伝えている。それはフォリオ版でロシア革で半装丁されていて，932葉から成る。著名な本の蒐集家M.（ヴィクトル・）リュザルシュ氏（1805–1889）の蔵書の中にあり，同氏がレオン・パジェスに売却したのだ。同書の著者としてフロイスについて言及はまったくない。その後の売却先については，リヴィエールが『Bibliothèque de la Compagnie de Jésus〔イエズス会書誌〕』第XII巻（577段1722番）で明らかにしており，そこには当該の書物は，その時点で彼の友人であるポール・サルダの蔵書の中にあり，彼はそれをミュンヘンの書店主ルードヴィヒ・ローゼンタールから500フランで購入したと書かれている。それはジョゼ・モンターニャ神父の作である，とそこでこの手稿に対する興味は終わっている。

1923年，ついに16世紀の東洋におけるポルトガルについてのもっとも忍耐強く幸運な研究者の一人，P.シュルハンマーがリスボンに降り立った。彼がアジューダで49-IV-54の巻を発見した。それは『日本史』の1549年から1578年に相当し，写本の巻末に作者の一種のあとがきが記されており，フロイスの著作であると判明した。彼の喜びはいかほどばかりか。と言うのもフロイスはザビエルの同時代人であり，日本での彼の活動がその巻の中で描写されていたからである。その発見は，1925年，ドイツのイエズス会士の雑誌『Stimmen der Zeit〔現代の声〕』第109号（1925年，453–69頁）で発表された。そして1929年に雑誌『Brotéria』第VIII号（1929年，95–128頁）に「イエズス会士ルイス・フロイス神父とその著作『日本史』」と題した記事の中で，著者とその作品の簡単な考察をしている。若き熱意で，1926年には早々に第一部を翻訳し，長い序文と索引をつけて出版した。それまで述べられていたごとく，『日本史』の第二部はまったく失われたと序文のXV頁で断言している。しかし1588年から1593年の続編の存在は承知していて，またアジューダで整理番号49-IV-57が付されているその第二部を見つけた。

フロイス神父に関心を抱いていたのは彼だけではなかった。フランシスコ会のドロテウス・シリング神父も，様々な都市で，かつての日本における布教の研究資料を渉猟していた。1933年，ミュンスター（ドイツ）で発行された彼のドイツ語の論考「ルイス・フロイス神父の『日本史』の新たな発見」（1938年にピント＆オカモトの第二部の版に再録）で，トゥールーズとリスボンで待望の第二部を発見したと公表した。数々の探索が失敗に終わった後，リヴィエールの『Bibliothèque de la Compagnie de Jésus』第XII巻の「補遺と訂正」を執筆したフェルディナン・

カヴァレラから，切望しているその手稿のありかまではわからないが蔵書家のポール・サルダはいくつもの貴重な「ジャポニカ」を所有していると聞かせれた。同氏はフランシスコ会士とサルダの面会まで取り持った。神父は1932年３月９日に蒐集家の蔵書の中にあれほどまでに探し求めた二つの書物を発見した！　驚きはどれほどのものだったろう！　いつ入手したかも判明した。表紙の下部に，1909年，ミュンヘンのローゼンタール商会によって購入され，1912年５月にポール・サルダに売却したと書かれていたからだ。サルダは彼にL.パジェスの書店の典型的な装丁だと伝えた[87]。シリング神父は，あまり適切な名ではないが，その二冊の写本をサルダA，サルダBと名付けた。その際に何枚ものマイクロフィルムが作成された。1944年，サルダの死とともに，再び手稿は紛失した[88]。しかし1957年にリスボンの国立図書館により買い上げられた。

しかしシリング神父の幸運はこれに留まらなかった。1932年の初めに，ポルトガルの知識人アドルフォ・ベナルスより，当時，まだ一般公開されていなかった海外領歴史文書館に，モンターニャやそのほかのイエズス会士たちの手稿があると教えられたのだ。そしてフランシスコ会士は，ある職員から，そのわずか前にそれらがリスボン国立図書館の海外領部のものとなったと聞かされた。同神父は1932年３月14日にそれらを調査し，フロイス神父の『日本史』の第二部であることを確認した。1578年から1582年の43章分で，299葉から始まり，474葉裏で終わっている。すべてがJ.モンターニャ神父の手に成るものであった。

〈要旨〉

本稿は，ヨーゼフ・ヴィッキ編によるルイス・フロイス『日本史』のイントロダクション抄訳に，新訳プロジェクトの意義を付したものである。1970年代に故・松田毅一および川崎桃太の両氏が達成した邦訳は，日本語研究史における画期的成果であったが，刊行から半世紀を経て，史料環境や学術的要請の変化が新たな翻訳を可能かつ必要なものとしつつある。とりわけ，ヴィッキによる校訂版との接続を通じて，当時は不可能であった本文批判的な読みが初めて可能となる。今回の抄訳は，松田・川崎訳が成立した背景と限界を批判的に捉え直しつつ，ヴィッキ版の編纂経緯および日欧の共同研究体制をめぐる摩擦を明るみに出す。フロイス『日本史』という重層的史料への新たなアプローチとして，本稿は今後の翻訳作業の端緒をなすことを意図する。

〈Resumo〉

Este artigo apresenta uma tradução parcial da introdução à *História de Japam*, de Luís Fróis, na edição anotada por José Wicki, acompanhada de uma reflexão crítica sobre o novo projeto de tradução atualmente em desenvolvimento. A versão japonesa realizada na década de 1970 pelos professores falecidos Kiichi Matsuda e Momotaro Kawasaki representou um marco na historiografia japonesa, mas, passados quase cinquenta anos desde sua publicação, as transformações no acesso às fontes e nas demandas acadêmicas justificam e possibilitam uma nova abordagem tradutória. Em especial, a existência da edição crítica de Wicki permite, pela primeira vez, uma

leitura filológica do texto de Fróis, algo impossível à época de Matsuda e Kawasaki. A presente tradução parcial ilumina as condições históricas e as limitações do projeto original japonês, ao mesmo tempo em que discute os conflitos e desencontros que marcaram a cooperação entre estudiosos europeus e japoneses durante a publicação da edição crítica. Ao retomar *História de Japam* como fonte densa e estratificada, este trabalho pretende ser um ponto de partida para uma nova fase de estudos e traduções da obra de Fróis, agora com o benefício de um aparato crítico consolidado e de uma equipe multidisciplinar.

注

1）Luis Frois, *Historia de Japam*, vol. 1, ed. Josef Wicki, Lisboa, Biblioteca Nacional de Lisboa, 1976.
2）京都外国語大学教授
3）国際日本文化研究センター准教授
4）京都外国語大学講師
5）松田・川崎「訳者序文」（ルイス・フロイス（松田毅一・川崎桃太訳）『日本史』第1巻，中央公論社，1977年）3頁。
6）タイトルは「ルイス・フロイス『日本史』を読みなおす」。
7）ある参加者より同訳書の中の誤訳も示唆された。
8）本文にて言及されるが，書写の際の間違いも少なくなかった。
9）『日本史』はイエズス会の命令を受けて執筆された日本布教史であった。
10）呉座勇一「ルイス・フロイス『日本史』を読みなおす①」（2022年11月9日付）『日本関係欧文史料の世界』https://kutsukake.nichibun.ac.jp/obunsiryo/essay/20221109/　閲覧日2025年6月7日。
11）同上。
12）松田・川崎，前掲書，3頁。
13）1970年におそらくは松田が直接リスボンの国立図書館に写本の閲覧を求めたものの、にべもなく断られた旨を記載している。松田・川崎「解題」（フロイス，前掲書），30頁。
14）Fróis, *op. cit.*, pp. 2*–3*.
15）ヴィッキは次のように書いている。「1972年に入り，同年4月28日に行われた学会で，A.ダ・シルヴァ・レゴ博士とマヌエル・エステヴェンス博士とともに，我々は『日本史』の批判的な校異注と注釈を備えた完全版を準備する任を授かった」（ibid., p. 3*.）。
16）松田・川崎，前掲書，4頁。
17）同書，5頁。
18）〔　〕訳者注，もしくは挿入を示す。本翻訳は「イントロダクション」の抄訳であり，同書の中の「手稿の記述」「『日本史』の史料と内容」「日本学者の見解」「L.フロイス神父の書簡，1552年－1597年」「本版に関する所見」「謝辞」が省略されている。以下の注はすべて原注である。
19）Cf. J. A. Abranches Pinto〔アブランシェス・ピント〕，Yoshitomo Okamoto〔岡本良知〕，Henri Bernad S. J.〔イエズス会士アンリ・ベルナール〕，*La première embassade du Japon en Europe, 1582–1592, première partie, le traité du Père Frois*〔『日本初のヨーロッパ使節，1582年～1592年，第一部 フロイス神父の記録』〕Tokyo, p.Lの序文。「私たちがルイス・フロイス神父の『日本史』第二部ならびに『史料集』（マカオ司教区）の2本の手稿の写真複製を入手してから，ほぼ10年が経過した。我々の意図は，できるだけ早くこの二つの歴史文書を出版することだった。しかし，

必要とされる作業は決して容易なものではなく，それゆえ我々の願いの実現は遅れることとなった。（…）我々の『史料集』の写真複製は，残念ながらかなりの数の葉が欠落している。さらに，我々が生きているこの不確実で混乱した時代（1942年）において，フランスからそれらを入手することは現時点では不可能である」シリング神父は「Tratado da embaixada〔使節に関する報告〕」において欠けていた何葉かを彼らに貸した（同書）。シリング神父の写真複製は，1961年にはフルダ（ドイツ）にあるフラウエンベルクのフランシスコ会修道院にあった。Cf. A. SCHWADE〔A. シュヴァーデ〕の論文Otomo Sorins Kampf〔「大友宗麟の戦い」〕，p.XI, p.11*.そこにはこれらのほとんどの写しが判読不能で不完全であると述べられている。1954年，J. L.アルバレス・タラドリスは写本サルダAから転記したテキストを利用した（A. VALIGNANO〔A. ヴァリニャーノ〕，*Sumario de las cosas de Japón*〔「日本の事物の概要」の意。松田毅一・佐久間正・近松洋男 編訳・解説『日本巡察記』平凡社東洋文庫，1973年中に「日本諸事要録」（1583年）として収録〕，東京，XII頁参照）。

20）ポルトガルのイエズス会の神父たちの私信。

21）J. F. Marques Pereira〔J. F.マルケス・ペレイラ〕*Ta-ssi-yang-kuo*〔大西洋國〕1（Lisboa〔リスボン〕，1899），p.34.

22）*Documenta Indica* II（1550–1553），III（1553–1557），IV（1557–1560），V（1561–1563），ed. Wicki〔ヴィッキ編〕，Roma，1950，1954，1956，1958，1960，

23）A. Valignano S. I., *Historia del principio y progresso de la Compañia de Jesús em las Indias Orientales*（1542–64）〔『東インドにおけるイエズス会の起源と進展の歴史』〕，ed. Wicki, Roma 1944.

24）*Primeira parte da Historia dos Religiosos da Companhia de Jesus [...] nos reynos e províncias da India Oriental*,〔『東インドの諸王国・諸地方における（…）イエズス会修道士たちの歴史の第一部』〕，3 vol.〔3巻〕，Coimbra〔コインブラ〕，1957, 1960 e 1962.

25）付録文書10参照。

26）ベージャで生まれたとする説があるが，シュルハンマー神父によって否定された。O P. Luís Fróis S. J. e a sua《História do Japão》〔「イエズス会士ルイス・フロイス神父とその著書『日本史』」，*Brotéria*, 9, 1925, p.95.

27）SHURHAMMER 1. c.

28）*Documenta Indica* I, pp.382–383.

29）*Document Indica* I, p.382.

30）*Documenta Indica* I, pp.394–395.

31）*Documenta Indica* II, pp.459–460.

32）*Documenta Indica* II, p.441.

33）*Documenta Indica* II, pp.447–491

34）*Documenta Indica* II p.537, III p.365.

35）*Documenta Indica* III, p.85, pp.178–182.

36）*Documenta Indica* III, p.181, p.226. B.ヌネス・バレット神父は明記している。「私たちは，徳においても日本語を学ぶ能力においても，より適任と思われる者たちを選んだ」（ibid., p.85）。

37）*Documenta Indica* III, p.204.

38）Cf. *Documenta Indica* III, p.119, pp.128–129, p.140.

39）SEB. GONÇALVES, *Hist*. II, p.124.

40）*Documenta Indica* II, p.314.

41）*Documenta Indica* III, p.363.

42）*Documenta Indica* III. P.321.

43）*Documenta Indica* III, p.270, p.570.

44）*Documenta Indica* III, 703, pp.704–705. そこには次のように書かれている。「最初のクラスではマルコス・ヌネス神父が講義する。27人の生徒がおり，イルマンが 8 人，コレジオの若者が 6 人，外部の学生がいる。聖ルカの日（1557年10月18日）から彼の修辞学の授業で講義を始めた。午前中は『ヘレンニウスに与える修辞学書（ヘレンニウスへ）』とキケロの演説を講義し，午後はある日はサルティウスの『ユグルタ戦記』，またある日はウェルギリウスを講義した」

45）Cf. 後述のリスト，21，24，25。

46）*Documenta Indica* IV, pp.659–664. このようなキリスト教徒の一部は，今世紀，350年以上を経て，ヒンズー教徒に戻ってしまったのは残念である。

47）「ルイス・フロイス修道士はディヴァル島とショラン島を改宗させる主要な力であった」*Documenta Indica* IV, p.703. そこにはまた次の文が読める。「毎週日曜日にここから（ゴアのコレジオから）何人かのイルマンが村々へ教義を教えに出かける。すなわちルイス・フロイス修道士は同僚のマノエル・ドゾウロとマドレ・デ・デウス（ダウジン）へと行く」

48）*Documenta Indica* IV, pp.172–173.（ショラン，ヒンズーの巡礼地），pp671–672（ディヴァル，「バラモンのローマ」）.

49）*Documenta Indica* IV, pp.131–132.

50）*Documenta Indica* IV, pp.285–286.

51）*Documenta Indica* IV, p.190.

52）ibid., ならびに p.293.

53）*Documenta Indica* IV, p.731.

54）*Documenta Indica* IV, pp.735–736.

55）*Documenta Indica* IV, p.293.

56）*Documenta Indica* IV, p.472.

57）*Documenta Indica* IV, p.403.

58）*Documenta Indica* IV, pp.383–3384.

59）*Documenta Indica* IV, p.458.

60）*Documenta Indica* IV, p.424.

61）つまり「独断的」。

62）*Documenta Indica* IV, pp.507–508.

63）*Documenta Indica* V, p.261, p.267.

64）*Documenta Indica* V, pp.258–259.

65）*Documenta Indica* V, p.266.

66）*Documenta Indica* V, p.612.

67）SEB. GONÇALVES, *Hist*. III, p.145.

68）*História*, primeira parte, c.47〔『日本史』第一部，47章〕.

69）ibid., c.56–57〔同書，56–57章〕. 1565年10月25日に博多から送られたL・デ・アルメイダの書簡「ルイス・フロイス神父と都に向かう道中について」に関する，ポランコ神父の助手でありライネスならびにボルハ総長の本部の書記である，ディオジニオ・ヴァスケス神父の所見は注目に値する。「この非常に長い書簡には，多くの点で注意を払うべきことがあり，厳しい判断で削除すべき部分がある。すべてがあまりにも詳細に語られ，無駄で役に立たないことが多く，誇張表現や大げさな表現は至るところに見られ，容認しがたい。そして最も重要なのは，彼が自ら見たと語る仏僧の寺院や修道院についての記述が，敵対者だけでなく，友人や私たち自身にとっても，信じがたいほど誇張されていることである。したがって，ここは我々のヨハネス・マフェウスが，彼の推敲と批評の腕をふるうのが望ましいと考える。この書簡の中には，読むに値し，知るにふさわしい事項も少なからず含まれているからである」（日本シナ写本第 6 巻39葉表，自筆原稿）

70）実直なA. Franco〔A. フランコ〕が*Imagem da virtude de Lisboa*〔『リスボンの高徳者の像』〕の201と253頁で，SCHURHAMMERが*Geschichte Japans*〔『日本史』〕IX頁で，SCHÜTTEが*Introductio*〔『導入』〕285頁で言及された日付に疑問を呈している。18世紀のブラジルの聖人伝歴では「6月20日」と書かれている（付録文書15）。

71）Cf. Boxer, *The Great Ship from Macao*, p.46.

72）Cf. SHÜTTE, “Valignanos Japangeshichte. Bemerkungen zu Form und Inhalt〔ヴァリニャーノの日本史。形式と内容に関する考察〕”, *Analecta Gregoriana* 72, Roma, 1954, pp. 109–140.

73）1623年9月23日付，同神父の書簡（日本シナ写本第37巻223裏）。

74）1625年10月29日付，同上（日本シナ写本第37巻227）。

75）Cf. SCHURHAMMER, “P. Johann Rodrigues Tçuzzu als Geschichtschreiber Japans〔日本史の記録者としてのヨハン・ロドリゲス神父ツズ〕”, *Gesammelte Studien, Orientalia*〔『東洋学研究論集』〕, pp.604–618.

76）Cf. SOMMERVOGEL, XII, p.201.

77）Cf. Schütteの綿密な研究“P. Joseph Montanha’s《Apparatos》und die Abschrift des Fernost-Archivs S.I. im Rahmen der Initiative der Academia Real da História Portugesa〔ジョゼ・モンターニャ神父の『史料集』とポルトガル王立歴史アカデミーの主導によるイエズス会極東文書館写本について〕”, *Arch. Hist. S. I*〔(『イエズス会史資料集』〕, 31 , 1962, p.245.

78）ibid., p.255.

79）SHÜTTE, “Wiederentdeckung des Makao-Archivs” *Arch. Hist. S. I*, 30 , 1961, p.102.

80）SHÜTTE, “Montanha’s《Apparatos》”, p.257.

81）モンターニャ神父は，1708年1月にコインブラで生まれ，1722年にイエズス会に入会した。1733年ごろ司祭に任ぜられ，3年をアングラで，もう3年をS. ミゲルで説教者および聴罪司祭として過ごした。1741年に修道立願をした後，1742年から1745年にマカオに滞在した。その後，上長としてシャムに行き，1748年終わりに再びマカオに滞在した。続いて日本管区長を1年と数か月務めた。1754年ごろ，許可なくポルトガルに戻り，1764年10月10日，カステル・ガンドルヴォ（ローマ）で死去した（SHÜTTE, “Wiederentdeckung des Makao-Archivs”, pp102–103）。1741年3月25日付の修道立願の記載がある文書（cód. Lus, 16 I, 30）の文字は『日本史』の手稿のそれとはまったく異なる。

82）Cf. *Grande Enciclopédia Portuguesa e Brasileira*〔『ポルトガルおよびブラジル大百科事典』〕I, p.184.

83）Cf. FRÓIS, *Die Geschichte Japans*〔『日本史』〕, p.XII.

84）ibid.

85）SCHÜTTE, *Introductio*, p.293.

86）*Bibliotheca Japonica, Dictionnaire bibliographique des ouvrages relatifs à l’empire japonais rangés par ordre chronologique jusqu’à 1870*〔『日本書誌，日本帝国に関する著作の年代順文献辞典，1870年まで』〕, Paris, 1912, col. 189–190に引用されている。

87）シリング神父は彼の論考“Neue Funde zur《História do Japão》von P. Luis Frois S. J.〔ルイス・フロイス神父による『日本史』に関する新発見〕”, *Zeitschrift für Missionswissenschaft und Religionswissenschaft*〔『宣教学および宗教学紀要』〕23 , 1933, pp.337–343ならびに再び*Segunda parte da Historia de Japam*〔『日本史第二部』〕, Tóquio, 1938, pp. IV–XIIIにて，これらの巻中に同書を見つけた僥倖を余すところなく語っている。

88）A. SCHWADE, “Otomo Sorins Kampf”, p.XI.

S. Bernardo, de Graciliano Ramos – tradução: Capítulos V a XII

Masayuki Kibe e Felipe Motta

〈Sumário〉

Os capítulos aqui traduzidos prosseguem a narrativa em primeira pessoa do fazendeiro Paulo Honório, cuja ascensão social foi retratada na primeira parte do romance. Tendo se apropriado da decadente fazenda de São Bernardo, o protagonista dedica-se agora à sua modernização, ampliando sua influência econômica e política na região.

Essa etapa do romance evidencia o papel de Paulo Honório como figura representativa do *coronelismo*, sistema de poder baseado na autoridade local de grandes proprietários rurais, característico da chamada Primeira República brasileira (1889–1930). Como “coronel”, Paulo exerce poder não apenas sobre a terra e os trabalhadores, mas também sobre o sistema eleitoral e os laços sociais que o sustentam. Sua autoridade se apoia em uma combinação de mando pessoal, distribuição de favores e uso estratégico da violência.

O confronto com seu rival político, o coronel Mendonça, ocupa papel central neste trecho. Ambos pertencem à elite agrária local, mas diferem em estilo e método. Mendonça, esboçado como um lobo em pele de cordeiro, representa uma ameaça velada que Paulo neutraliza com frieza num episódio marcado por simbolismo: o sacrifício de um carneiro no mesmo dia da morte de Mendonça. A linguagem do romance recorre frequentemente a imagens animais para caracterizar os personagens, fundindo aparência e instinto como elementos estruturais da narrativa de poder.

A brutalidade das relações sociais, muitas vezes encenada sob uma aparência de civilidade, estende-se até o espaço religioso: a morte de Mendonça é anunciada dentro da igreja, mas o tema da conversa ali gira em torno do preço de um sino, e não de luto. Por fim, este bloco do romance apresenta, ainda de modo discreto, a figura de Madalena — mulher letrada e urbana que futuramente se tornará esposa de Paulo Honório. Sua entrada em cena, contida e sugestiva, sinaliza a emergência de um outro regime de sensibilidade, ainda alheio à lógica patriarcal dominante.

が連邦議会に送り込んだ者たちを見てみろ。なあ、マガリャンイスさん？」

マガリャンイス博士は黙ったままであった。

「政治のことは分からない。単なる裁判官なのでね。学びを深め、本のページをめくる。それだけ。早起きをして、小さなカップでコーヒーを飲み、髭を剃って、シャワーを浴びる。それから庭を散歩して戻って来ると、のんびり雑誌を読んで、腹が空くので昼食を少しとる。一時間休んでから、執筆をしたり師の書を繙いたりする。夕食後は町をぶらぶら歩き、夜には訪ねてくる友人がいれば迎え入れ、そして寝る」

グローリアさんは思わず口を挟んだ。

「そのとおりだわ。健康は大事だから」

ジョアン・ノゲイラはいたずらっぽい表情を浮かべた。

「もちろん健康は大事ですよ。でも、言いかけましたが、それが寡頭政治だったことは一度もない。人間が多すぎる」

「そんなに大勢いながら、野党が大声を上げている。もし人数が少なかったらどうなるか。騒ぎは収まらないでしょうね」

「どうして？」

「上に立つ者の多くが下回されると不満が高まる」

弁護士が窓辺に寄って来たので、私は彼の耳元で囁いた。

「彼は判決を約束してくれたのか？」

ジョアン・ノゲイラはそうだと合図をした。私はその場を離れた。

「ノゲイラ博士、あなたとは意見が噛み合いませんな。共和政はやって来る。我々にあるのは正義だけだ。考えてみてほしい」

「私はただの裁判官に過ぎない」マガリャンイス博士は言った。「学びを深め、文豪たちの書を開く……」

私はその話が終わるのを待って、もう一度暇の挨拶をし、そこを去った。

町を上の空で歩きながらも、金髪の女の瞳にうっとりとし、どんな名前なのか偶然にでも分かれば嬉しいのにと思っていた。そんな偶然は訪れなかったので、ジョアン・ノゲイラのもとを訪ねることにした。名前、身分、家族など、本気で想いを寄せる人に関する不可欠な情報を得るために。十時に『クルゼイロ紙』の編集室を覗くと、そこにいたのはアルキメデスだけで、植字作業をしていた。ソウザのビリヤード場に出向いた。しけた客が一人いるだけで、ほかに客はいなかった。

「ノゲイラ博士なら、エルネスチーナの家にいるはずです」

私はエルネスチーナの家がどこにあるのか知らなかった。夜中近くになって、ホテルでアゼヴェード・ゴンジンと詩について議論をする弁護士を見つけた。何か学ぼうと一時間ばかり耳を傾けたが、成果はなかった。

「ノゲイラ博士、時間はないか？　少しだけだからな、ゴンジン」

しかし、あの繊細な話題を切り出すのに気後れした。ノゲイラもあの金髪の女にちょっかいをかけているかもしれないと思い、自分が滑稽になるのが心配だった。私は嫌な気分になって、ペレイラの裁判について詳しく教えてもらうことにした。

した考えを持っていなかったからだ。

「人は目にするものに慣れてしまう。自分も物事を理解するようになってから、選挙民や投票箱を見てきた。その選挙民や投票箱が無用になることもある。本があれば十分だ。それでも、市民が政府を動かせると信じるのは悪いことではない。実際には影響力はないけれども。農園の一番でき損ないの使用人でも、自分が辞めてしまえば仕事が止まると信じている。私は幻想を育てている。それでみんな興味を持つ」

ジョアン・ノゲイラがすぐに反応した。

「自分が思うのは、代議員も上院議員も役立たずの食いしん坊だということです」

私は言い返そうとしたが、マガリャンイス博士がもぞもぞしているのが目に入った。言葉は喉まで出かかったままになった。彼が自制すると、二人ともしばらくその状態が続いた。そのとき、金髪の女が大きな青い瞳をじっとこちらに向けていることに気づいた。

私は女をいたく気に入っているのが不意に分かった。まさに想像していた女と反対で、驚くほど好ましい。小柄で、華奢で。マルセラさんは見事な雌牛だ。大きな胸に、大きな尻に、あのうなじ！

沈黙が続いていたのでノゲイラに言い返したものの、金髪の女に向けて言ったのも同然だった。

「無駄なものなのに、手放さず持ち続けているものがある。私はこのパイプを持っているが、無駄どころか、体にも悪い」

パイプに煙草を詰めた。

「率直に言って、パイプが無駄なのかどうかも分からない。無駄じゃないかもしれない。だから、選挙に行くわけだ。博士は絶対に法律をなくしたくないでしょう」

法律文が空気のようなマガリャンイス博士は気を悪くした。

「なんとまあ」

「いや」ジョアン・ノゲイラが言い返す。「議会のそんなものはほとんど使えないものばかり。なくすべきものは議会だ。法律は専門家が作るべきでしょう」

「はあ」マガリャンイス博士がほっとして息をついた。

法律にしろ政令にしろ、しかるべく紙の上に書かれればすべて同じだった。彼は足を組んで頷き、下唇を前に突き出すと指を立てた。

「我々に必要なのはエリートだ」

「まさに」ジョアン・ノゲイラが調子を合わせる。「寡頭政治です」

しかし、マガリャンイス博士はその言葉に反感を抱いた。

「いや、それは違う」

「なんだって？」ジョアン・ノゲイラは叫んだ。「政府にいられるのは少数のエリートのみ。これが寡頭政治だよ」

「じゃあ、それに対して新聞や集会でがなり立てる以外に、野党は何をしているとでも？」私は訊ねた。

「野党自身、何を言っているのか分かっていない。我々に寡頭政治などあるだろうか？　金食い虫が山ほど権力を持っている。議員どもが！　それに、大臣、議長、州統領、書記官、南部の政治家も。欲深い連中が宝を食い尽くしてやがる。なんとも悪い奴らだ。我々

（二三）

「二週間って十五日じゃないの？」マルセラさんは訊いた。

「違う。二週間は十四日だ」

マルセラさんは腑に落ちない様子である。

「二週間は十五日だとずっと思っていたわ」

「そう耳にする」マガリャンイス博士が言った。「何度も耳にしている。でも、間違いだ。一週間は七日ある。七と七を足したら十四じゃないか。そうだろう？　十四だ」

ジョアン・ノゲイラは本を放った。マルセラさんは映画館に行った日も計算に入れているのだろう。

「かもしれないな」マガリャンイス博士は同意した。「それを入れなければ十四だな」

「でも、入れたら十五になるでしょ」マルセラさんが叫んだ。

「入れない方が良い」マガリャンイス博士は助言した。

みんなが沈黙を破ると、金髪の女が立ち上がろうとした。

「早すぎるわよ」マルセラさんがそっと言い止める。

黒服姿の婦人は座ったまま小説について語り出した。マルセラさんはちょうど一冊、冒険小説を読み終えたばかりだった。あらすじを思い出そうとしたが要領を得ず、登場人物の名前を正確に言えなかった。もう一度試みたが、やはり舌がもつれた。

「素晴らしい小説なのよ、グローリアさん」

「文学は好まない」マガリャンイス博士が言った。「昔は何冊か目を通したものだが、今はもう読まなくなった。何も分からん。自分はただの裁判官だからな、ただの」

マルセラさんは冒険小説のあらすじを思い出しつつあった。グローリアさんは耳を傾けていた。金髪の女は手を組んで頭を傾けていた。美しい手、美しい頭。

「判決を下すとき」マガリャンイス博士が言う。「ほかのことを考えずに感情を払いのける」

「昨日の午後、ノゲイラ博士とそのことを話題にしたところで」私は話を遮った。

マガリャンイス博士は礼を言った。

「そんな風にするには、自立心が求められる。自分には自立心がある。彼らが何をしてくれるっていうのか。誰も必要ない」

マガリャンイス博士が誰のことを言っているのか分からない。ジョアン・ノゲイラが彼の肩に触れて耳打ちをした。ペレイラの件だと気づいた。

私は立ち上がってその場を離れ、裁判官の公正さを傷つけず、道理をわきまえようとした。窓辺に行ってパイプ煙草に火をつけた。マルセラさんは小説の話を終えかけていた。弁護士は満足げだ。私はパイプ煙草を噛みしめ、両手を強くこすり合わせた。

「さてと。党の候補者名簿について教えてくれないか。候補者は誰も知らないが、二、三人の度胸ある演説家だと思っている」

「真に受けているのですか」ジョアン・ノゲイラが訊いた。

「何を？」

「選挙だとか、代議員だとか、上院議員といったものですけど」

私は言葉に詰まった。というのも、それらのことに関して確固と

第十二章

ペレイラの件は公証役場で眠ったまま、裁判官が訴訟書類に署名するのを待っていた。ジョアン・ノゲイラがそれを伝えてくれたのは、ある午後のことだった。それで、私はペレイラの件とマルセラの美貌とを結び付けると、翌日に町へと降り、マガリャンイス博士を訪ねることにした。

日暮れ時、仕事部屋を兼ねた大広間で彼に会った。そこには娘と三人の訪問客がいた。ジョアン・ノゲイラ、背が高くて細身の年老いた黒服姿の婦人、金髪で美人の若い女である。

男と女の二つのグループに分かれて、みんな黙っていた。

マガリャンイス博士は小柄で、大きな鼻にパンスネを掛け、その奥には笑みを浮かべた小さな目があった。薄い唇はきゅっと結ばれている。マガリャンイス博士が自分のことを話す際に、ようやく開かれる。その話題が始まると止まらない。

ところが、そのときはすでに言ったとおり、沈黙が流れていた。マルセラさんは金髪の若い女に微笑んでいたが、この女も白い歯を見せてにっこりしていた。二人を見比べた瞬間、今回の訪問の重要性が五十パーセント薄らいだ。

それで、マルセラさんから視線を外し、裁判官から弁護士に必要不可欠な判決をそれとなく引き出そうとした。

マガリャンイス博士は額に手をやって訊ねた。

「あなたはどの新聞を講読しておられる？」

私は農業雑誌、党の機関紙、『クルゼイロ紙』、『ガゼッタ紙』だと答えた。アゼヴェード・ゴンジンを称え、ブリットを非難した。

「厚かましい男ですよ」

マガリャンイス博士は口を噤んだ。ジョアン・ノゲイラは二段構えの本棚へ行って本を抜き取ると、また腰を下ろして読み始めた。

部屋の向こう側では、途切れ途切れの微かな笑い声が聞かれた。必要に迫られて考えてみると、男と女が分かれて生活をするこの習慣は奇妙なものだった。理解し合うときは、たいてい性に関する理由によって起こる。それゆえに、清廉潔白な言動の中にも行き過ぎた邪心が生まれるのかもしれない。私が女性に話しかけると、彼女は縮こまって体を震わせる。身を竦めたり、身震いしたりしなければ、無関係の男が邪なことを考えるのである。

「近頃は映画館でお見かけしませんね」黒服姿の婦人が大きな声で訊ねた。

「十五日よ、グローリアさん」マルセラさんは答えた。「十五日だと思うわ。ねえお父さん、どのくらい前から映画館に行っていないかしら？」

マガリャンイス博士は計算した。ポケットから煙草を取り出すと、それを二本にちぎって細い煙草にしてから火をつけた。

「二週間だな」

「そうそう、十五日よね」

「いや」マガリャンイス博士は同意しない。「二週間だ。お前は間違っている」

（二一）

悪いところといえば、かなりの厚化粧と、やたらにシューシューと発音する癖のある話し方だった。我慢だ。完全なのは神しかいない。

マガリャンイス博士のもとへ向かおうか迷っていたそのとき、二百ミルヘイスを借金したいとの手紙がコスタ・ブリットから送りつけられてきた。

コスタ・ブリットは人間が変わっていた。いつも熱烈に政府を称賛していた『ガゼッタ紙』が州議会議員の職をめぐって野党へ流れると、行政がぐだぐだに混乱し、無能な人間に任されていることをブリットが明るみにしたのだ。与党に投票したものの取るに足らない存在でしかない私たちには、不平、嫌悪、軽蔑の目を向けてきた。この間、つまらない四行の記事の代わりに私が州都へ出向いたとき、カフェでビールを飲みながら苛々する『ガゼッタ紙』の編集長に、また五十ミルヘイスを無心して来た。

「ただで新聞に寄稿したいだと。地獄に落ちろ！　受刑者のように一生かけて記事を書き、嘘までついて、あいつらを出世させてやっているのに。経費でどれだけかかっているのか。紙代だけでも。それに選挙になったら恩を仇で返しやがる。読み書きのできない無能な馬鹿市長でも簡単にのし上がる。賛辞の言葉が欲しいんだ。勝手にしやがれ」

ブリットのことは必要ではなかったが、以前世話になったこともあって金は渡した。それに、報道関係の人間と揉めるのも好まなかった。そのあと、厳しい状況にあることを伝えて、もう出せる金がないことを仄めかした。

しかし、ブリットは駝鳥の胃袋のように底なしにがめつく、その知らせを無視して手紙を何通も寄越してきた。泣き言から始まったかと思えば、終わりの方は要求になっていた。私の結婚計画を含む手紙には脅し文句があった。金のことは電報で断った。『何度言ってきても無駄だ。もううんざりだ』

物書きを支えるために汗水たらして生きるなんてまっぴらごめんだった。私が父親とでも言うのか？

「自分の尻は自分で拭け。節度ある妥当な無心ならたまにはいいが、脅迫や恐喝は論外だ」

新聞で一体どんな風に私を批判しようというのか。公務員ではない私と政党の関係は、選挙民の勧誘、公式の候補者名簿の手渡し、州統領の歓迎会での音楽と花火への資金提供ぐらいのものだ。『ガゼッタ紙』の毒など私には効かない。ただ、こちらの個人的な商売に手を出してきたら話は変わる。その際は、棒を取って、ブリットの肋骨を折ってやるしかない。

そんな乱暴な考えを抑えて、またマルセラさんの化粧とシューシューという発音について考えようとした。思い浮かべられたものの、時おり遠ざかって行った。その合間には、マルシアーノ、子どもたちを連れたホーザ、ルイス・パジーリャ、コスタ・ブリットが現れた。

私は二人に暴言を浴びせると、荷物をまとめるよう指示し、地獄に行けと言った。

「私の土地では許さん」もう喉が枯れている。「どこかに行け！守るべき道を踏み外す奴はいない。がらくたを拾って出て行け。こんな教師がいては弱ったな、困ったものだ。この恥知らずが生徒たちに何を教えているのか、見ただけで分かる」

ところが、その後ぐちぐち泣き言を零しながら、パジーリャは学校がまともに運営されるようすべての聖人たちに誓った。多くの子どもたちが「知恵のパン」を知らないまま放っておかれるのは心が痛むとも言った。理論のことは、ただの時間つぶしとカジミーロを揶揄するためだった。

「自分がそんな無謀なことを信じると思いますか？　革命的な思想を広められるとでも？」

翌朝、泣き声まじりにたどたどしく訴えるホーザが、五人の子どもを連れて私の果樹園にやって来た。三人はスカートにしがみつき、一人は腕に抱えて、あと一人はお腹の中にいた。彼女に対して何か言える力もないので、彼女を宥めるほかなかった。

「マルシアーノをここに寄越したらいい。あの野郎を。それじゃあ、また」

夜、食堂にマルシアーノとパジーリャを呼んで、お前たちのために働いているのは私の方だと分からせるべく、長い説教を垂れた。しかし、言い淀んでしまい、彼らを罵るだけになった。

「恩知らずの馬鹿どもが」

二人は怯え、私はこき下ろした。

「鶏並みの頭の悪い奴が。間抜けなことをしやがって。愚か者どもが」

忠告をした。私が落ち着いたと見るや、ルイス・パジーリャは言い返そうとした。こちらがまた怒鳴ると、彼は自分が正しくないことに納得した。マルシアーノは委縮して肩を竦め、体の中に頭を沈めようとしていた。亀のようだった。パジーリャは爪を噛んでいた。

「今回は目をつぶろう。でも、お前たちが浮かれていることが知れたら、警察署長を呼ぶぞ。ここはロシアじゃないんだ。分かったか？　じゃあ、失せろ」

二人は逃げるように姿を消した。しばらく苛々を引きずったが、じきに収まった。

「何もなかったと思えば良い」

戯言が。こんな馬鹿はどいつもこいつも寝てばかりで、無駄にしゃべる。

「ホーザの夫マルシアーノはそうでもないのに気の毒だな。家畜の世話をよくするのに」

パジーリャについては、農園が良くなっていくのを見せつけて侮辱することに喜びを感じていた。

そして、本章の冒頭で言及した女のことを頭の中で改めて整理し始めた。メンドンサ、ガマ、ゴンジンの妹（その名前すら知らなかった）に加えて、マガリャンイス博士のところのマルセラさんのことを考えた。マルセラさんは肉付き良い美人だった。あの目！

（一九）

青錆びの汚れを砂と灰で落とした。それで食い繋いだ。マリガリーダはこれまでずっとその平鍋を使ってきた。あるいは、使われたのは彼女の方か。今はすっかり衰えて菓子作りもできず、あれはもうまったく要らないものになってしまった。

「わかったよ、マリガリーダ婆さん。前のものと同じ平鍋を持って来るから」

第十一章

ある日、結婚することを考えながら夜を明かした。それは特定の女といった刺激も何もなくふと思いついたことだった。恋や愛に疎いことにはお気づきだろうし、女というものが奇妙な生き物で、もて余す存在だといつも思っていた。

私が知っていたのはマルシアーノの妻ホーザという至って平凡な女だ。ほかにも、ジェルマーナやそれらしい女とも知り合った。これらの女がすべてだと考えていた。そのために、誰にも心が傾いたと感じることはなかった。私が抱いていたのは、サンベルナルドの土地の跡継ぎを育てたいとの望みだった。

背が高くて、健康的で、黒髪の三十歳の女を想像しようとしたが、すぐに止めた。私は想像力に欠けるし、今言った理想が際立つばかりで、完全な一つの形になることは一度もなかった。これまでに知り合った女たちのことを思い出した。ガマ家のエミーリア・メンドンサさん、アゼヴェード・ゴンジンの妹、裁判官を務めるマガリャンイス博士の娘マルセラ。

そのとき、予期せぬ小さな問題が起こった。ある午後、礼拝堂（塗装を除いて工事は終わっていた）の側壁で、驚いたことに、ルイス・パジーリャがマルシアーノとカジミーロ・ロペスに演説をぶっていた。

「いかさまだ。これは哲学者たちが明確に証明しているし、本にも書かれている。ほら、一レグア以上の土地、家々、森林、池、家畜。それがたった一人の男のものだぞ。まともじゃない」

気怠そうな混血のマルシアーノは喜んで小躍りし、前歯のない歯茎を見せていた。

「パジーリャさん、そのとおりですよ。俺は学がなくて分からないけど、そのことを考えると眠気も飛んでしまう。他人のために命まで削っているんだから。なあ、カジミーロ。あんたもそう思うだろう？」

カジミーロ・ロペスは鼻のしわを寄せて、この世界ができてから、万物には持ち主がいるものだと言った。

「持ち主だって？」パジーリャが叫んだ。「ここにあるのは、他人を金持ちにするために働いて死ぬことだ」

私は聖具室から出て怒鳴った。

「誰のために働いているだと？　誰のために？　この寄生虫が、怠け者が、クズ野郎が！」

「何でもありませんよ、パウロさん」パジーリャはおどおどしながら弁解した。「若い者にちょっとした理論を話していただけで」

「斑点がある。でかい歯に、でかい足、それに爪ときたら！　ああ、恐ろしい」

パジーリャはカジミーロ・ロペスに説明を繰り返すように言い、新たな特徴を自分で加えていった。カジミーロ・ロペスは反発したが、パジーリャの知識を信頼して妥協した。間もなく、ジャガーはかつて見たこともない動物になっていた。

「なあ、カジミーロ。神父に手紙を持って行ってくれないか」

マルガリーダを連れて来ることが難しい中、シルヴェストレ神父が関心を寄せてくれたことに私は感謝の手紙を書いた。彼女は数日前に着いていて、バナナの木に囲まれた小さな家に泊まっていた。

カジミーロ・ロペスに手紙を渡すと、帽子を取って、二度目の訪問となるマルガリーダに会いに行った。二度目である。坂を下った。池の堤防を横切ったとき、マガモとレンカクの群れがいて酷く驚いた。最近降った雨で池の嵩が増し、水草の群生が排水路を詰まらせようとしていた。綿繰り機と製材所へ流れ込んだ水は溢れていた。製材所も綿繰り機も動かなくなった。無駄な一日となった。

マルガリーダは筵に腰を下ろして、炭でレンガに線を引いていた。

「マリガリーダ婆さん、ご機嫌はどうだろう」

凝った背中を伸ばそうとする際、こちらに白眼をこちらに向ける前に、声で誰か分かったようだった。

「そこかしこ辛いことばかりでね、罪の意識に苛まれて」

罪だとは。かつては聖人のようであったのに。それが今や、小さく縮こまって、動いたり、考えたりすることも減ったのに、どんな罪があるというのか。目があまり見えなかったので頭を上げずに話し、私が子どもの頃にかけてくれた言葉を繰り返した。老いて弱った姿に心が締め付けられ、彼女のそばに寄って筵に座った。

「マルガリーダ婆さん、ずいぶん探しましたよ。忘れたことなんてありません。会えて良かった。何か必要なものがあれば言ってもらえませんか。すぐ取りに行かせるので。マルガリーダ婆さん、遠慮しないで」

驚いた様子で、椅子、小さなテーブル、電灯、隣の部屋の家具を見た。

「何のためにそんな贅沢を？　自分のものをしっかり持っていなさい。役に立つかもしれないんだから。ベッドでは寝ないよ。与えてばかりいると、助けを求めることになる」

「そんなこと構いませんよ、マルガリーダさん。大人しくして、ゆっくり寝れば大丈夫だから。火をつける薪が足りなくなったら、知らせてほしい。夜は冷えるから、火が消えたままにはしないように」

「要るのは火だね。火と壺」

マルガリーダは背を丸めたまま、地面に何やら図を書き続けた。開いた襟元から白と青のロザリオが見え、それが皺だらけの垂れた胸に当たっていた。

「それに平鍋も欲しい。前のものは盗まれてしまってね」

私は古い平鍋を思い出した。むかし一緒に住んでいた小さな家で一番大切なものだった。何年もの間その周りで作業をして、洗い、

ら、ブリットの酷い文章について静かに批評していた。

「私が理解できずに奇妙に思ったのは、神父がこんなつまらない理由で落ちたことです。当選したも同然で、認められて、就任を控えていたのに、突然『どさっと』転げ落ちました。どうして？」

「シルヴェストレ神父は革命家です」ジョアン・ノゲイラが説明した。「乱暴な方法で国を救おうとしています」

私は身震いした。手に煙草入れを持っていたカジミーロ・ロペスが煙草に火をつけた。月が真っ白だった。森の一部が遠くに見え、ノウセンカズラの黄色い花が鮮やかだった。

立ち上がってジョアン・ノゲイラに合図をし、窓辺へ近づいた。

「なあ、ノゲイラ博士。ペレイラが落ちたって話は本当なのか、教えてほしい」小声で訊ねた。

ジョアン・ノゲイラは葉巻を受け取り、疑いの余地は一切ないと言った。

「州統領は妥当な出方で、神父を評議会に入れる取り決めを提案しました。ペレイラは神父に賭けて負けてしまったのです」

「よし、ノゲイラ博士」さらに息を押し殺して言った。「ペレイラとの交渉に決着をつけるときが来たと思う。静かに見守り、機会を探っていた。偉いのは向こうだからな。でも、倒れたんだったら終わりだ。白髪みたいな借金を数えてまごまごしている。清算しよう。担保ができないか調べてくれないか」

「もちろんです」ジョアン・ノゲイラは同意して、興奮気味に言った。「もちろんですとも！　委任状を書いて渡してください。あなたは党に大きな仕事をしますよ。ペレイラを絞り上げましょう、パウロ・オノーリオさん」

第十章

聖人の日になると、旅や病気や口実がもろもろ出てきて、ここの働き手たちが仕事をさぼる。日曜日はなくなり、土曜日も市場のために失われる。週はたった五日しかないが、教会がさらに減らしてしまう。結果として報酬は下がり、この連中は腹を空かせて過ごすことになる。

ある嘘の祝日、人手が見つからずに池から水草を取ったり、家畜の檻の一部を掃除したりできなかったので、パジーリャとカジミーロ・ロペスがジャガーについて話しているのをぼんやり聞いていた。

二人の意見はすれ違う。沿岸部出身の痩せたパジーリャはよく話し、荒々しい行為を褒めそやす。カジミーロ・ロペスは片足が不自由で、語彙力も乏しい。本を使うという理由で初等学校の教師を優れた存在だと考えているが、どう思っているかを示すには目を大きく見開いて、口笛をそっと吹くのである。吃音持ちだ。奥地では何時間も黙ったままで、楽しいときには牛追いの節を歌った。言葉については数語しか分からなかった。近頃、町の人々の話を聞いて幾つか言葉を覚えたが、場違いな使い方をしたり、意味を歪めて使ったりしていた。その日、どれほど頑張ってもカジミーロ・ロペスが言えたのは、ジャガーは怖くて騙し上手だということだけだった。

「報酬はわずかで、本を買うにも足りません。でも、仕事に来ようと思います。教育に関わることだし、教職に向いていますから」

ヒベイロさんは『ガゼッタ紙』のページをめくりながら、唇を動かし、身振りを交えることもあった。

その新聞は下品だった。そして、金の無心をするブリットには我慢ならなくなっていた。

アゼヴェード・ゴンジンは二レグアも歩いて疲れたせいで、欠伸をしながら伸びをした。

「ところで、ペレイラの立候補者たちは落選したんですよね？」

市議会選挙のことだった。

「興味ないな。幽霊候補者なんて！」

本当に応援するなら構わない。選挙民を投票箱に送り込む代わりに、党に感謝してもらっていた。地元のくだらない詐欺はごめんだ。ペレイラがバナナの皮を踏んでいたら、もっと悲劇だった。落選して、別の候補者が現れて、新しい選挙人名簿に載るだろう。

「いい気味だ」パジーリャがぶつぶつ言った。かつて自身の農業計画を疑ったペレイラを許すつもりはない。「あいつは間抜けだ」

「不公平だな」ジョアン・ノゲイラが微笑みながら叫んだ。「これまでのペレイラは分別のある男だった。その慎重さを誰もが褒めていたのに。パジーリャが今になって間抜けだと非難するとは」

「いや」髭を触りながらアゼヴェード・ゴンジンが言った。「パジーリャだけじゃない。自分もだし、お前さんも。こんな状況の中で向こう見ずな真似をするとは。買収された連邦議会選挙があったら、行けば良い。でも今は、政府が投票を気にせず、シルヴェストレ神父を市長に担ぎ上げようとしているんだ。パジーリャには一理ある」

「どういうことだ」私は遮った。「ゴンジン、新聞で神父の立候補を支持しなかったのか」

「支持しましたよ。政治的連帯という義務から。ただ、個人的には合いませんでした。そこにいるノゲイラが証言してくれますよ。それに、馬鹿げたってことは文字どおりですから」

市が『クルゼイロ紙』に払っていた月々百五十ミルヘイスの補助金について、シルヴェストレ神父が打ち切ると話していたのは知っていた。ゴンジンはこの脅しが不愉快でならなかった。それで怒り狂って神父を支持し、その徳性を褒め称える一方で、それ以外のことに目をつぶったのだった。

「なんてことだ。善良な人間だけでは足りない。お人好し過ぎて、耳にしたら何でも信じて、若い七面鳥のように知性に欠けているし、貝のようにのろまだ」

「神父たちってものは！」ルイス・パジーリャが蔑んだ声で言った。彼は無神論者で、進化論者だった。私が農園から解放してやったあと、血なまぐさい思想を露わにして、貴族階級の根絶をひそひそ説くようになっていた。

「ごろつきどもが！」

そして、激怒して爪を噛んだ。

眼鏡をかけたヒベイロさんは鋭い目つきで不満げな仕草をしながら

（一五）

したら、ミサンガを頼んでくれ。それとあれは？」

「ステロ板。ステロ板とプレートです」

「そうだそうだ。婆さんを迎えるときに、ステロ板とプレートを取り寄せるようにしてほしい」

「学校のことを考えていまして」パジーリャがぼそっと言った。

「自分も」ジョアン・ノゲイラが私より先に口を挟んだ。「パウロ・オノーリオさん、マダレーナを誘ってはどうでしょう？　教養のある文句なしの女です」

「家だって華やかになります、パウロさん」アゼヴェード・ゴンジンが叫んだ。

「馬鹿なことを。飾り物を探しているとでも？」

パジーリャはいくぶん戸惑いつつ、取り上げられそうな骨に齧りついた。

「引き受けられないとは言っていません。仕事で忙しい、と言っただけで。報酬がいくらかって訊いたんです」

鶏肉の手羽を引き剝がすことに気を取られて返事をしなかった。

「報酬のことを訊いたんです」パジーリャが遠慮がちに繰り返した。

哀れな奴だな。なかなかのけちで鬱陶しいトコジラミのようだった。

「場合による。お前にどのくらいの価値があるか、私には分からない。月に百ミルヘイスくらいか。試しに百五十にしよう。住むところに食事つきで、楽しい会話もできる。月に百五十ミルヘイス、一日八時間労働だ。それでどうだ？　先に忠告しておくが、仕事は仕事だ。それに酒も駄目だ。ここで飲めるのは客だけだ」

「当然です」パジーリャはきまり悪そうにぶつぶつ言った。「考えましょう。酒についての忠告は無用です。飲みませんから。食事のときに飲むといってもいつもとは限りませんし、友人に強く勧められてたまに一杯くらいですよ。仕事は引き受けるかもしれません」

私たちは静かに夕食を終えた。マリア・ダス・ドレスがコーヒーを運んで来て、皿を片づけた。私は葉巻の箱を開けるとパイプ煙草に火をつけ、皆で居間へ移動した。

ヒベイロさんは『ガゼッタ紙』を広げた。私はぱっと部屋の隅に身を隠して、開いた扉から距離を置いた。窓は避けられなかった。閉めようと思ったが、動かなかった。見張り役のカジミーロ・ロペスが教会の未完成の壁に腰を下ろし、股の間にライフル銃を挟み、鼻を利かせながらじっと周囲を窺っていた。

「我らがパジーリャはサンベルナルドへ戻る」ジョアン・ノゲイラが言った。

「それで、本を書き終えるのか」アゼヴェード・ゴンジンが言葉を足した。「生活が安定したら、山ほど書けるじゃないか、パジーリャ」

「まさか！」

『クルゼイロ紙』に筆名で発表している短篇執筆のことを言われて恥ずかしく思った。それを話題にされると、揶揄われた気がして戸惑ってしまうのだ。パジーリャは姿勢を正すと、椅子、床、ランプに苦々しい視線を向けた。

「そうだ、二十五歳だ」

私は両腕を伸ばした。太陽の下で一日中、使用人たちと言い争って過ごして疲れていた。

「分かった、パジーリャ。二十五歳ってことにしておこう。夕飯は食うか、食わないか？　車で戻ればいいじゃないか。話があるんだよ、パジーリャ」

ルイス・パジーリャは伝言を聞いていたため、前の日から何事かと気になっていた。

「実はな、学校を作ってみたいと思っていて」

「素晴らしい！」顔がくしゃくしゃになるほどの笑顔でアゼヴェード・ゴンジンが叫んだ。「こちらの助言を受け入れてくれたんですね。教育ほど優れたものはありません」

弁護士は額に指を滑らせながら、学校は大いに役立ちますよ、とぼんやり言った。

私は肩を竦めた。

「さあな、信じられないな。だから、パジーリャの手を借りることにした。農業と牧畜業について相当の教育を備えた上等な農村学校ができるのは間違いない。でも、どこで専門家を見つければいいのか。それに金もかかる。今のところ、読み書きと計算だけだ。パジーリャ、それを任せても大丈夫か？」

ルイス・パジーリャは報酬のことを訊いて、今は仕事が忙しいと告げた。

電灯の明かりがぽつぽつと灯っていった。住民たちの家も明るくなる。あの向こうにあるボンスセッソ農園の柵の近くに集まっていたごろつき連中なら、電気で明かりを点けるなど想像したこともなかっただろう。真夜中まで明かりがある。なんと過ごしやすいことか！　それから、私は電話を設置するつもりでいた。

カジミーロ・ロペスが片足を引きずりながら近づいて来た。

「夕食にしよう。パジーリャ、お前さんを必要と思って呼んだのだが。忙しいって言うのなら仕方がない。食べようか」

夕食のとき、アゼヴェード・ゴンジンが今日の目的を明かした。マリガリーダ婆さんの居場所が分かったということだった。

「何だって、ゴンジン？　黙っていたのか」

アゼヴェード・ゴンジンはグラスを満たした。

「ジャカレー・ドス・オーメンスに住んでいます」

「それはどこだ？」

「ポン・デ・アスーカルに。今日、一通の手紙を受け取りましてね。ほくろ、年齢、肌の色、何もかも一致します。チーズ農家で暮らしているようで。『クルゼイロ紙』の広告はもう取り下げました」

「そうか。パン・デ・アスーカルに誰か知り合いはいるか？　ヒベイロさん、パン・デ・アスーカルに知り合いはいないか？」

誰もいなかった。

「なあ、ゴンジン。仕事ついでに神父に頼んで、マルガリーダさんを連れて来るようソアレス神父に手紙を書いてもらってくれないか。私も同行して、シルヴェストレ神父と話をしようと思う。移動中に怪我しないよう婆さんを用心して運ばないとな。それで彼女が到着

「そうだな」マッチ棒で爪をほじくりながら呟いた。

ジョアン・ノゲイラは責任感のある男だった。四十歳を過ぎた学士で、立派な禿げ頭をしていた。馬鹿騒ぎに首を突っ込むこともあったが、顧客に対してはしっかり仕事をした。年間四コント八百ミルヘイスを支払って、法律面でサンベルナルドの立て直しを手伝ってもらっていた。正しい見解を見せてくれるが、いくぶん学者気取りでもあった。彼のことを博士と呼んだ。馴れ馴れしく接することはできない。学問や狡猾さでは劣っていても、自分の方が優れていると思っていた。彼の才能には軽蔑すべき点があるようだったが、有益なので互いに相応の敬意を払っていた。

「パジーリャと一緒に来ましたよ」ノゲイラが言った。「歩いて。夕方の涼しい風が吹いて、気持ちの良い散歩でした。お話を伺いに来ました」

黙って彼を招き入れ、窓の方を見遣った。帳簿の上にはヒベイロさんの白い頬ひげと眼鏡があった。私たちは書斎に入った。月初めだった。金庫を開けると、二百ミルヘイス札二枚を弁護士に手渡した。ヒベイロさんは手を震わせながらきっちり帳簿記録をつけたあと、そっと場を離れた。ジョアン・ノゲイラは椅子に腰かけ、領収書を差し出し、鞄から書類を取り出すと、各訴訟の状況を説明してくれた。最初の訴訟で、四百ミルヘイスが有効に使われたと思った。ほかも順調だった。ただ公証人は信用できなかった。それに裁判所の執行官も。袖の下のことだ。

「さあ約束ですよ、ノゲイラ博士。先払いは一切しないでほしい。払うのは後だ。あいつらが誠意を持って取り組んだら最後に支払うように」

細かい退屈な情報を得ると、ヒベイロさんに幾つか指示を出し、軒先に戻った。ルイス・パジーリャがアゼヴェード・ゴンジンと一緒にまた足の話をしていた。

「誰の足のことを言っているんだ？」

「マダレーナの足です」ゴンジンが答えた。

「誰なんだ？」

「教師をしています。知りませんか？　美人ですよ」

「教養だってありますし」ジョアン・ノゲイラが口を挟んだ。

「美人だ」ゴンジンが繰り返す。「金髪で、三十歳かそこらでしょうよ」

「いくつだって？」ジョアン・ノゲイラが訊ねた。

「三十歳か、そのあたり」

「二十歳だろう、せいぜい」

「お前さんは近くで見たことがないんだな」ゴンジンが割り込む。「もし見たことがあったら、そんな馬鹿げたことは言えない」

「いやいや。マルセラの誕生日にマガリャンイスのところで、すぐそばで見た。二十歳だ」

「見たのが夜だったからだ。午前中なら違う。三十歳だ」

パジーリャは、小川の畔に生い茂る牧草を食む若い牛の群れや、カモたちが泳いでいる池を悲し気に眺めながら、ふっと息をついて、二十五歳じゃないかと言った。

ゴマの収穫をさせてみろ。収穫がどうなるか見ものだ」

テーブルの席を立つと、くすんだ目をしたパジーリャが小声で五十ミルヘイスを求めてきた。

「一トスタンも出さん」

それから、私は州統領殿に製材所と綿繰り機を見せ、家畜小屋へ案内した。圧搾機、発電機、鋸、ダニ駆除用の薬液について手短に説明をした。そのときふと、学校があれば州統領の好意を得て、私の要請に便宜を図ってもらえるかもしれないと思った。

「そうですね。州統領殿が次にお越しの際には、読み書きのいろはを学ぶ人たちをご覧になれるでしょう」

そのあと、私たちが教会の基礎工事のところで景色を眺めていたとき、弁護士をそばに呼んだ。

「なあ、ノゲイラ博士、パジーリャを明日ここに寄越してくれないか。話があるのだが、あいつときたらふらふらしてばかりで。頼んだからな。明日、あいつの酔いが醒めたときに」

州統領が暇を告げると、その日は記憶に残るものとなった。自動車が道路を走った。土埃が巻き上がるのを見ながら、両手をこすり合わせた。

「よし！　この訪問のおかげで大きな恩恵を受けられる。資本がある。どれほど稼げるか楽しみだ」

実は自信があるように装いながらも、債権者たちに怯えていた。順調だったのは確かで、資産が負債を上回っていたが、あの悪漢どもが望めばタマを取られてしまう。そんな不安も今は和らいだ。学校は資本になる。教会の基礎工事も資本だった。

ひたすら両手をこすり合わせた。よし！

それから、メンドンサ一家を守ることにした。私の人生がうまく回り始めたのも、一家の父親が亡くなってからである。黒くて肥沃な粘土質の土壌は私にとって非常に価値があった。今では取るに足らないものになったが。

メンドンサ一家のことが気の毒だった。ボンスセッソ農園の綿花畑が雑草に覆われて土地が痩せ衰えているので、翌日に除草させるつもりだった。ずいぶん落ちぶれてしまったものだな、メンドンサ一家は。父親は恥知らずだったが、娘たちに何の罪があろうというのか。非情な隣人たちに彼女たちのものを奪われないように用心することに決めた。女たちは自分で自分の身を守ることがほとんどできない。どこぞのならず者が手を掛けようとでもすれば、私が相手になってやろう。

第九章

翌日、畑から戻って来ると、軒先にジョアン・ノゲイラ、パジーリャ、アゼヴェード・ゴンジンがいて女の脚やら胸やらを称賛していた。彼らは話の調子を変えた。

「教養のある、知的な女だ」ジョアン・ノゲイラが言った。

「それに真面目でね」アゼヴェード・ゴンジンが付け加えた。

パジーリャは胸や足に比べれば、長所でもないと思った。

（一一）

ころが、今はご覧のとおり。お気に召さなければ、我慢をするか、裁判に訴えるかすれば良い」

裁判には費用がかかるので、誰も訴えはしなかった。それで道が開けたので、私は片腕が麻痺しているフィデリスの土地と、レシーフェで法律を学びながら遊び惚けているガマ家の土地に触手を伸ばした。裁判官のマガリャンエス博士のサトウキビ農園には手を出さなかったが。

こまごまとした暴力沙汰には気づかれず。より深刻な諍いについては、ジョアン・ノゲイラの詭弁のおかげで裁判でも勝訴が続いた。大胆な取引をして借金を抱え、機械を輸入した。あれこれ手を広げすぎだと非難してくる者たちを気に留めなかった。果樹栽培と養鶏を始めた。できたものを市場へ持って行くために、道路工事にも手を付けた。アゼヴェード・ゴンジンはこれについて二件の記事を書き、私を愛国者と呼び、フォードやデルミーロ・ゴヴェイアを引き合いに出した。コスタ・ブリットも『ガゼッタ紙』に寄稿して、私と地元の政治指導者を褒め称えた。それで、彼は私から百ミルヘイスをむしり取った。

こうした宣伝にもかかわらず、次々と困難が降って来た。私がサンベルナルドの土地を耕しているうちは順調だったが、四つか五つの農園を取り込んだ際、スズメバチの巣を突いたような襲撃を受けた。家僕を二人失い、待ち伏せの銃弾を受けた。軽傷で済んだものの、傷跡は肩に残っている。酷く苛々したので、コスタ・ブリットにもう百ミルヘイスを送り、ジョアン・ノゲイラとゴンジンを訪ねた。

「このくだらない奴らを何とかできないか。こちらがやっているのは公共事業で、税金を取り立てているわけじゃない。恥ずべきことだ。市からの援助があっても良いくらいだ。ノゲイラ博士、市長と掛け合ってくれないか。牛除けの溝のためにセメント樽を手配してもらえないか訊いてほしい」

セメントは受け取れなかったものの、牛除けの溝は作った。私の計画が膨大で変則的な方法を採ったために、心の狭い人たちに狂人だと思われ、放っておかれた。

その頃、州統領が訪ねてきた。池ができてから三年が経っていた。愚かなことだと、フィデリスは言う。

「小川か涸れずに流れているのに、何のための池なのか？」

そのとおり役に立ちそうもない代物であった。ただ、そこから引かれた水で綿繰り機と製材所を動かしていた。

州統領は果樹園、オーピントン種の鶏、綿花、トウゴマを気に入り、リムジン種の家畜に好感触を持って写真を要求すると、学校はどこにあるのかと訊ねた。私はどこにもありませんと答えた。シャンパン付きの昼食時に、マガリャンエス博士が演説をぶった。州統領はまた学校のことに触れた。口を挟みたくなったが、ぐっと堪えた。

学校だとは！　字の読み書きができるかなど、自分にはどうでも良いことだった。

「州政府の連中は頭のネジが緩んでいるな。教養のある人間にトウ

「ヒベイロさんは、自動車に足を轢かれたみたいですな。どうしてもっと早く動かなかったのでしょう？　災難でしたな」

第八章

この前、メンドンサの家で居合わせたあの不愛想な家僕も酷い最期だった。きれいさっぱりに。こうした連中はほとんどまともな死に方をしない。蛇にやられる奴、火酒に溺れる奴、自殺する奴。

石切り場で一人の男を失った。梃子が石から外れてそいつの胸を直撃して死んでしまった。妻を残し、幼い息子たちを孤児にして。みんないなくなった。一人は火の中に落ち、もう一人は寄生虫の餌食になり、最後の一人はジフテリアで斃れた。そして妻は首を吊った。

死亡率を下げて仕事の効率を上げるべく、火酒を禁止した。

新しい家の建築工事が終わった。どんな家か説明する必要はないだろう。大事な部分はもう語られたか、じきに語られる。それ以外は触れなくても構わない。興味を持つのはせいぜい建築家くらいだし、これを読むこともないだろう。何もかも快適で、うまく仕上がった。ハンモックで寝るのは当然やめた。家具やそのほか諸々を買って恐る恐る使い始めたものもあれば、使い方が分からずいまだに下ろしていないものもある。

ここで五年の時が流れる。その五年間で世界は幾度となく巡った。いま言及した障害の数々に躓きながらも、絶えず確信をもって振る舞い、躊躇うことなく正しい道を歩んできたことなど、誰も想像しないだろう。いや、そんな風に振る舞ったり、歩んで来たりしたわけではない。落ち込んだり、諦めたくなったりもした。困難という困難も避けてきた。紆余曲折だ。こんな生き方はまずいと思うだろうか？　実際のところ、自分の行動のどれが良くて、どれが悪かったのかまったく分からない。良かれと思ってやって損したことがあれば、悪しかれと思ってやって得をしたこともあった。ただ、常日頃からサンベルナルドを手に入れようと企んでいたので、そのためにとった行動は正当なものだと考えた。

神のおかげで、期待していた以上のものを手に入れた。ご存知のとおり皺は増えたものの、初めは離れていた信用も得て、利子が下がった。すると、商売も自然に広がった。自然に。苦労したかって？　まったく。商売が軌道に乗ったら、あとは順調に回る。軌道に乗らなかったら、じっと待てば良い。でも、運が味方をするとなれば、突き進むのみだ。馬鹿なことをやっても、賢明なことに変わる。人一倍の仕事をしても、成果の上がらない人たちをずっと見てきた。勘の鋭い怠け者たちがいることも知っている。彼らは好機が訪れると、それを広げる。口を開けてすべて飲み込むのだ。

私は怠け者ではない。当初から運に恵まれ、その後も自分に味方するように仕向けた。

メンドンサの死後、当然ながら柵を取り払い、サルスチアーノ・パジーリャの時代よりも奥へと押し込んだ。苦情はあった。

「奥様方、メンドンサさんは存命中にずいぶん悪さをなさった。と

（九）

で溢れていた。陸軍少佐の綿花畑も広大で、収穫時には全員で懸命に働いた。そして、黒人たちは自分が黒人であるとは知らず、白人たちは自分が白人であることも知らなかった。

ヒベイロさんが尊敬されるのも当然だった。市場で騒動があると、腕を振りかざしてこう叫んだ。

「味方ならついて来い」

そうして市場は終わり、騒ぎは鎮まると、みんな陸軍少佐の味方だったのでついて行った。

聖ジョアンの夜には、大きな篝火がヒベイロさんの家を照らした。ほかの家の前にも篝火はあったが、陸軍少佐の篝火には薪が大量に積まれていた。若い男女が手を取り合って篝火の周りを歩く。炭火で青トウモロコシを焼いていると、ラッパ銃のものすごい銃声が響いた。陸軍少佐はラッパ銃を持っていたが、その錆を落とすのは聖ジョアンの夜だけだった。

もっとも、そのような日々も遠い昔日のこと。

すっかり様変りしてしまった。人は生まれては死に、陸軍少佐の代子たちは成長して、鉄道で兵役に従事した。

集落は村に、村は町へと変わり、政治指導者、司法判事、検察官、警察署長がいるようになった。

製造機の導入で、陸軍少佐の木綿工場は役割を終えた。

神父がやって来て、礼拝堂を閉鎖すると美しい教会ができた。聖人の物語は子どもたちの記憶の中で忘れられた。

医者が来た。聖人を信じない。ヒベイロさんの妻は落ち込んで、

（八）

痩せ細って衰えた。

弁護士が事務所を構えたので、陸軍少佐の知恵がかすんだ。そして、数多くの訴訟が裁判所で起こされた。

町は実に急速な発展を遂げた。男たちはネクタイを締め、真新しい職業に就いた。牛車が狭い道でギーギー音を立てて走るのを止めた。自動車、ガソリン、電気に映画館。それに税金も。

若い男女はもう手を取り合って聖ジョアンの篝火の周りを歩いておらず、タンゴやフレヴォを踊っていた。

ある日、ヒベイロさんは自分の住む家が大きすぎることに気づいた。それを売って小さい家を買った。今や自由には一切の制限がなかったので、彼の権威は落ちていき、ついには消えてしまったのである。

ヒベイロさんには、サッカーをする息子とたくさんのリボンをつける娘がいた。時代遅れの場所だと思った二人は出ていった。ヒベイロさんは恥ずかしさのあまり引きこもった。一週間ほど思い悩んで、家財道具を処分すると子どもたちを探しに出た。それでも見つからず。娘は工場で働き、息子は軍隊にいた。

ヒベイロさんは州都に根を下ろした。救貧院に入院し、公園のベンチで寝泊まりをし、宝くじのチケットを売って胴元になったり、怪しげな会社の情報屋になったりした。十年後には『ガゼッタ紙』の経営責任者に帳簿係を兼ねて、百五十ミルヘイスを稼いでいた。それでも、友人たちへの無心は続けた。

彼が話し終えると、私は大声で言った。

「メンドンサに仇でもいましたか？」

「いやはや、そこら中にいましたよ。ダニのような仇たちが。シルヴェストレ神父、話を続けましょう。鐘はおいくらほどになるでしょうか」

第七章

ブリットの『ガゼッタ紙』が経営に行き詰っていた頃、私はマセイオでヒベイロという年取った男に会った。背が高く、痩せていて、背は曲がり、目の色はくすみ、頬髭をたくわえていた。ひと目で飢えている様子が分かった。帳簿係が必要だったので、気に入ったこの人をサンベルナルドへ連れて来た。ある程度まで心を許してあげると生い立ちを語ってくれた。さて、ここからは三人称に切り替えて、できるだけ言葉遣いを合わせよう。

ヒベイロさんは七十歳の不運な身の上だったが、かつては幸せな青年期を過ごした。住んでいた村の男たちは彼を見かけると帽子を取って会釈し、女たちは顔を伏せて「おお陸軍少佐様、我らが主イエス・キリストに祝福あれ」と呟いたものだった。

住民は手紙を受け取るたびに、何が書かれているのか教えてもらおうと訪ねた。ヒベイロさんは手紙に目を通すことで秘密を抱えていった。尊敬されていたのだ、陸軍少佐だと。

隣人同士が土地をめぐって争っていると、ヒベイロさんは二人を呼びつけ、状況を調べて境界線を定め、取っ組み合いになるのを防いだ。

陸軍少佐の知恵を誰もが信頼していた。実際、ヒベイロさんは無知ではなく、法律を、それも古い法律を暗記し、新聞を、古いものも含めて読み返し、オイルランプの灯りの下、発音するのも難しい謎めいた言葉が溢れる本で夜通しよく勉強をしていた。そうした奇異な言葉たちが出てくると、ヒベイロさんはその意味を説明し、住民の語彙を増やしていった。

ほかは確かに無知だった。

そんな無知な人が棒で殴打されたりナイフで刺されたりして、死体で見つかることもあった。公正なヒベイロさんは殺人者を探し出し、縛りつけ、町の留置所へ連れて行った。一方、遺族は陸軍少佐の庇護のもとに置かれた。

さらに、泣き崩れた少女が妊娠していることを告白することがあった。ヒベイロさんは色魔を見つけ出し、神父を呼んで、村の礼拝堂で結婚式を行った。男の子が生まれると、ヒベイロさんは代父になった。

陸軍少佐の決定に異を唱える者は皆無だった。その決断は有無を言わせないものだった。

村には軍人も裁判官もいなかった。神父が遠くに住んでいたため、ヒベイロさんの妻がロザリオの祈りを捧げ、子どもたちに聖人の物語を聞かせていた。すべての物語が真実というわけではなかっただろうが、あの当時の彼らは真実を気にかけていなかった。

小さなヒベイロさん一家は大きな家に住んでいた。家はいつも人

（七）

のだが。池の堤防の工事は進むどころか後退していた。そして石切り場には小さな人影がちらほら見えたが、六か月の作業は実を結んでいなかった。

丘の麓を牛車が通った。煉瓦を積んだ別の牛車とすれ違った。マルガリーダ婆さんはどこにいるのだろうか。サンベルナルドに連れて来られたらな。そろそろ百歳にでもなろうか。ずいぶんと年老いたものだな。

家僕たちがシャベルを洗って道具を片付けるまで、私はそこにいた。一人で佇んでいた。畑仕事をしていた者や池の作業員たちは次々に引き揚げて行った。

石切り場ではまだ爆発音が響いていたが、もう終わりかけていた。メンドンサのことを考える。ふてぶてしい男が。柵のこちら側の綿花は見事で、トウゴマも畑の周りに広がっていた。それに対して向こう側ときたら、チガヤと棘ばかり。あのいかさま野郎はどれほどの土地を盗んだのか。幸いなことに、互いの間には平穏な雰囲気が流れていた。表向きは。いずれにしても、急いで進めなければならなかった。

坂を下りて、食事に向かった。食べながら、カジミーロ・ロペスに小声で話しかけた。遠回しに話を切り出して、計画を示していく。カジミーロ・ロペスはその遠回しな言い方を遮って、計画に賛同してくれた。

準備に取り掛かった。扉を閉め、町にある各銀行と州統領宛てに書簡をしたためた。銀行には融資を求め、州統領には近くに工場群ができることを伝達し、輸入する機械類への免税を依頼した。実際のところ、融資は不透明だったので機械類をどう購入すべきか考えてもいなかった。ただ、もう手に入ったものだと思うようになっていた。

次に、リムジン種の子牛を手に入れられるか否かについて、サトゥバ農業学校に相談を持ちかけた。

作業が終わろうとしていたとき、家の周りから足音が聞こえた。体を起こして窓越しに外を覗いた。すると、男が指を鳴らしながらトゥバランをからかっていたのである。じっと見ていると、それはメンドンサの部屋に入っていったしかめ面の男のようだった。覗くのを止めて、カジミーロ・ロペスを呼びつけて代わってもらった。ハンモックに横たわってカエターノ親方のことや石切り場のことを考えていた。木槌、梃子、鋼の錐、火薬、導火線。

「向こうの連中ですな」ハンモックの端を揺らしながらカジミーロ・ロペスが呟く。

「間違いない」

翌日の土曜日、選挙民のために羊を屠った。日曜日の午後、投票を終えた帰り道、メンドンサは胸部肋骨に銃弾を受けてその場でくたばった。ボンスセッソの近くだった。現在、その場所には片腕の欠けた十字架が立てかけられている。

犯行時、私は町でサンベルナルドに建てる教会について神父と話をしていた。将来的に計画が順調に進めば、ということだが。

「これは酷い」事件が報じられると、シルヴェストレ神父が叫んだ。

（六）

沼地は埋め立てられ、蚊は一匹も残っていなかった。口を滑らせてしまったと後悔した。メンドンサが横目でこちらを見たところからすると、満足しなかったのだろう。眠れなかった昨晩のことにまた触れるので、私はぐっすりだったと繰り返した。どこか自信なさげで、定まらない表情をしていた。もちろん嘘だと彼は見抜いていた。

互いに下手な嘘をついていた。今一度、雇われの身の人生を話題にしたものの、つまらない結果になった。娘たちはうとうとし、メンドンサはしかめ面をした。

不愛想な家僕が部屋に入って来た。メンドンサは眉をひそめた。私は暇を告げようと思ったが、頃合いが悪いかと気になって座ったままでいた。自分のせいでできた気まずい雰囲気を和らげたかったのだ。娘たちから退屈に思われているのは間違いなかった。

「次の冬も今年のようだったら、何もかも駄目になりますよ。ここは泥沼になって、キャッサバの一本すら育ちません」

「そうでしょうな」メンドンサはそう応じたが、家僕に苛立っているのは明らかだった。その家僕は上目遣いに冷静な眼差しをこちらへ向けていた。

「それじゃあ、また」急に大声で言った。「選挙は日曜日ですよ。そうそう。一頭のうっ……（牛と言いかけて言葉を飲み込んだ。私に六人の選挙民しかいないことは誰でも知っていた）羊を屠りましょう。一頭で十分ですよね。よし、決まりました。じゃあ、日曜日に」

そうして家を後にしたが、もやもやしていた。おおよそこんな感じだったと思う。はっきりとは覚えていない。

前庭からサンベルナルドに続く近道を通った。なんてことだ。他人の土地を奪っておきながら、荒れ放題の小道にはトカゲばかりいて、歩けば茂みが顔に当たるとは。

大いに揉めた一帯を通り抜けた。去年見たところに柵はまだあった。メンドンサは土地を広げようと窺っていたが、思い留まっていた。一方、私はかつての境界線まで押し戻そうとしていたが、徒労に終わった。決定打となったのは次の事件のせいだ。サンベルナルドの家僕がメンドンサのところにいた製糖工場長の娘にちょっかいをかけたために、仕返しに有刺鉄線をペンチで切ってきたのだ。しかし私は柵を修理して、家僕と娘を結婚させた。

綿花畑に目を遣り、池の堤防に足を向けた。働いている者はほとんどいなかった。

丘を上った。私たちの家の土台は工事が済み、壁ができつつあった。急に爆発音が鳴った。ぞっとした。石切り場では、カエターノ親方が職人二人と一緒に岩をゆっくり切り崩していた。また爆発音が響く。胸騒ぎがする。小石が飛び散っていた。

あんな腑抜けた作業が終わるのはいつだろうか。情けないことだが、自分にはメンドンサを徹底的に打ち負かすほどの元手がなかった。こうして人手不足に悩まされていたので、金曜日になると土曜日に支払う賃金をどう工面すれば良いか困ることさえあった。

私は石工に幾つか訊いてみた。たった一人に。壁はまだ高さ一メートルしかない。多くの作業員を雇えば、工事は安上がりになる

（五）

の収穫は悪く、価格も低いままで、苦しい生活が何か月も続いた。命をつなぎ、どん底に落ちないよう気を張った。朝四時に起きて寝る間も惜しみ、大型ナイフと拳銃と弾薬帯を身につけて、晴れの日も雨の日も必死に働いて過ごした。休憩の合間に、マンジオカの粉をまぶした焼きダラの切れ端を食べた。夜はハンモックに揺られながら、仕事の細々したことをカジミーロ・ロペスに言って聞かせた。彼は疲れてうずくまりながらも耳を傾けていた。外にいる犬のトゥバランが吠えると、私たちは耳を澄ませた。

ある時、家の周りの足音に気づいて、窓越しに外を覗いてみた。真っ暗闇だったが、人影があるのは分かった。足音が近づいて来ると、トゥバランが吠えて唸った。

「またか」カジミーロ・ロペスが小声で言った。

翌日、メンドンサを訪ねると、落ち着かない様子で出迎えられた。投票のことを中心にいろいろと話をした。婚期を逃した娘に心遣いをして、妻の死を悼んだ。彼女は思いやりのある素晴らしい人で、確かに面倒見が良かった。メンドンサは驚いて、アレシャンドリーナ夫人とどこで会ったのか訊ねた。

「しばらく前ですよ。サルスチアーノ氏の農園の住み込みでした。畑で鍬を引いたものです」

娘たちは苦笑いをしたが、父親は私が自分の過去を包み隠さず誠実に語ったものだと思った。それから、近隣住民たちへの不満をこぼした（そもそもメンドンサと親しい人間などいなかった）。

「そこら辺には、お前さんのように田舎から出てきて偉そうにしている輩がいる。農作業をすることは不名誉でもなんでもない。わしが底辺の生まれだとしたら、それを否定しないといかん理由でもあるか」

恥を掻かせようとしていた。

「雇われ者だった？　別にいいじゃないですか。フィデリスなんて、農園主として立派になりましたが、昔は雌鶏泥棒でしたし」

メンドンサがまた悪態をついていたとき、その顔をじっと見た。自分が現れてから落ち着きなかったものの、それも徐々になくなりつつあった。近隣住民たちの非を気ままにあげつらって、ほかの現実を忘れているようだったが、私を丸め込もうとしているのかは判断しかねた。選挙の話を持ち出そうと窺っていた。しかし、うまく騙すどころか、やろうとしていたことを反対にやられていたかもしれない。だとすれば、私は疑われることなく済ませたのだから、メンドンサの演技は素晴らしい。あるいは、選挙の話のために来たのだと思わせられたら、うまく装ったのは私の方だろう。彼がそう考えたとすれば馬鹿な奴だが、違うのかも。私が本心を言っていると思って、あとで騙そうと考えたかもしれない。しかるに結果は次のとおり。同じ言葉と同じ身振りが繰り返され、同じ話を聞いているうちに、ボンスセッソの農園主を気に入ってしまった。

彼をじっと見続けていたが、それは本能的なものだった。はっとした。黄色く尖った犬歯を見せて欠伸をしながら、メンドンサは蚊を手で叩き潰した。弾のような蚊だ。酷い夜を過ごしたらしい。

私は石のようにぐっすり眠ったと返事をした。サンベルナルドの

（四）

私はメンドンサを囲む家僕と自分の家僕をさっと数え、「柵はこのままで」と告げた。節度を持って説明することだ。声を荒げたところで何も始まらない。

しまったと思った私は半ば後悔した。メンドンサのような偏屈者とは言い争っても割に合わないからだ。初っ端から言い負かされるのは気に食わなかった。

カジミーロ・ロペスが一歩前に出たので、私がその肩に手を置くと下がった。メンドンサは事を察すると、大袈裟なほど丁重になった。こちらもそれに応えた。ボンスセッソ近くにある杉を欲しがっていたので、それを譲ろうと持ち掛けた。相手が断ると、若いゼブの牝牛と交換してはどうかと提案してきた。私はインド産の家畜を飼育するつもりはないが、リムジン種やシュウィッツ種のことを熱く語った。ところが、メンドンサによれば、上等な品種は餌を食い散らかす上に、ダニへの耐性も弱くて快く思わなかった。肉屋に卸す牡牛ばかり太らせていた。

杉はどうだと繰り返したものの、彼はわなわなと体を震わせた。二人のやり取りはそっけなく、早口で交わされ、冷ややかな笑顔しかなかった。家僕たちも疑い深げな様子だった。私は胸の高鳴りを感じながらも、この本音隠しの行く末を考えていた。メンドンサはあご髭を掻いていた。

「境界線のことは、あとで解決できるでしょう。落ち着いて」

「分かりましたよ」メンドンサは受け入れた。

私たちはその場を離れた。そのあとも有刺鉄線を伸ばし、古い金具を新しいものに取り換えていった。メンドンサは遠くからわざわざ振り返ると、笑みを浮かべて充血した目でこちらを睨んでいた。

夕方に家へ戻ると、カジミーロ・ロペスが物憂げにやって来た。私がなにも言わないでいると、咳をして立ち止まった。レモンの木にもたれ掛かり、頭から離れない鬱々とした思いを追い払った。

「明日、家僕を四人連れて来て、ここの水たまりを埋めてくれ。それから、小川をきれいにして水が平地に流れ込まないように」

「それだけでしょうか」

水たまりを埋めさせ代わりにカエターノ親方を呼び出して、石切り場で作業させる方が良いかと思った。ただ、上の者としての立場がなくなるので指示は取り消さなかった。

「それだけでしょうか」カジミーロ・ロペスが繰り返し訊く。

私はそのほつれた髪の毛、狭い額、大きな頬、分厚い唇を伝って流れて来た考えを捕まえた。彼に一理あるかもしれない。慎重に行動しながら茂みを避け、行き先に注意を払わなければならなかった。壁が崩れ落ちて、あの穴だらけの家ときたら……。

カエターノ親方と石切り職人を呼ぶことにした。

いや、だめだ。頭を振って、その場しのぎの計画を打ち捨てた。

「それだけでいい、今は」

第六章

二年目はこんなんの連続であった。トウゴマと綿花を植えたもの

制崩壊後になされていることを踏まえると、オノーリオの独白は、すでに失われた秩序への執着と孤独のにじむ回想とも受け取れる。

今回の翻訳範囲では、オノーリオと政敵メンドンサの関係が物語の中心を成している。両者はともにコロネルとしての権威を備えつつも、外見や態度に違いがあり、メンドンサはまるで羊の皮をかぶった狼として描かれる。白い髭は羊の毛のようであり、黄ばんだ鋭い犬歯は肉食獣を思わせる。このような動物的な比喩は、外面的な穏やかさと内面的な狡猾さの二面性を視覚的に浮かび上がらせると同時に、政治的対立に潜む暴力の暗喩ともなっている。実際、メンドンサが暗殺される前日にオノーリオが選挙のために羊を屠る場面が描かれ、この行為は象徴的に政治の残酷さと犠牲の構造を示している。

こうした動物的な描写は、ハーモス作品における重要な文体的特徴のひとつである。代表作『乾いた人びと（*Vidas Secas*）』（高橋都彦訳、水声社）においても、人間と動物の境界が曖昧になる描写が繰り返されており、たとえば犬のバレイアは人間と同様の存在感を持ち、言語を持たぬままに「生きること」の本質を表現している。本作においても、忠実な部下カジミーロ・ロペスが猟犬のように描かれることで、支配と従属の力学が視覚的に示されている。さらに、教会でメンドンサが殺された報せが届いた場面において、議論の主題が霊的な悼みではなく鐘の価格にすり替わる描写も、宗教的空間ですら現世的利害に飲み込まれていることを印象づける。

最後になるが、今回の翻訳範囲で言及される「金髪の女」（マダレーナ）は、都市的で教養ある存在として、今後オノーリオの世界に変化をもたらす予兆をはらんでいる。現段階ではその輪郭はあいまいであるが、彼女の存在は、家父長的秩序と精神的閉塞に覆われた空間への静かな異物として機能し始める。（解題おわり）

（二）

第五章

「お前さんはこちらに何の相談もなく土地を買ってしまったようですな」柵の向こう側からメンドンサが怒鳴り声をあげた。

「どういうことでしょう？　前の地主は一人前の大人だったはずですが」

「そうですな」白いあご髭を伸ばしたわし鼻のメンドンサが答える。「ただ、厄介な案件に立ち入る前に情報を集めるべきだったかと」

「揉め事など望んでいませんよ。分かり合えますよ」

「お前さん次第だろう。今の境界線が仮のものっていうのは分かっていますよね。はっきりさせておくのは良いこと。自分のものは自分のものってね。柵を繕っても仕方がないよ。取っ払って、置くべきところに置く」

メンドンサ氏に伝えたのは、サンベルナルドの土地がずいぶん狭められたことだった。書類を見せるよう言ったが、納得を得られない場合、弁護士と測量士に来てもらう方が良いと勧めた。

「そうか。そいつらと手を組んで操ろうっていうんだな。でも、そうはいかんよ。柵は取っ払う」

グラシリアノ・ハーモス著『サンベルナルド』（翻訳：第五章～第十二章）

岐部雅之／フェリッペ・モッタ（共訳）

解題

本翻訳は、グラシリアノ・ハーモス（Graciliano Ramos, 1892–1953）による長篇小説『サンベルナルド（*São Bernardo*）』（一九三四年）の日本語訳であり、本誌第四号にて公刊された第一章から第四章の翻訳に続くものである。第五章以降に入る前に、以下にこれまでの物語の概要を簡潔に振り返っておく。

物語冒頭では、主人公パウロ・オノーリオが自らの半生を綴る決意を語り、文章の書き方について周囲の助言を得ようとするが、結局は独力で書くことを選ぶ。続く章では、彼の若き日々が回想される。貧困生活から出発し、投機的な商売と暴力を通じて資本を蓄えたオノーリオは、道楽者の跡取り息子パジーリャからサンベルナルド農園を巧みに手に入れ、地主としての地位を築いていく。その過程には、冷徹な計算と階級間の力関係が色濃く映し出されている。

第五章から第十二章にかけては、オノーリオが農園を拡大・整備しながら、地元社会における政治的影響力を強めていく様子が描かれる。その姿は、旧共和政期（República Velha 1889 年～1930 年）のブラジルにおける政治体制「コロネリズモ（Coronelismo）」の典型例と言える。これは、一八八八年の奴隷制廃止（今回初めて登場する老女マルガリーダが奴隷として生まれたことを想起すると、如何にブラジルにおける奴隷解放が遅かったかがうかがえる）および一八八九年の帝政の終焉を経て成立した制度で、地方の大土地所有者（コロネル Coronel）が選挙や行政を支配し、中央政府と癒着して権力を維持するという構造である。

中央政府の方針を支持する見返りとして、地方政治への干渉を免れるこの体制では、投票権を持つ成人男性に対して、いわば半強制的に政府候補に票を投じさせる「voto de cabresto」（牛や馬に付ける手綱になぞらえた管理投票）が重要な役割を果たしていた。このような時代背景を知らない読者にとって、作中で交わされるオノーリオとメンドンサの「選挙民」に関する会話は、やや理解しづらいかもしれない。表面的には近代国家の装いを備えながらも、実質的には旧来的な支配構造が温存されていた点こそが、コロネリズモ体制の本質である。なお、本作の語りが、一九三〇年のジェトゥリオ・ヴァルガス（Getúlio Vargas, 1882–1954）による革命を経て体

（一）

京都外国語大学・京都外国語短期大学
国際言語平和研究所　機関誌投稿・執筆要領

令和３年３月26日制定
（令和４年２月12日改訂）

１．投稿原稿

（1）京都外国語大学および京都外国語短期大学（以下「本学」という）が定める研究倫理を遵守した論文に限る。

（2）未発表のものに限る。

（3）投稿分類は，論文，翻訳，資料解題，研究ノートとする。

（4）投稿言語は特に制限を設けない。

２．投稿資格

（1）本学の専任教職員

（2）国際言語平和研究所（以下「研究所」という）の客員研究員および嘱託研究員

（3）研究所の所長が認めた者

３．審査

（1）機関誌編集委員会（以下「編集委員会」という）が指名した査読者２名がブラインド方式により審査を行う。

（2）審査基準は以下を目安とする。

① 参考文献リストのスタイル統一と本文での適切な表記がなされているか。

② 研究の背景・意義・位置づけ・目的が明確であるか。

③ 論文タイトルが妥当であるか。

④ 先行研究の分析と当該論文の関係が明確であるか。

⑤ 分析の視点・方法論的特質が妥当であるか。

⑥ 資料，調査データ等の有用性・独自性が妥当であるか。

⑦ 本文の論理的展開に飛躍や矛盾がないか。

⑧ 結論に飛躍・矛盾・トートロジーがなく妥当であるか。

⑨ 図表等の書式や精度が適切であるか。

⑩ 適切な言語運用がなされているか。

（3）審査結果は，編集委員会が研究所を通じ執筆者へ伝える。

4．著作権

（1）投稿原稿の著作権は執筆者に属する。

（2）掲載原稿の編集著作権（翻案権）は本学に属し，電子化して公開利用などに供することができる。

（3）機関誌は発刊後，京都外国語大学・京都外国語短期大学機関リポジトリに登録のうえ公開する。

5．個人情報の管理

投稿の際に提出された個人情報については，研究所及び編集委員会が管理し，その使用は本学の出版に関する事柄に限られる。

6．投稿原稿の詳細

（1）分類

① 論文には，実践研究，調査報告，教材開発なども含む。

② 翻訳には，日本語からその他の言語，日本語以外の言語から日本語に限る。

③ 資料解題には，既存の研究資料やオリジナル資料を含む。

④ 研究ノートは，論文として完成されていないが，掲載の価値があると判断されたものとする。

（2）分量

① 日本語・中国語で横書きの場合は，１行43字全角×35行の設定で，21枚を上限の目安とする。

② 日本語・中国語で縦書きの場合は，１行30字全角×23行の設定で，46枚を上限の目安とする。

③ 欧文の場合は，１行86字，半角（スペースを含む）×35行の設定で，21枚を上限の目安とする。

（3）構成

① 論文の場合は，タイトル，サブタイトル，氏名，要旨（執筆言語），要旨（それ以外の言語），本文（IMRAD形式＝Introduction, Materials and methods, Results, and Discussionに準ずる），注（脚注あるいは文末注），参考文献，参考サイト（サイト名，URL，最終確認日），資料の順番とする。

② 翻訳の場合は，タイトル，サブタイトル，氏名，解題（翻訳の底本の情報，翻訳の意義など），翻訳注（脚注あるいは文末注），参考文献，参考サイト（サイト名，URL，最終確認日），資料の順番とする。

③ 資料解題の場合は，タイトル，サブタイトル，氏名，解題（資料の所在，価値など），解説，注（脚注あるいは文末注），参考文献，参考サイト（サイト名，URL，最終確認

日），資料の順番とする。

④ 研究ノートの場合は，タイトル，サブタイトル，氏名，要旨（執筆言語），要旨（それ以外の言語），本文（IMRAD形式 = Introduction, Materials and methods, Results, and Discussionに準ずるが，結論については論文と同レベルを求めない），注（脚注あるいは文末注），参考文献，参考サイト（サイト名，URL，最終確認日），資料の順番とする。

(4) スタイル

引用や参考文献などの書式は，下記のいずれかに従う。

① APA（The American Psychological Association）の最新版に準ずる。

② 各分野の慣習に準ずる。

(5) 表記

① 初出の地名や人名などの固有名詞にはオリジナルの言語表記を付す。

② 初出の人名には生没年を付す。

③ 特殊な略語は，初出時に正式名称を付す。

(6) 注

① 文末注か脚注かの選択は，執筆者に委ねる。

② 注番号には，アラビア数字を用いる。

(7) 図・表・グラフ・写真など

① 鮮明なものを使用する。

② 図や写真は，各図の下に番号とキャプションをつけ，本文中に参照箇所を明示する。

③ 図や写真は，各図に出典を明記するか，巻末に図像出典一覧表を付す。

④ 表は，当該表の上に番号とキャプションをつけ，本文中に参照箇所を明示する。

⑤ グラフには，当該グラフの下に番号とキャプションをつけ，本文中に参照箇所を明示する。

(8) 要旨（アブストラクト）

① 論文，研究ノートには，執筆言語の要旨ともう1つ別の言語による2種類の要旨を作成すること。

② 日本語・中国語の場合は300－400字程度とする。

③ 欧文の場合は，200－300語程度とする。

(9) 謝辞

謝辞を入れる場合は，下記のいずれかに従う。

① 注に含む。

② 各分野の慣習に準じた位置に付す。

7．投稿先

京都外国語大学・京都外国語短期大学所定の機関誌投稿フォームより投稿する。

8．その他

(1) 提出された原稿は，その採否にかかわらず原則として返却しない。

(2) 研究倫理に係る不正等については，本学の研究倫理規定に準ずるものとする。

執筆者一覧

（掲載順）

中西久実子	本学教授	日本語，日本語教育
大西　博子	本学教授	中国語方言学
戴　　智軻	本学教授	社会情報学，観光学
蝦名　大助	本学教授	言語学
吉野　孝介	本学嘱託研究員	日中対照言語
目黒　裕将	本学非常勤講師	日本語教育
佐藤　晶子	本学教授	外国語教育
楊　　蕾	本学准教授	外国語教育
三好　まりあ	本学准教授	外国語教育
アイシュワリヤ・スガンディ	本学准教授	異文化理解
林田　雅至	大阪大学名誉教授	外国語教育
パッラヴィ・バッテ	京都大学大学院講師	人文・社会，史学一般
岐部　雅之	本学専任講師	ブラジル文学
フェリッペ・モッタ	本学専任講師	史学
伊藤　秋仁	本学教授	ブラジル地域研究
呉座　勇一	国際日本文化研究センター准教授	日本中世史

『京都外国語大学 *Ignis*』編集委員

岡本　信照
モイゼス　カルヴァーリョ
河上　幸子（副委員長）
坂口　昌子（委員長）
グスタボ　タナカ
林　　姿穂

（五十音順）

坂本季詩雄（国際言語平和研究所所長）
多田　純子（国際言語平和研究所主幹）

京都外国語大学 *Ignis* Vol. 5

2025年 5 号
令和７年12月31日　印　刷
令和７年12月31日　発　行　（非売品）

編　　集　　京都外国語大学機関誌編集委員会
　　京都外国語短期大学機関誌編集委員会
発　　行　　京都外国語大学国際言語平和研究所
　　〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6

印刷：株式会社 北斗プリント社